

関越自動車道
堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書

しみずのうえ
清水上遺跡 II

(本文編)

1996

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

関越自動車道
堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書

しみずのうえ
清水上遺跡 II

(本文編)

1996

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

関越自動車道は、昭和60年10月に全線開通し、平成3年11月には関越トンネルが4車線化し、文字どおり関東圏と新潟を結ぶ大動脈となった。開通以来、高速道路がもたらした社会・経済・文化的効果は絶大なものがあり、新潟県全体がその影響を受け、大きく変わろうとしている。

特に、上越線沿線の魚沼地方は県内でもリゾート関連の開発が顕著な地域で、その影響を直接受けている地域もある。

本書は、関越自動車道堀之内インターチェンジの建設に先立って、平成2年から5年にかけて調査を実施した北魚沼郡堀之内町の清水上遺跡の発掘調査報告書である。

清水上遺跡は縄文時代中期の集落の跡で、遺跡の北半分は昭和56・57年に堀之内バーミングの建設に伴って発掘調査がなされ、集落の一端が明かにされている。今回の調査では主に遺跡の南半分、約4万平方メートルが調査され、縄文時代前期から中期におよぶ縄文時代前半の集落が検出されている。中期初頭から中葉の集落は自然にうまく適応し、同一集団が狭い範囲で地点を変えながら連続して生活を営んだものと考えられる。中期初頭の集落や前期前半の集落が全面にわたって調査された例は、県内では数少なく注目される。

遺物も多量に出土し、土器には関東・北陸・中部高地・東北方面等との交流が見られるとともに、石器の組み合わせから当時の人々の生活様式の変化が読み取れる。当時から他地域との交流があったことを示すものである。この状況は本県が置かれている地理的環境に起因するもので、現在とあまり変わることろがない。

今回の調査結果が、今後の本県のみならず全国的な縄文時代研究の一資料として広く活用され、その一助となれば幸いである。

最後に、本調査に対して多大なご協力とご援助を賜わった地元の方々ならびに日本道路公団金沢管理局・同小出管理事務所・新潟県土木部道路建設課・堀之内町・堀之内町教育委員会に対して深甚なる謝意を表わす次第である。

平成8年3月

新潟県教育委員会

教育長 平野清明

例　　言

- 本書は新潟県北魚沼郡堀之内町大字机小屋字清水上5233番地ほかに所在する清水上遺跡（しみずのうえいせき）の発掘調査報告書である。本書は本文編、図面図版編、写真図版・一覧表編の3分冊である。発掘調査は堀之内インター チェンジの建設に伴い、新潟県が日本道路公团金沢管理局・県土木部道路建設課・堀之内町から受託して実施した。
- 発掘調査は新潟県教育委員会が主体となり、平成2~5年度の4年次にわたって実施した。なお、平成4年度・5年度の発掘調査については、新潟県教育委員会からの委託を受けて、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 整理および報告書作成にかかる作業は平成2~7年度にかけて行った。平成2・3年度は新潟県教育委員会が行い、平成4年度以降は新潟県教育委員会から委託を受けて、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団が整理作業・報告書作成を行った。
- 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて新潟県教育委員会が保管している。ただし、写真実測に用いた写真的ネガは、撮影者の小川忠博氏が保管している。遺物の註記は略記号「清」に調査年次・遺物番号・出土地点を併記した。また、本報告書に掲載した遺物については、実測図番号も併せて記した。
- 本書の作成は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査職員があつた。ただし、第Ⅴ章の自然遺物の分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
- 引用・参考文献は著者および発行年（西暦）を中心に（ ）で示し、巻末に掲載した。ただし、第Ⅵ章の自然科学的分析については、章末に掲載した。
- 既成の地図を用いた場合は、その出典を記した。
- 本書に掲載した遺物の番号は通し番号とし、実測図・写真とも共通の番号を使用した。
- 本書は寺崎祐助・鈴木俊成・加藤正樹・高橋一功・大杉真実が分担執筆したもので、執筆分担は以下のとおりである。編集は鈴木が行った。なお、第Ⅳ章の遺構各説は、発掘調査にかかわった調査職員の作成した遺構カードをもとにして執筆したものであるが、文責は執筆者にある。

第Ⅰ章（寺崎）	第Ⅳ章 3-B-(4)（鈴木）	第Ⅳ章 6-B-(3)（鈴木、高橋）
第Ⅱ章（寺崎）	4-A（大杉）	7-A（大杉）
第Ⅲ章 1（鈴木）	4-B-(1)(2)（寺崎）	7-B-(1)（寺崎）
第Ⅲ章 2（寺崎）	4-B-(3)-a（鈴木）	7-B-(2)（鈴木）
第Ⅳ章 1（寺崎）	4-B-(3)-b-s（高橋）	8-A（大杉）
2-A（加藤）	4-B-(3)-t（鈴木）	8-B-(1)（寺崎）
2-B（寺崎）	5-A（大杉）	8-B-(2)-a（鈴木）
2-C（鈴木）	5-B-(1)(2)（寺崎）	8-B-(2)-b-o（高橋）
3-A（加藤）	5-B-(3)-a（鈴木）	8-B-(3)-p·q（鈴木）
3-B-(1)(2)（寺崎）	5-B-(3)-b-s（高橋）	第Ⅴ章（高橋）
3-B-(3)-a（鈴木）	5-B-(3)-t（鈴木）	第Ⅵ章 1·2（寺崎）
3-B-(3)-b-c（高橋）	6-A（大杉）	3（鈴木）
3-B-(3)-b@·@(鈴木)	6-B-(1)(2)（寺崎）	要約（寺崎）

- 発掘調査から本書の作成に至るまで、下の方々から多くの御教示、ご協力を頂いた。記して御礼申し上げる。（敬称略、五十音順）

石井 寛、池田 享、上田典男、梅川勝史、岡村道雄、小野 昭、久々忠義、可見道宏、金子拓男、木島 勉、小林達雄、駒形敏朗、坂井秀弥、佐藤雅一、品田高志、新宮璋一、鈴木健雄、角屋久次、関根慎二、田中耕作、谷保彦、塙本節也、堀 隆、寺内隆夫、土肥 孝、中山誠二、長沼正樹、賀田 明、原田昌幸、深澤克友、細田 勝、前山精明、増子正三、水沢敦子、宮崎 博、宮下健司、武藤康弘、山口逸弘、山本正敏、鶴田弘実、川口町教育委員会、新潟県土木部道路建設課、日本道路公团金沢管理局、日本道路公团金沢管理局小出管理事務所、堀之内町、堀之内町教育委員会

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 調査の概要	3
1 発掘調査	3
A 調査方法	3
(1) グリッドの設定と調査地の現況	3
(2) 調査の方法	4
(3) 遺構略図・遺構台帳・遺構カード	5
(4) 調査日誌	6
B 調査経過	6
C 調査体制	12
2 整理作業	14
A 方 法	14
(1) 遺 物	14
(2) 図 面	15
B 整理経過と体制	15
第Ⅲ章 遺跡の環境	19
1 地理的環境および遺跡分布	19
2 遺跡の層序	23
第Ⅳ章 繩文時代の遺構・遺物	29
1 概 要	29
2 分類・その他	31
A 遺 構	31
(1) 記述の方針および遺構の分類	31
a. 基本方針	31
c. 土 坑	33
e. その他の遺構	33
(2) 図化の方法	33
b. 住居跡	32
d. ピット	33
f. 性格不明の落ち込み	33

(3) 観察表	34
B 土 器	34
(1) 資料の取扱について	34
a. 基本方針	34
b. 造構出土の土器	35
c. 造構外出土の土器	35
(2) 図化の方法	35
(3) 観察表	35
(4) 部位名称について	36
(5) 分 類	36
a. 縄文時代中期前・中葉の土器	36
① 系 統	36
② 器 形	37
③ 文 様	39
④ 時 期	50
b. 縄文時代中期初頭の土器	50
① 系 統	50
② 器 形	50
③ 文 様	51
④ 時 期	53
c. 縄文時代前期前半の土器	53
① 系 統	53
② 器 形	53
③ 文 様	54
④ 時 期	56
C 石 器	56
(1) はじめに	56
(2) 資料の提示方法	57
a. 資料の表現方法および記載事項	57
① 実測図の表示方法	57
② 観察表の記載	60
b. 出土石器の分類	60
3 集落跡1の調査	76
A 造 構	76
(1) 住居跡	76
(2) 土 坑	101
(3) 埋設土器	102
(4) 一括土器	104
(5) 立 石	104
(6) 石列 3136A	107
(7) 捜て場 A	107
(8) ピットおよび性格不明の落ち込み	107
B 造 物	108
(1) 土 器	108
a. 造構出土の土器	108
b. 造物包含層出土の土器	111

(2) 土製品	115
a. 土偶	115
c. 板状土製品	115
e. 耳飾り	115
g. ミニチュア土器	116
i. 焼成粘土塊	116
(3) 石器	117
a. はじめに	117
b. 集落1出土の石器	118
① 石鏃	118
③ 石錐	119
⑤ 両面加工石器	121
⑦ 板状石器	126
⑨ 磨製石斧	133
⑪ 磨石類	136
⑬ 石皿	143
⑯ 不定形石器	146
⑰ 台石	153
⑲ 刺片類	156
㉑ 翡翠原石	163
c. 捨て場A出土の石器	163
① 石鏃	163
③ 石匙	164
⑤ 三脚石器	164
⑦ 打製石斧	165
⑨ 磨器類	166
⑪ 砥石	167
⑯ 両板石器	168
⑰ 台石	170
㉑ 刺片類	171
(4) 遺構内出土石器および一括性の高い石器	176
a. 遺構内出土石器	176
4 集落跡2の調査	182
A 遺構	182
(1) 住居跡	182
(2) 土坑	182
(3) ピット及び性格不明の落ち込み	183

(4) 集石	183
(5) 一括土器	183
(6) 捨て場	184
B 遺物	185
(1) 土器	185
a. 中期前葉の土器	185
c. その他の時期の土器	186
(2) 土製品	186
a. 土偶	186
b. 板状土製品	186
(3) 石器	186
a. はじめに	186
c. 石錐	188
e. 両面加工石器	188
g. 板状石器	189
i. 磨製石斧	190
k. 磨石類	191
m. 石皿	192
o. 不定形石器	192
q. 台石	195
s. 剥片類	196
b. 石鑿	188
d. 石匙	188
f. 三脚石器	189
h. 打製石斧	189
j. 摩器類	191
l. 砥石	192
n. 両極石器	192
p. 石錐	195
r. 石核	195
t. 石製品	199
5 集落跡3の調査	200
A 遺構	200
(1) 住居跡	200
(2) 土坑	202
(3) ピット及び性格不明の落ち込み	202
(4) 捨て場	203
B 遺物	203
(1) 土器	203
a. 遺構出土の土器	203
b. 遺物包含層出土の土器	204
(2) 土製品	205
a. 板状土製品	205
(3) 石器	205
a. はじめに	205
c. 石錐	205
e. 両面加工石器	206
g. 板状石器	207
i. 磨製石斧	207
b. 石鑿	205
d. 石匙	206
f. 三脚石器	207
h. 打製石斧	207
j. 摩器類	208

k. 磨石類	208	l. 磁 石	209
m. 石 盆	209	n. 両極石器	209
o. 不定形石器	210	p. 石 錘	211
q. 台 石	211	r. 石 槌	211
s. 剥片類	215	t. 石製品	215
6 集落跡4の調査	217		
A 遺 構	217		
(1) 住居跡	217		
(2) 土 坑	218		
(3) ピット及び性格不明の落ち込み	218		
(4) 捨て場	218		
(5) 土器集中地点	219		
B 遺 物	219		
(1) 土 器	219		
a. 遺構出土の土器	219	b. 遺物包含層出土の土器	220
(2) 土製品	221		
a. 板状土製品	221		
(3) 石 器	221		
a. はじめに	221		
7 A地区の調査	223		
A 遺 構	223		
(1) 土 坑	223		
(2) 集 石	223		
(3) 埋設土器	223		
B 遺 物	223		
(1) 土 器	223		
(2) 石 器	224		
8 E地区の調査	225		
A 遺 構	225		
(1) 住居跡	225		
(2) 土 坑	225		
(3) ピット及び性格不明の落ち込み	226		
(4) 埋設土器	226		
(5) 一括土器	226		
(6) 埋没谷	226		
B 遺 物	227		
(1) 土 器	227		

a. 遺構出土の土器	227	b. 遺物包含層出土の土器	228
(2) 石 器			228
a. はじめに	228	b. 石 錐	229
c. 石 鋸	229	d. 石 匙	229
e. 両面加工石器	232	f. 打製石斧	232
g. 磨製石斧	232	h. 磨器類	232
i. 磨石類	232	j. 砥 石	232
k. 石 盆	233	l. 両板石器	233
m. 不定形石器	233	n. 石 核	233
o. 剥片類	233	p. 石 製品	234
q. 局部磨製石斧	234		
第V章 繩文時代以降の遺構・遺物			235
1 概 要			235
2 遺 構			235
A 古墳時代の遺構			235
B 平安時代の遺構			235
C 江戸時代の遺構			236
3 遺 物			238
A 古墳時代の土器			238
B 平安時代の土器			238
C 中世の土器			239
D 近世陶磁器			239
E その他の遺物			240
第VI章 自然科学分析			242
1 はじめに			242
A 当時の古環境と水利用について			242
B 繩文時代中期の各不明遺構および埋設土器の性格について			242
C 土坑内の赤色物質の検討			242
2 試 料			243
3 分析方法			243
A 珪藻分析			243
B 花粉分析			243
C 放射性炭素年代測定			243

D 樹種同定	243
E リン・カルシウム分析	244
F X線回折	244
4 縄文時代中期土器捨て場（水場？）付近の古環境と周辺植生	244
A 結 果	244
(1) 粘藻分析	244
(2) 花粉分析	245
(3) 樹種同定	245
(4) 放射性炭素年代測定	249
B 考 察	249
5 不明遺構・埋設土器等の内容物について	249
A 対照試料	249
B 不明遺構	251
C 埋設土器	252
D 一括土器	252
E 遺体埋納の可能性がある遺構	252
F 検討課題	254
6 赤色物質の由来について	255
A 結 果	255
(1) SK238C（赤色土）	255
(2) SK238C（対比キヅカ）	255
(3) SK239C（赤色土）	255
(4) SK239C（対比キヅカ）	255
B 考 察	257
C 検出鉱物の説明	257
(1) 石英 (quartz)	257
(2) カリ長石 (Potassium feldspar)	257
(3) 斜長石 (plagioclase)	257
(4) ギブサイト (gibbsite)	258
(5) ヘマタイト (hematite)	258
(6) セリサイト (Sericite)	258
(7) 緑泥石 (Chlorite)	258
(8) 角閃石 (Hornblende)	258
7まとめ	258
A 当時の古環境と水利用について	258

B 縄文時代中期の各遺構の内容物について	258
C 土坑内の赤色物質の由来	259
第VII章　まとめ	261
1 土　器	261
A 縄文時代中期前・中葉の土器について	261
(1) 編　年	261
a. 中期前葉①期	261
b. 中期前葉②期	262
c. 中期前葉③期	263
d. 中期中葉①期	263
e. 中期中葉②期	264
f. 中期中葉③期	265
(2) 様　相	265
B 縄文時代前期前半の土器について	267
(1) 編　年	267
a. 前期前半Ⅰ期	267
b. 前期前半Ⅱ期	268
(2) 様　相	269
(3) 大湊遺跡出土の土器について	269
(4) 越後系土器について	271
C 縄文時代中期初頭の土器について	275
(1) 編　年	275
a. 中期初頭①期	276
b. 中期初頭②期	276
c. 中期初頭③期	278
(2) 様　相	278
2 遺　構	279
A 集落跡1・2・3について	279
(1) 集落構造	279
a. 集落跡1	279
b. 集落跡2	281
c. 集落跡3	283
(2) 集落跡の動態	283
a. 中期初頭①期	283
b. 中期初頭②期	283
c. 中期初頭③期	285
d. 中期前葉①期	285
e. 中期前葉②期	285
f. 中期前葉③期	287
g. 中期中葉①期	287
h. 中期中葉②期	287
i. 中期中葉③期	289
B 集落跡4について	289
3 石　器	292
A 新潟県の石器組成の概要と清水上遺跡	292

(1)はじめに	292
(2)石器組成の地域性	292
(3)清水上遺跡出土石器群の概要	297
(4)各集落跡の石器様相	300
《引用参考文献》	308
《要約》	311
《遺構索引》	313

挿図目次

1 地区割と確認調査トレント位置図	2	30 図の展開例の模式図	58
2 グリッド設定図	3	31 実測図の主な表現例	58
3 遺構台帳の記入例	6	32 主な器種の部位名称と計測基準	59
4 年度別調査範囲	7	33 素材の計測部位と名称	60
5 調査風景	8	34 石鏃分類図	61
6 調査風景など	10	35 尖頭器分類図	62
7 整理作業風景	15	36 石錐分類図	62
8 年度別整理作業進捗状況	17	37 石匙分類図	63
9 周辺の遺跡	19	38 三脚石器・板状石器分類図	65
10 遺跡周辺の段丘分布図	21	39 打製石斧撥形・短彫形の分類基準	66
11 地形と集落分布	22	40 打製石斧・磨製石斧遺存部位と 破損の在り方	66
12 基本層序（集落跡1・2）	24	41 打製石斧分類図	66
13 基本層序（集落跡3・4、A地区）	26	42 磁器類分類図	68
14 基本層序（E地区）	27	43 磐石類分類図	69
15 地区割図	30	44 石皿分類図	70
16 土器文様の表現方法	36	45 不定形石器分類図	72
17 法量測定位置と部位名称	37	46 剥片剥離工程および石核分類図	74
18 器形分類図（1）（中期前・中葉）	38	47 剥片分類図	75
19 土器文様系統別分類（1）（中期前・中葉）	40	集落跡1	
20 土器文様系統別分類（2）（中期前・中葉）	42	48 SB3156A（焼土420A）埋甕	95
21 土器文様系統別分類（3）（中期前・中葉）	43	49 集落跡1石器分布図	117
22 土器文様系統別分類（4）（中期前・中葉）	45	50 石鏃出土分布図	118
23 土器文様系統別分類（5）（中期前・中葉）	46	51 石鏃長幅分布図	119
24 土器文様系統別分類（6）（中期前・中葉）	48	52 石錐重量分布図	119
25 土器文様系統別分類（7）（中期前・中葉）	49	53 石錐出土分布図	120
26 器形分類図（2）（中期初頭）	50	54 石錐長幅分布図	121
27 土器文様系統別分類（8）（中期初頭）	52	55 石錐重量分布図	121
28 器形分類図（3）（前期前半）	54	56 両面加工石器出土分布図	122
29 土器文様系統別分類（9）（前期前半）	55		

57	両面加工石器長幅分布図	122
58	両面加工石器厚さ分布図	122
59	両面加工石器重量分布図	122
60	三脚石器出土分布図	124
61	三脚石器長幅分布図	125
62	三脚石器重量分布図	125
63	三脚石器厚さ分布図	125
64	板状石器出土分布図	126
65	板状石器長幅分布図	127
66	板状石器厚さ分布図	127
67	板状石器重量分布図	128
68	打製石斧出土分布図	129
69	打製石斧重量分布図	129
70	打製石斧長幅分布図	130
71	磨製石斧出土分布図	133
72	磨製石斧長幅分布図	134
73	磨製石斧重量分布図	134
74	砾器類出土分布図	135
75	砾器類長幅分布図	136
76	砾器類重量分布図	136
77	磨石類出土分布図	137
78	磨石類長幅分布図(1)	138
79	磨石類長幅分布図(2)	139
80	磨石類重量分布図	139
81	磨石類厚さ分布図	140
82	砥石出土分布図	142
83	砥石長幅分布図	142
84	砥石重量分布図	142
85	砥石厚さ分布図	142
86	石皿出土分布図	143
87	石皿長幅分布図	144
88	石皿重量分布図	144
89	両極石器長幅分布図	145
90	両極石器重量分布図	145
91	両極石器出土分布図	146
92	不定形石器出土分布図(1)	148
93	不定形石器出土分布図(2)	149
94	不定形石器出土分布図(3)	150
95	不定形石器長幅分布図	151
96	不定形石器重量分布図	153
97	石核出土分布図	154
98	石核長幅分布図	155
99	剥片類出土分布図	157
100	剥片類長幅分布図(1)	158
101	剥片類長幅分布図(2)	159
102	剥片類長幅分布図(3)	160
集落跡1(捨て場A)		
103	石炭長幅分布図	163
104	石錐長幅分布図	163
105	三脚石器長幅分布図	164
106	三脚石器厚さ分布図	164
107	板状石器長幅分布図	165
108	打製石斧長幅分布図	166
109	磨石類長幅分布図	167
110	不定形石器長幅分布図	170
111	石核長幅分布図	170
112	剥片類長幅分布図(1)	172
113	剥片類長幅分布図(2)	173
114	剥片類長幅分布図(3)	174
115	遺構内出土石器(1)	177
116	遺構内出土石器(2)	178
117	遺構内出土石器(3)	179
118	遺構内出土石器(4)	180
119	遺構内出土石器(5)	181
集落跡2		
120	集落跡2石器分布図	186
121	集落跡2石器出土分布図	187
122	三脚石器長幅分布図	189
123	三脚石器厚さ分布図	189
124	板状石器長幅分布図	189
125	打製石斧長幅分布図	190
126	磨石類長幅分布図	191
127	磨石類厚さ分布図	192
128	不定形石器長幅分布図	193
129	剥片類長幅分布図	198
集落跡3・4		
130	集落跡3・4石器分布図	205
131	集落跡3石器出土分布図(1)	206

132 打製石斧長幅分布図	207	151 系統別の土器組成（1）	266
133 磨石頭長幅分布図	208	152 前期前半の土器編年	269
134 集落跡3石器出土分布図（2）	209	153 系統別の土器組成（2）	270
135 不定形石器長幅分布図	210	154 大湊式土器	272
136 刺片類長幅分布図	216	155 橫小屋式土器	274
137 集落跡4石器出土分布図	222	156 中期初頭の土器編年	277
E地区		157 系統別の土器組成（3）	278
138 E地区石器分布図	229	158 集落跡1遺構分布模式図	280
139 E地区石器出土分布図（1）	230	159 集落跡2・3遺構分布図	282
140 E地区石器出土分布図（2）	231	160 集落跡1～3の変遷（1）	284
141 石製品出土状況	234	161 集落跡1～3の変遷（2）	286
142 L2-21の主要珪藻化石分布図	247	162 集落跡1～3の変遷（3）	288
143 H04-25の花粉化石分布図	248	163 集落跡4の変遷	290
144 リン・カルシウム分析サンプル位置（1）	253	164 用途別石器組成の地域性	294
		165 各ブロックの用途別石器組成	296
145 リン・カルシウム分析サンプル位置（2）	254	166 E③地区埋没谷3層出土石器	300
146 SK238C（赤色物質）のX線回折結果	256	167 捨て場C下層（前期）出土石器	301
147 SK238C（対照試料）のX線回折結果	256	168 捨て場C上層（中期初頭） 出土石器（1）	302
148 SK239C（赤色物質）のX線回折結果	256	169 捨て場C上層（中期初頭） 出土石器（2）	303
149 SK239C（対照試料）のX線回折結果	257		
150 中期前・中葉の土器編年	折り込み		

目次

1 年度別遺物出土量	14	15 両面加工石器石材表	123
2 段丘対比表	20	16 三脚石器分類別出土数	123
3 中期前・中葉の土器編年案	50	17 三脚石器自然面集計表	123
4 中期初頭の土器編年案	53	18 三脚石器遺存状態表	123
5 前期前半の土器編年案	56	19 三脚石器石材表	124
6 石器の主な縮尺率	57	20 板状石器分類別出土数	126
7 集落跡・地区別の出土石器	61	21 板状石器石材表	127
8 不定形石器分類表	73	22 板状石器自然面集計表	128
集落跡1		23 板状石器遺存状態表	128
9 集落跡1の出土石器	117	24 打製石斧分類別出土数	128
10 石器分類別出土数	118	25 打製石斧素材表	129
11 石器石材表	118	26 打製石斧石材表	131
12 石器出数	120	27 打製石斧自然面集計表	132
13 石器石材表	121	28 打製石斧刃部平面形表	132
14 石器鉋部断面形表	121	29 打製石斧刃部断面形表	132

30 打製石斧遺存部分と破損の仕方	132		
31 磨製石斧分類別出土数	133	集落跡2	
32 磨製石斧石材表	134	69 集落跡2の出土石器	187
33 磨製石斧遺存状態表	134	70 打製石斧分類別出土数	190
34 砥器類分類別出土数	135	71 打製石斧石材表	190
35 砥器類石材表	136	72 磨石類分類別出土数	192
36 磨石類分類別出土数	136	73 磨石類石材表	192
37 磨石類石材表	141	74 不定形石器素材観察表	194
38 砥石分類別出土数	141	75 不定形石器分類別出土数	195
39 砥石石材表	141	76 不定形石器石材表	195
40 砥石遺存状態表	141	77 石核分類別出土数・石材表	196
41 砥石使用面数	141	78 剥片類石材別観察集計表(1)	196
42 石皿分類別出土数	144	79 剥片類石材別観察集計表(2)	197
43 石皿石材表	144	80 剥片類石材表	199
44 石皿遺存状態表	144	集落跡3	
45 石皿使用面数	144	81 集落跡3の出土石器	205
46 両極石器分類別出土数	145	82 不定形石器分類別出土数	211
47 両極石器石材表	145	83 不定形石器石材表	211
48 不定形石器分類別出土数	147	84 不定形石器素材観察表	212
49 不定形石器石材表	147	85 剥片類素材観察表(1)	213
50 不定形石器素材観察表	152	86 剥片類素材観察表(2)	214
51 石核分類別出土数	155	87 剥片類石材表	215
52 石核石材表	155	集落跡4	
53 剥片類石材表	156	88 集落跡4の出土石器	221
54 剥片類石材別観察集計表(1)	161	A地区	
55 剥片類石材別観察集計表(2)	162	89 A地区的出土石器	224
集落跡1(捨て場A)		E地区	
56 三脚石器分類別出土数・石材表	164	90 E地区的出土石器	229
57 三脚石器遺存状態表	164	91 剥片類石材表	233
58 板状石器分類別出土数・石材表	165	92 江戸時代の墓葬一覧表	237
59 板状石器遺存状態表	165	93 銭貨一覧	240
60 打製石斧分類別出土数・石材表	165	94 H04-25, I2-22の珪藻分析結果	245
61 打製石斧遺存部分と破損の仕方	166	95 L2-21の珪藻分析結果	246
62 磨石類分類別出土数	167	96 H04-25, I2-22の花粉分析結果	248
63 不定形石器分類別出土数・石材表	168	97 各遺構のリン・カルシウム分析結果	250
64 不定形石器素材観察表	169	98 各土器試料のリン・カルシウム分析結果	251
65 石核分類別出土数・石材表	171	99 各集落跡およびE③地区的石器組成	
66 剥片類石材表	171	298
67 剥片類石材別観察集計表(1)	174	100 各集落跡出土の主な石器比率	298
68 剥片類石材別観察集計表(2)	175	101 引用した遺跡の石器一覧	305

第一章 調査に至る経緯

遺跡の発見 本遺跡は、昭和53年に新潟県教育委員会（以下、県教委）が実施した北魚沼郡を対象とした遺跡詳細分布調査によって発見された。そして、新潟県埋蔵文化財包蔵地調査カードに、北魚沼郡堀之内町大字根小屋字清水上 5233を中心とした 100m × 200m の範囲が登録され、その時の分布調査により土器片 30 点・打製石斧 3 点・凹石 3 点・銅片 40 点が採集されたことが調査カードに記載されている。なお、新潟県文化財保護指導委員の新宮璋一氏によれば、堀之内町大字根小屋字寺村の故波方国治氏は、父親から清水上で遺物が出土するのを聞いていたということから、地元ではかなり以前から本遺跡の存在は知られていたようである。

昭和 56・57 年の発掘調査 本遺跡は、関越自動車道の本線および堀之内バーティングエリア建設予定地内に所在するため、発掘調査依頼が昭和 55 年度に日本道路公団新潟建設局（以下、道路公団建設局）から県教委に提出された。これを受けて県教委は、バーティングエリアの建設工事に先立ち遺跡の内容・性格を記録に残すための発掘調査を、昭和 56 年 10 月 19 日～11 月 21 日・昭和 57 年 4 月 12 日～7 月 3 日の間に実施した。調査面積は、6,395 m² であった。

調査の結果、本遺跡は、縄文時代中期前・中葉の典型的な環状集落跡を中心とした遺跡であることが判明し、竪穴住居跡やピット群およびフ拉斯コ状土坑などが多数検出されたほか、それらの遺構内や遺物包含層からは多量の遺物が出土した。この他、縄文時代後期の土坑、縄文時代早期・後期の土器、平安時代の土器、中世陶器などが検出または出土した。そして、この調査によって本遺跡の範囲は、本線やバーティングエリア建設予定地およびその周辺に広がることが明確になった。

なお、この時の調査の経緯・結果などは、「清水上遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 55 集（新潟県教育委員会 1990b）に詳しく記されている。

インターチェンジの建設 昭和 63 年 11 月、新潟県道路建設課より堀之内インターチェンジ建設に係わる清水上遺跡の取扱いについての協議があり、バーティングエリアを追加インターチェンジに改修する計画が明らかとなった。追加インターチェンジとは、高速自動車国道法第 11 条第 2 項の規定に基づき整備計画で定められたもので、開発事業の促進を図り、周辺地域の発展に資するため開発事業者の負担によって設置し、また交通利便性の向上などに寄与し、高速自動車国道の採算性を確保するなど増設条件調査により追加設置が妥当と認められたものである。

平成元年 4 月、堀之内町より本遺跡の踏査の依頼があり、同月 11・12 日の 2 日間、調査員 3 名を派遣し、本遺跡のインターチェンジ建設予定地内を便宜的に A～E 地区に 5 区分して踏査を行った。踏査結果は、同月 20 日付で堀之内町教育委員会へ事務連絡したが、その内容は、以下のとおりである。

遺物の散布状況

- a) B・C 地区で縄文時代の土器・石器が多く採集される。
- b) A・D・E 地区では数は少ないが、縄文時代の土器・石器が採集される。

今後の取扱い

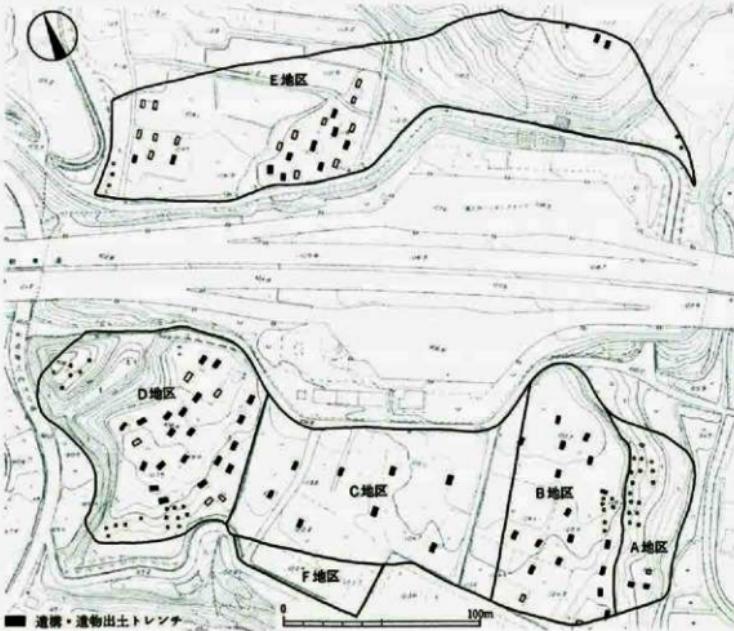
- a) 確認調査は、A・D・E 地区で面積の 5%、B 地区で面積の 3%、C 地区で面積の 1% を目安として調査する必要がある。
- b) 上記の確認調査の結果、遺跡範囲となった地域については、遺跡保存・発掘調査（本調査）など、

今後の対応について事業者と協議する必要がある。

平成2年1月、堀之内インターチェンジの着工が決定し、建設工事は日本道路公团金沢管理局（以下、道路公团管理局）が担当することとなった。このような状況下において県教委は、発掘調査は避けられないと判断して清水上遺跡担当専門職員5名の増員を要望し、新年度当初をもって5名の増員が認められた。

確認調査 堀之内町教育委員会は、県教委から職員3名の派遣をうけ、平成2年5月8日～24日の間に、本遺跡の範囲・内容などを把握し、今後予想される発掘調査に係わる資料を得ることを目的とする確認調査を実施した。その結果は、同年7月19日付教第980号2で県教委に報告された。それによると、A地区では縄文時代の遺跡、B地区では縄文時代前期以前と中期の遺跡、C地区では縄文時代中期と旧石器時代？の遺跡、D地区では縄文時代前期と中期の遺跡、E地区では縄文時代早期と前期および中期の遺跡がそれぞれ確認され、発掘調査は、インターチェンジ建設予定区域のほぼ全域で必要となった。その後県教委は、確認調査の資料を基に、発掘調査必要面積は38,800 m²、現地調査に約3年、遺物整理作業に約23年の足掛け6年余りの年月がかかると予測した。

発掘調査へむけて 平成2年5月、堀之内インターチェンジ建設に係わる打合せ会議が道路公团金沢管理局すべての関係者が集まって開催され、その席上で各自、今後の動きに対応できる準備はしておくということで意見の一致をみた。そして同年8月、発掘調査計画の策定や作業員募集などの準備作業に入るとともに、文化庁長官に文化財保護法第98条の2項の規定により「埋蔵文化財発掘調査の通知」を行い、平成2年9月3日より発掘調査に着手した。



第1図 地区別と確認調査トレンチ位置図

第Ⅱ章 調査の概要

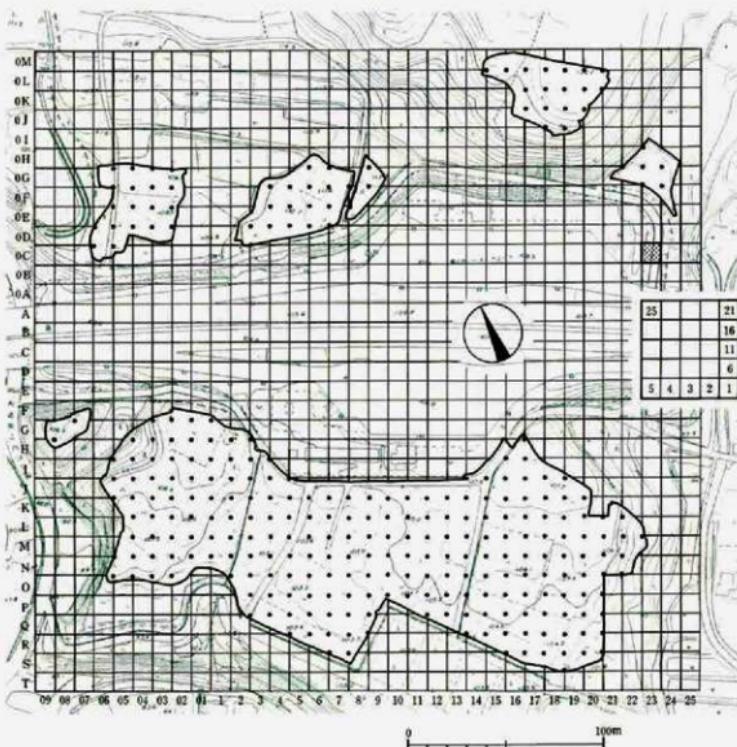
1 発掘調査

A 調査方法

(1) グリッドの設定と調査地の現況(第2図)

グリッドは、環状集落跡の南側への広がりを考慮して、昭和56・57年度の発掘調査(以下、前回の調査)と同じ座標軸を用いて設定した。

すなわち、関越自動車道センター杭STA.69と70を結んだラインを基線とし、それをもとに10m方眼の大



第2図 グリッド設定図

グリッドを組み、東西方向に数字、南北方向にアルファベットを付してグリッド名を表示した。大グリッドは、さらに2m方眼の小グリッドに分割して、南東隅を1、南西隅を5、北東隅を21、北西隅を25と表示した。そして、「A1—10」などと表示した。ただ、今回は、前回の調査よりも広範囲を調査対象としたため、A以前および1以前の大グリッド表示は、Aや1の前に0を付け0Aまたは01などとした。なお、グリッドは、国土地理院の座標軸に対して約21.5度東偏している（新潟県教育委員会1990b）。

調査地の現況は、ほぼ中央を関越自動車道が東西に走り、その両側は掘之内パーキングエリアで地形変更がされているため、旧地形の詳細は不明であるが、四段の河岸段丘が認められる。一段目・二段目は、比高差2mあまりで、A地区のK～R18～22付近に狭い平坦面がみられる。三段目は、二段目よりも比高で3m余り高く、B・C地区とD地区の一部を含むI～S06～19付近に広い平坦面をもつ。四段目は、三段目に次いで広い平坦面をもち、OH～N07～9付近に広がっている。三段目との比高差は2m余りである。なお、E地区の一部に当たる01～0M15～20は、段丘面との比高差20m余りの丘陵先端部に位置している。

小河川は、2本調査区内を流れている。内1本は、0D～0H8からH～N1～3というラインを流れ、現在では用水路となっているが、以前は、清水として農作業の際の飲料水に使用されたということである。他の1本は、0C～0H3～8およびE～I08～03で小谷を形成している。

土地利用は、段丘面は主に畑地、段丘崖や丘陵部分は林野となっており、杉が植林されている。小河川によって形成された小谷部分の0C～0H3～8付近は、谷地型の水田として利用されている。その他、調査地およびその周辺では、現在でも春には山菜、秋にはキノコが少なからず採集が可能である。

(2) 調査の方法

発掘調査は、基本的には基本層序の確認、表土剥ぎ、遺物包含層発掘、遺構検出・発掘、遺構写真・実測という手順で行われた。

基本層序の確認 前回の調査結果を踏まえて確認調査時に基本層序の把握を試み、本調査の初期で基本層序を決定した。しかし、調査区域が広大で調査区域内に複数の段丘面や丘陵が存在するため、調査区域ごとに基本層序が微妙に変化する。それゆえその変化についてはⅡa・ⅡbやⅢ」というふうにアルファベットや「」を付し区別した。

表土剥ぎ 表土は、厚さ20cm余りで、耕作土が主であった。そのため除去にはバックホー（重機）を用いた。バックホーは、法面バケット付きコンマ4を使用し、表土でも遺物が出土する可能性があるため調査員または作業員が付き添い、数cmずつ薄く剥ぎ取るように掘り下げた。なお、地表面において遺物の散布が認められる箇所は、表土剥ぎ直前に表面採集を行ってから作業に着手した。

遺物包含層発掘 ベルトコンベヤーを東西に配列し、その両脇の小グリッド(2m×2m)に作業員1名ずつを配置して北～南へ掘り進むなど、規則的な発掘を心がけた。調査1年目は、遺構確認面である地山直上まで一気に掘り進んだが、発掘した遺構を検討した結果、住居跡などの掘り込み面の多くは表土直下の浅い位置にあり、それらの覆土のほとんどは、黒色土中に存在することが判明した。そのため、2年目からは、慎重に掘り進み、遺物が集中または多量に出土した場合は遺構と同等に扱い、遺構発掘時に遺構との間わり合いに注意を払いながら発掘した。

遺構精査 遺構精査は、最大グリッド(10m×10m)以上の単位で、歯付きジョレンを持った作業員5～10名を一列に配し、端から一方向に向けて二度掛けを原則に一斉に行った。調査員は、検出された遺構の輪郭をクギなどでなぞり、それに沿ってマークリングのために白スプレーを噴霧していった。

遺構発掘 プランが明確に検出された住居跡が少なく、土坑やピットが主体であったため大グリッド単位で一方向から規則的に行った。各遺構は、土層観察などのため全て半裁または四分割の発掘を行い、そのセクションベルトは、住居跡はもちろん原則として径1m内外の土坑までは写真・実測の対象とした。他のものも遺構台帳などに記録したほか必要に応じて写真撮影も行った。遺構番号は、名称と同じように考えて全て通し番号とした。ただし、発掘年度を明確にするために平成2年度以外は、末尾にA（平成3年度）、B（平成4年度）、C（平成5年度）を付して区別した。

遺構写真 写真は、1物件に対して白黒2枚・カラープリント1枚を原則とし、写真整理時の混乱を避けるため遺跡名・地区・方位・撮影内容・撮影者・年月日を記入したボードを物件撮影前に必ず撮影することとした。カメラは35mmを、フィルムはごく普通のASA100を使用し、光量に応じて三脚を用いた。撮影台は、脚立および三段のローリングタワーを使用した。また、航空測量時には遺構全体の俯瞰写真も撮影したほか、測量用に撮影した遺構写真からも住居跡の個別写真を抽出して完掘写真とした。

遺構実測 土層セクション・遺物の出土状況など個別のものは人で、完掘状況などの遺構全体実測図はヘリコプターを用いての航空測量で行なった。個別のものは、作業員2~3名で簡易造方や平板で1/10あるいは1/20の図面を作製した。航空測量は、3回の校正を経て、遺構実測図のほか等高線や桟乱坑などできる限りの情報が入った1/40の素図面を作製した。なお、航空測量を行う際、遺構など図化に必要なものについては、図化および校正しやすいうまーマーキングを行った。その時は、スプレーではなく、消石灰と水を1:1の割合で混ぜて柔らかいクリーム状にしたものヨウロに入れて用い、さらにそれに木工用ポンドを水で落めたものを霧吹きで塗布した。このような措置を施した消石灰は、乾燥すれば少々の雨でも流れることもなく、一週間以上マーキング状態を保った。また、予算面でもスプレーを使用するよりもかなり安価であった。

遺物の取り上げ 遺物は、一括性を重視し、なおかつ遺物整理において出土地点がより詳細に把握できることを目標に取り上げた。そのため、遺物収納に専従する作業員を配置した。遺物は、現場ではラベルの付いた水切りカゴに入れ、包含層出土の遺物は小グリッドごとに、遺構出土の遺物は所属遺構ごとに取り上げ、その後、遺物収納専従の作業員がビニール袋に収納した。

(3) 遺構略図・遺構台帳・遺構カード

平成2年度調査の反省および平成3年度調査の初期における遺構の検出状況から、遺構略図の作成を行い、各遺構の特徴を書き記すこととした。遺構略図は、遺構の検出状況を1/100で略測し、遺構発掘時にそれぞれの遺構番号・覆土の状況・出土遺物などを略図中もしくはその余白部分に書き込んだ。

遺構台帳は、平成3年度調査の下半期において遺構の検出数がますます増えることが予想されたため、遺構観察記述の統一性と簡略化などを図るため考案された。記述内容は、遺構番号・規模・時代・覆土の土色および土質・混入物・しまり・粘性・出土遺物・写真的有無・実測図の要不要・その他である。そして、遺構本体には遺構番号を記したフリーラベルを立てて、遺構略図や遺構台帳との整合性に努めた。

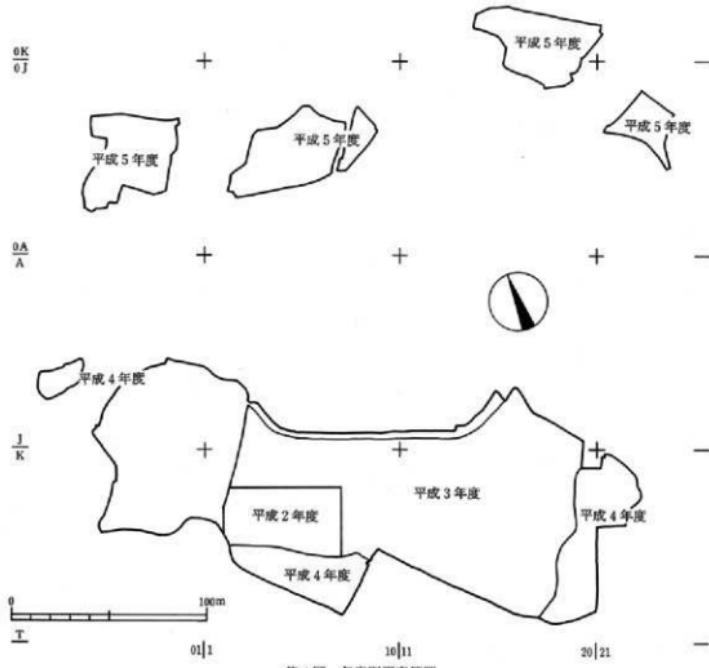
遺構カードは、山三賀Ⅱ遺跡の例（坂井ほか1989）にならい、前二者などに記した遺構発掘調査の生の記録に完掘写真や実測図のほか、遺物出土状況などの写真や実測図およびメモを加えたもので、報告書執筆の際の重要な資料となった。このカードは、本来日々の調査の進捗とともに記入し、完掘時には記入をほぼ終了するものである。しかし本遺跡は、遺構数が膨大でその多くは調査終了以後に記入されたものである。

9月3日、先発3名午前中に現地入りし、道路公団小出管理事務所や堀之内町などの関係機関に発掘調査開始の挨拶を行った。4日以降は、発掘調査予定地の草刈りや発掘調査機材の調達などを行い、11日からの発掘調査に備えた。

発掘調査は、C地区のM~O2・3から着手し、東進した。18日には後発の2名も加わり、調査員は定数の5名となった。作業員は、1日当り20名余りと当初から不足していたため、通勤のためのバスを運行し、隣の川口町からも作業員を募集することとした。その結果、10月中旬から1日当り45~50名を数えるようになった。

10月4日から遺構発掘を開始した。それにともない調査員は、遺構発掘に専従する者2名、遺物包含層発掘に専従する者2名、それらの作業を総括する者1名というように役割を分担して発掘調査を進めた。遺構発掘の開始当日、N2で近世の墓壙らしい落ち込みを検出した。その後も、近世の墓壙の検出が相次ぎ焼成人骨も出土したため、10月18日に地元横小屋地区主催の供養祭が行われた。

11月5・6日、文化行政課埋蔵文化財第1係長が現地指導のために来訪。9日、今年度の遺物包含層の発掘が終了した。その範囲は、M~P2~12である。16日、地元の堀之内町文化財保護審議委員および同町町史編纂室職員が見学のために来訪し、新聞社の取材もあった。同日、今年度分の遺構発掘が終了した。その範囲はM~P2~7である。18日の日曜日には午前中、曇天の中で堀之内町教育委員会主催の現地説明会が行われた。20日、晴れ間をみて小型ヘリコプターでの航空測量が実施された。その後、残務整理や機材の整備・



1 発掘調査

収納を行い、29日に堀之内町などの関係機関に発掘調査終了の挨拶を行い、現地より撤収した。

平成3年度【4月22日(月)～11月30日(土)】 3年度の発掘調査は、B・C地区を対象に調査員5名、作業員60名の体制で4月下旬から11月末までの7ヵ月間行われたが、発掘調査予定面積は、13,550m²と広大で、遺跡の中心部を発掘するため相当な困難が予想された。その上、天候に恵まれず梅雨明けも8月半ば近くにずれ込むなど、発掘予定日数の約1/4に当たる38日が雨の影響を受けた。そのため雨対策として、2間×3間もしくは3間×5間の脚付のテントを利用し、8月以降は雨天でもできる限り発掘調査を行うこととした。発掘調査は、発掘された遺構の保存および発掘廃土置き場の関係で前半と後半に分けて行われ、前半の調査区域は、昨年度遺物包含層の発掘が終了した部分を含むM～R8～19、後半の調査区域は、H～L2～20であった。この区域は、前回の調査で確認された縄文時代中期の環状集落跡の南半分の存在が確認されたが、調査の結果、C地区において堅穴住居跡や土坑などの多数の遺構群や縄文時代中期前葉～中葉の多量の遺物が発掘され、予想通り縄文時代中期の環状集落跡の南半分が完掘された。また、B地区においても、縄文時代前期と中期初頭の集落跡を発掘した。最終的な実質発掘調査面積は11,519m²であった。

4月22日午後、調査員5名で現地入りし、関係方面へ発掘開始の挨拶を行った。その後5月の連休前までは、発掘調査区域および区域内の支障物件について堀之内町や道路公团管理局との協議、測量業者との現地打ち合わせ、発掘調査機材の搬入・購入など発掘調査の事前準備を行った。

5月8日、C地区から発掘作業を開始した。調査員は、表土剥ぎ・遺物包含層発掘1名、遺構精査・発掘4名に役割分担し、昨年度に遺物包含層の発掘が終了している地区は、ただちに遺構精査・発掘を開始した。24日、B地区的調査にも着手した。29日、C地区とB地区との境界近くで縄文時代中期初頭の土器が出土し、本遺跡の中心をなす環状集落跡とは別の集落跡が存在している可能性がうかがえた。

6月5日、堀之内町公民館の取材と曾和分室の日々雇用職員の研修見学があった。公民館の取材は、後



第5図 調査風景 (1.表土剥ぎ 2.包含層発掘 3.遺構精査 4.遺構発掘)

日、『館報はりのうち』6月号（No350）に「—むかしむかしの堀之内を知ろう— 清水上遺跡をたずねて」というタイトルで紹介された。6日、C地区のP15・16で縄文時代前期の住居跡4軒が検出され、前期の集落跡の存在が明らかになった。これらの住居跡群は、竪穴住居跡1軒・掘立柱建物跡3軒からなり、掘立柱建物跡は、柱間が1間×2間のものが2軒、1間×1間のものが1軒であった。18日～20日、文化行政課埋蔵文化財第2係長が現地指導に来跡。19日、前半部分の発掘調査のメドがついたため、後半部分の発掘調査に着手した。21日、堀之内町公民館事業の一環である「ふるさとめぐり」のメンバー39名が見学のため来跡。なお、この事業のメンバーは、平成4・5年度も見学に来跡した。28日、堀之内町議会の産業経済委員会の現地視察があり、委員長ほか町長・助役・建設課長・町会議員10数名が来跡。

7月3日、北魚沼郡担当の新潟県文化財保護指導委員が、発掘調査巡回のため来跡。26日、文化行政課長が観察に来跡。30日午後、前半部分の発掘調査区域であるM～S8～19の航空測量をヘリコプターで行った。

9月26日、昨年に引き続き墓壙や土葬人骨が出土したため、その取扱いについて堀之内町関係者・地元町内会長・道路公団管理局などと協議を行った。その結果、覆土や形状で明確に土葬墓と判る遺構については、発掘調査は行わないこと、もし人骨が出土した場合は、地元の寺に届けて預かってもらうこと、その年度の調査が終了した時点で何らかの供養を行うことを取り決めた。30日、墓壙および土葬人骨の供養祭が行われた。

10月18日、堀之内町立堀之内小学校の教員7名、見学のため来跡。21日～23日、文化行政課埋蔵文化財第2係長が現地指導に来跡。24日、堀之内町立宇賀地小学校の六年生が見学のため来跡。

11月13日、文化行政課長補佐、現地視察に来跡。16日、後半部分の遺構発掘が終了した。21日午前、後半部分の発掘調査区域H～K2～20の航空測量を行った。23日午前、地元の人達を対象とした現地説明会を急きょ行うこととなり、口コミであったが地元の人や考古学関係者約30名が参加した。29日、関係機関に今年度の発掘調査終了の挨拶を行い、30日午前、現地より撤収した。

平成4年度【4月13日（月）～12月4日（金）】 平成4年度から文化行政課埋蔵文化財第2係が財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）として発足し、本遺跡の発掘調査も新潟県教育委員会の委託を受けて、埋文事業団が実施することとなった。

平成4年度の発掘調査は、発掘予定面積が13,005m²で、環状集落跡の周辺部分を占めるA・D・F地区および現在の堀之内バーミングエリアの側道部分対象に、昨年度並みの体制と調査期間で行うこととなった。A地区は、狭い平坦面をもつ河岸段丘で、発掘調査前は成果はあまり期待されなかつたが、B地区の縄文時代中期初頭の集落跡と前期前半の集落跡に伴う遺物の廐棄場（捨て場C）が発見された。D地区は、その中心部がB・C地区と面の異なる河岸段丘で、集落跡の存在が期待できる地区であった。発掘調査の結果、後世の土地改良の影響を受けてはいるものの、環状集落跡と同時期の集落跡と考えられる遺構群と遺物の廐棄場（捨て場B・D）が発掘された。F地区については、平成3年3月26日の協議において道路公団管理局から設計変更に伴う追加調査というかたちで示されたもので、その面積は2,300m²であった。F地区は、C地区に隣接していることから、環状集落跡の延長部分が検出されるかと期待されたが、期待はずれに終わった。しかし、この地区的調査で環状集落跡の南の限界が確認された。なお、発掘調査が予定よりも進捗したため、確認調査時に耕作が行われていて調査不可能であったE地区的水田部分について、確認調査を実施した。最終的な実質発掘調査面積は、10,008m²であった。

4月13日、調査員5名で現地入りし、恒例となった挨拶回りを行う。その後、発掘調査範囲や支障物件

1 発掘調査

の確認、発掘調査機材の搬入・購入などを行い、5月の連休明けからの発掘調査開始に備えた。

5月7日、発掘調査を開始、D・F地区の調査に着手した。両地区ともまず基本層序および遺物出土状況確認のためのトレーンチ発掘を行った。調査員は、D地区3名・F地区2名、作業員は、D地区30~35名・F地区20~25名というように割り振った。12日、F地区的表土・遺物包含層発掘に着手した。18日、D地区も表土・遺物包含層発掘に着手した。D地区では、遺物の出土がまばらなため表土~遺物包含層の中位まではバックホーで発掘することとした。26日、D地区で人力の遺物包含層発掘に着手した。29日、F地区で遺構精査および遺構発掘に着手した。

6月3日、F地区的遺構発掘終了。4日、F地区的メンバーで、A地区的調査に着手した。10日、D地区の遺構精査を開始した。16日、A地区でバックホーによる表土剥ぎを開始した。18日、A地区的遺物包含層の発掘に着手した。25日、堀之内町公民館事業の一環である「ふるさとめぐり」メンバー40名が前年に引き続き見学に来路。26日、D地区的遺構発掘を開始した。

7月7日、A地区的遺構精査を開始した。8日、D地区に所在する古墳の可能性のあるマウンド（以下マウンドとする）の実測に着手した。10日、A地区的遺構発掘を開始した。29日、D地区的マウンドで周溝と思われる溝状の遺構が確認された。

8月18日、側道部分の発掘調査に着手した。9月8日、側道部分の遺構精査・遺構発掘を開始した。17日、埋文事業団の総務課長が発掘調査状況視察のため来路。21日、同事業団事務局長・調査課長・第2係長、現地の視察・指導に来路。22日に調査課長と調査担当が来年度の発掘調査・遺物整理予定について協議を行なった。側道部分の遺構発掘を開始した。29日、側道部分の発掘調査終了。30日、文化行政課の現地指導があり、マウンドは直径または長辺が12m余りの古墳の可能性があるので、古墳を想定した調査を行うべきであるとの指導があった。10月1日、D地区で川岸に遺物や礫が集中する自然流路が検出された。この自然流路は、遺物などの出土状況からみて、川岸で何らかの作業が行われていた可能性がうかがわれた。5日、



第6図 調査風景など (1.遺構の清掃 2.遺物の取り上げ 3.航空測量 4.遺跡の見学会)

第2係長が自然流路の視察に来跡。11日、堀之内町の小・中学校PTA役員約50名、見学のため来跡。13日、テレビ局の取材があり、この時の取材内容は11月7日に放映された。14日、月末までの予定で、調査員1名が応接に加わり、早速、D地区自然流路の発掘を担当することになった。23日、マウンドの頂部の調査に着手した。29日、マウンドの封土より近世陶器が出土した。

11月3日、堀之内町が発掘調査を行っていた桜又古墳群の現地説明会が行われた。この古墳群は、本遺跡に隣接しており、本遺跡へも見学者が多数訪れた。5日、D地区のマウンドの発掘調査が終了した。結局は、マウンドは近世の塚、周溝と考えていたものは古墳時代～古代の溝であった。9日、E地区の確認調査に着手した。12日、文化行政課長・総務課長、発掘調査状況の視察に来跡。埼玉県北部市町村発掘担当者研修会、見学のため来跡。13日、ヘリコプターで航空測量を行った。

12月2日、A・D地区の発掘調査が終了した。3日、E地区の確認調査が終了した。4日、関係機間に発掘調査終了の挨拶回りをした後、現地から撤収した。

平成5年度【4月12日(月)～9月10日(金)】 5年度は、現地調査の最終年度に当たるとともに本格的な遺物整理作業の初年度となるため、調査員5名は、現地調査に3名・埋文事業団本部での遺物整理作業に2名というように割り振った。現地調査は、調査予定面積6,250m²で、前年度の確認調査の結果を踏まえてE地区を①～④に分割し、おおむね上半期中の終了目標を行った。現地での調査体制は、調査員3名・作業員40～50名であった。

E①地区は、OC～OH02-07に位置し、確認調査では諸磧b式土器が出土したことから縄文時代前期後半の集落跡の存在が期待された。しかし調査の結果、集石土坑が2基検出されたことにとどまった。E②地区は、E①と谷地水田を隔てた対岸のOD～OH2～9に位置している。確認調査結果からみてあまり大きな成果は期待されていなかったが、OE～OH8・9からは縄文時代早期の押型文土器、OG6からは縄文時代早期以前と考えられる片刃石斧が出土した。E③地区は、OI～OM14～21に位置しているが、他のE地区とは段丘面が異なり比高差約18mの高所に所在する。確認調査では、縄文時代早期の沈線文系土器と考えられる土器の小片が出土したことから、早期の遺構・遺物の発見が期待された。調査の結果、この地区からは、他のE地区に比して遺構・遺物が最も多く発見され、縄文時代中期末の住居跡や早期の土坑といった遺構およびそれらに伴う遺物が検出または出土した。早期の遺物は、OK～OM16・17付近に所在する埋没谷の下層から後葉の土器がかなりまとまって出土したほか、玦状耳飾りと円筒状の石製品がOJ18からまとめて発見された。E④地区は、OF～OJ21～24に位置し、確認調査では段丘縁に混じって磨製石斧が1点出土しただけであった。そのため本調査を行うこともためらわれたが、調査の結果、疊層上面から縄文時代中期の遺構・遺物が発見され、環状集落跡と同じような時期の遺跡であることが明らかになった。実質発掘調査面積は、5,723m²であった。

4月12日、調査員3名で現地入りし、関係機間に挨拶回りを行った。21日、バックホーでE②地区的表土剥ぎを開始した。26日、E②地区的表土剥ぎ終了、同地区的遺物包含層の発掘を開始する。本日より作業員を投入した。

5月17日、E③地区的調査に着手した。5月19日、E②地区的遺物包含層の発掘終了、同地区的遺構精査に着手した。21日、E②地区的遺物包含層の発掘を開始した。31日、E③地区的遺構発掘終了。

6月1日、E①地区的調査に着手した。2日、E①地区的遺物包含層の発掘を開始した。10日、事務局長・調査第2係長、現地の視察と指導のため来跡。その時点では、E①地区は表土剥ぎ終了、E②地区は調査ほぼ終了、E③地区は遺物包含層を発掘中で遺物がかなり出土、E④地区はまだ調査未着手の状況であつ

た。

7月2日、E①地区の遺構精査に着手した。5日、E④地区の調査に着手した。8日～9日、調査課長・調査第2係長・現地指導に来跡。その時点での調査状況は、E①地区は遺物包含層発掘中であったが、遺構・遺物はあまり認められない、E③地区は深さ2m余りの埋没谷を発掘中で遺物はかなり多く出土、E④地区はバックホーで表土剥ぎを行っている最中であった。22日、E③地区的遺構精査を開始した。26日、E①地区的遺構発掘を開始した。29日、調査第2係長・現地指導に来跡。調査担当者と現地調査完了予定などについて協議し、調査完了は、9月の第1週目くらいになることを確認した。調査状況は、E①地区は遺構発掘中、E③・④地区は遺構精査中であった。

8月4日、E④地区的遺構発掘を開始した。17日、E③地区的遺構精査が終了し、ただちに遺構発掘に移行した。23日、文化行政課埋蔵文化財係長・終了確認のために来跡、調査第2係長が同行した。24日、ヘリコプターによる航空測量が終了した。同日、北魚沼郡担当の文化財保護指導委員が発掘調査状況確認のため来跡。25日、現場撤収へ向けての残務整理作業に入った。9月8日、道路公團管理局・堀之内町・インターチェンジ建設施工会社に来跡してもらい、E地区的引き渡しを行った。10日、前日からの挨拶回りの後、現地から撤収した。ここに、足掛け4年間続いた本遺跡の現地での調査は完了した。

C 調査体制

平成2年度（9. 3～11. 29）

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 堀川徹夫）

管理	総括	大島圭己（新潟県教育庁文化行政課長）
管理	吉倉長幸（	課長補佐）
調査指導	中島栄一（	埋蔵文化財係第1係長）
	本間信昭（	埋蔵文化財係第2係長）
庶務	境原信夫（	主事）
調査担当	寺崎裕助（	主任）
調査員	平沢秀昭（	文化財主事）
	岩崎 均（	文化財専門員）
	小野塚徹夫（	文化財専門員）
	高橋知之（	臨時の任用職員）

平成3年度（4. 22～11. 30）

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 堀川徹夫）

管理	総括	大島圭己（新潟県教育庁文化行政課長）
管理	吉倉長幸（	課長補佐）
調査指導	横山勝栄（	埋蔵文化財係第1係長）
	本間信昭（	埋蔵文化財係第2係長）
庶務	藤田守彦（	主事）
調査担当	寺崎裕助（	主任）
調査員	川村三千男（	文化財主事）

岩崎 均 (+	文化財専門員)
小野塚徹夫 (+	文化財専門員)
羽賀信幸 (+	文化財専門員)

平成4年度（4. 13～12. 4）

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）

管理	藍原直木（事務局長）
	渡辺耕吉（総務課長）
	茂田井信彦（調査課長）
庶務	藤田守彦（総務課主事）
指導	藤巻正信（調査課調査第2係長）
担当	寺崎裕助（+ 主任）
職員	中江茂雄（+ 専門員）
	加藤正樹（+ 専門員）
	岩崎 均（+ 専門員）
	羽賀信幸（+ 専門員）

平成5年度（4. 12～9. 10）

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）

管理	藍原直木（事務局長）
	渡辺耕吉（総務課長）
	茂田井信彦（調査課長）
庶務	藤田守彦（総務課主事）
指導	寺崎裕助（調査課調査第2係長）
担当	岩崎 均（+ 専門員）
職員	中江茂雄（+ 主任）
	高橋一功（+ 専門員）

2 整理作業

A 方 法

(1) 遺 物

遺物は、第1表で示されているように最終的には総量で1842箱を数え、その内訳は、土器(土製品含む)654箱・石器(石製品含む)1,188箱であった。

土器 土器は、水洗→註記→接合・復元→抽出→実測・拓本→復元→写真→図版という手順で整理作業を行った。水洗は、土器の保存状況があまり良好ではなく、無理な水洗によって文様が磨滅する恐れがあったことや出土量が多く現地では対応できないと判断したため、調査初年度の冬より新潟市内の曾和分室内に整理室を設けて行った。註記もまた同様であった。

接合は、調査現場で取り上げた1袋単位を重視し、まずその中で徹底的に接合を行い、次に同一グリッド、その次に周辺のグリッドというように徐々に接合の輪を広げ、同一個体の発見に努めた。復元は、実測時に断面などの観察が必要なため、とりあえずは実測や拓本に耐え得る程度の復元にとどめ、実測・拓本後に写真撮影用や展示用の復元を行った。なお復元は、展示などで一般の人たちにより理解を深めてもらうため、できるかぎり全体像がわかるような復元に努めた。

抽出は、実測・拓本用の土器を選び出す作業であるが、出土量が大量であったため抽出の漏れや重複を避けるため、抽出表に記入しながら土器担当の職員が行った。抽出基準は、復元土器や大型破片はもちろんのこと、遺構出土の土器や口縁部破片を重視した。実測は、文様や器形が複雑なものと単純なものに分け、複雑な土器の実測は、超望遠レンズ装着のカメラで撮影した写真から実測図を起こす方法を用いた。単純な土器は、従来通りの実測方法で行った。口縁部破片で口径がある程度わかるものについては、できるかぎり復元実測を試みた。縄文などの地文が施されているものは、地文を部分的に拓本にとり実測図に張り込んだ。拓本は、基本的には従来通りの方法を用いたが、文様が出にくい箇所については、乾拓的な技法も用いた。実測・拓本は、日々雇用職員が行いそれを土器担当職員が点検したが、点検済みのものには実測・拓本カードに必要事項を記入し、それぞれの実測図や拓影図に添付した。

写真は、実測図用と展開写真用のものは委託し、図版用のものは職員が撮影した。図版は、なるべく出来上がりに近い大きさを目標に、実測・拓本図版は2倍図、写真図版は等倍で作成した。図版構成は、出土土器の遺構ごとのまとまりや一括性・同時性を重視するという編集方針から、遺構ごと・グリッドごとに、そして南北から北・西から東の順番で張り込んだ。収納にあたっては、報告書に掲載したものはその図版番号を註記し、報告書との照合が容易となるようにした。

石器 水洗・註記の後、石器器種・剥片類・自然砾とに分けた。石器器種・剥片類については、遺構・グリットごとに分けて、個々の長さ・幅・厚さ・重量等を計測し、台帳を作成した。その後、石器器種ごとに細分・観察を行った。分類基準については、同一遺跡であることを考慮して、前回報告(新潟県教育委員会 1990b)にはば從うこととした。この結果を台帳に加えて観察表を作成した。これは、石器器種には全点について本報告書に掲載している。観察表の作成とともに、実測個体を選び出し、二次加工の複雑な石器・尖頭

第1表 年度別遺物出土量

	平成2年度	平成3年度	平成4年度	平成5年度	計
土器	100 箱	380 箱	150 箱	24 箱	654 箱
石器	300 箱	580 箱	248 箱	60 箱	1,188 箱
計	400 箱	960 箱	398 箱	84 箱	1,842 箱



第7図 整理作業風景 (1.石器実測 2.トレス)

器・石錐・打製石斧・三脚石器などの大部分は土器同様に写真実測を、その他の器種については簡易実測器を利用することによって正確に早く実測図を作成できた。リング・フィッシャーなどは、調査員が記入した。なお、写真実測に用いた写真是、写真図版に使用することとした。

石器の収納にあたっては、報告書に掲載したものと未掲載のものとに分け、器種ごとにまとめた。石器全点について観察表の番号を註記し、また実測図版に掲載した石器については観察表の番号とともに実測図番号も註記して、後の検索を容易になるようにした。

(2) 図 面

現地で作成した図面は、遺構平面図・同断面図・同微細図・同略図・土層断面図などで、350枚以上に上った。そのうち遺構平面図は、発掘調査の迅速化を図るために航空測量を行い、 $1/40$ と $1/100$ の図面を素図の段階まで業者に委託して作成した。ほかの遺構断面図・同微細図・土層断面図などは、從来通り人手による実測を行い、遺構断面図・同微細図などは原則として $1/10$ 、土層断面図は $1/20$ の図面を作製した。

整理段階においては、遺構全体図は $1/100$ でトレースを行い出来上がりを $1/200$ とし、14枚で遺跡全体をカバーした。個別の遺構については、縮尺コピーを利用してトレース原図を作成し、住居跡はトレース $1/40$ で出来上がりを $1/60$ 、土坑・焼土・立石はトレース $1/20$ で出来上がりを $1/40$ 、埋設土器はトレース $1/10$ で出来上がりを $1/20$ とした。

なお、反省点としては長期間の発掘調査に共通することであるが、転出者が多く、現地調査および整理作業の全期間を携わった職員は1名のみであった。そのため、遺構カードや遺構台帳でカバーできない部分が生じたりして、整理作業の進捗に支障をきたした。

B 整理経過と体制

整理作業が始まったのは平成2年の12月からであるが、現地調査が優先されたため、それが本格化したのは、平成5年度当初からであった。それまでの2年4か月は、出土遺物の水洗・註記といった基礎整理に費やされ、整理作業に携わる日々雇用職員も4名~8名であった。

平成5年度当初からは、職員2名が常駐し、それに日々雇用職員15名が加わり、整理作業を開始した。9月上旬に現地調査が終了し、中旬には現地調査に従事していた職員3名が合流して整理作業はより本格的になった。整理作業のおおよその経緯は第11図のとおりであり、その実質的な作業は、日々雇用職員が行った。

体制 各年度ごとの体制は、以下のとおりである。

平成 2 年度

主体	新潟県教育委員会（教育長 堀川徹夫）		
管理総括	大島圭己	（新潟県教育庁文化行政課長）	
管理	吉倉長幸	（	♦ 課長補佐）
整理指導	中島栄一	（	♦ 埋蔵文化財係第 1 係長）
	本間信昭	（	♦ 埋蔵文化財係第 2 係長）
庶務	境原信夫	（	♦ 主事）
担当	寺崎裕助	（	♦ 主任）
調査員	平沢秀昭	（	♦ 文化財主事）
	岩崎 均	（	♦ 文化財専門員）
	小野塙徹夫	（	♦ 文化財専門員）
	高橋知之	（	♦ 臨時の任用職員）

平成 3 年度

主体	新潟県教育委員会（教育長 堀川徹夫）		
管理総括	大島圭己	（新潟県教育庁文化行政課長）	
管理	吉倉長幸	（	♦ 課長補佐）
整理指導	横山勝栄	（	♦ 埋蔵文化財係第 1 係長）
	本間信昭	（	♦ 埋蔵文化財係第 2 係長）
庶務	藤田守彦	（	♦ 主事）
担当	寺崎裕助	（	♦ 主任）
調査員	川村三千男	（	♦ 文化財主事）
	岩崎 均	（	♦ 文化財専門員）
	小野塙徹夫	（	♦ 文化財専門員）
	羽賀信幸	（	♦ 文化財専門員）

平成 4 年度

主体	新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）		
整理	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	（理事長 本間栄三郎）	
管理	藍原直木	（事務局長）	
	渡辺耕吉	（総務課長）	
	茂田井信彦	（調査課長）	
庶務	藤田守彦	（総務課主事）	
指導	藤巻正信	（調査課調査第 2 係長）	
担当	寺崎裕助	（♦ 主任）	
職員	中江茂雄	（♦ 主任）	
	加藤正樹	（♦ 専門員）	
	岩崎 均	（♦ 専門員）	
	羽賀信幸	（♦ 専門員）	

平成5年度

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
遺構							トレース	■	■	■	■	■	
土器	複合	■	■	■	■	■	復元	■	■	■	■	■	
石器	註記	■	■	■	■	■	註記	■	分類・観察	■	■	実測	■

平成6年度

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
遺構	トレース	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	図版	■
土器	復元	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	実測	■
石器	実測	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	トレス	■

平成7年度

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
遺構	図版	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	印刷・校正	■
土器	図版	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	印刷・校正	■
石器	図版	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	印刷・校正	■

第8図 年度別整理作業進捗状況

平成5年度

主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

整理 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）

管理 藍原直木（事務局長）

渡辺耕吉（総務課長）

茂井信彦（調査課長）

庶務 藤田守彦（総務課主事）

指導 寺崎裕助（調査課調査第2係長）

担当 * (*) (土器・遺構)

職員 中江茂雄（調査課調査第2係主任）（遺構）

加藤正樹（ * 専門員）（土器）

岩崎 均（ * 専門員）（遺構）

高橋一功（ * 専門員）（石器）

平成 6 年度

主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）
 整理 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）
 管理 藍原直木（事務局長）
 渡辺耕吉（総務課長）
 茂田井信彦（調査課長）
 務務 泉田 誠（総務課主事）
 指導 寺崎裕祐（調査課調査第2係長）
 担当 * (* *) (土器・遺構)
 職員 中江茂雄（調査課調査第2係主任調査員）（遺構）
 鈴木俊成（ * * 主任調査員）（石器）
 加藤正樹（ * * 主任調査員）（土器）
 高橋一功（ * * 文化財調査員）（石器）

平成 7 年度

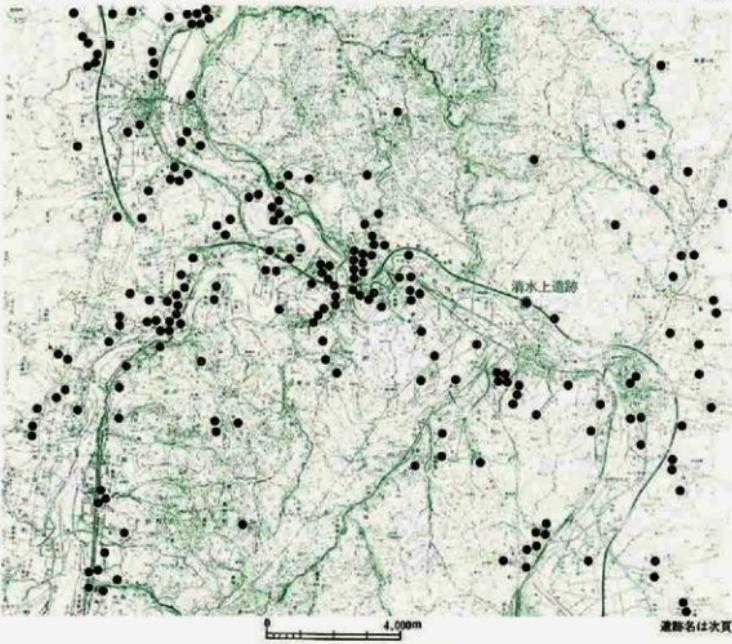
主体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）
 整理 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 平野清明）
 管理 藍原直木（事務局長）
 山上利雄（総務課長）
 亀井 功（調査課長）
 務務 泉田 誠（総務課主事）
 指導 寺崎裕祐（調査課調査第2係長）
 担当 * (* *) (土器・遺構)
 職員 鈴木俊成（調査課調査第2係主任調査員）（石器）
 加藤正樹（ * * 主任調査員）（遺構・土器）
 高橋一功（ * * 文化財調査員）（石器）
 大杉真実（ * * 嘱託員）（遺構）

第Ⅲ章 遺跡の環境

1 地理的環境および遺跡分布

遺跡が所在する堀之内町は新潟県のほぼ中央に位置し、面積69.0km²（東西11.9km・南北14.4km）、人口10,407人（平成2年国勢調査）の第二次産業（製造業）に大きく依存した町である。昭和45年まで主幹産業の一位であった稲作中心の農業もその座を製造業など第二次産業に譲ったが、畜産・花きなどの複合農業への転換もめざましく、スカシユリの生産では全国1、2位になるまで成長している。年平均気温は11.8℃、年平均湿度は84.2%、降水量は年平均2,637.5mmを計り、夏の高温多湿、冬の多雪が特徴で、最高気温と最低気温の差が大きい内陸型の気候である。

清水上遺跡は、町域を南北に二分する魚野川の右岸段丘上に位置する。標高約100mから135mを計り、魚野川との比高差は25m以上である。当該地方の地形は新発田一小出構造線という北東から南西に軸をもつ大断層によって特徴づけられ、この構造線を境に東側を魚沼山地、西側を魚沼丘陵と呼ぶ（第10図）。群馬県境を源とする魚野川は、この大断層に沿って当町東側の小出町まで北上する。同じく大断層に沿っ



第9図 周辺の遺跡（绳文時代）
(国土地理院「小千谷」1:50,000原図 昭和59年発行)

1 地理的環境および遺跡分布

1 布場	30 黒島	59 椿平	88 芦屋	117 矢原	146 本田	175 下界沢
2 石倉田	31 麻押	60 上の原 D	89 五郎谷	118 上の原 B	147 紗高寺	176 上の原
3 須場	32 三池	61 中原 I	90 上ノ山	119 上の原 C	148 冬井	177 下の原農
4 京平	33 清本白山神社境内	62 万沢	91 田ノ瀬	120 上の原 A	149 大原北	178 大石切
5 可上	34 上宇山	63 中原 II	92 球ノ瀬	121 中道	150 中山	179 上の原農
6 まごのこう	35 神野山	64 上の原	93 平山	122 大清水	151 大原南	180 箕山田
7 所平	36 小金原	65 和田津	94 荻原	123 上原駅	152 市ノ原	181 外山
8 鳥居木	37 鶴原	66 佐野	95 川口スキーパーク	124 道原	153 池ノ葉	182 大平
9 カジヤ原	38 ノザ	67 伊田	96 中山 II	125 百鬼原 B	154 野音	183 仲中
10 草	39 中平	68 高瀬水 II	97 ササウ	126 百鬼原 A	155 北原八幡	184 隆・平
11 富田	40 芹川	69 高瀬水 I	98 木下屋敷	127 百鬼原 C	156 北原塗	185 向原
12 平岡	41 清水上	70 久保田牧	99 中山 I	128 百鬼原 D	157 行原	186 大光沢
13 水原	42 鳥ヶ原	71 千・官	100 薩摩塗	129 百鬼原 E	158 為永塗の下	187 四子山
14 芦屋敷	43 庄岡平	72 行原	101 南原	130 金坂	159 中段	188 時水
15 針山	44 舟見平	73 旗谷宮塗	102 谷内	131 鶴ヶ丘	160 岩山	189 天辺原 A
16 長者谷	45 古長沢	74 旗谷塗	103 上玄入	132 通金坂北	161 三木本	190 天辺原
17 上原	46 月岡	75 天納 I	104 諸波無	133 通金坂	162 原南	191 天辺原 C
18 吉田 A	47 月岡公園	76 天納 II	105 横平	134 下原	163 原北	192 地之壁
19 戸平	48 布場平 A	77 畑原	106 内ヶ巣	135 畠原山	164 下ノ沢	193 天辺原 D
20 古新田	49 布場平 C	78 板の上	107 濁原	136 上の山	165 鶴ヶ原	194 前野
21 渥ノ山	50 布場平 D	79 丸山 A	108 山佐	137 元の山	166 真人原	195 鶴ヶ原
22 向山	51 布場平 B	80 丸山 B	109 古屋敷	138 山本	167 市ノ口	196 小糸田
23 草	52 中平	81 丸山 C	110 天神	139 下原 I	168 山谷	197 鳥取
24 七日市	53 谷内 A	82 西倉	111 草	140 下原 II	169 鳥	198 梶之内原
25 立ノ内	54 丸坂堤	83 安寺寺	112 上の原 II	141 山王井	170 稲荷堂	199 上原 A
26 東小学校周	55 大平	84 研敎	113 上の原 III	142 中平	171 双音堂	200 戸畠
27 家の道	56 金塚	85 芦屋	114 上の原 I	143 鶴ヶ原	172 八幡様	
28 大原	57 沢田	86 芦屋 C	115 郡の木	144 鶴鳥	173 墓地の下	
29 いのくは	58 牛ヶ首	87 宮の船	116 大光明	145 鶴の神移	174 上原沢	

て南下する破間川はこの小出

町で魚野川と合流し「強い集水力と下流域の鍛治屋敷向斜による造盆地性の運動」(新潟県教育委員会1990)によって魚沼丘陵を横断し、同丘陵の西側を北上する大河信濃川に合流する。この間、堀之内町の盆地周縁部には洪積世および沖積世の大小の段丘が良く発達している。町内の段丘は合計11段に区分され(第10図)、ローム層中の鉱物組成により第2表のように対比・整理されている(堀之内町1995)。今回調査した清水上遺跡は標高100mから115m前後のH8面と標高130mから137m前後のH7面に相当し、更新世末期に形成された段丘である。

繩文時代の遺跡の分布(第9回)はこれら複数の段丘周縁に点在する。縁辺部は湧水や雨水等により深く解析され大小の沢筋を作り、これらの沢

第2表 段丘对比表(堀之内町史、資料編による)

地質年代	十日町盆地		堀之内町地域
	層序区分	範囲	
完新世	記蓋原面 記蓋原堆積物		Hu面(氾濫原 扇状地)
	大割野 II面 大割野 II段丘堆積物		Hu面 一日市面(町外) Hu面 七日市面(町外)
	大割野 I面 大割野 I段丘堆積物	Ks (Aa-K) Ks (AT) Ks	Hu面 高等学校面(上ノ原面)
	正面面 正面段丘堆積物	Kz Kz (DKP)	Hu面 月岡面・大林面
第Ⅳ期	貝坂面 貝坂段丘堆積物	M ₁ M ₂ (Aso-4)	Hu面 柳平面・布場平
更新世	米原口 Iム層 朴ノ木坂面 朴ノ木坂段丘堆積物	M ₃ M ₄ ・M ₅ M ₂ M ₁	Hu面 大平面
	卯ノ木面 卯ノ木段丘堆積物		Hu面 上ノ画面(大字下島)
	米原 II面		
	米原 II段丘堆積物	T ₁ T ₂ T ₃	
中期	谷上口 Iム層 谷上面 谷上段丘堆積物	一 バ イ オ タ ロ イ タ ム T ₁	Hu面(中ノ段面(大字原) 牛ヶ首面・舟山面)
	鷹羽面 鷹羽段丘堆積物		Hu面 上ノ段 道光高原面 根小屋牧場面
前期	鷹羽ローム層 魚沼層群		板木平面
	魚沼層群		魚沼層群

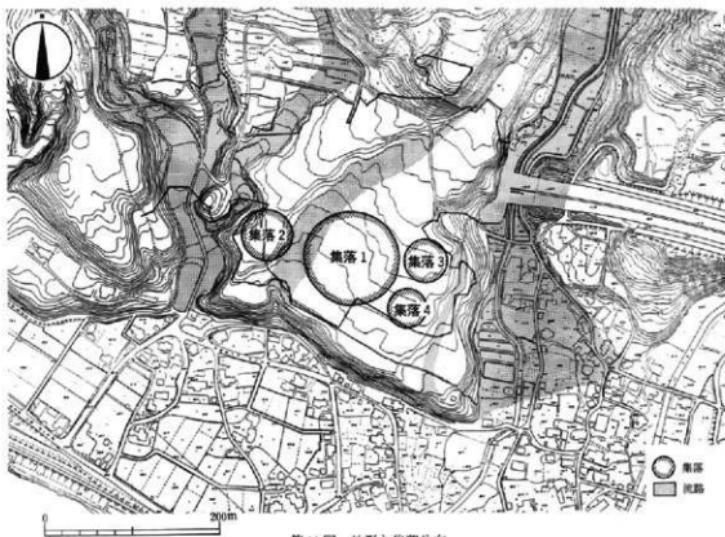


段丘分布図例



第10図 遺跡周辺の段丘分布図（段丘の区分は「堀之内町史」1995を引用）

（新潟県の地形分類図は「新潟県地質図説明書」1991に掲載の新潟県第四紀研究グループ（1971）作成図を一部加筆）



第11図 地形と集落分布

筋をとりまくように遺跡が立地している。段丘中央部に立地する例が少ないので水の便を考慮したためであろう。遺跡は南側に広がる河岸段丘に多くが存在するものの、これは地形的な制約によるもので、むしろ、段丘が未発達な北部は南部に比べ、平坦部の面積の割に遺跡が多いと言えよう。

また、時期別の分布および遺跡数の増減に関しては「堀之内町史、資料編」(堀之内町1995)が詳しいので要約すると、旧石器時代から縄文時代前期にかけて遺跡数は徐々にではあるが増加し、高等学校面(H 8面)以上の高位段丘に立地する。次の中期に遺跡数は爆発的に増加し、大規模な集落を形成するにいたる。段丘面としては前期以前同様、高等学校面(H 8面)以上の高位段丘に立地するが、大規模な集落は比較的低位の段丘に進出する。次の後・晩期には遺跡数は激減し、低位段丘(H 6面)へ進出する。これらの遺跡増減または低地への進出過程等は、本県の一般的な状況と合致する。

清水上遺跡が立地する段丘は北北東の高位段丘から流れ込む複数の沢または湧水の流路により開折され、起伏に富んだ微地形を形成している。遺跡の占地および土地利用はこれらの微地形の利用、または制約の上で展開したと考えられる。調査範囲内に存在する大小の流路は合計4本に達し(第11図)、現在も湧水が確認される集落2の捨て場Bの沢、または、集落4(縄文時代前期)の段階で形成されていた流路(捨て場C)。そして、集落1の捨て場Aを形成した崖下には水が勢い良く流れないまでも、湿润な環境であったことが珪藻化石の分析で明らかになっている。これら小規模な沢または湿地に隣接する微高地状の平坦部は、居住空間としての好条件を備えていたことは言うまでもない。眼下に広がる大河魚野川は食料獲得の場として認識される一方、これら小さな湧水・沢・湿地等は日々の生活に密着した生活の施設および設備として位置づけることができよう。

2 遺跡の層序

本遺跡における基本的な土層堆積は、I層（表土）・II層（縄文時代の遺物包含層）・III層（地山漸移層）・IV層（地山）からなっており、前回の調査で認められた平安時代の遺物包含層である黒褐色土は確認されなかった。黒色土の堆積は、段丘の平坦部では50~60cmと薄く、遺構の掘り込みも土層断面の観察から、I層直下で確認されるものもあった。それゆえ、II層は単なる遺物包含層ではなく、遺構覆土となっている場合も少なくないものと考えられる。地山は、本来は粘質土であるが、場所によっては段丘疊が露出しており、河原状を呈する地点も存在した。各集落跡およびA・E地区の基本的な土層堆積は以下のとおりである。

集落跡1 C地区に位置し、地山ラインは、北～南・西～東へとゆるやかに傾斜する。東端のL3-25付近では、I層は黒褐色を呈し、厚さ約40cmを計り、地表下約20cmまでは耕作の影響を受けている。II層はa・bに二分されIIa層は黒色を呈し、厚さ10~15cmを計る。IIb層は暗褐色を呈し、部分的に1~2cmの大きさの炭化物を含んでいる。IIa層は粘性、しまりが強く、遺物を多く包含している。III層は、全面に4~5mmの大きさの炭化物が認められるほか、砂が多く混入しておりザラザラしている。厚さは約10cmを計る。IV層は、水による還元作用をうけて青灰色に変色し、水分を多く含み粘性にも富んでいる。

中央部のL8-25付近では、I層は、上面で耕作の擾乱をうけているが、下位は硬くしまり、全体に多量の白色の小礫が混入している。厚さ約20cmである。II層は、a・bに二分されずに黒色を呈する。炭化物を少量含み、遺物の出土も少量である。厚さは約15cmである。III層は暗赤褐色を呈し、IV層の混入がかなり認められる。厚さは12~15cmである。IV層は、本来の黄褐色を呈している。

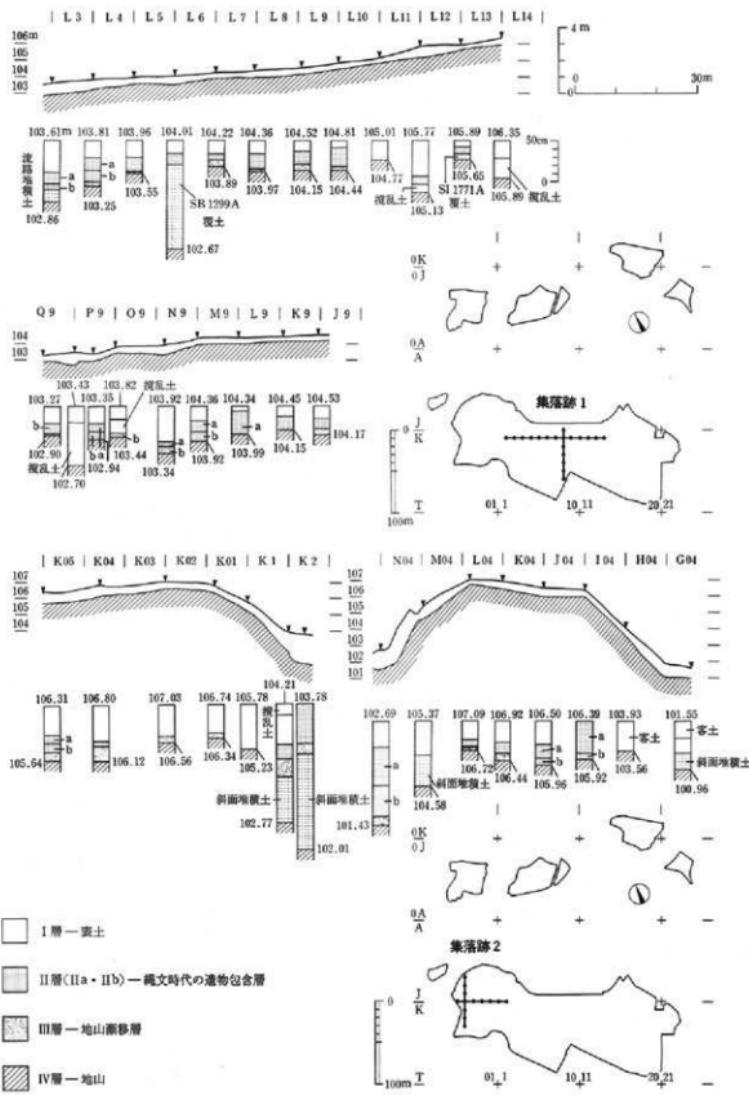
西端のL13-5では、I・II層とも黒褐色を呈して色調では分層不可能であった。しかし、I層はL8-25付近と同様に小礫を多く含むことから、それを目安にI・II層の分層を行った。I層の厚さは約20cm、II層の厚さは約15cmである。III層は暗褐色を呈し、下部ではIV層である黄褐色土の混入が目立っている。厚さは5~10cmである。

北端近くのL5-5では、I層は、中央部のL8-25付近と同様に上面は耕作の擾乱をうけているが下位は多量の白色の小礫が混入して硬くしまっている。厚さは約20cmである。II層はa・b分層が可能で、IIa層は黒色を呈し、細い炭化物や地山（IV層）粒を含み、遺物のほとんどがこの層から出土する。厚さは約15cmである。IIb層は暗褐色を呈し、しまりが強い。この層も遺物包含層であるが、遺物の出土は少ない。厚さは約10cmである。III層は暗褐色を呈して硬くしまり、IV層である黄褐色土が少量混入している。厚さは約15cmである。IV層は黄褐色土である。

南端近くのP9とO9の境界付近では、I層は硬くしまり、径5mm以下の小礫を多量に含んでいる。厚さは約15cmである。II層はa・bに分層が可能である。IIa層は黒褐色を呈し、しまりが強い。IIb層は暗褐色を呈し、しまり強く、粘性もIIa層よりも強い。IIa層との境界は明瞭であるが、III層との境界は明瞭ではなく、漸移的である。厚さは、IIa層が約15cm、IIb層が約10cmである。III層は褐色を呈し、IIb層とIV層の混合土であり、部分的に認められるのみである。しまりは強く、粘性もIIb層よりも強い。厚さは約5cmである。

以上のように集落跡1においては、I～IV層までがほぼ安定して認められるが、I層は前述したようにしまりは強いが粘性はなく、小礫を多量に含むほか、地山粒や炭化物も少量ながら含むといったように均質ではない。このことは、I層は場所によっては客土された土壌であり、従来は、かなり不規則であった地表面

2 遺跡の層序



第12図 基本層序(集落跡1・2)

耕作という人為的な行為によってなだらかにされたことを示すものである。また、I層下において擾乱が数地点において認められることや発掘調査前には表面採集でかなりの量の遺物が採集可能であったことも耕作という人為的行為によって本集落跡がかなり破壊されていたことをものがたっている。なお、縄文時代の遺物包含層であるII層は、地点によってはa・bに分層が可能であるが、単に色調の違いによる分層であり、a・bにおいて遺物の時期的な差異はない。

集落跡2 本集落跡は、D地区とC地区に位置し、集落跡1よりも2~3m高い段丘面にある。地山ラインは、東~西方向では段丘面上はほぼ水平であるが、02・01の境界付近から捨て場Aの谷筋となるため急傾斜となる。南~北方向では北から南へとやや傾斜しM・LとJ・Iの境界付近で捨て場B・Dの谷筋に入るため急激に傾斜を強める。

東端のK05-25では、I層は暗褐色を呈し、小礫が全体に含まれ、しまり、粘性がやや強い。厚さは約15cmである。II層は、I層と同じく暗褐色を呈し、a・bに分層される。IIa層はI層よりも暗く、しまりはやや強く、粘性は強い。厚さは約20cmである。IIb層はやや黄色味を帯び、しまりは強く、粘性はきわめて強い。厚さは約10cmである。III層は暗黃褐色を呈し、しまり、粘性とも強い。厚さは約10cmである。

段丘面のほぼ中央にあたるK04-23では、I・III層は、東端のL05-25と同じであるが、II層は、色調はI層に近似し、小礫が全体に含まれるがその量はI層よりも少ない。しまり、粘性ともやや強い。厚さは、I層が約20cm、II・III層はともに約10cmである。

段丘平坦面の北端付近に当たるL04-25および南端のJ04-5では、各層の色調、土質などは同じであるが、黒色土の堆積はL04-25では約45cm、J04-5では約55cmである。また、J04-5ではIII層は部分的にしか認められない。

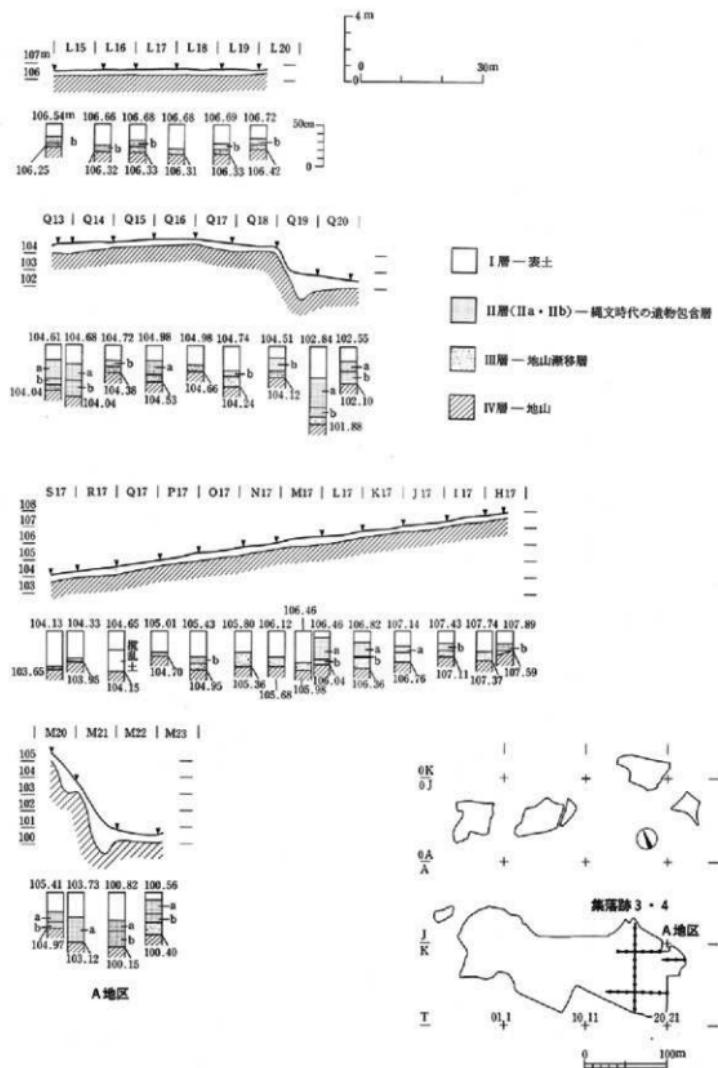
集落跡3・4 集落跡3・4は、同一段丘面上に重複するようにB地区に位置を占めている。また、地区は異なるが、集落跡1とも同一段丘面上を占有する。地山ラインは、段丘平坦面においては東~西方向では水平であるが、南~北方向では北から南へと大きく傾斜し、その比高差は北端と南端では4mを計る。

集落跡3の東端、L15では、I層は黒味の強い黒褐色を呈し、IV層のブロックを特徴的に含んでいる。厚さは約5~15cmである。II層は暗褐色を呈し、集落跡1・2のIIb層に対比される。厚さは約10cm~20cmである。III層は暗赤褐色もしくは黄褐色を呈する。厚さは約5cmである。中央部付近のL17ではI層は暗褐色もしくは黒褐色を呈し、大変硬くしまっており、小礫を多く含んでいる。厚さは約15cmである。II層はa・bに分層される。IIa層は黒味を帯びた暗褐色を呈し、擾乱をかなりうけているようである。厚さは約10cmである。IIb層は暗褐色を呈し、厚さは約10~15cmである。III層は暗赤褐色もしくは黄褐色を呈し、厚さは約10cmである。西端のL20では、東端と同様な層序が確認され、厚さはI層が約20cm、II層が約10cm、III層が約5~10cmである。

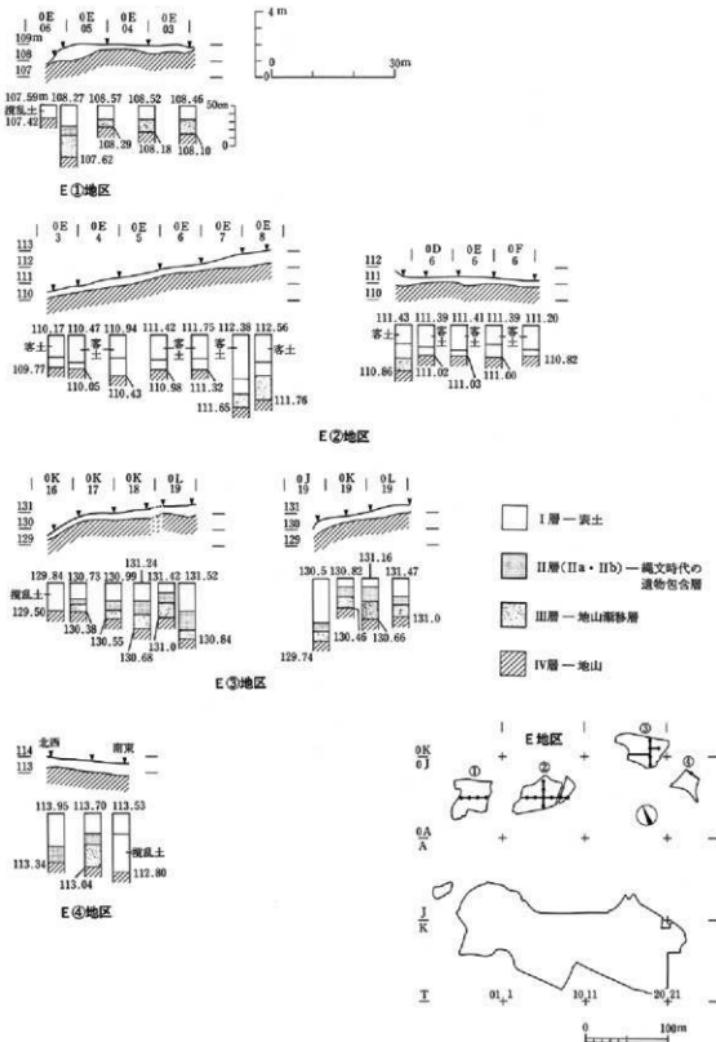
集落跡4の東端、Q13では、I層は黒褐色を呈し、小礫を含んでいる。厚さは約20~30cmである。II層はa・bに分層される。IIa層は暗褐色に近い黒色を呈し、しまりが強く粘性もある。厚さは約15cmである。IIb層は暗褐色を呈し、径1~2mmの炭化物を含み、粘性、しまりとも強い。厚さは約5~10cmである。III層は暗赤褐色を呈し、径4~5mmの炭化物を含み、砂が多く混入してザラザラしている。厚さは約10cmである。中央付近のQ17では、I・III層は確認されたが、II層は明確には確認されなかった。I・III層の厚さは、それぞれ約20~25cmと10cmである。西端近くのQでは、I・II・III層は認められるが、II層は薄く、約5cmである。I・II層の厚さは、それぞれ約30cmと約10cmである。

集落跡3・4の北端、H17では、I層は黒味を帯びた暗褐色もしくは黒褐色を呈し、小礫を多く含み、非

2 遺跡の層序



第13図 基本層序 (集落跡3・4、A地区)



第14図 基本層序 (E地区)

常に硬くしまっている。厚さは約30cm～35cmである。II層はIII層の上部にわずかに部分的に認められるのみである。III層は暗褐色もしくは黄褐色を呈し、I層との境界は波打っており、厚さは約5～15cmである。南端のN17ではI・III層のみが確認された。I層は木の根の擾乱をうけており、厚さは約25cmである。III層の厚さは約10cmである。

以上のように集落跡3・4の層序は、基本的には同一段丘面に所在する集落跡1と同じである。しかし、集落跡3・4が位置する区域は、後世の搅乱が激しく、場所によってはII層（遺物包含層）が存在しない箇所もあった。

A地区 本地区は、集落跡1・3・4が所在する段丘面よりも一段低い段丘面に位置し、その比高差は約2～5mである。M22とM23の境界付近では、I層は、表面に腐植土が堆積する暗褐色土でしまりは非常に強いが粘性は弱い。近世以降の陶磁器が出土する。厚さは約15cmである。II層はa・bに分層される。IIa層は黒褐色を呈し、しまりは強く、小礫を大量に含んでいる。A地区全域で「前後の層よりもひときわ厚い層」として認められ、平安時代の土師器の大半が出土した。前回の調査（新潟県教育委員会1990b）におけるII層に対応するものかもしれない。厚さは約20cmである。IIb層は暗褐色を呈するが、色調はやや明るい。しまりは強いが粘性はやや弱く、下部に地山（IV層）粒を少量含んでおり、やや砂質気味である。縄文土器がまれに出土する。厚さは約15cmである。III層は暗褐色を呈し、しまりは強い。厚さは約10cmである。

E地区 E地区は関越自動車道の北側に位置し、さらに①～④の地区に細分される。E①地区はE地区の中で最も低位に位置する。東端近くの0E06では、I層は黒褐色を呈し、径1～2mmの白または赤褐色の粒子を多く含む。やや粘性はあるが、しまりは弱い。厚さは約30cmである。II層は黒色を呈し、砂もしくはシルト質で粘性が弱い。下部より縄文時代の遺物が出土する。厚さは約15cmである。III層は黒褐色または黄褐色を呈し、粘性、しまりとも弱い。厚さは約25cmである。IV層は黄褐色を呈する粘質土で、しまりは強い。他の0E04・03ではII層は認められず、黑色土はI・III層のみである。

E②地区は、地山ラインが西から東へと傾斜し、西端と東端の比高差は約3mである。この地区は、遺物包含層は明確には確認されず、I層からただちにIII層となっている。また、かなり大規模に土砂の人の為的な移動が行われたらしく、ほとんどのグリッドで暗褐色の旧表土上に黒褐色の客土が認められた。

E③地区は、最も高位に位置し、E②地区との比高差は約18mである。地山ラインは北～南、西～東へと傾斜している。E地区の中では層序が最も安定しており、遺物包含層もほとんどのグリッドにおいて確認されている。東西セクションと南北セクションが交差するOL19付近では、I層は暗褐色を呈し、木の根による搅乱が著しく、しまり、粘性はあまりない。厚さは約20cmである。II層は黒褐色を呈し、木の根の搅乱はうけてはいるが、しまりはかなりある。厚さは約15cmである。III層は上半分で縄文時代の遺物がまれに出土する。厚さは約20cmである。

E④地区は、E②地区ととは同一の標高に位置する。一部は搅乱をうけていたが、一応I・II・III・IV層は確認でき、IV層までの黒色土の厚さは約60cmである。I層は黒褐色砂質土、II層は黒色砂質土、III層はにぶい黄褐色砂質土、IV層は黄褐色砂質土で粘性やしまりはあまりないが、いずれの層も径約2～10cmの段丘疊の混入が著しく、ほとんど疊層化している箇所もあった。

第Ⅳ章 繩文時代の遺構・遺物

1 概 要

本遺跡は約 112,000 m² の規模を有する繩文時代中期を中心とした大遺跡である。今回の調査は、集落跡 1 の南半分を中心とした 38,800 m² を対象に行われた。調査の結果、前期と中期の集落跡が 4か所ではほぼ完掘されたほか、住居跡や土坑およびピットなどが数地点において発見された。そして、それらに伴う遺物も大量に出土した。以下は、それらの概要である。なお、これ以後の遺構・遺物の説明も集落跡単位や地区ごとで行なっていきたい。

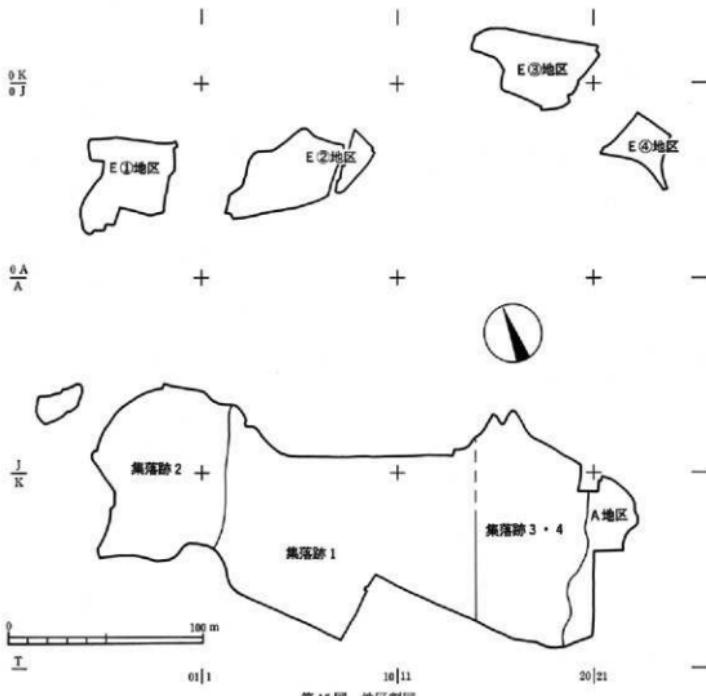
集落跡 1 本集落跡における今回の調査範囲は、I～R2～14 間でその面積は約 11,000 m² である。遺構は、住居跡 65 軒、土坑 187 基、ピット 2,180 基、立石 16 基、石列 1 基、埋設土器 7 基、遺物の廃棄場（捨て場 A）などが検出され、J～P3～14 間の南北 70m・東西 120m の範囲に集中している。しかし、J7～11、K・L8～10 は遺構の空白域となっていることから広場と考えられ、その縁辺部では立石や石列が検出された。住居跡は、幅 30～40m の半環状に検出され、土坑やピットの集中域と合致している。また捨て場 A は、集落跡西端の自然流路を利用しており、多くの遺物が出土した。このようなことから、集落跡の形態は前回の調査（新潟県教育委員会 1990b）で予測された通り、中央に広場や立石をもち、その周囲に住居跡や土坑などの遺構群がめぐり、西端に遺物の廃棄場（捨て場 A）をもつ、直径 120～130m ほどの典型的な環状集落跡であることが確認された。遺物は、土器約 400 箱、石器器種約 8,500 点と大量に出土しており、伴出した土器を基準に中期前・中葉に大別され、さらに中期前葉①・②・③、中期中葉①・②・③というように 3 時期ずつ、都合 6 時期に細分される。検出された遺構も大半が中期前・中葉に比定されるものと考えられる。

集落跡 2 本集落跡は、F～O04～2 の間に範囲を占め、その面積は約 5,000 m² で、遺構集中区と遺物の廃棄場で構成されている。遺構集中区は、面積は約 2,700 m² で、集落跡 1 より一段高い段丘面上に位置し、集落跡 1 との高差は 2～3m あまりである。段丘面の縁辺部は、土地改良や開拓自動車道の建設および自然の崩落により集落存続当時の状況を保っていないようである。遺構は、住居跡 1 軒、土坑 14 基、ピット 263 基、集石 1 基および遺物の廃棄場 2か所（捨て場 B・D）が検出されたが、北側と南側の段丘面の縁辺部付近を中心に分布しており、北側は段丘崖を取り巻くように馬蹄形状を呈している。遺構集中区の大半はピットで、それにいくつかの土坑等が伴うが、炉跡や焼土は認められなかった。住居跡は、遺構集中区から外れた集落跡の北端に竪穴住居跡が 1 軒検出されたのみであり、時期も中期中葉で本集落跡の他の遺構と隔たりがある。捨て場は北側（捨て場 B）と南側（捨て場 D）の 2か所で検出され、いずれも段丘崖を利用したものである。遺物は捨て場 B から多く出土した。なお、遺構の集中分布域は、いずれも捨て場に面している。遺物は、土器約 120 箱、石器器種約 700 点と集落跡 1 ほどではないが相当量出土しており、時期は、中期前葉と前期前半に比定されるものがほとんどである。中期前葉の遺物は、どの区域からもまんべんなく出土しており、住居跡を除いた遺構の大半もこの時期のものと考えられる。前期前半の遺物は、多くが捨て場 D から出土し

ている。

集落跡3 本集落跡は、集落跡1と同一段丘面上に位置し、H～S14～20の間に範囲を占めるが、南側部分は、調査区域外へ延びる可能性がある。今回調査を実施した面積は約6,900 m²で、遺構集中区と遺物の廃棄場（捨て場C）が検出された。遺構集中区は、H～M15～19の南北50m、東西47mの範囲で認められ、7軒の住居跡らしき遺構や10基あまりの土坑が検出された。それ以外の地区は、捨て場を除くと遺構・遺物が希薄な区域で、数基の土坑が検出されたり、若干の遺物が出土したにとどまった。捨て場Cには、遺構集中区が所在する段丘面の西側段丘崖で検出され、上層から中期初頭の遺物、下層からは前期前半の遺物が出土した。出土遺物は、中期初頭の土器約40箱、石器種約550点と集落跡1・2と比べると少量であるが、当該期の資料としては、県内最大級である。出土土器は、中期初頭①・②・③というように3細分されるが、遺構や捨て場C上層では③の時期の土器が目立つことから、本集落跡の中心時期は中期初頭③と考えられる。

集落跡4 本住居跡は、集落跡1・3と同一の段丘面上に位置し、K～S15～19というように集落跡3と範囲をほぼ同じくする。集落跡3と同様に南側部分は、調査区域外へ延びる可能性がある。今回の調査では、住居跡4軒、土坑15基および土器集中地点と遺物の廃棄場（捨て場C）が検出された。住居跡は竪穴住居跡



第15図 地図剖面図

と掘立柱建物跡の二者がみられた。土器集中地点はL17~19の16×9mの範囲で認められ、遺物の廃棄場は、集落跡3の捨て場と同じ捨て場Cの下層で検出された。遺物は、土器約40箱、石器器種約160点が出土した。土器は、前期前半Ⅰ期とⅡ期に細分されるが、住居跡と建物跡はⅡ期に、土器集中地点出土の土器のほとんどはⅠ期に比定され、Ⅰ期は北側、Ⅱ期は南側が分布の中心である。

A地区 本地区は、本遺跡の西端J～R20～23に位置し、北東から南西方向に細長く延びる上下2段の段丘面からなっている。面積は約1,100m²で、上段と下段の比高差は約2.5mを計る。上段西側には捨て場Cの一部が重複している。遺構・遺物は希薄で、上段より集石遺構や埋甕が検出されたほか、晩期の土器など少量の遺物が出土した。下段からは、平安時代を中心とした若干の遺物が出土したのみであった。

E地区 本地区は、関越自動車道の北側の0M～OC07～24に位置する。調査区が散在するためにE①～④地区に分割して調査を行った。遺物は、土器約24箱、石器器種約380点である。

E①地区は、OH～OC07～02に位置し、面積は約1,800m²である。2基の集石土坑を検出したほかは、遺構・遺物はほとんど発見されなかった。間に沢をはさむE②地区は、E①地区と同様に土坑2基が検出されたのみで、他の遺構・遺物はほとんど発見されなかった。しかし早期の押型文土器、丸ノミ形石斧、晩期の浮線文土器といった意外性のある遺物が出土している。E③地区は、E①地区やE②地区よりも20mあまり高位の段丘面上の0M～OI14～21に位置し、面積は約1,700m²である。北西部を埋没谷が走り、住居跡1軒、土坑13基および埋甕などが検出されたほか、中央から西側にかけて住居跡の存在を想定させるようなビット群が多数検出された。また、早期後半や中期末葉の遺物が遺構内外や埋没谷から出土するなど、E地区の中では最も多くの遺構や遺物が、発見された地区である。E④地区は、E地区では最も西側の0J～0F21～24に位置し、面積は約600m²である。確認調査では若干の遺物は出土したが、段丘壁が大量に混入する土層の状況から遺跡は存在しない可能性があった。しかし調査の結果、住居跡の存在を想定させるような配置を示すビット5基と、それに隣接するフ拉斯コ状土坑1基が検出され、それらに伴って一括土器などの遺物が出土した。

2 分類・その他

A 遺構

(1) 記述の方針および遺構の分類

a. 基本方針

本遺跡の現地調査は足掛け4年に及び、非常に多数の遺構が検出された。個々の遺構を説明するにあたっては、遺構各説・図版・観察表を用い、その記述および表記の方法を以下のように統一した。なお遺構各説では、各遺構ごとにその内容を箇条書きで記述した。また写真については、実測図の補助という観点から選んだものを図版に掲載した。

遺構番号 検出された遺構や出土した遺物の数量が非常に多いため、遺構番号の変更は遺物証記などに大きな混乱が生じる恐れがあった。そこで、遺構番号は現場で使用したものをそのまま使用することとした。番号の表記方法は以下のとおりである。なお、番号は発掘年度ごとに1番から使用した。

例：S K 2 9 4 5 A

↙ ↘ ↓

遺構名 遺構番号 発掘年度

遺構名の略称 S I…平面形が円形もしくは指円形の住居跡と考えられるもの。

S B…平面形が長方形もしくは柱穴配置から長方形の住居跡と考えられるもの。

S K…一般的に土坑と考えられているもの。

P…一般的にピットといわれているもの。

S D…一般的に溝といわれているもの。

S X…性格不明の落ち込み。

発掘年度 遺構番号の後に、アルファベットを付し発掘年度を区別した。

平成2（1990）年度…なし

平成3（1991）年度…A

平成4（1992）年度…B

平成5（1993）年度…C

位置 住居跡・石列・捨て場・性格不明の落ち込み・土器集中地点・埋没谷は大グリッドのみを、それ以外の遺構は小グリッドまで記した。

出土遺物 各遺構から出土した遺物については、土器・土製品は図版のNoを、石器については器種ごとの数量を各項に記した。

時期 各遺構内より出土した土器によって決定した。資料化にたえうる土器は図版に掲載したが、小破片の土器のみが出土した遺構については、「出土遺物」の項に「土器出土」とのみ記し、時期判定についてはできる限り行った。

その他 人事異動のため調査員が毎年入れ替わり、遺構カードの発掘所見などの記録に統一性が欠ける面がうかがえた。また、図面や写真などの記録の不備のため整理作業に支障をきたしたこと也有った。これら不明な点については可能な限り追跡したが、作業の限界により一部断念せざるを得なかった。

b. 住居跡

調査の際に住居と認識された住居跡は、ある程度掘り込みをもつものや床面が確認されたものののみであり、その数は決して多くはなかった。その他の住居跡の大半は、整理時に図面上で焼土を中心として柱穴配置により認定されたものである。炉跡と考えられる焼土のみが検出された住居跡については、住居跡○○（焼土）と表示し、基本的にはS IおよびS Bに準じた説明を行った。

平面形・規模 掘り込みや床面・周溝が確認されたものはその範囲を、それ以外は柱穴配置をもとに推定した。

壁 調査時に確認されたものののみ、その特徴を記載した。

柱穴 配置と規模から認定し、その特徴を記載した。平面の寸法や深度は確認面からの計測値だが、床面をもつ住居跡の場合は床面からのものである。

炉 大部分は地床炉と考えられ、その検出状況から炉跡と認定した。本文中で火床としたのは、地面が直接被熱して赤変した部分をさし、その多くは焼土化してブロック状を呈している。掘り込みの深度は、確認面からの計測値である。

床 調査時に確認されたもののみ、その特徴を記載した。いわゆる貼り床は今回の調査では検出されなかった。

周溝 調査時に確認されたもののみ、その規模および覆土について記載した。

覆土 調査時に確認されたもののみ、その特徴を記載し、図版に断面図を掲載した。

c. 土坑

原則として直径が1m以上の穴を土坑として扱ったが、それ以下でも深度や覆土および遺物の出土状況によっては土坑とした。土坑個々の形態・規模・土層堆積などの記述は、観察表にまとめた。平面形の寸法は最大径を計測しているが、フラスコ状土坑では部分的に極端な張り出しがあるため、全体の形状を良く残していると思われる位置で計測している。また、深度は確認面からの最深部を計った。なお定義・分類は前回の報告書（新潟県教育委員会1990b）に準じた。分類は以下のとおりである。

土坑 円形…短径／長径 × 100=80 (%) 以上のもの

梢円形…短径／長径 × 100=80 (%) 未満のもの

不定形…円形、梢円形以外のもの

フラスコ状土坑 I類…底部径が120cm 未満のもの

II類…底部径が120cm以上、160cm未満のもの

III類…底部径が160cm以上のもの

ただし、一部の土坑（SK88C, SK188C）については、底部がピット状に落ち込み、他の土坑とは一線を画する。底部径がフラスコの特徴を表すものとはいはず、必ずしもこの分類に則した形態をとっていない。

d. ピット

柱穴・土坑・性格不明の落ち込み以外の穴をピットとした。

e. その他の遺構

埋設土器・一括土器・立石・石列・集石・捨て場などをその他の遺構としてとりまとめ、それぞれについて記述を行った。また、厳密には遺構とみなされないが、遺物の出土状況等その分布に特徴のあるものに関しては、例外的に記述を行った。（土器集中地点・埋没谷）

f. 性格不明の落ち込み（不明遺構）

性格不明の落ち込みとしたものは、風倒木や木の根および攪乱など自然の行為によって生じた落ち込みや、自然なのか人工なのか判断できない落ち込みのことで、その中から遺物が出土したものを取り扱った。

(2) 図化の方法

図版に掲載した遺構図は、全体図と個別図に大別され、構成は以下のとおりである。なお（ ）内は平面図のスクリーントーン範囲を示す。

全体図 清水上遺跡全体図 = 1:1250・・・調査区全体の遺構配置を概観できるもの

（捨て場、埋没谷、前回の調査範囲）

遺構全体図 = 1:200・・・清水上遺跡全体図を15分割したもの

(住居跡の床・焼土検出面、捨て場、埋没谷、土器集中地点)

集落跡全体図 = 1:400・・・遺構配置を集落跡ごとにまとめたもの

(捨て場、土器集中地点、集落跡1のみ前回の調査範囲)

覆土や出土遺物の状況により、縄文時代の遺構および性格不明の落ち込みとされたものは、完掘状況を各全体図に示した。しかし遺構番号は、遺構各説や観察表に記載された遺構に限り、遺構全体図および集落跡全体図にその番号を付した。

個別図 住居跡 = 1:60 (床・焼土検出面) ※焼土拡大図 = 1:30 (赤変部分)

焼土のみ検出の住居跡 = 1:40 (赤変部分)

土坑・集石・立石 = 1:40

埋設土器・一括土器 = 1:20 ※一括土器 30C = 1:40

石列 = 1:80

捨て場・埋没谷…平面図 = 1:400 (検出範囲) 断面図 = 1:100

個別図 中における P は土器、S は石器や礫などの石を示している。

住居跡の個別図においては、その住居跡に間わると判断される遺構のみをトレースし、それ以外のものは省略した。なお、図版に掲載した焼土の写真や平面図は、遺構精査時の検出状況であり、完掘状況とは、規模や形状が若干異なる。また焼土は、包含層やⅢ層漸移層中で終結しているものが多く、地山上面での形状把握が困難であったため、完掘状況の掲載は省略した。

断面図においては、IV 層以下を地山として斜線のスクリーントーンで明示した。Ⅲ層（地山漸移層）は包含層ではないが、明確に地山とは断定し難いため、調査時に発掘した層である。その表示については、包含層や遺構覆土と同様の扱いにしたが、Ⅲ層上面で掘り方が認められる場合のみ、その境界を断面図中に太線で示した。

(3) 観察表

土坑・ピット・性格不明の落ち込みは、個々の遺構ごとに観察表に記載した。土坑の記載順序は、おおむね図版と同様に分類・形態別とした。ピットおよび性格不明の落ち込みは、大グリッド別とした。観察表の項目は、遺構番号・図版・写真・位置・分類・形態・規模・土層堆積・出土遺物・時期・覆土・その他である。

分類・形態・土層堆積 土坑のみ記した。

規模 長径・短径などが推定の場合は、推定数値にカッコをつけて表した。また、重複や搅乱によって規模が不明の場合は「-」で表した。

覆土・その他 形状・覆土の状況・新旧関係・遺物の出土状況などを記載した。

他の項目は、基本方針と同様である。

B 土 器

(1) 資料の取り扱いについて

a. 基本方針

本遺跡からは、早期、前期前半、中期初頭～中葉・末葉など多岐にわたる時期の土器が出土している。こ

れらの中で質・量とも豊富で主体を占めるものは、中期前・中葉、中期初頭、前期前半の土器である。それゆえ今回は、主体を占める土器については系統・器形・文様に力点を置いた分類を試み、それ以外の資料については文様を中心とした分類を行った。分類の基本は、前回の発掘調査報告書(新潟県教育委員会1990b)に準ずると併に、遺構または遺物包含層から出土した「まとまり」を重視した。その他、口縁部資料は、他の部位よりも情報提供量が多いと考え、意識的に抽出して掲載した。なお、個々の土器の説明については、土器観察表にまとめたが、特に説明を要するものについては、報文の「土器」の項で行った。なお、土製品については、個々の説明は土器と同じく観察表にまとめたが、土器のような分類はおこなわず、「土偶」「三角形土板」といった形式的な分類にとどめた。

b. 遺構出土の土器

遺構覆土および遺構直上の遺物包含層より出土した一括土器を遺構出土の土器とした。そして、それらの土器は、遺構の時期決定ひいては集落の成立過程を明らかにすべく、より多くの図化を試みた。住居跡出土の資料は、覆土・柱穴・焼土など出土場所ごとに分けて、柱穴のみが確認された住居跡については、遺物量が極めて少ないため、出土資料は極力抽出して図示した。土坑は、場合によっては住居跡に匹敵する資料を提供することがあるため、その取扱いは住居跡に準じ、ピットは、一括個体や特徴的な土器を中心に選択して図化した。

c. 遺構外出土の土器

遺構外出土の土器は、「まとまり」を重視し、なるべく小グリッドごとの掲載に努め、好資料が出土しているグリッドについては、なるべく多くの図化を試みた。

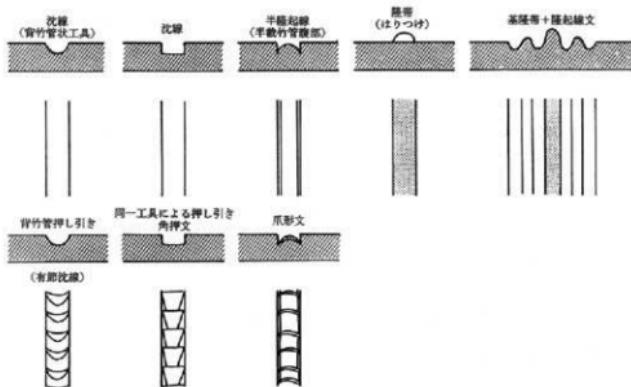
(2) 図化の方法

形や文様が複雑な復元土器の図化については、作業のスピード化と簡略化を図るために、前回と同様に超望遠レンズを用いた写真実測を導入した。実測方法は、^{1/2}もしくは実大に焼きつけした印画紙にマイラーペーパーをかぶせ、トレース台上で光をあてながら鉛筆トレースを行った後、手取り補正して断面図を加え、さらに実測図の再点検やトレースの簡略化を図るため、実測図をコピーしたものに隆起部分は赤、沈線部分は青を色鉛筆で色づけして完成させた。

破片資料は、復元実測図と拓影図を掲載したが、復元実測は、口径がある程度推測可能な資料についてはできるかぎり試み、形や文様が複雑なものについては、復元土器と同じく写真実測を行った。拓影図の基本となる拓本は、従来通りの方法を用いたが、拓影の出にくい箇所については、乾拓的な手法を採用した。なお、拓本むらをなくすために拓影原図ではなく、原図をコピーしたものを図版に用いた。文様表現方法は、前回の発掘調査報告書(新潟県教育委員会1990b)に準じ、縄文などの地文については拓本をとり、それの一部を実測図に張り込んだ。断面図における「輪積み痕」は破線で示し、欠損部は波形で表し、実測図および断面図の実存部分は実線でくくり、推定部分と実存部分の境界は間隔を空けて復元部分を細線とした。

(3) 観察表

報告書に掲載された土器は、2756点で、それらを1点づつ詳述することは、煩雑となり客觀性を欠き、その上紙面の都合からも不可能と考えられる。それゆえ、個々の土器の説明の多くは観察表にゆだねたい。観



第16図 土器文様の表現方法

察表の項目は、No.・遺構番号・出土地点・層位・系統・器種・器形・文様・原体・時期・法量・色調・混和材・二次焼成・遺存率である。なお、不明の箇所および個別に説明を行なった箇所は空白とした。

No. 石器・土製品をも含む全てを通し番号とし、番号というよりもむしろ名称のように考え、取り扱った。

地区・出土地点 地区は、第15図のように遺跡全体を集落跡1・2・3・4、A・E①～③地区に大別し、それに従って記した。地点は、できるだけ小グリッド単位で表し、層位は、集落跡3・4の捨て場Cのみについて記した。

系統・器形・文様・時期 分類の項を参照。

器種 深鉢・鉢・浅鉢に大別した。台付土器、有孔鈎付土器などについては、その他の項に記した。

原体 LRなどの記号で表した。

法量 口縁部径・器高・底部径をcm単位で示した。

色調 内外面の色調を標準土色帖を参考にして表した。

混和材 混入物もしくは混和材を中心に表したが、胎土が特に緻密なものについても記した。

二次焼成 二次焼成による色調の赤色化、スス・オコゲ状の炭化物の付着について記した。

遺存率 %表現で示すが、10%以下のものについては、空白とした。

(4) 部位名称について

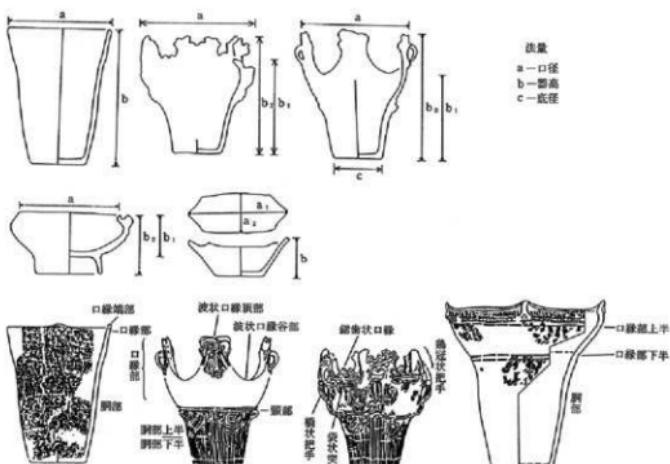
第17図のように、前回の発掘調査報告書（前掲1990b）の記述に従った。

(5) 分類

a. 繩文時代中期前・中葉の土器

① 系統

北陸系 北陸地方に分布する新崎式土器と密接な関係にある土器群。半截竹管による半隆起線文、爪形文、蓮華文などを特徴としている。しかし、石川・富山県地方の土器とは、違いが認められる。



第17図 法量測定位置と部位名称

越後系 いわゆる火炎土器様式（小林1987）のA群とされている一群である。その大半は、縄文は施文されていないが、多様な把手や突起、口縁形態をもち、半隆起線・沈線・隆起線・隆帯で満巻文や三叉文、直・曲線文などを描いている。

東北系 東北地方南部に分布する大木7b・8a式土器と密接な関係にある土器群で、会津地方や秋田・山形方面からの影響が認められるものもあるが、越後特有なものもある。

中部高地系 おもに五丁歩遺跡（新潟県教育委員会1992）や群馬県北部、長野県北東部の土器と関連するもの。地文に縄文をもつものともたないものがある。このほか、五領ヶ台式直後の土器（今村1985）に類似する土器も若干存在する。

関東系 北関東を中心に分布する阿玉台式土器と密接な関係にある土器群および阿玉台式土器の影響下において生じた土器群である。

系統不明土器 いろいろな系統が複雑に入った土器や縄文のみ施文の土器など、どの系統に入れたらよいか不明なものを一括した。

② 器 形

主観的判断により深鉢はA～J、浅鉢・鉢はA～Fに分類した。

深鉢 A（第18図1）いわゆるバケツ状に聞くもの。

B（第18図2）バケツ状の長い胴部に外反する口縁部がつくもの。

C（第18図3）長い胴部に内厚気味の口縁部をもつもの。

D（第18図4）口縁部がキャリバー形を呈し、胴部が筒状となるもの。

E（第18図5）口縁部がそろばん玉状に内反するもの。

F（第18図6）長胴で口縁部が外反してのび、口縁が内反もしくは直立気味になるもの。

G (第18図7) 脚部は外反して長くのび、口縁部が短く内反するもの。

H (第18図8) 脚部は棒状を呈し、口縁部が外反するもの。

I (第18図9) 脚部が張り、口縁部が外反するもの。

J (第18図10) 筒状を呈するもの。

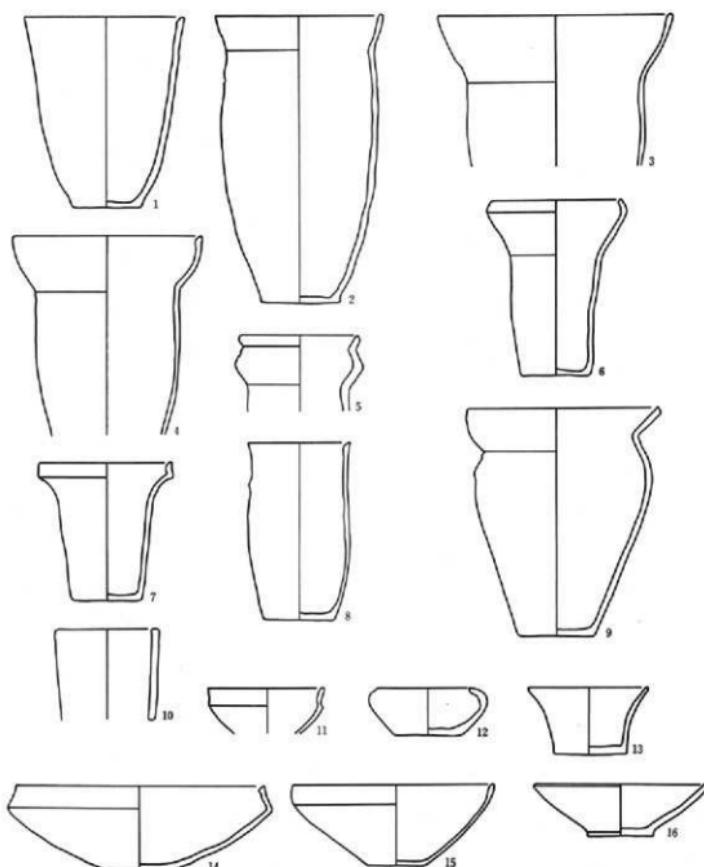
浅鉢・鉢 A (第18図14) 口縁部が「く」の字状に内反するもの。

B (第18図15) 口縁部が直立、または内縁気味に立ちあがるもの。

C (第18図16) 脚部から口縁へと外反しながら、立ちあがるもの。

D (第18図12) 口縁部が内縁するもの。

E (第18図11) 頸部が屈曲して口縁部が外縁気味に立ちあがるもの。



第18図 器形分類図(1) (中期前・中葉)

F (第18図13) 口縁部が外反するもの。

口縁部形態 平口縁のもの(a)、小突起もしくは把手のつくもの(b)、波状口縁を呈するもの(c)に分類し、Aa・Bb・Ccなどと表記した。なお小突起・把手・波状口縁が明確に認められない破片は、平口縁に含めた。

胴部形態 B・C・D器形の胴部が膨らむものについては、それぞれのアルファベットに「」をつけ、B'・C'・D'とした。

③文様

普遍的で文様構成の全体がある程度把握できるものを基準に系統別に文様構成・施文技法・地文などで分類を行った。しかし、越後系深鉢は、その大半が半隆起線・沈線・基隆帯+隆起線などで満巻文や三叉文、直・曲線文を描いている。それゆえ、文様分類にあたっては、把手・突起の形状や口縁形態で類別し、さらに施文技法などで細分した。なお、前述したように分類基準にあてはまらないものや特に説明を要するものなどについては、「遺物」の項で個別に説明を行なった。

北陸系深鉢 1類 口縁部と頸部には半隆起線がめぐり、胴部には頸部から縦位の半隆起線が垂下するもの。a~dに4分される。

a (第19図596) 口縁部と頸部をめぐる半隆起線に爪形が施され、胴部の縦位半隆起線の垂下は基本的には胴部上半にとどまる。地文として繩文がほぼ全面に施文されている。

b (第19図962) 文様構成は、aと同じであるが、aに比べて胴部の縦位半隆起線が長くのびて下半までたっし、その数もaに比べて多くなる。基本的には口縁部下間に無文帯が生じる。

c (第19図2554) 文様構成は、bと同じであるが、半隆起線でのみ文様が描かれている。地文として繩文がほぼ全面に施文されている。

d (第19図365) 文様構成は、bと同じであるが、地文に撚糸文が施されている。

2類 口縁部から頸部にかけて横位半隆起線がほぼ密にめぐり、その一部に爪形が施されているものもある。a・bに2分される。

a (第19図533) 胴部に縦位半隆起線が垂下している。

b (第19図2501) 胴部全面に繩文が施されている。

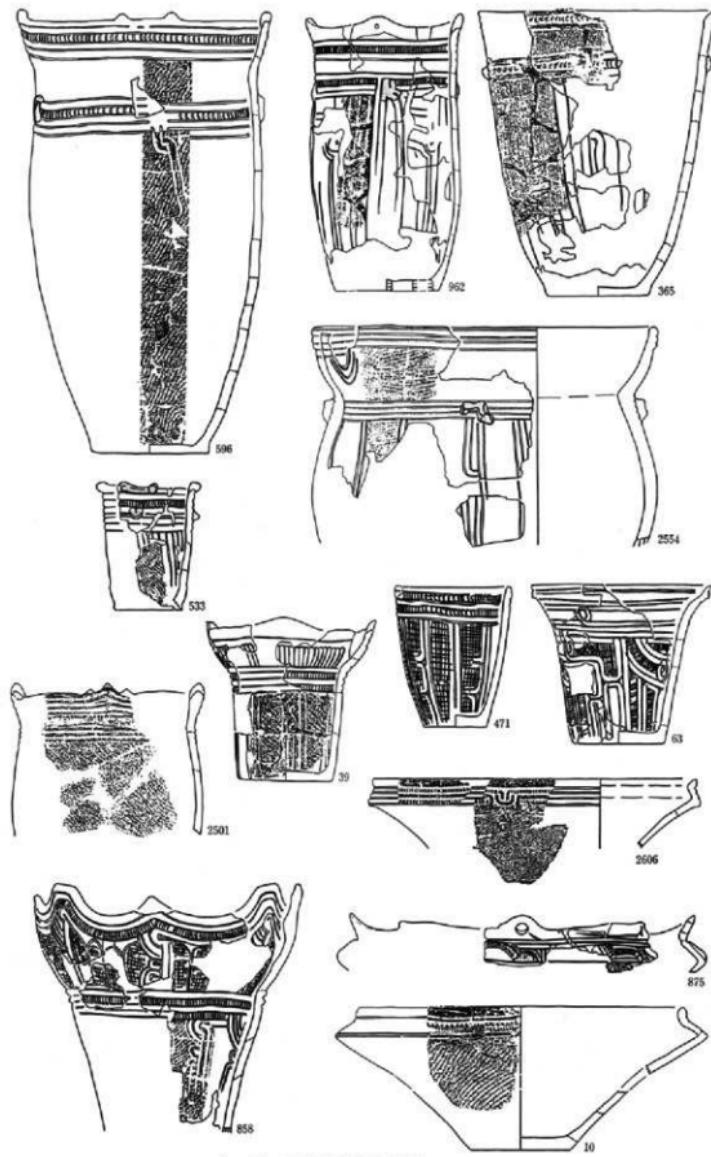
3類 (第19図39) 口縁部に蓮華文や蓮華文を想起するような縦位沈線文が施文されているもの。

4類 文様間の空白部分に、格子目状沈線文や横位細沈線文が充填されているもの。a~cに3分される。

a (第19図471) 口縁部と頸部には爪形が施された横位半隆起線がめぐり、半隆起線で施文された胴部文様の空白部分は、格子目状沈線文や横位細沈線文が充填されている。

b (第19図63) 口縁部と頸部には横位半隆起線がめぐり、胴部は、aと同じような文様構成をとる。

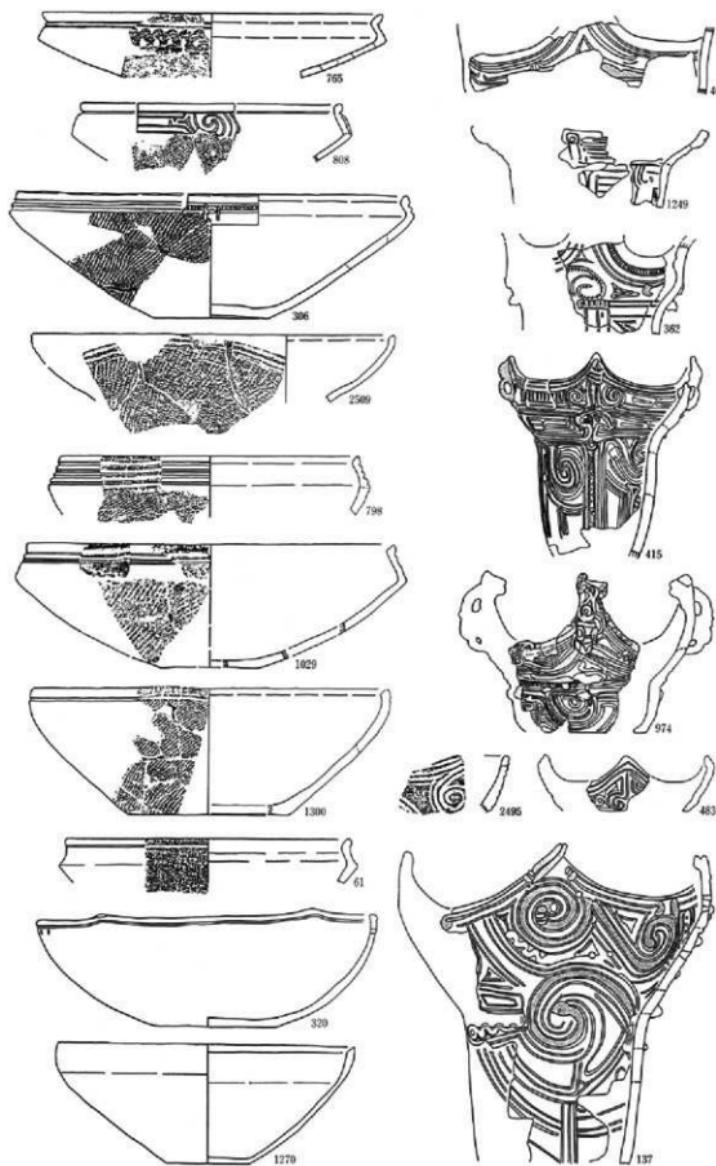
c (第19図858) 口縁部は、半隆起線および爪形の施された半隆起線で施文され、文様間



第19図 土器文様系統別分類(1)（中期前・中葉）

に格子目状沈線文や横位細沈線文が充填されている。頭部には爪形が施された横位半隆起線がめぐり、胴部は、縄文地上に縱位半隆起線が垂下する。

- 北陸系浅鉢** 1類 (第19図 2606) 口縁部に爪形や半隆起線が数条めぐり、胴部に縄文が施されるもの。
 2類 (第19図 875) 口縁部に半隆起線や隆帶で直・曲線文が描かれ、隆帶上などに爪形や絵状の刻目が施されているもの。
 3類 (第19図 10) 口縁部に蓮華文または蓮華文的な文様が描かれ、胴部に縄文が施文されているもの。
 4類 (第20図 765) 口縁部に隆帶や陰刻の手法で波状文もしくは波状的な文様を描き、胴部は無文となっているもの。
 5類 (第20図 808) 口縁部に沈線で渦巻文などの直・曲線文様が描かれ、胴部には縄文が施文されているもの。
 6類 (第20図 306) 口縁部に指頭圧痕的な文様がめぐり、胴部には縄文が施文されているもの。
 7類 (第20図 2509) 口縁部に半隆起線がめぐり、胴部には縄文が施文されているもの。口縁部から胴部へと半隆起線が垂下するものもある。
 8類 (第20図 798・1029) 口縁部に数条の沈線がめぐり、胴部には縄文が施文されているもの。
 9類 (第20図 1300) 口縁部に1条の沈線がめぐり、以下には縄文が施文されているもの。
 10類 (第20図 61・320) 口縁部に1条の沈線がめぐるほかは無文となっているもの。
 11類 (第20図 1270) 無文のもの。
- 越後系深鉢** 1類 4単位の三角形状の大波状口縁をもつもの。a~fに6分される。
 a (第20図 40・1249) 半隆起線などで直・曲線文を描いている。胴部の一部に斜格子目文がみられる。
 b (第20図 362) 半隆起線などで渦巻文や三叉文、直・曲線文を描き、半隆起線上や渦巻文の一部に爪形や刻目が施されている。
 c (第20図 415・974) 基隆帯+隆起線および沈線などで渦巻文や三叉文、直・曲線文などが描かれる。口縁部と胴部を画するライン、頭部から胴部へと斜行する渦巻文、胴部文様帯を縦に区画するラインには基隆帯+隆起線が用いられている。
 d (第20図 2495) 文様の空白部分が目立ち、半隆起線で渦巻文や直・曲線文が描かれている。
 e (第20図 483) 沈線および半隆起線で渦巻文や三叉文、直・曲線文が描かれている。
 f (第20図 137) 文様の施文技法などは1c類と同じであるが、胴部と頭部を画するラインのないもの。
- 2類 4単位の台形様の大波状口縁をもつもの。a~cに3分される。
 a (第21図 2432) 基隆帯+隆起線と隆起線や沈線で渦巻文や直・曲線文が描かれ、口縁部文様帯と胴部文様帯を画するライン、胴部文様帯を縦に区画するライン、渦巻文には基隆帯+隆起線が用いられている。隆起線上には爪形または爪形



第20図 土器文様系統別分類(2)(中期前・中葉)



第21図 土器文様系統別分類（3）（中期前・中葉）

様の刻目が施されているものもある。いわゆる王冠形土器の範疇に含まれる。

b (第21図918) 施文技法などはa類に似ているが、いわゆる王冠形土器の範疇に含まれない。

c (第21図1432) 沈線で渦巻文や直・曲線文が描かれている。

3類 (第21図349) ゆるやかな波状口縁で、1c類や2a類と類似する文様構成や施文技法もつもの。

4類 4単位の鶴冠状把手または鶴冠状気味の把手をもつもの。a~cに3分される。

a (第21図414) 口縁は鋸歯状で1c類、2a類、3類と類似する文様構成や施文技法をもつている。いわゆる火焰型土器の範疇に含まれる。

b (第21図469・470) 口縁はaと同様に鋸歯状で、口縁部文様帯は上半。下半に2分される。上半には縦位の刻目状の沈線文、下半には基隆帯+隆起線や沈線で渦巻文や直・曲線文が描かれている。基隆帯上には爪形や爪形様の刻目が施される場合もある。

c (第21図451) 口縁はゆるやかな波状を呈し、その頂点に鶴冠状気味の小把手をもち、縄文地上には半隆起線で渦巻文や直・曲線文が描かれている。

5類 口縁端部に双瘤様の突起のつくもの。a~cに3分される。

a (第21図1144) 1c類、2a類、3類などと類似する文様構成や施文技法をもっている。

b (第21図481) 半隆起線で直線的な文様が描かれ、文様間の空白が目立つもの。

c (第21図1305) 口縁部文様帯の文様割りつけがb類に類似し、縄文地上に基隆帯+隆起線と沈線で直・曲線文が描かれている。

6類 (第21図242) 平口縁で、口縁部に柄状把手をもち、1c類や2a類などと類似する施文技法をもっている。

東北系深鉢 1類 口縁部上半に楕円区画をもち、それ以下は、縄文地上に原則として1本ないしは2本1組の背竹管を用いた沈線で施文を行っているもの。a~cに3分される。

a (第22図1021) 楕円区画内に波状沈線を施している。

b (第22図1200・1290) 楕円区画内に有筋沈線を施している。

c (第22図960) 楕円区画内が無文となっている。

2類 (第22図338・925) 口縁部に楕円区画をもたないほかは、1類と同じもの。

3類 (第22図1386) 口縁部上半に横位の指頭圧痕帯がめぐるほかは、2類と同じもの。人面を連想させるような把手がつく場合もある。

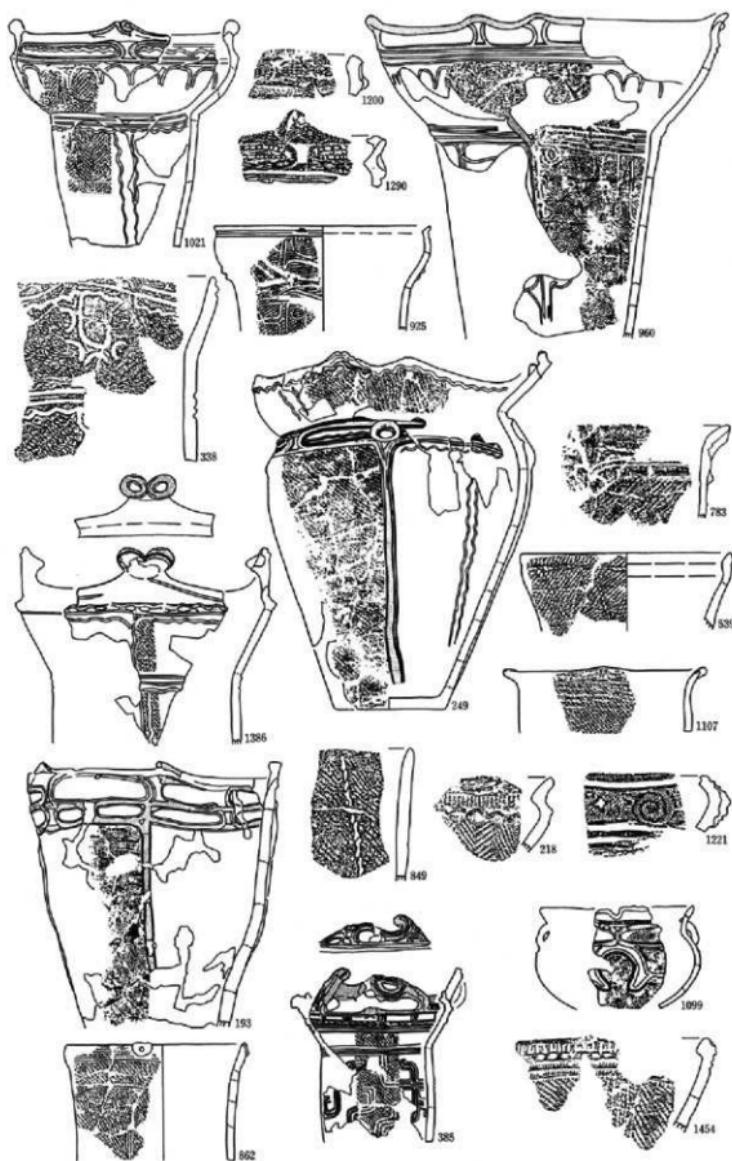
4類 (第22図193・249) 頭部ないしは口縁部に楕円区画をもち、そこから脛部へと隆帯が垂下するもの。

5類 捨糸側面圧痕が施されているもの。a~cに3分される。

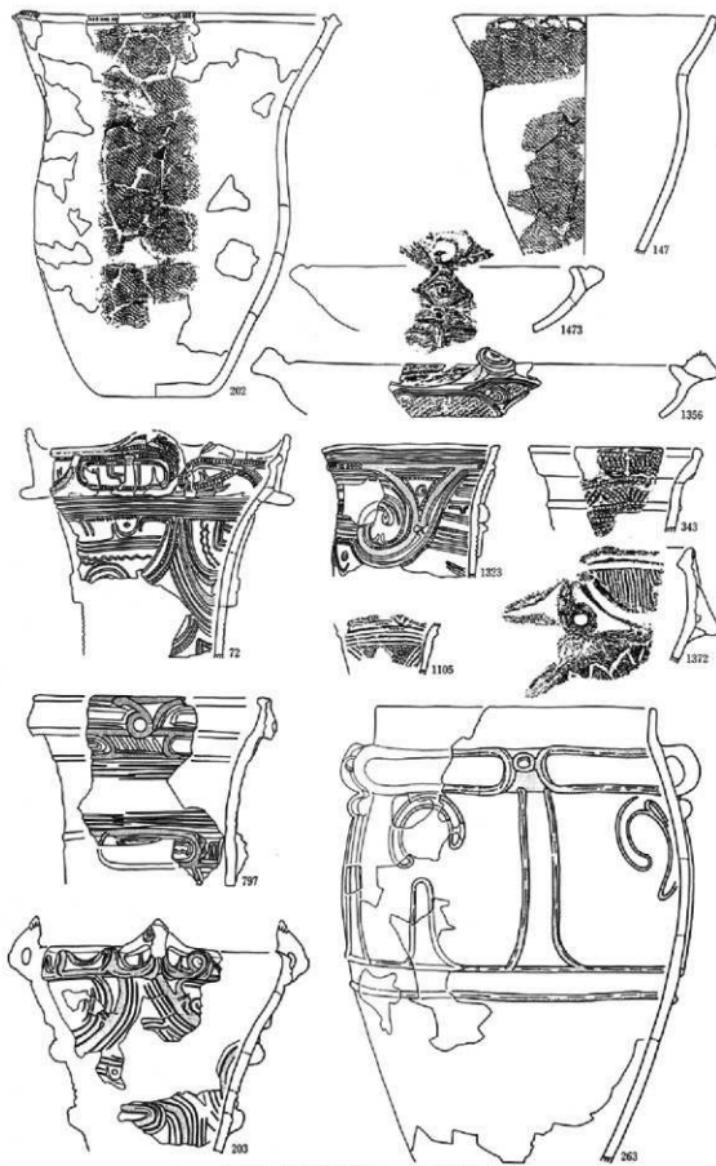
a (第22図783・539) 捨糸の側面圧痕のみ、もしくは隆起などの他の文様要素と組み合わさせて文様を描いている。

b (第22図1107) 口縁部に1~数条の横位捨糸側面圧痕が施されている。

c (第22図849) 縦位捨糸側面圧痕が施されている。



第22図 土器文様系統別分類(4)(中期前・中葉)



第23図 土器文様系統別分類(5)(中期前・中葉)

6類 (第22図385) 脊部の縄文地上に「クランク」状の文様が描かれているもの。クランク状の文様のほとんどは3本1組の沈線で描かれている。

7類 (第22図862) 縄文地上に原則として3本1組の沈線または半隆起線で文様を描くもの。

8類 有節沈線が施されているもの。a~cに3分される。

a (第22図1221) 口縁部文様帯の主文様として施されている。

b (第22図218) 口縁部上半に密接して縦位に施されている。

c (第22図1099) 全体の文様構成の一部として施されている。

9類 口縁部上半に縦位の刻目状沈線がめぐるもの。a・bに2分される。

a (第23図1454) 刻目状沈線の直下に指頭圧痕隆帶がめぐっている。

b (第23図202) 刻目状沈線のみが施されている。

10類 (第23図147) 口縁部に指頭圧痕もしくは指頭圧痕隆帶がめぐり、以下は全面に縄文が施文されているもの。

東北系深鉢 1類 捻糸側面圧痕が施されているもの。a・bに2分される。

a (第23図1473) 文様全体に捻糸側面圧痕が施されている。

b (第23図1356) 口縁部文様にのみ捻糸側面圧痕が施されている。

中部高地系深鉢 五丁歩遺跡(前掲1992)と同様に、地文に縄文を用いるものを【縄文系列】、縄文を用いないものを【隆帯系列】とし、隆1類、純1b類などと表記した。

隆1類 有節沈線が施されているもの。a~cに3分される。

a (第23図72) 口縁部などに横円区画をもち、その区画内や脇部文様に有節沈線が施されている。

b (第23図1323) 横円区画がなく、文様の区画などに沿って有節沈線が施されている。

c (第23図343) 文様のほとんどが有節沈線で施文されている。

隆2類 口縁部や脇部に横円区画をもつもの。a・bに2分される。

a (第23図1372) 区画内に斜行沈線または縦位沈線が施されている。

b (第23図797) 区画内に横位波状沈線が施されている。

隆3類 (第23図203) 五丁歩遺跡の隆帯系列1b(前掲1992)に類似する。原則として、隆帯や沈線部分に爪形や有節沈線などが施されていないもの。

隆4類 (第23図1105) 文様間の空白部分や隆帯上に刺突が施されているもの。

隆5類 脇部に鉗や橋状把手をもち、赤彩されたものが目立つもの。a・bに2分される。

東北地方にも類似する土器が存在するが、今回は胎土などの面から中部高地系に含めた。どちらの系統にするかについては今後更に検討を加えてゆきたい。

a (第24図1135) 口縁部に規則的に孔が穿かれ、いわゆる有孔鉗付土器と呼ばれているもの。多くは脇部が無文である。

b (第23図263) 口縁部に孔が穿たれていないもの。脇部には、隆帯などで文様が描かれている。

純1類 有節沈線が施されているもの。a~cに3分される。

a (第24図6-768) 地文に縄文をもつほかは、隆1a類に類似する。

b (第24図1273) 地文に縄文をもつほかは、隆1b類に類似する。



第24図 土器文様系統別分類(6) (中期前・中葉)

c (第24図954) 4単位の波状口縁をもち、波頂部に有節沈線が施された三角形の区画を有し、胴部及び胴部下半に縄文が施されている。今回は中部高地系としたが、東北的との指摘もあり、今後の検討を要する。

純2類 (第24図1327) 沈線や隆帯などで文様が描かれ、原則として、隆帯上や沈線部分に爪形や有節沈線が施されていないもの。

関東系深鉢 1類 阿玉台式土器に近似または類似するもので I a・I b・II式が認められる。a~gに7分したが、全体を伺い知るような資料がなく、部位的な分類にとどまった。

a (第24図750) ほとんど角押文のみが施文されている。

b (第24図1179) 角押と沈線が施されている。

c (第24図2521) 角押文と断面三角形の隆帯が施文されている。

d (第24図841) ヒダ状の刻目文が施文されている。

e (第24図1044) 刻目と隆帯が施されている。

f (第24図1265) 隆帯が施されている。

g (第24図599・989) 刻目が加えられた隆帯が施されている。

2類 (第24図2462) 阿玉台式土器の影響下において生じたと考えられるもの。輪積痕に沿って器面全体に横位の指頭圧痕状の押圧が施されている。

関東系浅鉢 1類 (第24図666) 口縁部に捺円区画をもつもの。

系統不明深鉢 1類 器面のほぼ全面に縄文が施されているもの。a~eに5分される。

a (第24図789) 全面に縄文が施されている。

b (第24図477) 口縁が無文となるもの。

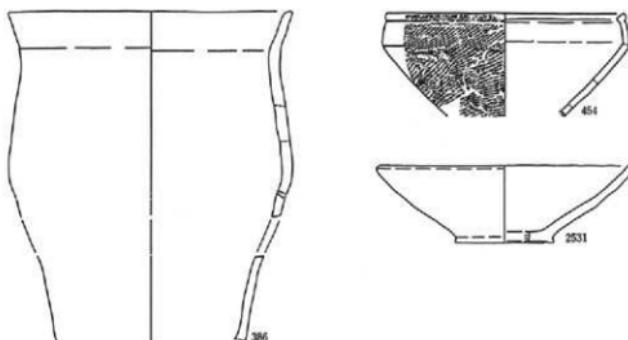
c (第24図478) 口縁に沈線がめぐっている。

d (第24図1002) 口縁に隆帯が添付されている。

e (第24図2527) 頭部に瘤状の突起が添付されている。

2類 器面のほぼ全面に撫糸文が施されているもの。a・bに2分される。

a (第24図1121) 木目状撫糸文が施文されている。



第25図 土器文様系統別分類(?) (中期前・中葉)

b (第24図346) 木目状以外の撚糸文が施文されている。

3類 (第25図386) 無文のもの。

系統不明浅鉢 1類 (第25図454) 全面に縄文が施文されているもの。

2類 (第25図2531) 無文のもの。

④ 時期

時期については、第3表の
ような縦年案を考えている。

b. 縄文時代中期初頭の

土器

① 系統

北陸系 北陸地方の新保式

土器と密接な関係にあるもので、剣野式土器（金子1967）や豊原遺跡の土器（小野・前山ほか1988）などがそれに該当する。斜格子目文、木目状撚糸文、縞条体压痕文、三角形陰刻手法の選葉文などを特徴としている。

東北系 撥糸御面压痕など円筒上層式土器と部分的に共通性をもつもの。

関東・中部高地系 関東地方の五領ヶ台式土器、中部高地の梨久保式土器と密接な関係にあるものおよび東関東または東北地方南半の五領ヶ台式土器と関係するのではないかと考えられるもの。

系統不明土器 中期前・中葉と同様に、どの系統に含めたらよいか不明のものを一括した。

⑤ 器形

主観的判断により分類したが、全体をうかがえないものについては空白とした。

深鉢 A (第26図1) 口縁部が外反し、胴部が円筒状をなすもの。

B (第26図2) 口縁部が短く外反し、胴部が円筒状をなすもの。

C (第26図5) 口縁部が直立し、胴部が円筒状をなすもの。

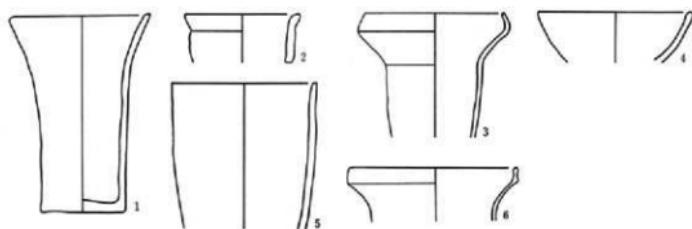
D (第26図3) キヤリバー形をなすもの。

E (第26図6) 口縁部が直立ないしは内反気味となり、胴上部が外反するもの。

浅鉢 A (第26図4) 体部から口縁部へとゆるやかに外反するもの。

第3表 中期前・中葉の土器縦年案

清水上	清水上(前段1990)	越後	北 雄	東 北	關 東	中部高地
前葉①	I - ①	大 泽	新崎I		阿玉台Ia 五箇ヶ台直後	
前葉②	I - ②	千石原	新崎II	大木7b	阿玉台Ib 後神(藤沢)	
前葉③			新崎III		阿玉台II 新巣(新道)	
中葉①	II - ①					焼町
中葉②	II - ②	岩野原	天神山 (上山田)	大木8a		
中葉③	II - ③					



第26図 器形分類図(2) (中期初頭)

口縁部形態・胴部形態 中期前・中葉の土器分類に準じた。

③文様

北陸系深鉢 1類 (第27図3226) 口縁部にソーメン状浮線隆帯で斜格子目文などが施文されているもの。

2類 口縁部下半もしくは胴部上半の横位区画内に継位半隆起線を等間隔に配するもの。

a・bに2分される。

a (第27図3051) 横位区画内に縄文が施されている。

b (第27図3007) 横位区画内に縄文が施されていない。

3類 口縁部の横位区画内に密に継位平行沈線が施されるもの。a・bに2分される。

a (第27図3191) 口縁に三角形陰刻手法による蓮華文がめぐる。

b (第27図3103) 口縁に数条の横位平行沈線がめぐる。

4類 口縁部に沈線と半隆起線で斜格子目文が施文されているもの。a・bに2分される。

a (第27図3185) 口縁に原則として絹条体圧痕が認められるが、縄文が施されているものもある。

b (第27図3085) 口縁に平行沈線がめぐる。

5類 (第27図3032) 口縁の横位区画内に継位沈線を密に施すもの。

6類 (第27図3124) 口縁に三角形陰刻手法の蓮華文がめぐるもの。

7類 (第27図3163) 口縁に三角形陰刻文が施文されているもの。

8類 (第27図3023) 口縁部に半隆起線がめぐり、口縁に縄文帯をもつもの。

9類 (第27図3193) 口縁部に半隆起線がめぐり、その半隆起線上に爪形が施されているもの。

10類 (第27図3221) 胴部上半に「Y」字状文が描かれているもの。

東北系深鉢 1類 (第27図3074) 口縁部に捺糸側面圧痕をもつもの。

関東・中部高地系深鉢 1類 器面のほぼ全面に沈線が施されているもの。a~cに3分される。

a (第27図3067) ソーメン状浮線隆帯で斜格子目文が描かれ、口縁などに絹条体圧痕が施されている。

b (第27図3094) 沈線と半隆起線で斜格子目文が描かれ、口縁に絹条体圧痕が施されている。

c (第27図2990) 口縁の横位区画内に継位沈線を密に施したりなどする。

2類 (第27図3128) 口縁部を中心に斜格子目文または格子目文が施文されているもの。

3類 (第27図3131) 口縁部に横位沈線と刺突および刺突状の刻みが施されているもの。

4類 (第27図3105) 口縁部に山形文が施文されているもの。

5類 (第27図3183・3883) 沈線文様を描いたあとで単沈線を充填するもの。五領ヶ台I a式 (今村1985) と考えられる。

6類 (第27図3060) 口縁部にハケ目のような細沈線をもつもの。五領ヶ台I b式 (前掲1985) と考えられる。

7類 (第27図3178) 胴部に沈線と円形刺突の点列をもつもの。五領ヶ台II式 (前

掲 1985) の範疇に含まれると考えられる。

8類(第27図3161) 繩文地上に半隆起線などで施文されているもの。

9類(第27図3219) 繩文地上に半隆起線で幾何学的な文様が施文され、それに沿って刺突が加えられているもの。

10類(第27図3014) 繩文地上に隆帯が添付されているもの。



第27図 土器文様系統別分類(8)(中期初頭)

11類（第27図3167）口縁部に三角形陰刻文が施文されているもの。

12類（第27図3207）口縁部に網目文が施文されているもの。

13類（第27図3151）結び目縄文が施文されているもの。

系統不明深鉢 1類（第27図3075）ほぼ全面に縄文が施されているもの。

④ 時期

時期については、第4表のような編年案を考えている。

第4表 中期初頭の土器編年案

清水上	越後	北陸	関東・中部高地
初頭①	利野E式古(巣原)	新保Ⅰ期	五領ヶ台Ⅰ・県久保Ⅰ段階
初頭②	利野E式中(山崎A)	新保Ⅱ期	
初頭③	利野E式新(タテ)	新保Ⅲ期	五領ヶ台Ⅱ・県久保Ⅱ段階

c. 縄文時代前期前半の土器

① 系統

東北系 表館式（武藤1978）や石川野式（加藤1982）などの東北羽状縄文土器群の流れをくむと考えられるものと縄文原体などに大木2式や円筒下唇式土器の影響が認められるものがある。前者の特徴としては、刺突文とコンバス文があげられるが、特に、刺突文は、底部にも施されている。また、幅狭等間隔横帯区画羽状縄文や非羽状のループ文（黒坂1989）もこの系統に含めた。後者の特徴としては、網目状撚糸文や多軸絡条体があげられる。

関東系 相互刺突文土器（細田1991）の範疇に含まれるものである。

関東・中部高地系 長野県や北関東を中心に分布する有尾式土器の範疇に含まれるもの。胎土中に纖維の混入が目立つことなどから北関東の系統をひく有尾式土器と考えられる。

越後系 すづまりの特異な器形で、器種分類では鉢の範疇に含まれる。文様はコンバス文や点列状の細い刺突などからなり、底部にも点列状の細い刺突が施されているものもある。また、口縁内側には、沈線が1条めぐる。器壁は薄く、焼成も良好で、器面の整形は外外面とも丁寧で、なかにはその極に達しているようなものもある。纖維は含まれていても極めて少量である。今まで県内では大澤遺跡（金子1987）や豊原遺跡（前掲1968）などで散見できる程度であったが、今回の調査ではじめて一定量まとまって出土した。

系統不明 どの系統に含めたらよいか不明のものを一括した。そのほとんどは縄文のみが施文されたものである。器壁が全般的に薄く、焼成も良好で胎土中に白砂の混入が目立つものと器壁・焼成とも普通で白砂の混入が目立たないものがある。

② 器 形

主観的判断により分類したが、全体をうかがえないものについては空白とした。

深鉢 A（第28図1）胴部から口縁部へと外傾しながら立ちあがるもの。

B（第28図2）口縁部が直立もしくは内傾気味に立ちあがるもの。

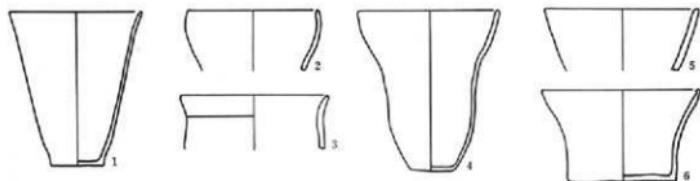
C（第28図3）口縁部が外反するもの。

D（第28図4）胴部は直線的に立ち上がり、口縁部が外傾するもの。

鉢 A（第28図5）底部から口縁部へと外傾して立ちあがるもの。

B（第28図6）底部から胴部へと直立気味に立ちあがり、口縁部が外反するもの。

口縁部形態・胴部形態 中期前・中期の土器分類に準じた。



第28図 器形分類図(3)(前期前半)

③文様

東北系深鉢 1類 口縁・頸部・胴部最下部に刺突がめぐり、そのほかは幅狭等間隔横帯区画の羽状繩文などが施文されているもの。なお、底部にも刺突が施されているものもある。a・bに2分される。

a (第29図3305) 円形の刺突が施されている。

b (第29図3312) 刻目状の刺突が施されている。

2類 (第29図3730) 器面だけではなく底部にも刺突が施されているもの。

3類 (第29図3696) 横位の爪形とコンバス文が帶状に施文されているもの。地文として組紐や羽状繩文などの繩文が施文されている。

4類 器面全体に繩文が施されているもの。a~eに5分される。

a (第29図3366) ループ繩文が施文されている。

b (第29図3302) 羽状繩文が施文されている。

c (第29図3692) 組紐が施文されている。なお、本類は3類の繩文施文部分とも考えられ、同類に含まれる可能性もある。

d (第29図3500) 網目状撚糸文が施文されている。

e (第29図3472) 多輪絡条体が施されている。

関東系深鉢 1類 (第29図3301) 口縁に縱位の平行沈線が施され、その直下に数条の横位平行沈線がめぐる。そして、その沈線上に市松状の爪形様の刻目が施されている。胴部は、ループの羽状繩文が施文されている。いわゆる相互刺突文土器(細田1991)とよばれているグループに含まれるものである。

関東系鉢 1類 (第29図3405) 関東系深鉢1類と同じ文様構成をとるが、鉢形を呈するもの。

関東・中部高地系深鉢 1類 口縁部から頸部にかけて、点列状刺突・爪形・平行沈線などで菱形文を主体とした文様を描き、その多くは胴部に菱形を構成する羽状繩文が施文されている。北関東や中部高地に分布するいわゆる有尾式土器に含まれるもの。a~gに7分される。

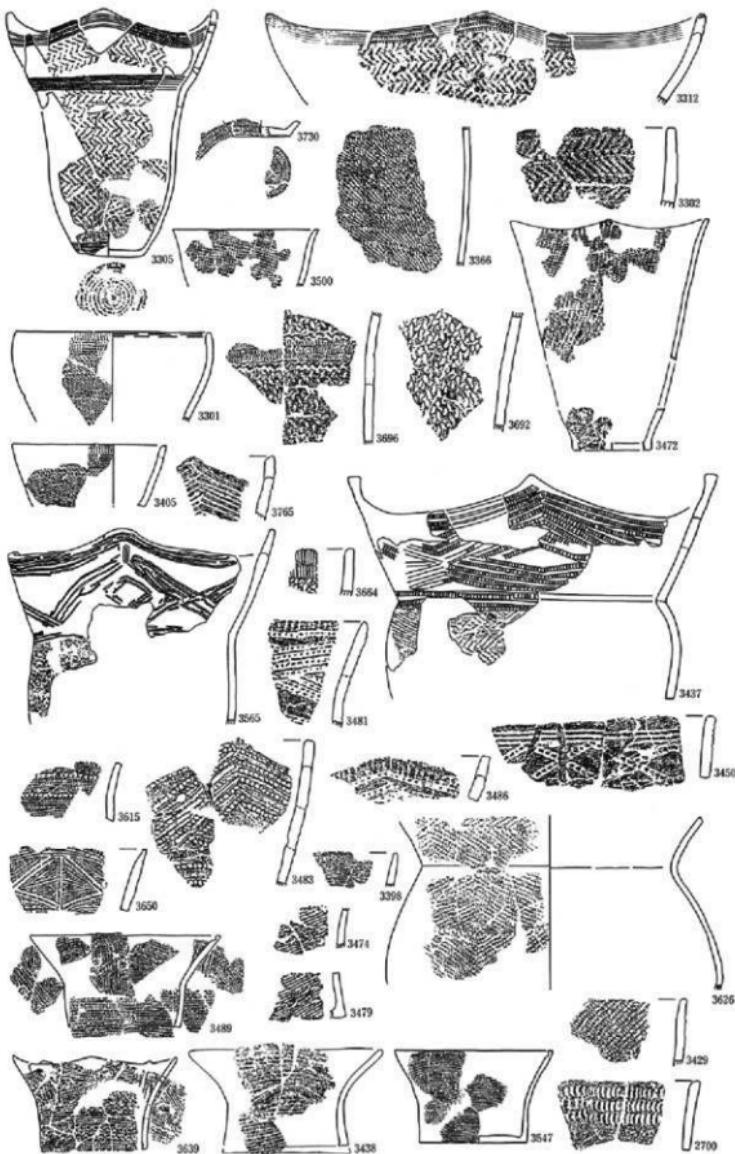
a (第29図3565) 点列状刺突が施されている。

b (第29図3483) 沈線間に点列状刺突が施されている。

c (第29図3437・3481) 爪形が施されている。

d (第29図3765) 沈線で施文されている。無文地と繩文地とがある。

e (第29図3450) 口縁に平行沈線がめぐり、その直下に爪形で菱形文が描か



第29図 土器文様系統別分類(9)(前期前半)

れている。

f (第29図3486) 口縁に縱位の点列状刺突が施され、その直下に爪形で菱形文?が施文されている。

g (第29図3626) 全面に縄文が施文されている。

2類 (第29図3664) 口縁に縱位刻目状沈線を2段余りめぐらし、それ以下は縄文が施文されているもの。

越後系鉢 1類 点列状刺突やコンパス文などで文様が描かれているもの。a~fに6分される。

a (第29図3489) 口縁と脇部は横位点列状刺突やコンパス文が密に施される。口縁部下半は縦位点列状刺突文帯で4区画され、その区画内には弧状の点列状刺突文帯や2個1対の円形刺突が配されている。

b (第29図3639) 口縁は横位点列状刺突文帯がめぐる。口縁部下半は点列状刺突文帯で菱形文が描かれ、その内部にはコンパス文や縦位点列状刺突文帯が施文され、菱形文と菱形文の接点には円形刺突が加えられている。脇部から脇部にかけてはコンパス文帯と点列状刺突文帯が交互に配されている。

c (第29図3650) 地文に縄文をもち、口縁部に半隆起線や波状半隆起線および沈線で菱形文などが描かれている。

d (第29図3438) 1条ないしは2条のコンパス文が間隔をあけて配され、その間は横位点列状刺突が密に施されている。脇部に波状の点列状刺突文が描かれているものがある。

e (第29図3615) 横位点列状刺突と粗い点列状刺突が併用されている。

f (第29図3547) 全面に横位点列状刺突が施されている。

2類 (第29図3398) 器面全体に横位細沈線が施されているもの。

3類 (第29図3474・3479) 器面全体に縄文が施文されているもの。

系統不明深鉢 1類 (第29図2700) 口縁部に数条の粗い爪形が施文されているもの。

2類 (第29図3429) 器面全体に縄文が施文されているもの。

④ 時期

時期については、第5表のような編年案を考えている。

第5表 前期前半の土器編年案

清水上	越後	関東中部高地
前期前半I	大溝	開山II
前期前半II		有尾

C 石 器

(1)はじめに

本遺跡で出土した石器の数は前回同様、膨大なものであるが器種としては同種のものが大半で、若干、石製品など前回で出土しないものが含まれる。時期的には出土土器から縄文時代早期から晩期の所産と考えられるが、大半は中期前葉から中葉までである。これら各期の遺構・遺物は広大な調査範囲内である程度の偏りを見せながら分布し、それらの地点および範囲は微地形からも、ある程度の整合性がある。そしてこれらの出土状況および微地形の違いから、調査範囲内をいくつかの範囲に細分することが可能となり、石器の記述においても、これらを単位とする分類・分析および資料の抽出が最善と考えた。そして、これらの情報に基に時期の異なる地区との比較による時期的な石器組成の推移、または同時期の地区の比較による土地利

用の状況等、縱（時間）と横（空間）の関係を解明することを心がけた。

実際の整理では前述の状況から、調査範囲を14の地区（集落1、捨て場A、集落2、捨て場B、捨て場D、集落3、捨て場C上層、集落4、捨て場C下層、E①地区、E②地区、E③地区、E④地区、A地区）に細分し、それぞれの地区を単位として分類・分析した。なお、各集落跡については、居住空間と廐棄空間の出土石器を区別するため前者を「集落」後者を「捨て場」と命名した。また、説明にあたっては出土石器量が少なく単独で解説した場合、組成上、著しい偏りを見る地区が多いため、集落跡および地区的単位で取り扱った。しかし、捨て場Aに関しては、出土土器から中期前業と考えられるため、集落1（中期前業から中業）と区別し説明した。遺構内出土の大半が廐棄時の投げ込みと考えられたため、遺物実測は遺構内出土を中心に抽出する事はせず、包含層出土の遺物も含め無作為に抽出した。分析においても遺構・包含層の区別なく実施した。

（2）資料の提示方法

提示方法は実測図・写真・観察表を基本とし、各集落跡および地区ごとにまとめて掲載した。また、各集落跡のものは居住範囲を中心とする台地上と捨て場とを区別し掲載した。実測図については時間の制約もあり、各出土地点ごとに各器種の細分に著しい偏りがないように、代表を図化した。写真については実測図に極力対応させたが、あくまで実測図の補助と考え、破片等で写真では不明瞭なものは載せていない。観察表には図化の有無に関わらず石器器種の全てを記した。なお、剥片については今回は図化しておらず、観察表においても表すことをしなかったが、大多数を表・グラフ等にしその属性を示した。

a. 資料の表現方法および記載事項

① 実測図の表示方法

第30図の様に入影図法で図化した。図の展開数については器種ごとにその特性を表現できるようにおおむね統一した。以下、表現するに当たり事前に表現の共通点や方法について断っておく。

図の縮尺 前回の報告同様、縮尺率（第6表）は各器種ごとに統一したが、同一器種内の法量が著しく隔たるものは縮尺率を変えている（例えば磨製石斧の小型品については1/2）。これらについては実測図版にスケールで明示している。

図の表現 実測図をより分かりやすくするために図中にスクリーントーン・記号・文字等を挿入し表現した（第31図）。以下にその要点を記すが、あくまで以下のものは基本的な表現方法であり、資料のいくつかはその限りでない。

- ・二次加工が急角度で平面図にうまく表現できない場合、側面図にその部分を表した。なお、平面図に表現できた場合は側面図は稜線のみとした。

- ・素材の打面が残るものについては、その面が剥離の場合、リング等は記入していない。

- ・節理面については表現方法をおおむね統一した。

- ・明らかに廐棄後の破損と思われる剥離または欠損部分についてはリング等は記入せず白ぬきとしている。

また、リングの方向が判らならないものについても白ぬきとした。

・剥離の切り合い等を明瞭に図化するため、リング等は実

第6表 石器の主な縮尺率

石器名	石 頭	尖 頭	石 頭	石 頭 加工	三 脚 状	三 板 状	打 磨	磨 頭	磨 頭	石 頭	石 頭	不 定 形 石	石 頭	石 頭	石 頭	石 頭	
縮尺率	2/3	1/2	1/2	1/2	1/2	2/5	2/5	1/3	1/3	1/4	1/4	1/5	1/2	2/5	1/3	1/5	1/3

物よりもはっきりと表現するように心がけた。しかし、著しく風化が進んだものについてはリングを破線とし区別した。

・欠損部位には延長ラインを破線で表現した。この場合、表現した図は正面図のみである。

・剥片石器の使用痕(磨耗・光沢)や磨石類・砥石・石皿の磨面の範囲は同一のスクリーントーンとした。特に剥片石器の縁辺のみに見られる使用痕については、明瞭化をはるため、使用痕位置から外側にスクリーントーンを貼りアピールした。

・磨石類の敲打痕の範囲は同一のスクリーントーンとした。また、石皿の側縁に見られる整形のための敲打痕はスクリーントーンは貼らず観察表備考欄に記述した。

・石鏃・石斧等に見られたアスファルト等の黒色付着物はその範囲を黒に点描した。

・磨石類・石皿・砥石の断面→→は使用痕の範囲で、必要な場合は文字で使用痕の名称を記した。

・打製石斧の→→はつぶしの範囲で、側面図にはスクリーントーンを貼った。

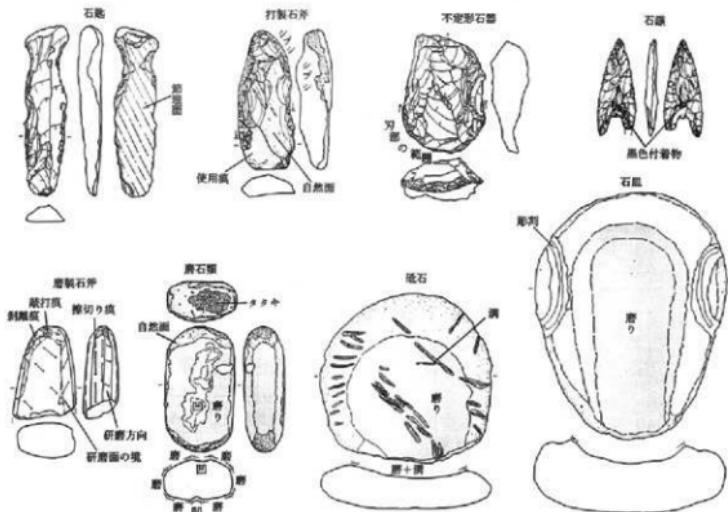
・不定形石器→→は刃部と考えられる範囲であるが、刃部を限定できないものには記入していない。

・使用痕のうち線条痕については、その方向を→→で示した。

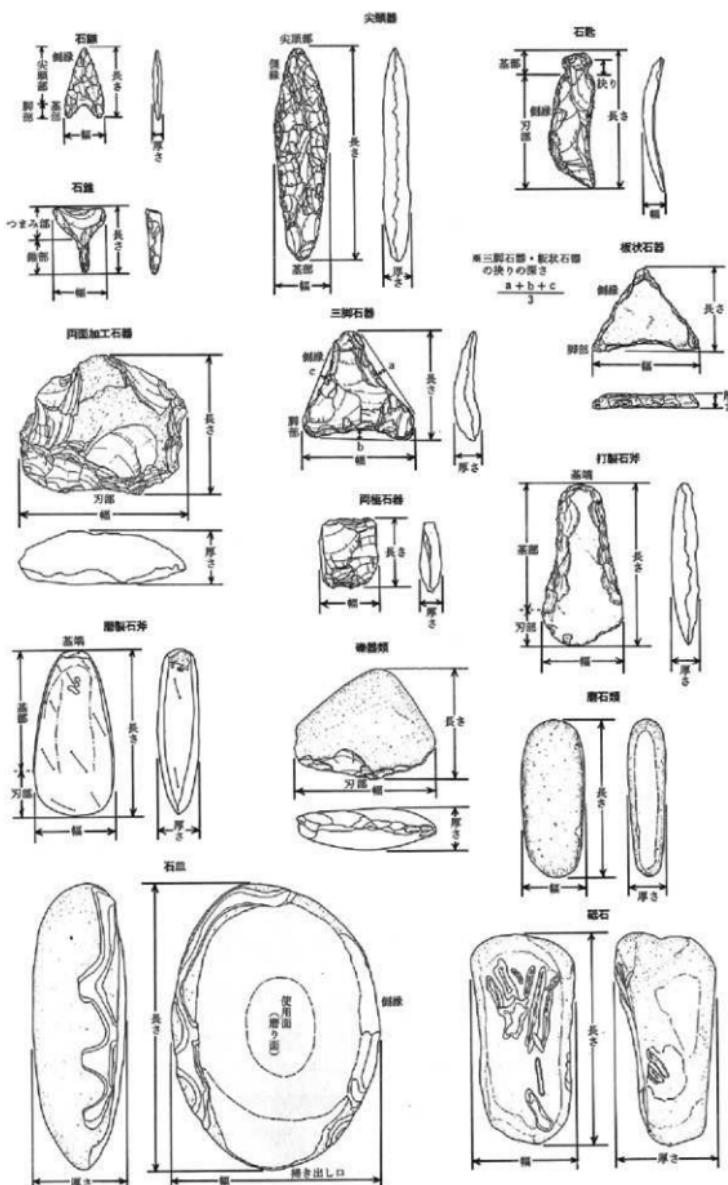
・磨製石斧の→→は研磨の方向を示す。また、細かな研磨面についても極力、破線で表示した。



第30図 図の展開例の模式図



第31図 実測図の主な表現例



第32図 主な器種の部位名称と計測基準

② 観察表の記載

剥片類と搬入難を除くすべての石器器種について、その属性を一覧表にした。観察項目は全器種共通項目（出土位置・長さ・幅・厚さ・重さ・石材）とそれぞれの器種の特性を考慮した項目とで構成される。後者の多くは各器種で説明するが、ここでは共通項目を中心に後者の項目を若干含めて説明する。

Noと図版No Noは個体番号で器種ごとの通し番号である。図版Noは報告書に掲載した実測図および写真の番号である。

出土位置 石器が出土した位置を示す。包含層出土のものは大グリッド—小グリッドの順で表示し、遺構出土のものは遺構名—大グリッドの順にした。

法量 器種ごとに計測基準を設定し（第33図）計測した。なお、剥片類と不定形石器D類の計測は、前回の報告とは異なり、素材の打面を水平に上位させた最大長・最大幅を測定した。

石材 前回の報告の分類におおむね準拠した。

素材 横長・縦長に区別したが、その基になる計測方法は第33図の通りである。最大長が最大幅より大きいものは縦長とし、逆の場合は横長とした。打製石斧は刃部または基端側に素材の打点があったと考えられるものは縦長、側縁側と考えられるものは横長とした。

自然面 特定器種において自然面の有無が、素材形状または素材そのものを復元する上で有効な手がかりになる場合、自然面の有無またはその部位を示した。

遺存状態 完形・略完形・破損品（残存割合）・破片の区別をした。

備考 観察項目以外に必要と思われるものを適宜記入した。

使用痕 使用痕に「磨耗」「つぶれ」「擦痕」の用語を使用した。磨耗の中には「光沢」も含まれる。

風化 風化により著しく石器表面が粗れて剥離等が不明瞭な場合、「風化著しい」と表現した。

被熱 タールの付着・煤の付着・熱による変色・熱によるひび割れ等は「被熱」と表現した。

折断 石器の一部に折り取ったような急角度の剥離があるものを、すべて「折断」とした。したがって、人為的・意図的でない折断も多く含まれる。

b. 出土石器の分類

出土した石器および石製品は合計38,088点で、その内訳は第7表の通りである。それぞれの器種の認定および分類基準は前回の報告のものに準拠するが、若干新たに分類したものも含まれる。また、分析の方法についても同様である。なお、分類は時期・地区の別なく基準は1つで集落跡1の各器種の分析の前に記述したが、それ以外の地区的説明中では割愛した。

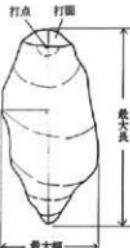
石鏃 第34図参照。基本的には前回報告の基準に準ずるが、今回調査の時期幅を考慮し、基部が凹状のものA4・A5類を加え、基部が平坦なものD類を新設した。以下にその基準を記す。

基部形態でAからDの4類に大別し、数量の多いA類についてはさらに側縁や脚部の形状により細分した。

A類 基部が凹状のもの。いわゆる凹基無茎鏃である。A類は尖頭部側縁の形状、脚及び脚端部の形状で5つに細分される。

A1類 尖頭部側縁が直線状のもの。

A2類 尖頭部側縁が内脣状に膨らみ、脚部端が丸味をもつもの。



第33図 素材の計測部位と名称

第7表 集落跡・地区別の出土石器

地区	石 頭 器	尖 頭 器	石 頭 器	石 頭 器	三 脚 石 器	板 状 石 器	打 制 石 器	磨 制 石 器	擦 器	磨 石	砥 石	石 斧	圓 弧 石 器	不 定 形 石 器	石 錐	石 台	石 片	石 削 器	石 合	計	
集落1	38	8	34	8	45	248	412	1322	126	138	1258	144	136	162	3276	4	8	262	1979	4	27424
捨て場A	7	10	2	14	39	62	118	9	19	83	14	10	15	524	2	36	3781			4745	
集落2	3	5		3	8	9	34	8	9	55	11	11	8	171	4	18	624	1		982	
捨て場B		5	3		7	10	28		10	89	5	4		129		1	10	587		888	
捨て場D					2	1	4		3	27	1	2	3	46	2		2	117		210	
集落3	4	1		3		12	19	9	5	53	5	1	10	230				11	976	1339	
捨て場C上層		6	1	5	4	2	13		7	24	2	4	6	126	4	1	5	498		708	
集落4	1				1		5	2		10	2	3	27	1				54		106	
捨て場C下層		1	4				5	3	4	22	2	4	3	42	11	6	218			325	
BC①地区							7			2	1	1	1	4	1		2	21		40	
BC②地区	1		1	1			2	1	1		1		10	2				23		44	
BC③地区	4	3	3	4			26	10	8	51	1	3	11	202	3	10	713	2		1054	
A地区					1		2		1				1				4			10	
A地区		1	1	1			6		1	5				12		1	10			38	
地区不明		2		2	2	21	1	2	40	2	5	4	31				10			122	
捨て場C							1	1	5		1		9	1				34		52	
その他													1							1	
合 计	57	9	66	21	83	309	510	1613	170	208	1725	188	186	226	4841	33	12	373	27451	7	38088



第34図 石器分類図

A3類 尖頭部側縁が内彎状に膨らみ、脚端部が鋭く尖るもの。

A4類 尖頭部側縁が外彎状に狭まるもの。

A5類 尖頭部側縁が内彎状に膨らみ、基部の凹状が浅いもの。

B類 基部が丸いもの。いわゆる円基鐵である。

C類 基部が棒状のもの。いわゆる尖基鐵である。

D類 尖頭部側縁が直線状で、基部が平坦なもの。いわゆる平基鐵である。

分類にあたっては、A1・A2・A3類にそれぞれの折衷的なものが多く、明瞭な識別は困難であった。また、A2・A3類には細身のものと幅広のもののが存在する。

尖頭器 第35図参照。前回の報告では数量が少ないので分類していないが、前回で出土していない形態（B類）が出土したため大別した。柳葉形のもの（A類）と逆刺しをもつもの（B類）に分けている。

A類 柳葉形を呈し、両面加工と片面加工がある。二次加工は石器の中央まで達する丁寧な押圧削離による優品や、周縁のみに階段状の剥離が粗く入る雑な作りのも

のなどがある。また、後者の中には周縁の一部に研磨痕がみられるもの（1769）があり注目される。

B類 両側縁ないし片側縁に逆刺しをもつもの。わずか2点の出土であるが、剥片を素材とし周縁に急角度の二次加工を施し形作っている。銛・ヤスなどに形態が似ているが、実用品か否かは不明である。

石錐 第36図参照。前回の報告と同様の分類である。錐部とつまみ部の区別が明瞭なもの（A類）と区別が不明瞭なものとに2大別し、後者は素材・剥片の形状により4分した。

A類 錐部とつまみ部の区別が比較的明瞭なもの。

B類 錐部とつまみ部の区別が不明瞭で、中型で厚手の剥片からなるもの。

C1類 錐部とつまみ部の区別が不明瞭で、縦長剥片からなるもの。

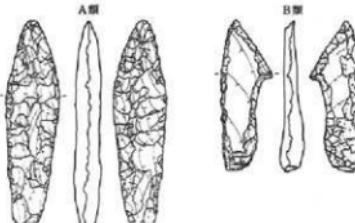
C2類 錐部とつまみ部の区別が不明瞭で、横長剥片からなるもの。

D類 錐部とつまみ部の区別が不明瞭で、角柱状の素材からなるもの。

石匙 第37図参照。前回の報告では数量が少なく分類していないが、今回、ある程度の量が出土したため分類を試みる。つまみ部を上位に位置させた場合、刃部が縦に長く垂下する縦形石匙（A類）と刃部が横位に位置する横形石匙（B類）に大別した。さらに、A類については側縁・つまみ部の形状や二次加工の部位により細分した。

A類 縦形石匙である。

A1類 刃部両側縁がほぼ直線状に垂下し、比較的大型のつまみ部をもつ。二次加工は両面加工が一般的である。



第35図 尖頭器分類図

錐部とつまみ部の形状	素材・剥片の形状	分類	
錐部からつまみ部にかけて大きく広がり、錐部とつまみ部の区別が比較的明瞭なもの	——	A類	
	中型で厚手の剥片 形状は不定形を呈する	B類	
	縦長剥片 形状はほぼ逆二等辺三角形を呈する（一端、不定形を呈するものがある）	C1類	
	横長剥片 形状は不定形を呈する	C2類	
	角柱状の剥片	D類	

The figure illustrates four categories of stone points (Iwa-ame) based on their shape and material. Category A (縦形石匙) shows a long, narrow, lanceolate point with a distinct vertical profile. Category B (横形石匙) shows a similar shape but with a more horizontal orientation. Category C1 (縦長剥片) shows a long, narrow, elongated flake or blade. Category C2 (横長剥片) shows a wider, more horizontally oriented flake. Category D (角柱状の剥片) shows a blocky, columnar piece of material.

第36図 石錐分類図

全体の形状	両側縁の形状	二次加工	つまみの形状	分類	
菱形石匙	ほぼ直線状で長く垂下する	両面加工（一部片面加工がある）	大型が一般的	A 1 類	
	両側縁の中央が大きく張り出し、菱形を呈する。	片面ないし両面の周縁部のみに加工	小型が一般的	A 2 類	
	両側縁は端部に向って広がり、端部は丸くおさまる。	—	—	A 3 類	
	片側縁が大きく張り出し、他の側縁はほぼ直線ないし内弯する。	小型が一般的	—	A 4 類	
	(C面端部が素材の打面となる場合が多い)	大型が一般的	—	A 5 類	
横形石匙	—	—	—	B 類	

第37図 石匙分類図

A2類 刃部両側縁の中央が大きく張り出し、刃部が菱形を呈する。小型のつまみをもつ傾向があり、二次加工は周縁部のみに施されるのが一般的である。

A3類 刃部両側縁は端部に向かって広がり、端部は丸くおさまる。

A4類 刃部片側縁が大きく張り出し、他の側縁はほぼ直線ないし内弯する。小型のつまみをもち、二次加工は周縁部のみに施される。

A5類 刃部片側縁が大きく張り出し、他の側縁はほぼ直線ないし内弯する。大型のつまみをもち、二次加工は周縁部のみに施される。

B類 横形石匙である。

特筆されることとしては、A5類の刃部端部が素材の打面となる場合(2279, 3805, 4097)が多く、技術的な特徴といえよう。

両面加工石器 二次加工・刃部形状・平面形態においてある程度の共通性が認められるため両面加工石器(仮称)とした。しかし、前回の報告でも指摘しているようにその形態はバラエティーに富み、不定形石器K類(両面加工)と同じくC類(鋸歯縁)の一部に明瞭な区別が困難なものがある。前者との区別は比較的薄い剥片を素材とし、二次加工が小さな剥離によっているものをK類とし、後者との区別はC類が両面加工により鋸歯縁を作り出す資料に対して不明瞭となるが、C類の鋸歯縁は狭い範囲で作られるもので、両面加工は全周に近い広い範囲で作られる。以下に諸特徴を記す。

・二次加工 比較的厚手の剥片(扁平鍛を素材とするものが一部ある)の両面にわたり、やや大きな剥離が全周またはそれに近い範囲に施される。交互剥離を多用している。

- ・刃部形状 平面形は波状、側面から見るとジグザグ状を呈するものが一般的である。
- ・平面形態 円形・楕円形を基本とするが、素材の打面が大きく残るものや折断状の加工が有るものは、半円形や半楕円形に近いものもある。

三脚石器 第38図参照。平面形は脚部を結ぶ辺（以下「脚線」とする）が内包する三角形（以下「挿入三角形」とする）または三角形を呈し、二次加工は全周またはそれに近い範囲で正裏両面からの剥離によっており、裏面が平板状でない石器である。分類基準は板状石器も含め前回の報告どおりである。形態的、技術的な面から識別が困難な板状石器とは、主に刃部の角度を重視し両面加工のものを三脚石器とし、片面加工によるものを板状石器とした。しかし、実際の資料にはその中間形のものも多く明瞭な識別は困難である。また、肉眼での使用痕観察でも両者に共通するものが多く、用途的に大きな違いはないものと推測される。なお、使用痕に関するものは観察表の備考欄に載せたが、「磨耗」とは光沢痕も含み、「つぶれ」とは明瞭な磨耗、光沢は無いが後が丸味を帯びてつぶれでいるもので、両者とも使用の結果を表すものと考えている。また、実測図面上ではつぶれの位置を矢印で示した。以下（第38図）に三脚石器と板状石器の識別に用いた基本的な考え方を示す。

分類 平面形態でA・B類に大別し、細部の特徴でA類を2分類している。

A類 平面形が挿入三角形を呈する。さらに本類は長さ・幅に対しての厚さにより二つに細分される。

A1類 厚さが長さ・幅に対して厚手のもの。從来より言われている「三脚石器」の典型品である。

A2類 厚さが長さ・幅に対して薄手のもの。

B類 平面形態が三角形を呈するもの。

なお、板状石器C・D類でみられる平面形が円形または不整形のものも含まれるが、数が圧倒的に少ないので、ここでは分類しない（これらについては、観察表備考欄に平面の形状を記した）。

板状石器 第38図参照。扁平な自然縫または平板状の剥片を素材とし、裏面から正面にかけて全周またはそれに近い範囲で二次加工が施される平板状の石器である。二次加工は基本的に急角度剥離の片面加工であるが、若干、裏面の周縁に細かな剥離が存在するもの（1868ほか）がある。これについては、使用結果または製作中のアクシデントによる剥離とも考えられるため、この小さな剥離を「両面加工の現れ」として積極的に考えなかった。断面形は台形状を呈するものが一般的である。なお、使用痕の表現は三脚石器と同様である。

分類 三脚石器同様、平面形でAからDまで4分類した。

A類 平面形が挿入三角形のもの。

B類 平面形が三角形のもの。

C類 平面形が円形・楕円形のもの。

D類 平面形が不整形のもの。

両極剥離痕のある石器（略称、両極石器）ここで扱う資料はビエス・エスキュー、両極剥片、両極石器を含む石器面に両極の剥離痕がみられるものである。したがって機能的に異なるものが含まれると推定されるが、それぞれの区別が難しいため、ここでは、これらを一括して取り扱う。しかし、資料数としては、ビエス・エスキューと考えられるものが圧倒的に多く、以下に示す分析もビエス・エスキューの大まかな状況を示すものである。

分類 前回の報告と同様に両極剥離痕の数により2分した。2個1対の両極剥離痕をもつものと、4個2対の両極剥離痕をもつものである。

器種名	分類	実測図					二次加工	削除の様子	平面形	断面形
		(A)	(B)	(C)	(D)	(E)				
三脚石器	A-1類								内等状 （中間形態很多く、明確に区分できない）	内等状
	A-2類							（多く内側するものが多い）	内等状 （中間形態很多く、明確に区分できない）	内等状
	B類							（多く内側するものが多い）	内等状 （中間形態很多く、明確に区分できない）	内等状
	A類							（多く内側するものが多い）	内等状 （中間形態很多く、明確に区分できない）	内等状
	B類							（多く内側するものが多い）	内等状 （中間形態很多く、明確に区分できない）	内等状
	C類							（多く内側するものが多い）	内等状 （中間形態很多く、明確に区分できない）	内等状
板状石器	D類							（多く内側するものが多い）	内等状 （中間形態很多く、明確に区分できない）	内等状
	E類							（多く内側するものが多い）	内等状 （中間形態很多く、明確に区分できない）	内等状
	F類							（多く内側するものが多い）	内等状 （中間形態很多く、明確に区分できない）	内等状
	G類							（多く内側するものが多い）	内等状 （中間形態很多く、明確に区分できない）	内等状

第38図 三脚石器・板状石器分類図

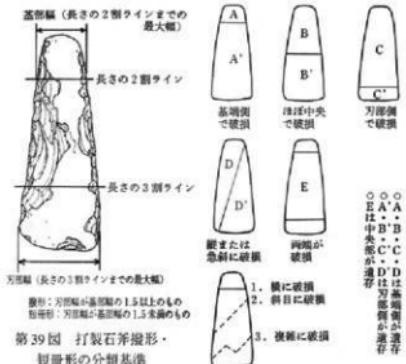
打製石斧 分類 第41図参照。前回の報告同様、用いる素材が削片なのか扁平礫かで大別し、さらに削片素材のものは平面形態かくらわゆる撮形・短冊形、そして刃部形状により直刃式片刃打製石斧(鈴木1977)を独立させ3つに細分した。なお、前回の調査で出土していない分銅形(2032, 2035)と思われるものも存在するが、数が少なくあえて分類することはせず観察表等で提示する。

撮形と短冊形の区別は第39図のように刃部幅が基部幅の1.5倍以上のものを撮形、1.5倍未満のものを短冊形とした。

A類 削片素材で平面形が撮形のもので、両側縁を

中心に粗雑な二次加工(剥離・つぶし)が施され

るのが一般的である。A類は側縁の形状で4つに細分される。



第39図 打製石斧撮形・短冊形の分類標準

第40図 打製石斧・磨製石斧遺存部位と破損の在り方

素材	平面形態	刃部形状 ・石質	側縁の形状	分類				
削片	A類 撮形	1類 両側縁やや抉れる		A 1類	A 1類	A 2類	A 3類	A 4類
		2類 片側縁やや抉れ、片側縁直線状またはやや彎らむ		A 2類				
	B類 短冊形	3類 両側縁直線状 片側縁直線状、片側縁やや彎らむ		A 3類	B 1類	B 2類	B 3類	B 4類
		4類 両側縁やや彎らむ		A 4類				
D類 扁平礫	C類 直刃・片刃 硬質で堅密	——	——	C類	D類	分類形		

第41図 打製石斧分類図

- A1類 両側縁がやや抉れるもの。
- A2類 片側縁がやや抉れるもの。
- A3類 両側縁が直線状のもの。または片側縁が直線状で他の側縁がやや膨らむもの。
- A4類 両側縁がやや膨らむもの。
- B類 剥片素材で平面形が短冊形のもので、側縁の二次加工等、技術的な面はA類と同様である。側縁の形状によりA類同様4つに細分される。
- B1類 両側縁がやや抉れるもの。
- B2類 片側縁がやや抉れるもの。
- B3類 両側縁が直線状のもの。または片側縁が直線状で他の側縁がやや膨らむもの。
- B4類 両側縁がやや膨らむもの。
- C類 直刃式片刃打製石斧と呼ばれるものに近似し、片刃で直線的な刃部をもち、硬質で緻密な石材を使用している。二次加工は両面・片面加工が存在し両側縁に急角度削離が集中する。刃部は素材の形状をそのまま利用し、急角度の片刃を作り出すが、刃部形態には直刃と円刃がある。
- D類 扁平礫を素材とし、粗雑な二次加工が周縁ないしは部分的に施されるもの。二次加工が進んだものの中には平面形がA・B類に類似するものが多い。

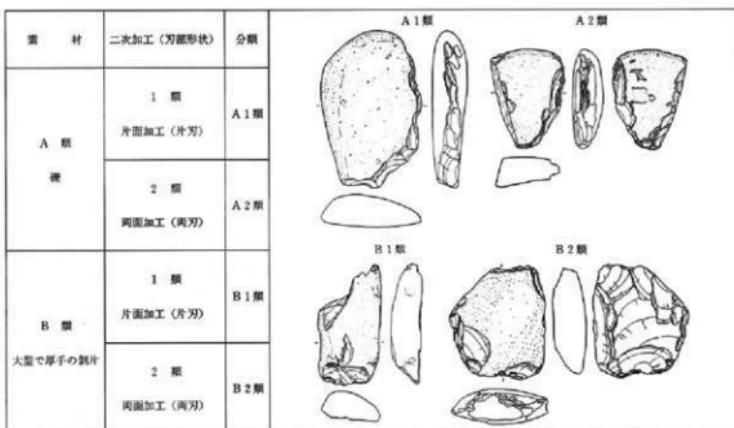
磨製石斧 分類 前回の報告同様、形状と製作技術により定角式磨製石斧・擦切磨製石斧・乳棒状磨製石斧に3分した。また、定角式磨製石斧の中には擦切技法により製作されたものが含まれる可能性があるが、識別できないため、擦切面が残るもの(2057, 2058, 2061)のみを擦切磨製石斧とした。そして時期差と考えられる側面が未発達で、横断面が方形にならない扁平のものも少数存在するが、取り合えず定角式磨製石斧の中に含めておく。

- A類 定角式磨製石斧。大きさで4つに細分する。
- A1類 長さが11cm以上のもの。
- A2類 長さが4cm以上11cm未満、幅が2cm以上のもの。
- A3類 長さが4cm以上、幅が2cm未満のもの。
- A4類 長さが4cm未満、幅が2cm未満のもの。
- B類 擦切磨製石斧。
- C類 乳棒状磨製石斧に近似するもの。

礫器類 種または大型で厚手の剥片を素材とし、周縁の1部に片面または両面から大きな削離を連続的に加え刃部としたものである。他器種との区別は打製石斧D類との場合、全体が縱長で比較的定形的な打製石斧に対し、礫器類は不定形である。また不定形石器や両面加工石器との場合、礫器類の素材が大型で厚手であることから区別され、石核との区別は使用痕と考えられる細かいぶれや削離が刃部の縁に残るものに基づいて礫器類とした。

全体的に完形品・破損品・未成品との区別が困難であるが、大型扁平礫を分割して素材とするものが目立つ。また、全体的に風化しやすい安山岩を素材とするものが多く、これらは二次加工の詳細な観察ができないものが大半で、別器種(石核等)やその未成品の可能性もある。そして片面加工や両面加工においても、本来片面加工であるものが使用時の衝撃により他の面へ削離が加わり、結果的に両面加工に見えるものも含まれているものと考える。

折断様の削離についても同様で風化の進んだもののなかには、使用時または廃棄後の破損の可能性があ



第42図 碓器類分類図

るが、明瞭な区別は困難である（なお、折断様の剥離のある資料には、観察表参考欄に記載した）。

分類 第42図参照。礫素材か剥片素材かで2分した。

A類 磎を素材とするもの。A類は二次加工により2分される。

A1類 片面加工(片刃)のもの。

A2類 両面加工(両刃)のもの。

B類 大型で厚手の剥片を素材とするもの。二次加工によりA類同様2分される。

B1類 片面加工(片刃)のもの。

B2類 両面加工(両刃)のもの。

石錐 全て扁平な円錐の両端に抉りを作った鍥石錐である。今回の調査で最も大きな集落跡1の出土例は少なく、集落跡4の捨て場C下層からの出土が多い。ここでは形態的な分類はしていない。

磨石類 円錐または扁平様に磨痕・凹痕・敲打痕の残るものである。これらの痕跡は単独で見られるものは少なく、複数の痕跡が一つの礫についている場合が多い。以下にそれぞれの痕跡の識別基準を示すが、前回の報告に準じたものである。

磨痕 正裏面や側面につく場合が多い。前者は比較的滑らかに擦られるものが多く、後者は微細な窪みの集合で全体的にザラつく場合が多い。これらの違いは機能の差と考えられ、後者には軽いたたきの使い方も複合したものと思われる。使用面はある程度広い面積をもち、平坦（主に側面）なものから曲面的（主に正裏面）なものまで存在する。側面を使用面とする場合、希に使用面の凸凹が著しく、強い衝撃によると考えられる剥離がつく場合があり、この場合は敲打痕としている。

凹痕 正裏面に一般的に見られる局所的な敲打痕で、少数側面につく場合がある。凹痕には局所的な深いものから、複数が集合して広い範囲にまたがるものなど多種多様である。使用位置は礫のほぼ中央に見られるものが普通で、希に側面の端部付近にあるものがある。この場合、小型の凹痕が複数集合するものは敲打痕との区別が難しいが、ここでは敲打痕として扱っている。

使用痕による組み合せ	分類				
磨痕	A類				
磨痕+凹痕	B類				
磨痕+敲打痕	C類				
磨痕+凹痕+敲打痕	D類				
凹痕	E類				
凹痕+敲打痕	F類				
敲打痕	G類				
抉入磨石	H類				

第43図 磨石類分類図

敲打痕 側面や端部に残された敲打痕である。凹痕・磨痕(特に側面を使用面としているもの)との区別が難しい場合があるが、使用の位置や凸凹の大きさ、そして敲打による周辺の剥離の有無等により区別する。

分類 第43図参照。前回の報告同様、磨痕・凹痕・敲打痕の組み合わせでA類からG類の7つに分類し、少数ではあるが両端に抉りの入った磨石(H類)を加え8分類した。

A類 磨痕だけのもの。

B類 磨痕と凹痕がみられるもの。

C類 磨痕と敲打痕がみられるもの。

D類 磨痕と凹痕と敲打痕がみられるもの。

E類 凹痕だけのもの。

F類 凹痕と敲打痕がみられるもの。

G類 敲打痕だけのもの。

H類 両端に抉りのあるいわゆる「抉入磨石」。

なお、観察表の項目A・B・C・Dについては以下に示す観察である。

・A 正裏面にある磨痕で両面にある場合○、片面の場合○、ない場合×

・B 側縁にある磨痕で両側縁にある場合○、片側縁の場合○、ない場合×

・C 正裏面にある凹痕で両面にある場合○、片面の場合○、ない場合×

・D 敲打痕で両側縁・両端部の4か所のうち、2か所以上にある場合○、1か所の場合○、ない場合×

砥石 不定形の比較的平坦な礫の1面ないし複数面に使用面をもつもので、使用面は比較的平坦な面や大きく内擱する面が一般的である。希に礫の接線線ないし端部に細い溝状痕が集中する場合がある。使用痕跡としては狭い範囲に磨面があつたり溝状に擦り込まれてたり多様であるが、溝状のものには太いものと細いものとがみられる。これら磨面と溝状痕とは1個体に同居する場合が多い。

石皿との区別が難しいものがあるが、広い範囲で比較的均質に擦られている石皿に対し、砥石は狭い範囲で擦られており、その中でも局所的に特に良く擦られた部分をもつ。そして、石材においても前者は安山

岩を多用するのに比べ、後者は風化の進んだ軟質の花崗岩を多用する。

前回の報告では僅か14点と出土が少なく、今回の出土量と比べ異質な感を呈するが、前回の調査では砥石の認識が甘く、資料を抽出できなかつたためと思われる。したがつて、今回の出土量が本遺跡における砥石の出土量を反映するものと考えたい。

形態的な分類については今回行つていない。

石皿 円形ないし梢円の大型扁平砾の1面または希に2面(2160)に使用面をもつもので、使用面は事前に縁取りされ大きく窪むものや、使用的結果窪むもの、または広い平坦面や若干膨らみをもつものなど多様である。

使用面以外の加工は、側縁または使用面の周縁に彫刻を施すものがある他、石皿の法量または形状を規定するため、側縁に急角度の削離を加えたり叩き潰しを加えることがある。

分類 第44図参照。前回の報告同様、縁や使用面の加工の有無により2分した。

A類 縁や使用面を加工しているもの。縁や使用面の形状により3つに細分した。

A1類 縁があり、使用面が平坦または緩く窪むもの。

A2類 縁があり、使用面が弓状にやや深く窪むもの。

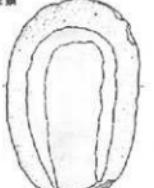
A3類 縁がなく、使用面が平坦または緩く窪むもの。

B類 縁や使用面を加工していないもの。使用面の形状により2つに細分される。

B1類 使用面が平坦または緩く窪むもの。若干膨らむものも含まれる。

B2類 使用面が弓状にやや深く窪むもの。

その他、明瞭な使用面は観察されないが側縁を急角度削離により加工し、形状を整えたものも数点抽出で

加工の有無	縁の有無	使用面の形状	分類		
A類 あり	あり	1類 平らまたは緩くくぼむ	A 1類		
		2類 弓状にやや深くくぼむ	A 2類		
	なし	3類 平らまたは緩くくぼむ	A 3類		
B類 なし		1類 平らまたは緩くくぼむ、凸状に緩く膨らむ	B 1類		
		2類 弓状にやや深くくぼむ	B 2類		

第44図 石皿分類図

きた。これらについては観察表備考欄に「未成品」とし、使用前であるため使用面は未記入とした。また、これらの資料については石核や砾器類との識別が難しいものが多く含まれる。同じく備考欄に「砥石の可能性有り」と記したものは、砥石に一般的に用いた石材（花崗岩）と同じで、なおかつ破片のため識別が困難なためである。実際に砥石と石皿の使用面が併設されている個体（2139など）も数点存在し、両者の識別の難しさを痛感した。

台石 石皿・砥石以外の作業台と考えられるものをここで扱う。大小の縁の片側ないし両面に使用面をもつもので、使用面は大小の窪みが比較的広い範囲につくものが一般的である。磨石類（正類）に見られる凹部と区別しにくいものもあるが、法量が比較的一定な磨石類に対し、台石は大型のものが多く、台としての安定性も確保したより扁平な縁を素材とするものが目立つ。

不定形石器 従来「搔・削器類」・「スクレイバー」・「二次加工のある剥片」・「使用痕のある剥片」・「微細剥離のある剥片」・「不定形剥片石器」等といわれている石器を一括して扱う。資料の抽出は以下の方法によった。

抽出方法 磨石器・石錐・尖頭器・石錐・両面加工石器・三脚石器・板状石器・打製石斧・磨製石斧・砾器類・両極剥離痕のある石器・分類不明石器・石核・剥片類を除外し、剥片に二次加工剥離または使用痕がみられるものを不定形石器とした。また、定形石器の素材や未成品と認められたものも不定形石器から外している。

分類 第8表・第45図参照。分類基準は前回の報告に準じるが、新たに「両面加工」のものK類（新潟県教育委員会1992）を加え11種類に分けた。分類は主に刃部の形状や製作技術によって大別し、そして素材の形状・刃部ライン・加工部位等で細分した。

A類 いわゆるスクレイバー 刃部には中型で急角度の二次加工が片面に連続的につくもの。用いる素材により細分した。

A1類 横長剥片 刀部には中型で急角度の二次加工が片面に連続的につくもの。用いる素材により細分した。

A2類 横長剥片 刀部には小型で急角度の二次加工が片面に連続的につくもの。用いる素材により細分した。

B類 いわゆるスクレイバー 刀部には小型で急角度の二次加工が片面に連続的につくもの。用いる素材により細分した。

B1類 縦長剥片 刀部には中型で急角度の二次加工が片面に連続的につくもの。用いる素材により細分した。

B2類 縦長剥片 刀部には小型で急角度の二次加工が片面に連続的につくもの。用いる素材により細分した。

C類 鋸歯縁石器 刀部には大型・中型で急角度の二次加工が片面に鋸歯状につく。鋸歯縁の凸部には使用痕とみられる細かな剥離がつく場合がある。刃部のラインにより細分した。

C1類 刃部ラインが直線状のもの

C2類 刃部ラインが内彎状のもの

C3類 刃部ラインが外彎状のもの

C4類 スクレイバーエッジと鋸歯縁の刃部が複合するもの

D類 銛尖頭部をもち、それに続く側縁に二次加工をもつもの 二次加工を片側縁にもち、他の側縁は古い急角度の剥離が多い。尖頭部に橢状剥離がみられる場合があり、剥離の機能を有したと考えられる。また、先端部が磨耗し石錐の可能性があるものは、その旨を観察表備考欄に記した。刃部の形状により細分した。

D1類 尖頭部につながる側縁の加工が大型・急角度剥離によるもの

D2類 尖頭部につながる側縁の加工が大型・浅角度剥離によるもの。

D3類 尖頭部につながる側縁の加工が小型の剥離によるもの。

E類 捕入（ノッチ）状の加工を有するもの。ノッチの大きさで細分した。

E1類 大型のノッチをもつもの。比較的厚手の剥片を素材とし大型・中型の急角度剥離によりノッチ状に加工している。

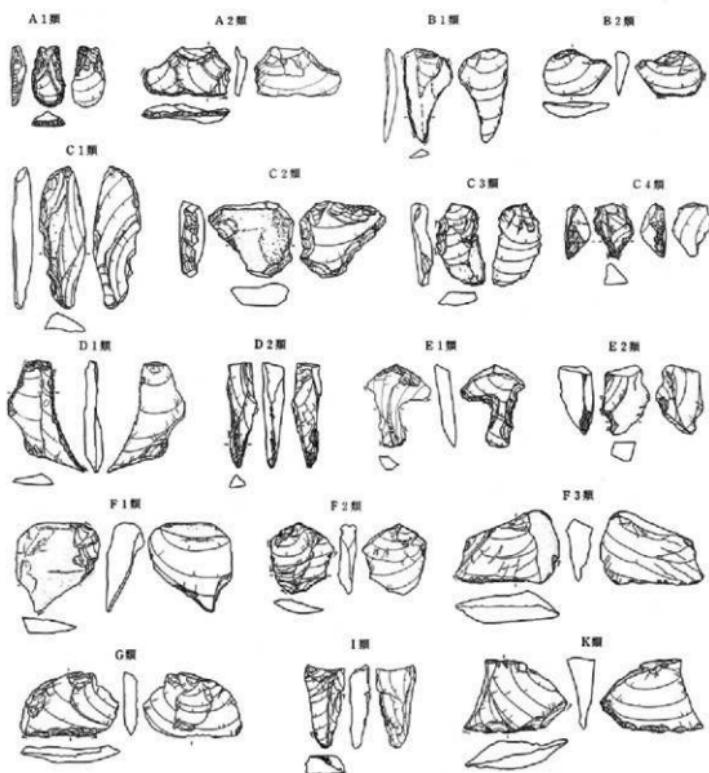
E2類 小型のノッチをもつもの。比較的薄手の剥片を素材とし中型・小型の急角度剥離によりノッチ状に加工している。使用の結果、ノッチ状部分ができるとする可能性も否定できない資料がある。

F類 刃部に中型・小型の二次加工が不連続につくもの。J類との区別が困難なものがある。用いる素材と二次加工部位により細分した。

F1類 縦長剥片を素材とし二次加工が側縁につくもの。

F2類 縦長剥片を素材とし二次加工が側縁と端部につくもの。

F3類 横長剥片を素材とするもの。



第45図 不定形石器分類図

第8表 不定形石器分類表

分類	刃部形状	刃部ライン	素材	二次加工部位	細分類	
A類	スクレイパー 中型・急角度・連続剥離	——	縦長 横長	側線と端部 片側線と底線	A 1類 A 2類	
	スクレイパー 小型・急角度・連続剥離	外彎状	縦長 横長	片側線と端部 底線	B 1類 B 2類	
C類	鋸齒縁石器 大型・中型・急角度・鋸齒状剥離	直線状	縦長・厚手 横長・厚手	片側線 底線	C 1類	
		内彎状	縦長・厚手 横長・厚手	片側線 底線	C 2類	
C類	スクレイパーと鋸齒縁石器の複合形	外彎状	縦長・厚手 横長・厚手	片側線 底線	C 3類	
		——	厚手	——	C 4類	
D類 <small>鋸利な尖端部をもつ石器</small>	大型・急角度剥離	直線状	厚手	片側線 (一方の側線は古い 剥離面や折断面等を 利用する)	D 1類	
		内彎状	厚手	片側線 (D 1類と同じ) 両側線	D 2類	
	大型・浅角度剥離	直線状	厚手	片側線 (D 1類と同じ) 両側線	D 2類	
		内彎状	厚手	片側線 (D 1類と同じ) 両側線	D 3類	
	小型剥離	直線状	厚手	片側線 (D 1類と同じ) 両側線	D 3類	
		内彎状	薄手	両側線	石錐	
		直線状	薄手	——	——	
E類	大ノフチ	大型・中型・急角度剥離	内彎状	縦長・厚手 横長・厚手	E 1類	
				縦長 横長	E 1類	
	大ノフチ	大型・中型・浅角度剥離		縦長 横長	E 2類	
				縦長 横長	E 2類	
	小ノフチ	中型・急角度剥離	内彎状	縦長 横長	E 1類	
				縦長 横長	E 1類	
F類	中型・小型・急角度・不連続剥離	端部に丸味	縦長	側線 側線と端部	F 1類 F 2類	
				底線	F 3類	
			横長	側線 底線と側線	F 3類	
			縦長	側線	G 類	
			横長	底線	G 類	
			縦長	側線	H 類	
H類	無加工 (使用痕の微細剥離・使用痕) 小型・浅角度剥離	外彎状	縦長 横長	底線	H 類	
I類	端部に小型・連続剥離	端部に丸味	縦長・薄手 横長・薄手	端部	I 類	
J類	無加工 (使用痕の微細剥離・使用痕)	——	縦長 横長	側線 側線・底線	J 類	
K類	両面加工 (調整) 石器 (刃部平面形は波状、側面観 はジグザグ状)	外彎状	薄手	——	K 類	

※ゴシック以外の明朝体は、一般的傾向を表したものが多い。

G類 刃部に大型・中型で浅角度の二次加工がつくもの。

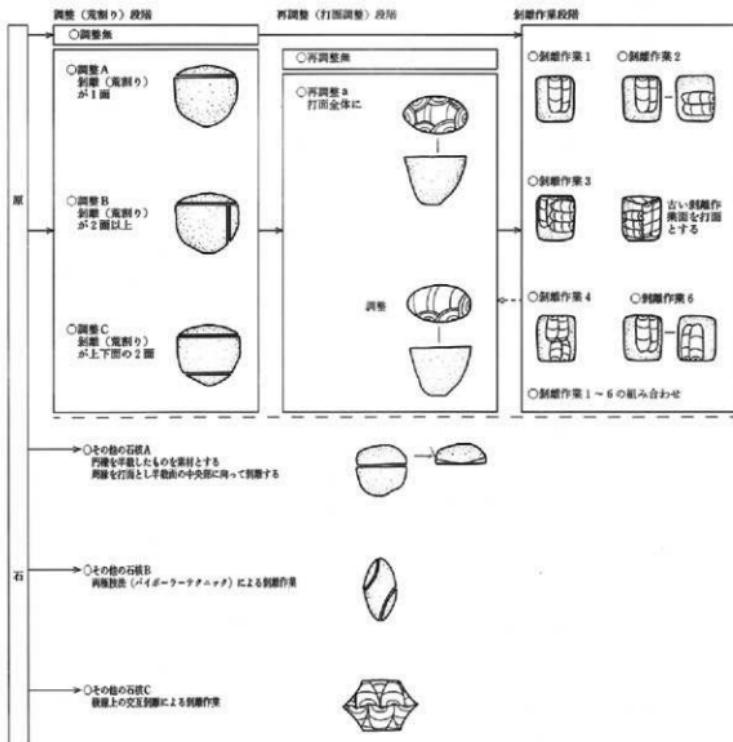
H類 正面に縦表皮を多く残す素材を用い、刃部に小型で浅角度の二次加工がつくか、使用痕と考えられる微細剥離・磨耗・光沢等がみられるもの。

I類 素材の一端部のみに連続的な二次加工がつくもの。比較的薄く小型の素材を用い、二次加工も小型の連続した剥離の場合が多い。

J類 使用痕と考えられる微細剥離・磨耗・線条・光沢等がみられるもの。

K類 大型・中型の浅角度の剥離により両面加工の刃部をつくるもの。刃部平面形は波状、側面形はジグザグ状のものが多い。従来「削器」といわれた一群である。

石核 第46図参照。剥片剥離作業には原石獲得→石核調整→打面調整→剥離作業の諸行程を想定した。抽出した資料は剥離作業が進行したと考えられる残核と、剥離作業の前段階と考えられる調整石核である。調整石核は観察表の備考欄で「打点なし」と表示した。打点なしとは、調整剥離に打点がない場合が多いので、これらの剥離技術の解明も課題となる。また、石核には小型のものが多く、そこから剥離された剥片石器も極小で、本遺跡で最小器種である石鏃にも作れないものが多く含まれる事実は、石核認定以前に大き



第46図 剥片剥離工程および石核分類図

な検討を必要とする事を示唆するものである。

今回の整理では上記の問題点は今後の課題とし、前回報告の認定及び分類基準を踏襲した。なお、接合作業は器種の抽出過程で同一母岩と判断されたもののみに限ったので、ほとんど実施していないのと同じである。

分類 第46図が分類の基準となる。

原石獲得 他地域から持ち込まれたと考えられる石材に、黒曜石・蛇紋岩・翡翠・滑石がある。蛇紋岩と滑石は成品または未成品で、翡翠は破砕面をもつ原石で持ち込まれており、黒曜石は石錐の製品と数点の剥片のみである。その他、遺跡で多量に使われた石材は、そのほとんどが遺跡周辺からの獲得と考えられる（新潟県教育委員会1990b）。また、器種に適した石材があるようで、剥片石器に多用される頁岩・鉄石英・流紋岩等は小型の原石を用いる傾向が高い。

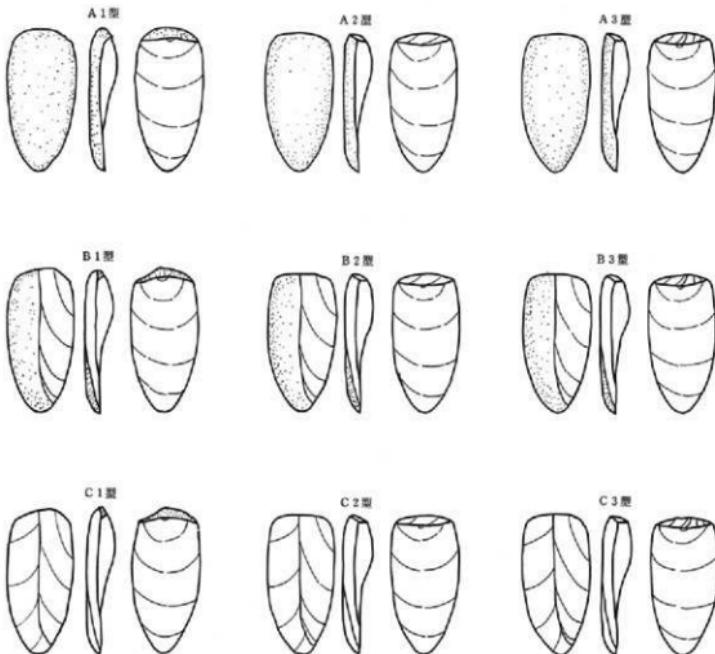
石核調整（荒削り） 目的とした剥片石器を剥離する前の、荒削りにより原石を調整する段階。この段階には目的とした剥片石器の法量をある程度限定する効果も含まれる。

調整無 調整のための荒削りを行わないもの。

調整A 調整のための荒削りが1面だけのもの。

調整B 調整のための荒削りが2面以上のもの。

調整C 調整のための荒削りが上下2面のもの。



第47図 剥片分類図

再調整（打面調整） 調整のための荒削り面ないし自然面に、打面を調整するための細かな剥離を施す段階。

再調整無 打面調整が行われずに剥離作業にはいるもの。

再調整a 打面の周辺全体に再調整の剥離が施されるもの。

再調整b 打面の一部分に再調整の剥離が施されるもの。多くの場合、目的とする剥片を剥離する打点付近にあらかじめ施される。

剥離作業段階 打面を加算し目的とする剥片石器を生産する段階。剥離作業を6類に分け資料を当てはめた。剥離作業1種類で完結する資料もあるが、複数の作業が複合しているものもある。

剥離作業1 同じ打面を用い、剥離作業が同一方向に行われるもの。

剥離作業2 打面を転位し、別の作業面へ約90°ずれる剥離作業が行われるもの。

剥離作業3 打面を転位し、同一の作業面に約90°ずれる剥離作業が行われるもの。

剥離作業4 古い剥離作業面を打面とし、別の面に剥離作業が行われるもの。

剥離作業5 打面を転位し、同一の作業面に約180°ずれる剥離作業が行われるもの。

剥離作業6 打面を転位し、別の作業面に約180°ずれる剥離作業が行われるもの。

その他の石核 上記以外の石核を記す。

その他の石核A 円礫を半裁し、半裁面の周縁から加算し半裁面を作業面とするもの。

その他の石核B 両極技法により剥離作業が行われるもの。

その他の石核C 交互剥離により剥離作業が行われるもの。

剥片類 ここでは剥片と碎片が含まれる。総数25,273点の内、分析に用いたものは遺構内出土と近現代の開墾塚から出土したもの除いた総数19,791点である。なお、分析の結果は資料数が膨大なため、観察表を掲載する事はせず、各種集計表および分布図等で表した。分類基準は前回の報告に準じた。

分類 第47図 打面と正面の様子を以下のように類型化し、これらの組み合わせにより分類した。

正面の様子 A型 正面のすべてが自然面であるもの。

B型 正面の一部が自然面であるもの。

C型 正面のすべてが剥離面であるもの。

打面の様子 1型 自然面打面

2型 剥離面打面。剥離が1つのもの。

3型 剥離面打面。剥離が2つ以上のもの。

その他の石器 石製品の他、上述した石器に分類上含まれないもの、および二次加工は存在するが破損が著しく器種を想定できないものを含め64点が出土している。なお、本資料については観察表および実測図等は掲載していない。

3 集落跡1の調査

A 遺構

(1) 住居跡

炉跡のみが確認されたものも含め、65軒が検出された。形状は、塩沢町五丁歩遺跡（高橋1992）と同様

に、2つのタイプが認められる。ひとつは平面形が円形または梢円形の住居跡 (SI) と考えられるもの、もうひとつは平面形が長方形もしくは柱穴配置が長方形の住居跡 (SB) と考えられるものである。前者は37軒、後者は21軒が確認された。両者とも竪穴住居跡である。なお、形状の違いによる時期差はないと考えられる。このほかに、径2mあまりの小規模な竪穴住居跡も5軒認められた。柱穴数は、SIではほとんどが不定であるが、中には2本1組のものも9軒確認された。SBでは6~8本の柱穴をもつものが主体を占め、3本または4本が対応する配列をとるが、中には棟持柱と考えられる柱穴をもつものも2軒確認された。造構が地山まで明瞭に掘り込まれているもののが少ないため、壁や床面・周溝が確認できたものは少なかった。中には、SI98のように柱穴の内側に掘り込みをもつものが検出された。炉跡は基本的にはすべて地床炉であるが、埋甕を伴うものや、1基のみであるが細長い櫛を数個伴うものが確認された。住居跡は、広場に面して環状に分布するが、南東側・南西側・西側の3つに大別される。しかし、それぞれの群の間に時期差は認められない。

SI750 (図版18, 写真333)

- 位置 集落跡外縁のO7, P7に位置し、SI457Aが近接する。
- 平面形 梢円形と推定される。
- 規模 周溝が柱穴の外側を全周すると仮定して、長軸6.0m、短軸5.5m程度と推定される。
- 柱穴 9本で梢円形を描いて並ぶが、南側で柱穴が途切れ、柱間が大きく開く。規模は上端径が24~50cm、深度が23~53cmである。
- 炉 地床炉で、平面は梢円形である。10cmほどの掘り込みが確認され、断面は浅い皿状である。焼土はブロック状を呈している。
- 周溝 住居跡の北側に長さ約2.5mにわたって、周溝 (SD762) を検出した。断面は浅いU字型で、深さは10cm程度である。覆土は暗褐色土である。
- 出土遺物 土器出土
- その他 調査時に確認された住居跡である。

SI457A (図版18, 写真333・334)

- 位置 集落跡南西側外縁部のO7・8, P7・8にあり、SI471AとSI750にはさまれる位置にある。SI471Aとは重複している可能性が高い。
- 平面形 梢円形と推定される。
- 規模 周溝が柱穴の外側を全周すると仮定して、長軸6.0m、短軸5.5m程度と推定される。
- 柱穴 11本で不整梢円形に並ぶ。規模は上端径が19~58cm、深度が17~36cmでやや不揃いである。
- 炉 地床炉で、平面は梢円形である。断面から2個のピット状の掘り込みが確認され、深さは12cmを計る。焼土は厚さ3cmのブロック状で、平面は環状を呈しているが下部への被熟は見られない。
- 周溝 住居跡の北側に長さ3.4mの周溝 (SD13A) を検出した。深さは12cm前後で、覆土はやや黒い暗褐色土である。
- 出土遺物 土器(554)、石器(磨製石斧1、磨石類1、不定形石器1)
- その他 調査時に確認された住居跡である。

3 集落跡1の調査

SI751 (図版19, 写真334)

- 位置 集落跡南西部分の最も外側のO5にあり、SI755から南西に約3m離れて位置する。
- 平面形 楕円形と推定される。
- 規模 柱穴間距離で長軸(P67~P57)が6.4m、短軸(P55~P740)が4.4mを計る。
- 柱穴 14本で、2本組になるもの4単位と、単独のP55、連続するP62~65がある。隣接する単位との距離は2m前後で安定している。規模は上端径が32~70cm、深度が32~74cmである。
- 炉 焼土407、焼土408という地床炉2基が検出された。焼土407の平面は不定形で、掘り込みは見られない。焼土は5cmほどの厚さで堆積し、一部はブロック状を呈する。焼土408の平面は不整椭円形である。断面は深皿状で南に傾斜しており、7~17cm掘り込まれている。焼土は厚さ5cmのブロック状で、炉の底部および北側壁部に認められる。
- 出土遺物 土器(1,2)、石器(三脚石器1、板状石器1、磨石類1、不定形石器1)
- その他 調査時に確認された住居跡である。

SI755 (図版20, 写真334・335)

- 位置 集落跡南西側の外縁部にあり、N5・6、O5・6に位置する。
- 平面形 北~東側で検出された壁と周溝および柱穴配置から円形と推定される。
- 規模 壁および周溝が柱穴の外側をまわると仮定して、径5.5~6mと推定される。
- 壁 北東側で4.8mにわたって検出された。遺構確認面より8~12cmの掘り込みをもち、立ち上がりは浅いが、明確である。
- 柱穴 12本で楕円形を描いて並ぶ。P69とP70、P75とP76、P99とP103、P158とP160は2本組になるが、建て替えではないと思われる。規模は上端径が26~67cm、深度が24~58cmでやや不揃いである。P160は根固め石をもっている。
- 炉 P74の西壁上部テラス状部分に焼土塊が認められる。P74は地床炉を壊して掘られたものと考えられる。
- 周溝 SD741、SD742、SD743という周溝が壁のすぐ内側に位置する。上面幅12~24cm、深さ5~10cmを計り、いずれも立ち上がりは良好である。
- 覆土 厚さ数cmで暗褐色を呈して締まりは強い。炭化物をやや多量に含んでいる。
- 出土遺物 土器(3~9)、土製品(1616)、石器(磨石類1)
- 時期 中期前業②
- その他 調査時に確認された住居跡である。

SI151 (図版19, 写真335)

- 位置 集落跡南西側の外縁部のO6に位置し、周囲には遺構が少ない。
- 平面形 不定形である。
- 規模 検出された壁から、東西幅2.7mを計る。
- 壁 北東側に隅丸のコーナーをもち、壁高8cm程度の明確な立ち上がりが認められる。
- 覆土 暗褐色を呈し締まりは強い。地山土粒と炭化物を多量に含み、大小の礫も出土した。
- 出土遺物 土器(10, 11, 438, 439)、石器(板状石器1、打製石斧1、磨石類2、両極石器1、不定形石器7、石核2)

時期 中期前業③

その他 柱穴、炉、床、周溝などの施設は検出されなかった。地山への掘り込みは、図化した範囲で明瞭であったが、住居の範囲は周辺に拡大される可能性もある。また、周辺に比べ櫛文時代の遺物が集中して出土したことから、整理中に住居跡と認定した。

SI471A (図版20, 写真335)

位置 集落跡南西側の外縁部のO8, P8に位置し、SI480Aと重複する。

平面形 柱穴配置から梢円形と推定される。

規模 柱穴間距離で長軸 (P28A～P4A) が 5.7m、短軸 (P15A～P591A) が 4.2m を計る。

柱穴 11本で梢円形を描いて並び、2本組が2単位ある。規模は上端径が 24～74cm、深度が 22～50cm でやや不揃いである。

炉 地床炉で平面は円形、底部は梢円形である。8cmほど掘り込まれ、断面は深皿状を呈する。焼土は記録をとる前に完掘したため、詳細は不明である。

出土遺物 土器 (12)

時期 中期前業②

その他 炉の存在から調査時に住居跡と想定し、整理中に柱穴配置、規模も含めて決定した。

SI480A (図版21, 写真336)

位置 集落跡南西側の外縁部のO8に位置し、SI471Aと重複する。

平面形 周溝と柱穴配置から梢円形と推定される。

規模 長軸 (SD280A～P456A) が 4.7m、短軸 (P35A～P278A) が 4.0m を計る。

柱穴 10本で略梢円形を描いて並ぶが、柱間は一定ではない。規模は上端径が 29～88cm、深度が 20～45cm でやや不揃いである。

炉 地床炉で平面は不定形である。18cmの掘り込みをもち、断面は深皿状を呈する。焼土ブロックが壁部の上面に認められる。

周溝 北側に長さ 1.7m の周溝 (SD280A) を検出した。幅は 20～34cm、深度は 6cm である。覆土は暗褐色を呈し、地山土粒と炭化物を含む。

出土遺物 土器出土、石器 (板状石器 1、磨製石斧 1、磨石類 2、不定形石器 1)

その他 炉と周溝の存在から調査時に住居跡と想定し、整理中に柱穴を決定した。

SI757 (図版21, 写真336・337)

位置 集落跡南西側のN5に位置し、周囲の遺構密度は低い。

平面形 柱穴配置から梢円形と推定される。

規模 柱穴間距離で長軸 (P86～P216) が 3.1m、短軸 (P202～P85) が 2.5m を計る。

柱穴 7本で梢円形に並ぶ。規模は上端径が 22～30cm、深度が 25～34cm と小規模ながら安定している。

炉 地床炉で平面は梢円形である。焼土は略環状を呈してブロック状に残存している。中央部のピット状の落ち込みは擾乱で、炉には伴わないと考えられる。

3 集落跡Ⅰの調査

出土遺物 土器 (13)、石器 (砥石 1)
その他 整理中に認定した住居跡である。

SI198 (図版22, 写真337)

位置 集落跡南西側 N5に位置し、SI759の北に隣接する。
平面形 不整規円形の地山への浅い掘り込みが検出された。
規模 検出された量から、長軸 2.7m、短軸 1.9mを計る。
壁 プラン全体に3~6cmの浅い掘り込みを検出した。立ち上がりは明確である。柱穴の配置から、この掘り込みは住居跡の内部に作られ、実際の住居跡の外縁はもっと外側にあった可能性がある。
柱穴 7本でほぼ壁に沿って並び、北側3本と南側3本がそれぞれ対称している。規模は上端径が14~40cm、深度が10~25cmでやや不揃いである。
炉 プランの中央やや北東寄りで焼土が検出されたが、詳細は不明である。
覆土 暗褐色を呈し締まりは強い。地山土ブロックを含み、炭化物を多量に含む。
出土遺物 土器 (14~16)、石器 (不定形石器 2)
時期 中期前業
その他 調査時に確認された住居跡である。

SI445 A (図版23, 写真338)

位置 集落跡南西側のN8、O8に位置し、周囲は遺構密集域でSI618Aと重複する。
平面形 地山への掘り込みと周溝が検出されており、不整な梢円形を呈する。
規模 周溝間で長軸 8.1m、短軸 6.5mを計る。
壁 4.1 × 3.2mの範囲で掘り込みを検出した。立ち上がりは不明確で、地山に10~15cm程度掘り込まれている。
柱穴 9本を配置し規模から想定した。不整規円形に並び、規模は上端径が36~59cm、深度が28~44cmを計る。P244A、P432Aは根固め石をもっている。
床 固く締まった床面が検出された。
周溝 掘り込みの北~東側にかけて約6.5mの周溝 (SD297A) を検出した。幅は70~130cm、深度は10~25cmで掘り込みとほぼ同じ覆土である。また南~西側にかけて3か所の浅い掘り込み (SD50Aほか) を検出し、コンターの流れからこれらも周溝の一部と考えられる。北~西側にかけて、掘り込みと周溝の間が最大で1.8mほど離れることから、テラス状の構造になる可能性が高い。また、周溝のプランもさらに南側に広がることが考えられる。
覆土 暗褐色を呈し、地山土粒、炭化物、小礫を少量含む。
出土遺物 土器 (17~22)、石器 (石器 1. 板状石器 2. 打製石斧 2. 磨石類 1. 不定形石器 2)
時期 中期前業③
その他 周溝、壁、床の存在から調査時に住居跡と想定し、整理中に柱穴を決定した。

SI154A (図版22, 写真337)

- 位置 集落跡南側のN9, O9に位置し、遺構密集域のやや外側にあたる。SI520Aの南西側と接し、SI3160Aの南東部分と重複している。
- 平面形 柱穴配置から円形と推定される。
- 規模 柱穴間距離でP174A～P142Aが3.7m、P542A～P651Aが3.9mを計る。
- 柱穴 9本で略円形に配置される。2～3本組になるものが4単位で構成されている。規模は上端径が34～68cm、深度が20～44cmを計る。P171A、P542A、P512Aは根固め石をもっている。
- 炉 地床炉で、火床と考えられる焼土が厚さ5cm、直径40cmのドーナツ状で検出された。中央部のくぼみは深さ7cmで、この底部付近に床面があったと考えられる。
- 出土遺物 土器(23, 24)、石器(打製石斧1, 磨石類1, 不定形石器1)
- 時期 中期前葉③
- その他 調査時に確認された住居跡である。

SI759 (図版24, 写真338)

- 位置 集落跡南西側のN5・6に位置し、遺構密集域のやや外側にあたる。SI98の南に隣接し、SI755の1.5m北に存在する。
- 平面形 柱穴配置から稍円形と推定される。
- 規模 柱穴間距離で長軸(P38～P64)が4.0m、短軸(P96～P285)が2.8mを計る。
- 柱穴 9本でやや不整な稍円形に並び、柱間は不揃いである。P284とP285を2本組とすると、長軸を中心に対称である。2つのピットの複合と考えられるP188を除くと、規模は上端径が20～30cm、深度が17～35cmで小規模ながら安定している。
- 炉 地床炉で1.0×0.7mの稍円形の範囲に、焼土と数cm大の炭化物が分布している。炉は大半が壊されており、その形状等は明確ではない。
- 出土遺物 土器(464, 465)
- 時期 中期前葉③
- その他 整理中に認定された住居跡である。

SI473 (図版24, 写真339)

- 位置 集落跡南西側のN7・8に位置し、遺構密集域にあたる。SB756、SB767のそれぞれ南東部と重複している。
- 平面形 不整稍円形の地山への浅い掘り込みが検出された。
- 規模 検出された壁から、長軸2.3m、短軸1.5mを計る。
- 壁 平均2～3cmの掘り込みがみられるが、底面に凹凸が多く、また壁の立ち上がりも不明確である。
- 柱穴 5本でほぼ壁に沿って並ぶが、柱間は不揃いである。規模は上端径が35～53cm、深度が30～39cmで安定している。P476はSB756の柱穴と、P475はSB767の柱穴と重複している。
- 覆土 暗褐色を呈し、北側では地山上ブロックが混じる。数mm～1cm大の炭化物を多量に含む。
- 出土遺物 土器(25～27 *ただし25の土器は柱穴が重複していることから、SB756に含まれる可能性がある)、土

3 集落跡1の調査

製品 (1603, 1612)

時期 中期前業②

その他 壁の外側にも柱穴に相当するピットが検出されており、重複するSB767の炉跡である焼土412が本住居跡の炉跡となり、規模が拡大する可能性も考えられる。調査時に確認された住居跡である。

SI3160A (図版25, 写真339)

位置 集落跡南側のN8・9に位置し、遺構密集域にあたる。SI520Aの西側に接し、SI154Aの北西部と重複している。

平面形 柱穴配置から梢円形と推定される。

規模 柱穴配置から、長軸5.0m、短軸4.5m程度と推定される。

柱穴 5本が梢円形に並ぶが、柱間はやや不揃いである。規模は上端径が42~68cm、深度が23~49cmを計る。

炉 地床炉で掘り込みは認められない。57×54cmの略円形の範囲に焼土粒が分布し、一部にブロック状の焼土が認められた。

出土遺物 石器(砥石1)

その他 整理中に認定した住居跡である。

SI520A (図版25, 写真340)

位置 集落跡南側のN9に位置し、遺構密集域のやや外側にあたる。SI154Aの北東、SI3160Aの東に接し、SB3159Aの南西部と重複する。

平面形 南西側の1/4を除いて検出された掘り込みから、円形と推定される。

規模 検出された数から、径4.5m程度と推定される。

壁 南西側の1/4を除いて、数cmの段差を検出した。

柱穴 8本で壁際をやや不整な円形に並ぶ。規模は上端径が33~100cm、深度が11~48cmと不揃いである。

炉 地床炉で掘り込みは認められない。77×47cmの範囲に焼土が分布し、一部にブロック状の焼土が認められた。

覆土 褐色を呈し、炭化物と焼土粒を含む。プランの北側で確認された。

出土遺物 土器(28~30)、石器(打製石斧2、不定形石器1)

その他 調査時に確認された住居跡である。

SI618A (図版26, 写真340・341)

位置 集落跡南西側のM8、N8に位置する。遺構密集域にあたり、SB3156Aの南に接し、SI445Aの北部と重複する。

平面形 周溝と柱穴配置から、梢円形と推定される。

規模 周溝と柱穴間の距離から、長軸6.5m、短軸4.5m程度と推定される。

柱穴 8本が梢円形に並ぶ。柱穴配置に規則性はなく、規模も上端径が56~124cm、深度が17~

41cmと不揃いである。

炉 焼土404A、焼土284Aという地床炉2基が検出された。焼土404Aの平面は不整捨円形で、深さ10cm程度の掘り込みをもち、断面は深皿状を呈する。掘り込みの上面に厚さ2~5cm程度の焼土ブロックが認められ、下半は褐色土が入る。掘り込みの下から上端径80×90cm、深度50cm程度のピットを検出したが、覆土の状況から炉はピットの埋没後に形成されたと考えられる。焼土284Aの平面は不定形で、断面は浅い皿状を呈する。7cmほどの掘り込みをもち、南側と北側上面に2~5cmの焼土ブロックが認められるが、掘り込み内の自然縛は被熱していない。

周溝 北側に半環状に巡る周溝(SD489A)を検出した。規模は長さが8.3m、幅が40~70cm、深度が5~15cmである。覆土は暗褐色を呈し、締まりが強い。全体に炭化物・礫を少量含み、下半部は地山土粒を多く含む。底面に凹凸が多い。

出土遺物 土器出土、石器(打製石斧7、磨石類2、砥石1、不定形石器4)

その他 ブラン内のP293A北西側テラスの確認面直下で、打製石斧7点が一括して出土した。P293Aの規模は、上端が72×42cm、下端が34×18cm、深度が36cmである。覆土は暗褐色で締まりが強く、炭化粒・小礫を少量含む。周溝と炉の存在から調査時に住居跡と想定し、整理中に柱穴を決定した。

SI51A (図版26、写真34)

位置 集落跡南側のM10に位置する。遺構密集域の南東辺にあたり、SB3157Aの北部と重複する。

平面形 棒円形を呈する。

規模 長軸約5m、短軸約4.4mである。

壁 地山への掘り込みは5~10cm程度であり、立ち上がりは明確である。

柱穴 6本で掘り込みの壁近くかやや内側に位置し、長軸に対して対称に配置される。規模は上端径が47~61cm、深度が14~35cmである。

炉 地床炉で平画は不整形である。断面は浅い皿状を呈し、10cmほど掘り込まれている。焼土は厚さ2~3cmのブロック状に堆積している。

床 西側を中心に固い床面が確認された。調査時には検出できなかったが、床は東側にも広がると考えられる。

覆土 基本層序のⅡa層に比定される。暗褐色を呈し、地山土・炭化物を含む。

出土遺物 土器(31~35、37、38)、土製品(1611)、石器(擦器類1、磨石類1、砥石2、不定形石器3)

時期 中期前業②

その他 重複するSB3157Aの柱穴(P957A)が、本住居跡の覆土を切っているため、SB3157Aの方が新しい。ブランの北東隅に壁を切る形でピットが掘り込まれ、そこに立石が25cmほど埋まっていた。ピットの覆土は、立石を境にして、住居跡の内側と外側では明確な違いが見られる。4層は住居跡の覆土と考えられることから、この立石は本住居跡内に設置されていたと考えられる。また、立石を境にして住居跡側で焼土が検出された。検出の状況からこの焼土は立石に伴うと考えられ、立石は住居跡内で祭的な役割をもっていたとも考えられる。調査時に確認された住居跡である。

3 集落跡Iの調査

SI349 A (図版27, 写真342)

位 置	集落跡南東側のM12・13, N13に位置する。周囲の遺構密度は低い。
平面形	掘り込みと柱穴配置から、楕円形と推定される。
規 模	長軸9.2m、短軸6.5mと推定される。
壁	東側でプランの約1/2を検出した。立ち上がりは明確だが、ゆるやかに立ち上がる。柱穴とは1.2~1.9m離れている。
柱 穴	13本で北側と南側の2群がそれぞれ弧状に並び、全体として楕円形の配置を呈する。この楕円形の長軸は、掘り込みプランの長軸とほぼ並行である。北~東側にかけては、長径30~40cm程度の柱穴が、長径45cm以上の柱穴の内側に並ぶ傾向がある。深度は15~56cmを計る。
炉	地床炉で西側の一部が搅乱を受けているが、遺存状況は良好である。平面は直径約50cmのドーナツ状を呈し、中央部に直径25cm、深さ5cmの円形の掘り込みをもつ。掘り込みの底面も被熱している。床面と同じレベルで検出した。
床	プランの北半で固い床面の残存が確認された。
周 溝	東~南東側にかけて周溝(SD714A, SD716A)が検出された。規模は幅が33~56cm、深度が9~12cmである。覆土は暗褐色で、地山土、炭化物を少量含む。
覆 土	全体に根による搅乱が激しく、遺存状況はよくない。住居跡南端は、耕作のため新しい時期に覆土を削られている。掘り込み面は基本層序のⅡa層中にあるが、耕作等で上部から搅乱を受け、上面を飛ばされている。現状での覆土の厚さは約60cmである。遺物はⅡ・1層から多く出土した。
出土遺物	土器(39~51)、土製品(1713)、石器(三脚石器1, 板状石器2, 打製石斧2, 磨石類3, 砥石2, 石皿1, 両種石器3, 不定形石器21, 石核2)
時 期	中期前葉③
その他の	調査時に確認された住居跡である。

SI1309 A (図版28, 写真342・343)

位 置	集落跡西側外縁部のL3・4に位置する。周囲には後世に掘られたピットや土坑、溝が多い。
平面形	柱穴配置から楕円形と推定される。
規 模	柱穴間距離で長軸(P1070A~P1049A)が6.0m、短軸(P1050A~P1069A)が4.6mを計る。
柱 穴	11本で不整な楕円形に並ぶ。西側の柱間が大きく開くほかは、2m前後の柱間が多い。規模は上端径が26~55cm、深度が6~48cmで、炉の東側の柱穴に深度25cm以上のものが多い。
炉	地床炉で平面は不整な楕円形である。断面は深皿状を呈し、14cmほどの掘り込みが認められる。
出土遺物	土器(52, 53)、石器(不定形石器2)
時 期	中期前葉②
その他の	プラン内を後世の溝に切られている。調査時に住居跡を想定し、整理中に決定した。

SI3169 A (図版29, 写真344)

位 置	集落跡西側のK6・7, L6・7に位置し、遺構密集域の内側にあたる。SB1262Aの東側と重複し、
-----	---

SI3166A の北東側と接している。

平面形 柱穴配置から梢円形と推定される。

規模 柱穴間距離で長軸 (P1419A～P2760A) が \varnothing 5.1m、短軸 (P2677A～P2682A) が \varnothing 4.6m を計る。

柱穴 8本で梢円形に並び、柱間は1.5～2.4mである。規模は上端径が40～61cm (P2768Aはピットの複合と考え除く)、深度が33～60cmを計る。

炉 地床炉で平面は不整な梢円形である。炉の南西側はピットに壊されているが、断面は浅い皿状を呈していたと考えられる。10cmほどの掘り込みが確認された。

出土遺物 土器出土、石器 (磨製石斧1、磨石類1、不定形石器1)

その他 整理中に認定した住居跡である。

SI1263A (図版28、写真343)

位置 集落跡西側のL5・6に位置し、遺構密集域の外縁にあたる。SB1262Aの西側と重複している。

平面形 柱穴配置から円または梢円形と推定される。

規模 柱穴間距離でP2601A～P2577Aが \varnothing 3.2m、P1261A～P2544Aが \varnothing 3.6mを計る。

柱穴 6本で2つの焼土を軸に、弧状に並ぶ片側3本ずつが対称する。規模は上端径が42～74cm、深度が25～42cmでやや不揃いである。

炉 焼土1367A、焼土1304Aという地床炉2基が検出された。焼土1367Aは10cmほど掘り込まれており、断面は浅い皿状を呈する。1・2層は被熱が大きいため、火床はこの上面にあったと考えられる。6層はP1297Aの覆土で、焼土より新しい。焼土1304Aの断面は浅い皿状で、8cmほど掘り込まれている。1層は被熱が大きく、この上面が火床であったと考えられる。

出土遺物 土器(54～58)、石器(打製石斧1、不定形石器1)

時期 中期中葉①

その他 出土土器から、重複するSB1262Aより本住居跡の方が新しい。整理中に認定した住居跡である。

SI3166A (図版29、写真344・345)

位置 集落跡西側のL6に位置し、遺構密集域にあたる。SB1262Aと重複し、SI3169Aの南西側に接している。

平面形 柱穴配置から梢円形と推定される。

規模 短軸と推定されるP2773A～P2681Aは、柱穴間距離で2.4mを計るが、長軸は西側の柱穴が欠けているため不明である。

柱穴 4本で北側に2本、南側に2本が並ぶが、西側の柱穴は検出されなかった。規模は上端径が46～96cm、深度が29～42cmである。

炉 地床炉で平面は半環状を呈する。P3205Aと後世の2つのピットに切られており、南西側の一部のみ残存している。3・5層は後世の掘り込み、4・6・7・8層はP3205Aの覆土である。

出土遺物 土器出土

その他 SB1262Aの柱穴 (P3205A)が、本住居跡の炉跡を切っているため、SB1262Aの方が新しい。整理中に認定した住居跡である。

3 集落跡1の調査

SI1602A (図版30, 写真345)

位置 集落跡南東側のL12・13に位置し、遺構密集域にあたる。本住居跡より東側では大規模な擾乱が入っており、遺構の広がりが不明である。

平面形 柱穴配置と床面の残存範囲から、楕円形と推定される。

規模 長軸6.5~7.0m、短軸が5.5m程度と推定される。

壁 柱穴の東側で、東西方向の壁が約2mにわたって検出されたが、柱穴の内側をまわると推定されるので、テラス状の施設の壁であることも考えられる。地山に5cmほど掘り込まれている。

柱穴 8本で東側では検出されなかったが、2本組が4単位検出された。規模は上端径が41~51cm、深度が12~43cmである。P3063Aで磨石が立った状態で出土した。

炉 地床炉で平面は不定形である。断面は浅い皿状で、4cmほどの掘り込みをもつ。

床 プラン内に5.7×4.4mの範囲で硬化している部分が検出され、このレベルに床面があったものと考えられる。

出土遺物 土器(59~76)、石器(両面加工石器1、打製石斧1、磨石類4、砥石2、両極石器1、不定形石器5、石核1)

時期 中期前葉③

その他 調査時に確認された住居跡である。

SI3168A (図版30, 写真346)

位置 集落跡の広場西側のK7・8、L7に位置し、遺構密集域から広場内部に入ったところにあたる。SI2691Aと重複する。

平面形 柱穴配置から楕円形と推定される。

規模 柱穴間距離で長軸(P2687A~P2715A)が5.8m、短軸(P2737A~P2908A)が4.1mを計る。

柱穴 12本で楕円形に並び、2~3本の組が5単位で構成されている。隣接する単位との距離は2m前後で、柱穴配置とともにSI751に類似している。規模は上端径が33~80cm、深度が25~49cmでやや不揃いである。

炉 地床炉で、平面は不整楕円形である。掘り込みは見られず、1層の直上に火床があったと考えられる。2・3層は被熱した地山である。P2725Aは焼土より古い。

出土遺物 土器(77)、石器(磨石類1、石皿1、不定形石器2)

時期 中期前葉③?

その他 本住居跡の炉がSI2691Aの柱穴(P2725A)の上に構築されているため、本住居跡の方が新しい。整理中に認定した住居跡である。

SI1771A (図版31, 写真346・347)

位置 集落跡南東側のK12・13、L12・13に位置する。遺構密集域にあたり、SB3167Aと重複する。

平面形 北側に1/2ほど残存する掘り込みから、円形と推定される。図版中で南側の破線部分は、残存する掘り込みと床面からプランを推定したものである。

規模 掘り込みと床面の残存から、径7m程度と推定される。

壁 プラン北半で検出され、半円形に巡る。地山から5~10cmほど掘り込まれている。北~東側にかけては柱穴と約1.2m離れている。

- 柱穴** 6本で半格円形に並ぶが、柱間は不揃いである。規模は上端径が45~56cm、深度が39~64cmで比較的大きなもので掘っている。
- 炉** 地床炉で半環状の焼土ブロックが残存する。掘り込みは見られず、床面とはほぼ同じレベルで検出された。南西側をSB3167Aの柱穴(P3060A)に壊されている。
- 床** 住居跡の南側は、後世の擾乱により検出できなかったが、北側では固い床面が検出された。
- 覆土** 基本層序のⅢ層の下部から掘り込まれており、暗褐色土を基調とする。
- 出土遺物** 土器(78~82)、土製品(1613)、石器(打製石斧1、磨製石斧1、磨石類3、両極石器1、不定形石器5)
- 時期** 中期前業②
- その他** SB3167Aの柱穴(P3060A)が、本住居跡の炉の一部を壊しているためSB3167Aの方が新しい。調査時に確認された住居跡である。

SI2691A (図版32、写真347)

- 位置** 集落跡の広場西側のK7・8に位置し、遺構密集域から広場内部に入ったところにあたる。SI3168Aと重複する。
- 平面形** 掘り込みが約3/4ほど検出され、精円形と推定される。
- 規模** 検出された掘り込みから長軸6.2m、短軸5.5m程度と推定される。
- 壁** 住居跡プランの約3/4ほど検出された。立ち上がりは明確で、地山に5~6cm掘り込まれている。南西側は明確な立ち上がりが認められなかったが、わずかに床面の傾斜が認められたため、図版にその部分を破線で示した。
- 柱穴** 12本でP2595A以外は壁のやや内側で、掘り込みプランと同じ形に並ぶ。規模は上端径が32~75cm、深度が26~40cmである。
- 炉** 焼土2790A、焼土2791A、焼土2792Aという3つの地床炉を検出した。焼土2790Aは4つの小ピットに切られており、平面は不定形な焼土ブロックである。4cmほどの掘り込みをもつが、1層は被熱が大きく、この上面に火床があったと考えられる。5層は焼土を切るピットの覆土である。焼土2791Aは平面が半環状で、断面は浅い皿状を呈する。7cmほどの掘り込みをもち、3・4層を覆土にもつピットの上面につくられている。焼土2792Aは平面が半環状で、断面は浅い皿状を呈する。7cmほどの掘り込みをもち、地山も被熱している。焼土ブロックはしっかりとおり、この上面に火床があったと考えられる。
- 床** プラン内で固い床面が検出された。
- 覆土** 覆土は暗褐色を呈し、締まりが強い。1~2mmの炭化物を少量含む。
- 出土遺物** 土器(83~85)、石器(打製石斧2、磨石類6、不定形石器2)
- その他** 重複するSI3168Aの炉跡の下から、本住居跡の柱穴(P2725A)を検出したため、SI3168Aの方が新しい。住居跡内のP2595Aで、2個の立石が接するようにして出土した。東側の石は確認面より約10cm埋めてあり、長さが45.9cm、幅が15.8cm、厚さが11cm、重さが9.2kgである。西側の石はほぼ確認面の高さに石底部があり、長さが28.2cm、幅が14cm、厚さが17.5cm、重さが11.5kgである。どちらも石材は安山岩である。掘り方の平面は円形で、断面はくさび形を呈する。覆土は暗褐色を呈し、締まりが強い。調査時に確認された住居跡である。

3 集落跡1の調査

SI1611A (図版33, 写真348)

- 位置 集落跡南東部のK11に位置する。遺構密集域の内縁にあたり、SB3161Aと重複する。
- 平面形 挖り込みと柱穴配置から梢円形と推定される。
- 規模 床面の残存範囲から、長軸が6.5m、短軸が5.5m程度と推定される。
- 壁 東側で5.7mにわたって検出された。地山面より6~18cmほど掘り込まれている。やや不整だが弧状に巡り、立ち上がりも明確である。
- 柱穴 8本で床面プランの内側にはば配置され、梢円形に並ぶ。西側で柱穴が途切れるが、これは後世の石組によって壊された可能性が高い。規模は上端径が28~58cm、深度が15~22cmである。
- 炉 焼土1607A、焼土1608Aという地床炉が2基検出された。焼土1607Aは木の根跡と思われる落ち込みの上につくられている。被熱の状況から、火床は3層の上面にあったと考えられる。焼土1608Aも木の根跡と思われる落ち込みの上につくられており、地山への被熱が見られる。
- 床 壁の内側に6.3×5.3mの範囲で検出した。ほぼ住居跡のプランを示すと思われるが、西側は石組によって壊された可能性が高い。
- 出土遺物 土器(86~89)、石器(打製石斧1、擦器類1、磨石類4、砥石1)
- 時期 中期前業③
- その他 重複するSB3161Aの炉跡が壊されておらず、またレベルが高いためSB3161Aの方が新しい。
調査時に確認された住居跡である。

SI1847A (図版34, 写真349)

- 位置 集落跡南東側のK12に位置する。遺構密集域にあり、SB1848Aの南側とSB3167Aの北側に重複する。
- 平面形 円形と推定される。
- 規模 柱穴間距離でP1887A~P3085Aが4.4m、P1987A~P3055Aが4.3mを計る。
- 壁 南西側で5.7mにわたって検出された。地山に5~10cmほど掘り込まれている。
- 柱穴 7本が円形に並び、北側を除いて2本組が3単位ある。規模は上端径が54~64cm、深度が43~66cmで安定している。
- 炉 地床炉で炉はSK1861Aの真上にあり、埋没途中のくぼみを利用したと考えられる。平面は1.5×1.0mの不定形に焼土が分布し、断面は浅い皿状を呈する。中央部が径65cm、深さ15cmほどくぼんでいる。くぼみの底面から周辺までよく赤変し、地山への被熱も見られる。7・9層はSK1861Aの覆土である。
- 覆土 暗褐色を呈し、締まりが強い。地土土ブロックを全体に含み、上部に炭化物を少量含む。
- 出土遺物 土器(90~95)、石器(板状石器2、磨製石斧3、擦器類1、磨石類1、砥石2、不定形石器6、石核1)
- その他 調査時に認定された住居跡である。

SI3155A (図版33, 写真348)

- 位置 集落跡西側の最も外縁のJ3・4に位置する。この西約5mのところから捨て場Aが形成されている。
- 平面形 柱穴配置から梢円形と推定される。

- 規 模 柱穴間距離で長軸 (P1128A～P1136A) が 4.6m、短軸 (P1138A～P1132A) が 3.4m を計る。
- 柱 穴 7 本で不整な楕円形に並ぶ。規模は上端径が 38～94cm、深度が 9～39cm で不揃いである。
- 炉 地床炉で、木の根跡とみられる落ち込みの上につくられており、3～6 層は落ち込みの覆土と考えられる。
- 出土遺物 土器出土
- その他 整理中に認定した住居跡である。

SI13154 A (図版34, 写真349・350)

- 位 置 集落跡西側外縁部の J4・5 に位置する。
- 平面形 不整な楕円形と推定される。
- 規 模 柱穴間距離 (P1165A～P2731A) で 4.2m である。
- 柱 穴 6 本で半円状に並ぶ。西側では純文時代のピットが少なく、同規模のものが検出されなかつた。規模は上端径が 42～82cm、深度が 33～46cm である。
- 炉 地床炉でどの柱穴からもほぼ等距離に位置する。一部を後世の攪乱によって破壊されているが、保存状況は良好である。平面は径 35cm のドーナツ状を呈し、8cm ほど掘り込まれている。断面は皿状で、中央は径 20cm、深さ 8cm ほどくぼみ、底面も被熱している。焼土の状況から、火床と考えられる。
- 出土遺物 土器 (96, 97)、石器 (板状石器 1, 磨石類 1, 不定形石器 2)
- 時 期 中期中葉①
- その他の 整理中に認定した住居跡である。

SI13164 A (図版35, 写真350)

- 位 置 集落跡西側の J4・5, K5 に位置する。遺構密集域にあたり、SB3165A の北側と重複する。
- 平面形 柱穴配置から楕円形と推定される。
- 規 模 柱穴間距離で長軸 (P2695A～P1324A) が 4.9m、短軸 (P2754A～P1307A) が 3.6m を計る。
- 柱 穴 11 本で略楕円形に並ぶ。長軸上の南東側でやや柱間が開く。規模は上端径が 38～67cm、深度が 20～48cm でやや不揃いである。
- 炉 焼土 1320A、焼土 1334A という地床炉 2 基が検出された。焼土 1320A は木の根の混入による搅乱を受けているが、14cm の掘り込みをもち、断面は浅い皿状を呈する。2 層は被熱した地山である。焼土 1334A の平面は半環状を呈し、火床と思われる焼土ブロックを中心検出された。7cm の掘り込みをもち、断面は深皿状を呈していたと考えられるが、南側を搅乱により切られていた。焼土ブロックの下から検出されたピットは、炉に伴うものではないと考えられる。
- 出土遺物 土器 (98～100)、石器 (磨石類 2, 砥石 1, 不定形石器 2)
- 時 期 中期前葉？
- その他の 整理中に認定した住居跡である。

SI1892 A (図版35, 写真349)

- 位 置 集落跡東側の J12・13, K12・13 に位置する。遺構密集域にあたり、SB1848A と重複し、SI1895A

3 集落跡1の調査

の西側と隣接している。(SI1895Aとは重複している可能性が高い。)

平面形 挖り込みと柱穴配置から隅丸長方形もしくは、不整な楕円形と推定される。

規模 検出された壁から長軸が4.4m、短軸が3.6mと推定される。

壁 南西側を除き、地山に15cmほど掘り込まれている。北～東側は隅丸のコーナーをもって直線的に伸びるが、西側は不整である。

柱穴 6本で北東側と南西側に3本ずつ不規則に並ぶ。規模は上端径が32～54cm、深度が17～28cmである。

炉 地床炉で、8cmほどの掘り込みをもち、断面は浅い皿状を呈する。一部で地山への被熱が見られる。P3103Aは炉よりも古い。

出土遺物 土器(101～110)、石器(三脚石器2、板状石器2、塵器類1、磨石類2、砥石1、不定形石器5)

時期 中期中葉③

その他 土層の観察から、重複するSB1848Aより本住居跡の方が新しい。調査時に確認された住居跡である。

SI3170A (図版36、写真350・351)

位置 集落跡東側のJ13に位置し、遺構密集域にあたる。

平面形 円形もしくは楕円形と推定される。

規模 柱穴間距離でP1923A～P731Bが30m、P1943A～P1941Aが27mである。

柱穴 5本で北西側に3本、南東側に2本が並ぶ。全体として方形もしくは台形の配置である。規模は上端径が43～70cm、深度が28～44cmである。P731Bは発掘区外へ延びるため、約1/2しか検出できなかった。図版の破線部分は推定である。

炉 地床炉で掘り込みは不明である。確認面より5cmほど上で検出された。2層は被熱した地山で、火床はこの上面にあったと考えられる。

出土遺物 土器(111)、石器(打製石斧1、磨石類1)

時期 中期中葉①

その他 出土土器(111)内部の埋土については、この土器の性格を明らかにするために化学的な分析を行ったが、際だった特色は表れなかった。整理中に認定した住居跡である。

SI1893A (図版36、写真351)

位置 集落跡東側のJ13・14に位置し、遺構密集域の外縁にあたる。

平面形 楕円形である。

規模 検出された壁から長軸が4.7m、短軸は3.8mである。

壁 北～南東側にかけて、地山に約10cm掘り込まれている。ほぼ垂直で明確な段差をもつてゐる。また、北西～南側では明確な段差が認められず、周辺より1～2cmの落ち込みを確認したのみであった。

柱穴 6本でプランのほぼ長軸上に2本組の柱穴が相対し、これと直行する軸上で1本ずつが相対する。規模は上端径が32～44cm、深度が22～33cmで安定している。

炉 地床炉で、平面は48×40cmの楕円形を呈する。外縁部に3つの焼土ブロックが認められる。

断面は皿状で、7~8cm程度の掘り込みを伴う。

覆 土 暗褐色を呈し、地山土粒・ブロックが少量含まれる。

出土遺物 土器(115~123)、石器(石斧1.打製石斧1.磨石類3.砥石1.不定形石器5.台石1)

時 期 中期中葉①

その他の 調査時に確認された住居跡である。

SI1895A (図版36, 写真352)

位 置 環状集落東側のJ13に位置する。遺構密集域にあたり、SI1892Aの東側と隣接している。
(SI1892Aとは重複している可能性が高い。)

平面形 不明である。

規 模 検出された床面は2.7×2.0mである。

炉 地床炉で、ほぼ床面と同じレベルで検出された。断面は浅い皿状を呈し、5cmほどの掘り込みが確認された。

床 固い床面が、炉の東側で2.7×2.0mの範囲にわたって検出された。

出土遺物 土器(112~114)、石器(砥石1.不定形石器2.石核1)

その他の 炉と床面の検出により、調査時に確認された住居跡である。住居跡に伴うと考えられる柱穴は、検出できなかった。

SI1896A (図版37, 写真352)

位 置 集落跡東側のJ14に位置し、遺構密集域外縁にあたる。

平面形 北半で検出された掘り込みから、隅丸方形もしくは隅丸長方形と考えられる。

規 模 北西から南東の縁の間で5.0m、北縁から南側の壌された部分までは3.8mである。

壁 北側で検出され、地山に5cm程度掘り込まれている。2つの隅丸のコーナーをもち、北側と東側は直線的に伸びている。

柱 穴 規模と配置から3本を柱穴としたが、全体の配置は不明である。

覆 土 暗褐色を呈し、炭化粒を含む。全体に地山土ブロックを多量に含む。

出土遺物 土器(124~133)、石器(板状石器1.砾器類1.磨石類2.砥石1.不定形石器5)

時 期 中期前葉③

その他の 南側は後世の溝と歯で壌されており、炉跡、柱穴の一部が欠けているが、掘り込みが検出されたことから、調査時に住居跡と確認された。

SI40B (図版37, 写真353)

位 置 集落跡東側のII4, J14に位置し、遺構密集域の外縁にあたる。

平面形 楕円形と推定される。

規 模 西側のみの検出だが、残存する床面と柱穴間距離から5.5×4.5m程度と推定される。

柱 穴 7本で、炉を中心とする楕円形の西側に弧状に並ぶ。柱間は70~120cmを計る。規模は上端径が29~53cm、深度は30~41cmである。P834B・835B・836Bは前回調査済みのものを再発掘した。

3 集落跡1の調査

炉	地床炉で、北と東側の一部が搅乱を受け、平面は不整なドーナツ状を呈する。中央は径25cm、深さ10cmほど掘り込まれているが、掘り込みの底面に被熱は見られない。床面と同じレベルで検出され、この面が火床と考えられる。
床	柱穴配置とはほぼ同様に、固い床面が検出された。
出土遺物	土器（134～149）、石器（石鼎3.石匙1.板状石器1.打製石斧4.不定形石器12.石核1）
時期	中期中葉②
その他	東側は、側道・町道工事により破壊されている。整理中に認定した住居跡である。

SB768 (図版38、写真353・354)

位置	集落跡南西側のやや外側のN7、O7に位置し、周囲の遺構密度は低い。
平面形	長方形と推定される。
規模	柱穴間距離で長軸（P386～P530）が4.3m、短軸（P386～P388）が1.7mを計る。
柱穴	7本で北側、南側それぞれ3本ずつが相対して並ぶが、真中の1本はやや外側にとび出し、柱間も不揃いである。規模は上端径が21～42cm、深度が27～39cmである。P387は棟持柱の柱穴と考えられるが、相対する柱穴は検出できなかった。
炉	地床炉1基がほぼ中央に位置する。掘り込みは不明である。35×20cmの範囲に焼土ブロックが点在するが、炉は搅乱により大半が壊されている。
出土遺物	土器（150～154）、土製品（1530.1619）
時期	中期中葉①
その他	整理中に認定した住居跡である。

SB54 (図版38、写真354)

位置	集落跡南西側外縁のN4に位置する。
平面形	長方形と推定される。
規模	柱穴間距離で長軸（P53～P40）が5.6m、短軸（P53～P43）が1.3mを計る。
柱穴	6本で長軸に3本が相対する配列をとるが、短軸長が他の長方形住居跡に比べて極端に短い。規模は上端径が30～39cm、深度が37～45cmと安定している。
出土遺物	土器出土、石器（不定形石器1）
その他	炉跡は検出されなかった。調査時に確認された住居跡である。

SB767 (図版39、写真354)

位置	集落跡南西側のM7、N7に位置する。遺構密集域にあたり、SB756、SI473と重複する。
平面形	長方形と推定される。
規模	柱穴間距離で長軸（P553～P521）が7.1m、短軸（P553～P551）が2.5mを計る。
柱穴	8本で長軸に4本が相対する配列をとる。規模は上端径が28～50cm、深度が32～65cmである。ただし、深度は地山地形の低い南側の柱穴ほど浅くなる傾向がある。P699の底部から、磨石が側面を上にして出土した。
炉	地床炉1基が南側のP715寄りに位置する。平面は、火床と考えられる焼土ブロックが不整構

円形を呈する。断面は浅い皿状で、7cmほどの掘り込みをもつが、下部への被熱は見られない。

出土遺物 土器出土、石器（磨石類1）

その他 整理中に認定した住居跡である。

SB756 (図版39, 写真355)

位置 集落跡南西側のM7, N7に位置する。遺構密集域にあたり、SB767, SI473と重複する。

平面形 長方形と推定される。

規模 柱穴間距離で長軸 (P484～P690) が5.2m、短軸 (P484～P476) が2.5mを計る。

柱穴 6本で長軸に3本が相対する配列をとる。規模は上端径が31～60cm、深度が32～64cmである。

炉 地床炉1基が中央に位置する。北側にはぼドーナツ状の焼土が、南側に埋壺が配置される。断面は皿状を呈し、15cmほど掘り込まれている。埋壺の掘り方の平面は梢円形で、覆土は焼土を多量に含む。

出土遺物 土器 (155～157)、土製品 (1525, 1614)、石器 (打製石斧2, 磨石類1)

時期 中期前葉②

その他 整理中に認定した住居跡である。

SB3159A (図版40, 写真356)

位置 集落跡南側のM9, N9に位置する。遺構密集域にあたり、SB130Aの東側とSI520Aの北東側に重複する。

平面形 長方形と推定される。

規模 柱穴間距離で長軸 (P3163A～P135A) が6.1m、短軸 (P149A～P135A) が2.5mを計る。

柱穴 6本で長軸に3本が相対する配列をとる。規模は上端径が37～88cm、深度は18～45cmでやや不揃いである。

炉 地床炉1基が南側の中央に位置し、平面は不整な梢円形を呈する。断面は浅い皿状で、10cmほどの掘り込みが認められる。確認面より12cm上で検出された。

出土遺物 土器 (158, 159)、石器 (磨石類1)

時期 中期前葉②

その他 出土土器から、重複するSB130Aの方が本住居跡より新しい。整理中に認定された住居跡である。

SB760 (図版40, 写真357)

位置 集落跡南西側の内縁部のM7に位置し、遺構密集域にあたる。

平面形 長方形と推定される。

規模 柱穴間距離で長軸 (P597～P569) が4.5m、短軸 (P597～P586) が2.9mを計る。

柱穴 6本で長軸に3本が相対する配列をとる。規模は上端径が35～45cm、深度が43～56cmで安定している。

出土遺物 土器出土、石器 (打製石斧1)

その他 炉跡は検出されなかった。整理中に認定した住居跡である。

3 集落跡1の調査

SB44 (図版41, 写真356)

位置 集落跡西側外縁のM3・4に位置し、周辺には他に遺構がみられない。

平面形 長方形と推定される。

規模 柱穴間距離で長軸(P32～P24)が4.7m、短軸(P52～P24)が3.5mを計る。

柱穴 9本で長軸に4本が相対する配列をとる。P26とP33はやや外側にとび出し、柱間も不揃いである。規模は上端径が34～67cm、深度が15～38cmである。

出土遺物 石器(磨石類1)

その他 炉跡は検出されなかった。整理中に認定した住居跡である。

SB752 (図版41, 写真357)

位置 集落跡西側外縁部のM4・5に位置する。

平面形 方形と推定される。

規模 柱穴間距離でP45～P681が2.2m、P46～P45が2.2mを計る。

柱穴 6本で3本ずつが相対する配列をとり、P688はやや外側にとび出している。規模は上端径が27～55cm、深度が33～69cmである。

出土遺物 土器(160, 161)、石器(不定形石器1)

時期 中期前葉③

その他 炉跡は検出されなかった。整理中に認定した住居跡である。

SB753 (図版42, 写真357)

位置 集落跡西側のM5・6に位置する。

平面形 長方形と推定される。

規模 柱穴間距離で長軸(P138～P356)が6.8m、短軸(P137～P138)が2.4mを計る。

柱穴 8本で長軸に4本が相対する配列をとる。規模は上端径が28～52cm、深度が47～55cmである。P137は根固め石をもっている。

出土遺物 土器(162)、石器(礫器類1)

時期 中期前葉③

その他 上部は耕作のため削平を受けている。炉跡は検出されなかった。整理中に認定した住居跡である。

SB754 (図版42, 写真355)

位置 集落跡南西のM6・7、N7に位置し、遺構密集域にあたる。

平面形 長方形と推定される。

規模 柱穴間距離で長軸(P308～P680)が5.1m、短軸(P318～P308)が2.5mを計る。

柱穴 6本で長軸に3本が相対する配列をとる。規模は上端径が41～74cm、深度が54～67cmである。P362は根固め石をもっている。

炉 地床炉1基が北西側中央に位置する。火床と考えられる焼土ブロックが、不整な楕円形を呈し、中央に径5cm、深さ17cmのくぼみが認められる。断面は浅い皿状で、8cmほど掘り込まれ

ている。確認面より 17cm 上で検出された。

出土遺物 土器 (163)、石器 (砾石 1, 石皿 1, 不定形石器 1, 石核 1)

時期 中期前業(③)

その他 整理中に認定した住居跡である。

SB3156 A (図版 43・44, 写真 358)

位置 集落跡南側の L8, M8 に位置する。遺構密集域の内線にあたり、SK434A と重複する。

平面形 長方形と推定される。

規模 柱穴間距離で長軸 (P3203A～P211A) が 11.8m、短軸 (P1493A～P3203A) が 4.0m を計る。

柱穴 8 本で長軸に 4 本が相対する配列をとると推定されるが、1 本は土坑 (SK254A) に埋されている可能性がある。規模は上端径が 45～122cm、深度が 33～50cm で不揃いである。

炉 焼土 1295A、焼土 1291A、焼土 420A、焼土 454A という地床炉 4 基が検出された。焼土 1295A は北側 P1493A 寄りに位置し、平面は不整な楕円形を呈する。断面は浅い皿状で、8cm ほど掘り込まれている。1・2 層は火床と考えられ、その下部の土も被熱している。4・6 層は、攪乱である。焼土 1291A は、焼土 1295A の 1m ほど南に位置する。焼土の下から 2 基のビットが検出されたが、どちらも炉には伴わない。断面は浅い皿状で西側に傾斜しており、11cm ほど掘り込まれている。1 層が火床の一部と考えられ、地山まで被熱している。焼土 420A は中央やや北寄りに位置し、SK434A の埋没途中のくぼみを利用してつくられている。中央に確認面から 30cm ほどの掘り込みをもち、埋設土器 (第 48 図) が出土している。この土器は深鉢で、器面全体に浅い LR の繩文が施されている。石英粒を多く含み、外面は橙色で、内面は明褐色を呈する。また内面は二次焼成を受けており、オコゲ・ススが付着している。遺存は 30% である。3 層は被熱して焼土化していることから、火床は 3 层上面にあり、前述の埋設土器を埋甕として伴っていたと考えられる。焼土 454A はもっとも南側に位置し、楕円形に焼土が分布している。断面は浅い皿状で 5cm ほど掘り込まれている。本住居跡のプラン内では、他にも多くの焼土が検出され、本住居跡に関連する可能性がある。

出土遺物 土器 (164)、石器 (石皿 1)

その他 重複する SK434A は、本住居跡の炉が SK434A の埋没後につくられているため、本住居跡の方が新しい。整理中に認定した住居跡である。

SB3158 A (図版 44, 写真 359)

位置 集落跡南側内線の L9・10, M9・10 に位置する。遺構密集域にあたり、SB130A に接する。

平面形 長方形と推定される。

規模 柱穴間距離で長軸 (P1799A～P131A) が 6.4m、短軸 (P131A～P955A) が 3.1m を計る。

柱穴 6 本で長軸に 3 本が相対する配列をとる。規模は上端径が 46～70cm、深度が 23～53cm である。P110A、P1001A は根固め石をもっている。



第 48 図 SB3156A (焼土 420A)
埋甕

3 集落跡1の調査

- 炉 焼土 1792A、焼土 561A という地床炉2基が長軸上で検出された。北側の焼土 1792A は、下から検出されたピットの埋没後につくられたと考えられる。8cm ほど掘り込みをもち、厚さ 5cm の焼土ブロックが堆積するが、炉の大半は壊されている。南側の焼土 561A は、70 × 65cm の範囲に不定形な焼土ブロックが認められる。断面は浅い皿状を呈し、10cm ほど掘り込まれている。1層は上部ほど被熱の度合いが大きいため、火床は1層の上面にあったと考えられる。
- 出土遺物 土器 (165~170)、石器 (三脚石器3、打製石斧1、穀器類1、磨石類2、不定形石器1)
- 時期 中期中葉②
- その他 整理中に認定された住居跡である。

SB130 A (図版45, 写真359・360)

- 位置 集落跡南側の M9、N9 に位置する。遺構密集域にあたり、SB3159A と重複する。
- 平面形 長方形である。
- 規模 長軸 10m、短軸 4.7m である。
- 壁 立ち上がりは緩やかで明確ではないが、プラン全体で確認された。
- 柱穴 9本を検出した。主柱穴6本は、長軸に3本が相対する配列をとる。規模は上端径が 56~110cm、深度が 43~55cm である。P525A、P550A、P527A は根固め石をもっている。棟持柱と考えられる3本は、ほぼ長軸上に配置される。規模は上端径が 40~60cm、深度は 25~55cm である。P554A は根固め石をもっている。
- 炉 焼土 517A、焼土 538A という2つの地床炉が検出された。北側の焼土 517A は、長軸よりやや東にずれて位置し、100 × 60cm の範囲全面が焼土ブロック化している。断面は皿状を呈し、10cm ほど掘り込まれている。火床は1層の上面にあったと考えられ、2層の被熱も明らかである。南側の焼土 538A は長軸上に位置し、100 × 55cm の範囲で不整梢円形に焼土が分布している。断面は皿状を呈し、15cm ほど掘り込まれている。
- 覆土 上部には黒褐色土、下部には褐~暗褐色土があり、遺物は特に上部で集中して出土した。
- 出土遺物 土器 (171~174)、土製品 (1702)、石器 (板状石器2、打製石斧7、磨製石斧2、磨石類6、砥石1、石皿3、不定形石器2)
- 時期 中期中葉③
- その他 出土土器から、重複する SB3159A より本住居跡の方が新しい。調査時に確認された住居跡である。

SB3157 A (図版46, 写真360)

- 位置 集落跡南側の M10、N10 に位置する。遺構密集域のはずれにあたり、これより東側は、遺構密度が低い。SI51A と重複する。
- 平面形 長方形と推定される。
- 規模 柱穴間距離で長軸 (P957A~P74A) が 6.0m、短軸 (P922A~P74A) が 2.3m を計る。
- 柱穴 6本で、長軸に3本が相対する配列をとると推定されるが、西側の真中の柱穴は検出されなかった。規模は上端径が 42~76cm、深度が 27~40cm である。
- 炉 焼土 71A、焼土 72A という2つの地床炉を検出した。長軸のほぼ中央にある焼土 71A は、51

× 46cm の範囲に焼土粒の分布が確認された。断面は深皿状で、12cm ほどの掘り込みをもち、埋甕を伴っている。焼土は暗褐色土に混入した粒が主体で、埋甕の周囲でやや多く検出された。南側の焼土 72A は、木の根跡とみられる落ち込みの上につくられている。炉の南側の詳細は不明だが、北側は被熱した様の下に、焼土粒を含む暗褐色土が堆積している。

出土遺物 土器 (190a, 190b)

時期 中期前葉③

その他 重複する SI51A の覆土を、本住居跡の柱穴 (P957A) が切っているため、本住居跡の方が新しい。整理中に認定した住居跡である。

SB1262 A (図版 47, 写真 361)

位置 集落跡西側の L5・6, K6 に位置する。遺構密集域にあたり、SI1263A, SI3166A, SI3169A と重複している。

平面形 長方形と推定される。

規模 柱穴間距離で長軸 (P2540A～P2676A) が 10m、短軸 (P2775A～P2540A) が 3.3m を計る。

柱穴 8 本で長軸に 4 本が相対する配列をとる。規模は上端径が 41～102cm、深度が 41～66cm でやや不揃いである。

炉 焼土 1265A、焼土 1425A、焼土 2503A という地床炉 3 基が検出された。焼土 1265A は長軸上北東寄りに位置し、焼土粒・焼土ブロックが円形を呈している。断面は深皿状で、10cm ほど掘り込まれている。1 層は火床と考えられる焼土で、3 層の上半は被熱による赤変がみられる。5 層は焼土を切るビットの覆土である。焼土 1425A は中央やや南東よりに位置し、断面は浅い皿状を呈していたと考えられる。炉に伴う掘り込みは 9cm ほどで、3・4 層は焼土を切る落ち込みの覆土である。焼土 2503A は、中央南西よりに位置している。1 層は被熱した地山であり、火床はこの上面にあったと考えられる。炉の一部は、後世の集石により壊されている。SK1294A は焼土 2503A より古い。隣接する SK1292A は、17 層の上面で焼土ブロックを検出した。焼土ブロックは半環状を呈し、中央に円形の掘り込みをもつ。掘り込みの底部も被熱しており、火床は 17 層の上面と考えられる。埋没途中の土坑を炉に利用したと考えられるが、本住居跡との関連は不明である。

出土遺物 土器 (175～189)、石器 (三脚石器 2、板状石器 2、打製石斧 1、磨製石斧 1、磨石類 9、砥石 1、不定形石器 10、石核 2)

時期 中期前葉③

その他 重複する SI3166A の炉を、本住居跡の柱穴 (P3205A) が切っているため、本住居跡の方が新しい。整理中に認定した住居跡である。

SB3165 A (図版 48, 写真 362・363)

位置 集落跡西側の J5, K4・5 に位置する。遺構密集域にあたり、SB3153A の北側と SI3164A の南側と重複する。

平面形 長方形と推定される。

規模 柱穴間距離で長軸 (P2672A～P1399A) が 9.4m、短軸 (P2740A～P2672A) が 2.5m を計る。

3 集落跡1の調査

柱穴 8本で、長軸に4本が相対する配列をとると推定されるが、北東隅の1本は後世の溝に切られ、検出できなかった。規模は上端径が42~73cm、深度が28~48cmである。P2672Aは2つのビットの複合と考えられ、SB3153Aの柱穴と重複する。

炉 焼土1382A、焼土1332A、焼土1403Aという地床炉3基が検出された。西側長軸上の焼土1382Aは、4cmほどの掘り込みをもっている。地山への被熱がみられ、火床は1・2層の上面と考えられる。焼土1332Aは、中央やや西よりに位置する。ほぼドーナツ状の焼土ブロックが検出され、4cmほどの掘り込みをもつ。地山への被熱がみられ、火床は1層上面と考えられる。焼土1403Aは長軸からはずれ、P2566Aの近くで検出された。南側で検出されたビットの上につくられ、断面は浅い皿状で、10cmほど掘り込まれている。地山への被熱がみられ、火床は3・4層の上面と考えられる。

出土遺物 土器(191~197, 580, 583~586)、石器(板状石器1、打製石斧1、礫器類1、磨石類5、砥石1)

時期 中期前業③

その他 住居跡内の浅い落ち込みの中で、一括土器1252A(580)を検出した。深鉢の胴部が倒立位で出土し、口縁部と底部が粘土帯の接合部から欠損している。このため本住居跡の埋甕、もしくは炉跡の埋甕炉の可能性もある。出土土器より、重複するSB3153Aの方が本住居跡よりも新しい。整理中に認定した住居跡である。

SB3153 A (図版49、写真361・362)

位置 集落跡西側のK4・5に位置する。遺構密集域にあたり、SB3165Aの南側と重複している。

平面形 長方形と推定される。

規模 柱穴間距離で長軸(P2743A~P2742A)が9.3m、短軸(P2672A~P2743A)が2.6mを計る。

柱穴 8本で長軸に4本が相対する配列をとるが、東側の2本は長軸、短軸とも柱間が開いている。規模は上端径が42~77cm、深度が34~53cmである。P2672AはSB3165Aの柱穴と重複している。

炉 焼土1231A、焼土2502Aという2基の地床炉を長軸上に検出した。西側の焼土1231Aは、15cmほどの掘り込みをもち、断面は浅い皿状を呈する。绳文時代のビットにより東側を切られているが、4層を中心で焼土が残存している。中央にある焼土2502Aは、記録がなく、詳細は不明である。

出土遺物 土器(198~205)、土製品(1532, 1623)、石器(板状石器1、打製石斧1、磨石類3、石皿1、両極石器1、不定形石器11、石核2)

時期 中期中業①

その他 出土土器より、重複するSB3165Aより本住居跡が新しい。整理中に認定した住居跡である。

SB1299 A (図版50、写真363)

位置 集落跡西側のK5・6, L5・6に位置する。遺構密集域にあたり、SB1262A、SI1263Aのそれぞれ北側に近接している。

平面形 長方形と推定される。

規模 柱穴間距離で長軸(P2573A~P2763A)が9.1m、短軸(P2763A~P1351A)が3.1mを計る。

柱穴 8本で長軸に4本が相対する配列をとると推定される。土層観察では確認できなかったが、1

本は土坑（SK2654A）と重複している可能性がある。規模は上端径が60～105cm、深度が54～82cmと大型である。P2573Aは柱痕をもっている。

出土遺物 土器（206～234）、土製品（1615、1714）、石器（板状石器1、打製石斧5、礪器類1、磨石類8、石皿2、不定形石器15、石核1）

時期 中期前葉③

その他 発掘時に柱穴を取り囲むかすかな落ち込みを検出したが、立ち上がりが不明確で、擾乱や重複が多く、その範囲を明確にすることが不可能だった。およその範囲は、図版中に破線で示した。炉跡は検出されなかった。調査時に確認された住居跡である。

SB3161A（図版52、写真364）

位置 集落跡南側のK11に位置する。遺構密集域の内線にあたり、SI1611Aと重複する。

平面形 長方形と推定される。

規模 柱穴間距離で長軸（P3206A～P1623A）が6.3m、短軸（P1766A～P1623A）が2.7mを計る。

柱穴 6本で、長軸に3本が相対する配置をとると推定されるが、北西隅の柱穴は検出できなかつた。また、南側中央の柱穴は、土坑（SK1614A）に埋されている可能性がある。規模は上端径が84～106cm、深度が56～74cmと大型なもので描っている。

炉 地床炉1基が中央やや東よりに位置する。20cmほどの掘り込みをもっているが、6・8層は被熱した焼土である。5層はSI1611Aの覆土である。土器（236）は、炉の検出時には確認されず、完掘時に確認されたものである。この土器は、8層中で底部のみが正立位で出土し、炉に伴う埋甕の可能性が高い。

出土遺物 土器（235～237b）、石器（打製石斧1、磨石類2、砥石1、不定形石器4、石核1）

時期 中期中葉①

その他 重複するSI1611Aに、本住居跡の炉跡が壊されておらず、また検出レベルも高いため、本住居跡の方が新しい。整理中に認定した住居跡である。

SB3167A（図版51、写真363・364）

位置 集落跡南東側のK12・13、L12・13に位置する。遺構密集域にあたり、SI1771A、SI1847Aと重複する。

平面形 長方形と推定される。

規模 柱穴間距離で長軸（P1782A～P1742A）が6.3m、短軸（P1856A～P1782A）が3.0mを計る。

柱穴 6本で長軸に3本が相対する配列をとる。規模は上端径が42～79cm、深度が46～62cmである。

出土遺物 土器（238～242）、石器（板状石器1、打製石斧1、不定形石器1）

時期 中期中葉①

その他 重複するSI1771Aの炉跡を、本住居跡の柱穴（P3060A）が切っているため、本住居跡の方が新しい。整理中に認定した住居跡である。

SB1848A（図版53、写真364）

位置 集落跡南東のK12・13に位置する。遺構密集域にあたり、SI1847A、SI1892Aと重複する。

3 集落跡1の調査

平面形	長方形と推定される。
規模	柱穴間距離で長軸 (P3069A～P1867A) が7.2m、短軸 (P3086A～P3069A) が2.5mを計る。検出された壁の一部から、全体の長軸は9m程度と推定される。
壁	東側に南北に伸びる長さ約11mの壁が検出されており、この一部が本住居跡に関わるものと考えられる。地山面に5cmほど掘り込まれている。
柱穴	8本で長軸に4本が相対する配列をとると推定されるが、北隅の柱穴はSK1973Aに重複すると考えられる。規模は上端径が51～87cm、深度が43～63cmである。東端の相対する2本の柱穴は、長軸の柱間を開いている。
炉	地床炉1基が長軸上東側で検出された。平面は帯状の焼土が2つ相対し、略環状を呈する。14cmの掘り込みをもち、断面は鉢状である。
覆土	暗褐色を呈し、地山土、炭化物を含む。
出土遺物	土器(243～249)、石器(三脚石器1、板状石器1、打製石斧1、磨製石斧1、磨石類4、両施石器2、不定形石器4)
時期	中期前葉②
その他	土層の観察から、重複するSI1892Aの方が新しい。調査時に確認された住居跡である。

住居跡 384A (焼土) (図版54、写真365)

位置	集落跡南東側のM12-21にあり、SI1602AとSI349Aにはさまれる位置にある。
炉	地床炉で、焼土は80×60cmの範囲に分布し、2つの焼土ブロックが認められる。18cmほどの掘り込みをもち、断面は皿状を呈する。遺構確認面の18cm上で検出されたが、火床は1層の上と考えられる。

住居跡 1290A (焼土) (図版54、写真365)

位置	集落跡西南側のL8-6に位置する。遺構密集域の内縁にあたり、SB3156Aの柱穴 (P3203A) と重複する。
炉	地床炉で、焼土は1×1mの範囲に分布している。擾乱や重複が多く炉の大半は壊されており、炉の形状等は不明である。8、10、11層はSB3156Aの柱穴 (P3203A) の覆土と考えられる。
その他	重複するSB3156Aの柱穴 (P3203A) よりも新しい。

住居跡 1198A (焼土) (図版54、写真365)

位置	集落跡西側のK4-1に位置し、遺構密集域にあたる。
炉	地床炉で、135×90cmの範囲に、いくつかの焼土ブロックが分布する。10cmほどの掘り込みをもち、断面は浅い皿状を呈する。焼土ブロックが良好に残存しており、下部への被熱も明らかである。火床は、この焼土ブロックの上に存在したと考えられる。
出土遺物	土器(455～459)、石器(打製石斧1、不定形石器2)
その他	周囲では多くのピットが検出されたが、多数の近世墓によって炉の南西側が擾乱を受けており、柱穴の特定が出来なかった。また、包含層中からも多量の一括土器が出土している。

住居跡 1381A (焼土) (写真 365)

- 位置 集落跡西側のK5-5に位置し、遺構密集域にあたる。
- 炉 地床炉で、焼土は $90 \times 60\text{cm}$ の範囲に分布し、特に中央部がよく焼けて不整なブロック状になっている。誤って完掘したため、炉の形状等は不明である。
- その他 周囲では多数のビットが検出されたが、柱穴の特定は出来なかった。また、包含層中から大量の一括土器が出土している。

住居跡 1989A (焼土) (図版 54, 写真 365)

- 位置 集落跡南東のK12-20に位置し、遺構密集域にあたる。
- 炉 地床炉で、 $90 \times 85\text{cm}$ の範囲に焼土粒が分布している。7cmほどの掘り込みをもつ。3層は木の根の搅乱と思われる。
- 出土遺物 土器 (460, 461)、石器 (石皿 1)
- 時期 中期中葉

住居跡 721B (焼土) (図版 54, 写真 390)

- 位置 集落跡東側のJ12-19に位置し、遺構密集域にあたる。
- 炉 地床炉で、焼土ブロック・焼土粒が $60 \times 37\text{cm}$ の範囲に分布している。上部は搅乱を受けており、掘り込みの存在は不明である。しかし、1層はほぼ全面が被熱しており、この上面に火床があったと考えられる。焼土の下に、3層を覆土とする上端径約20cmの小ビットを検出したが、覆土の上部も被熱しているため、焼土の方が新しい。

住居跡 1940A (焼土) (図版 54, 写真 365)

- 位置 集落跡東側のJ13-1に位置する。遺構密集域の外縁にあたり、SI1896A に接する。
- 炉 地床炉で、小ビットをもつ浅い落ち込みの上につくられている。焼土は $65 \times 60\text{cm}$ の範囲に分布し、一部はブロック状を呈する。

(2) 土 坑

フラスコ状土坑27基、フラスコ状以外の土坑160基の計187基が検出された。その分布は住居跡と同様、広場に面して環状を呈するが、中には分布の中心からはずれ、集落の内側や外縁部に位置するものも認められた。住居跡と重複しているものも多い。土層堆積状況は、基本的には自然堆積、人為堆積、自然堆積と人為堆積の両方によるものの3つに大別される。自然堆積では、黒色土～暗褐色土がレンズ状に堆積したり、暗褐色土が単層で堆積する場合が多く、人為堆積では、暗褐色土にブロック状の黄色土や大小の礫が混入する場合が目立つ。自然堆積と人為堆積の両方によるものはフラスコ状土坑に多くみられ、底や壁部に崩落土が堆積したり、大小の礫や地山で埋め戻しをしている場合が多い。

フラスコ状土坑は、底径によりⅠ～Ⅲ類に分類されるが、今回の調査ではⅠ類が17基、Ⅱ類が5基、Ⅲ類が3基検出された。検出数は、前回の調査(新潟県教育委員会1990b)の半分にすぎず、特に規模の大きなものが少なかった。土層堆積は、自然堆積と考えられるもの2基、人為堆積によると考えられるもの19基、自然堆積と人為堆積の両方によると考えられるもの6基である。SK1861AとSK2548Aは上部に厚く焼土が

堆積しており、炉跡などに再利用された可能性が考えられる。

フラスコ状以外の土坑は、平面形から円形・椭円形・不定形に分類され、円形のものが54基、椭円形のものが51基、不定形のものが55基検出された。土層堆積は、自然堆積と考えられるもの25基、人為堆積と考えられるもの53基、自然堆積と人為堆積の両方と考えられるもの4基を数える。

(3) 埋設土器

埋設土器は、住居跡の炉内に埋設されたものを除き、7基が検出された。集落跡の西～西南側に多く分布しているが、検出状況からそのすべては住居跡に伴わない単独の埋甕である可能性が強いと考えられる。

埋設土器 1232A (図版 70, 写真 385)

位 置 集落跡西側のL4-6に位置する。

埋設状況 土器は正位に直立しており、口縁部は欠損していた。底部は意図的に壊されていた。

埋設遺構 挖り方の平面形は円形で、断面からは土器埋設のための埋土がほとんど観察されないため、

土器はほとんど同規模の掘り方と考えられる。規模は上端が径35cm、底部は径25cmである。

深度は確認面から34cmを計る。

埋 土 土器内部の埋土は下半を黄褐色土で占めており、その上に焼土が認められた。上部の黒褐色土は、基本層序Ⅱa層と同質である。なお埋土については、この埋設土器の性格を明らかにするために化学的な分析を行ったが、リン酸の含量が著しく多いため、遺体埋納の可能性が大きいとの所見を得ている。

土 器 574

時 期 中期中葉②

その他 他の遺構との関係は不明である。

埋設土器 1251A (図版 70, 写真 385)

位 置 集落跡西側のL5-7に位置し、SI1263Aに近接する。

埋設状況 土器は正位に直立しており、口縁部は欠損していた。

埋設遺構 挖り方の平面形はほぼ円形で、西側がくさび形に掘り込まれている。規模は上端が径16cm、底部が径9cmである。深度は確認面から13cmを計る。

埋 土 土器内部の埋土は、1～2cmの焼土粒を多く含む暗褐色土で、土器片数点が出土している。なお埋土については、この土器の性格を明らかにするために化学的な分析を行ったが、リン酸の含量が著しく多いため、遺体埋納の可能性が大きいとの所見を得ている。

土 器 573

その他 他の遺構との関係は不明である。

埋設土器 1253A (図版 70, 写真 385)

位 置 集落跡西側のK5-17に位置し、SB3153A、SB3165Aと重複する。

埋設状況 土器は正位に直立しており、口縁部が欠損していた。

埋設遺構 挖り込みははっきりとは確認されなかった。

埋 土	土器内部の埋土は、2~4mmの炭化粒を含む暗褐色土で、地山粒を少量含む。
土 器	582
時 期	中期中業③
その他	SB3153A、SB3165Aのプラン内にあるが、出土土器からどちらの住居跡よりも新しい。

埋設土器 939A (図版70, 写真384)

位 置	集落跡南側のM10-9・10に位置する。SI51A、SB3157Aに近接する。
埋設状況	土器は、不定形で深さ14cmの落ち込み内に、つぶされた状態で埋設されていた。
埋設造構	埋設土器の北西側には大型の円窓が隣接し、その下にはピットが掘り込まれている。ピットの規模は上端径が32cmで、深度は確認面から42cmを計る。
土 器	575~579
時 期	中期前業③
その他	他の遺構との関係は不明である。

埋設土器 1254A (図版70, 写真386)

位 置	集落跡西側のK5-21に位置する。SB3153A、SB3165Aに近接する。
埋設状況	土器はやや北側に傾く形で、胴から底部にかけて埋設されていた。
埋設造構	掘り方の平面形はほぼ円形で、規模は上端が径45cm、底部が径10cmの皿状に掘り込まれている。深度は確認面から15cmを計る。
土 器	581
その他	他の遺構との関係は不明である。

埋設土器 1407A (図版70, 写真385)

位 置	集落跡西側内縁のJ6-13に位置する。
埋設状況	土器は正位に直立しており、口縁部が欠損していた。底部は意図的に壊されていた。
埋設造構	掘り方の平面形は円形と考えられ、規模は上端径60cm、底部径22cmである。深度は44cmを計る。
埋 土	土器内部の埋土は暗褐色土の単層で、基本層序Ⅱb層と同質である。なお埋土については、この埋設土器の性格を明らかにするために化学的な分析を行ったが、際だった特色は表れなかつた。
土 器	587, 588
時 期	中期前業③
その他	他の遺構との関係は不明である。

埋設土器 (写真384)

位 置	集落跡南西部のN6-25に位置する。
埋設状況	口縁部は欠損しているが、正位の埋設土器であったと考えられる。
土 器	555

時 期 中期中葉①

(4) 一括土器

一括して出土した土器は多数検出されたが、そのほとんどが住居跡などの遺構に伴うもの、もしくは遺構に伴う可能性の強いものであった。

一括土器 1276A (図版70, 写真385)

位 置 集落跡西側内縁のJ6-19に位置する。

検出状況 浅い落ち込み内より、土器が側面で置かれた状況で出土した。

土 器 596

(5) 立 石

立石は、屋内に設置されていたと考えられるものが4基、屋外に設置されていたと考えられるものが12基で計16基が検出された。屋外に設置されたと考えられる立石は、すべて広場の縁辺部に位置していた。また屋内に設置されたと考えられる立石の中には、焼土を伴うものもある。

立石 3152A (図版71, 写真386)

位 置 集落跡南側内縁のL9-4, M9-24に位置する。

検出状況 包含層発掘中に、直立した状態で検出された。

規模等 長さ51.2cm、重さ18.5kgで石材は安山岩である。

掘り方 立石の下部は砾で根固めされ、その下からはピットが検出された。確認面からの深さは42cmを計る。覆土は暗褐色土である。

その他 地表面からも立石の一部が確認できた。

立石 2661A (図版71, 写真386)

位 置 集落跡西側内縁のL6-22に位置する。SB1262Aと重複し、SI3166A、SI3169Aに接している。

検出状況 遺構精査中には直立の状態で検出された。

規模等 長さは37cmで、胴部中央が赤変している。

掘り方 掘り方の平面形は円形で、上端径22cm、底部径15cm、確認面からの深さは約35cmを計る。覆土は暗褐色土である。

その他 SB1262Aのプラン内にあるが、関連は不明である。

立石 2624A (図版71, 写真386)

位 置 集落跡南西側内縁のL8-16に位置する。

検出状況 遺構精査中には直立の状態で検出された。

規模等 立石は長さ26.2cm、厚さ10.8cm、重さは6.1kgである。砾石を利用しており、石材は花崗岩である。

掘り方 掘り方の平面形は円形で、上端径36cm、底部径12cm、確認面からの深さは22cmを計る。覆

土は暗褐色土である。

立石 1281A (図版71, 写真386)

- 位置 集落跡南西側内縁のL8-18に位置する。
 検出状況 遺構精査中に、やや傾いているが直立した状態で検出された。
 規模等 長さは40.5cm、重さは13kgで石材は安山岩である。
 掘り方 掘り方の平面形は円形で、上端径は37cm、底部径20cm、確認面からの深さは37cmを計る。
 覆土は暗褐色土が主体である。

立石 2651A (図版71, 写真386)

- 位置 集落跡南西側内縁のL8-23に位置する。
 検出状況 遺構精査中に南西側に大型の立石1基、北東側に小型の立石1基をもつ落ち込みを検出した。どちらもやや傾いてはいるが、直立した状態であった。
 規模等 南西側の立石は長さ57.3cm、重さ31.5kgで石材は安山岩である。北東側の立石は長さ17cmである。
 掘り方 掘り方の平面形は不明であるが、南西側は上端径42cm、底部径26cm、確認面からの深さは52cmを計る。北東側は上端径25cm、底部径11cm、確認面からの深さは24cmを計る。どちらも立石の下部には、礫が置かれていた。覆土は暗褐色土である。

立石 1495A (図版71, 写真386)

- 位置 集落跡西側のK7-10に位置し、SI3169Aに近接する。
 検出状況 包含層発掘中に直立した状態で検出された。
 規模等 長さは55.6cm、重さは23kgで石材は安山岩である。
 掘り方 掘り方の平面形は不明であるが、確認面からの深さは20cmを計る。覆土は暗褐色土を主体とし、底部に礫が置かれていた。

立石 2670A (図版71, 写真386)

- 位置 集落跡西側内縁のK8-9に位置し、SI2691Aに近接する。
 検出状況 遺構精査中に、やや傾いてはいるが直立した状態で検出された。
 規模等 長さは25cmである。
 掘り方 掘り方の平面形は円形で、上端径22cm、底部径20cm、確認面からの深さは17cmを計る。覆土は暗褐色土である。

立石 1964A (図版71, 写真387)

- 位置 広場内南西側のK9-25に位置し、周囲は遺構の空白域である。
 検出状況 遺構精査中に、直立した状態で検出された。
 規模等 長さは34cmで、石材は安山岩である。
 掘り方 掘り方の平面形はほぼ円形で、上端径31cm、底部径28cm、確認面からの深さは24cmを計る。

3 集落跡1の調査

覆土は暗褐色土で、立石の基部・底部には根固めと思われる小礫が認められた。

立石 1587A (図版71, 写真387)

位 置 集落跡南側内線のK10-3に位置する。

検出状況 造構精査中に、不整長円形の落ち込みに伴って検出された。立石は長径132cm、深さ20cmの浅い土坑内に、やや斜位に設置されていた。

規模等 長さは25cmである。

覆 土 覆土は上半が暗褐色土、下半が暗黄褐色土で、立石の基部には礫が置かれていた。

立石 2602A (図版71, 写真387)

位 置 集落跡西側内線のJ6-2, K6-22に位置し、SK2605Aと重複する。

検出状況 表土剥ぎ中に直立した状態で検出された。

規模等 長さは43.7cm、厚さは9.7cm、重さは4.7kgである。台石を利用しており、石材は安山岩である。

掘り方 掘り方の平面形は円形で、上端径は不明、底部径12cm、確認面からの深さは49cmを計る。
覆土は暗褐色の砂質土である。

その他 SK2605Aと重複しているが、立石2602Aの方が新しい。

立石 3143A (図版71, 写真387)

位 置 集落跡西側内線のJ11-11に位置する。

検出状況 造構精査中に直立した状態で検出された。

規模等 長さは25cmである。

覆 土 覆土は暗褐色土である。

立石 3011A (図版71, 写真387)

位 置 集落跡南東側K12-11に位置する。SI1847Aと重複し、SB1848AとSB3167Aに近接する。

検出状況 造構精査中に、不定形の土坑に伴って検出された。立石は傾いた状態であった。

掘り方 覆土は暗褐色土で、確認面からの深さは34cmである。

その他 SI1847A内にあるが、関係は不明である。なお、立石ではなく、土坑内に廃棄された自然礫とも考えられる。

立石 1538A (写真386)

位 置 広場内南側のK9-18に位置し、周囲は造構の空白域である。

検出状況 造構精査中に、上端57×40cm、深さ23cmの楕円形のピットの上面に、直立した状態で検出された。

覆 土 覆土は暗褐色土である。

立石 1595A (写真 387)

位置 集落跡南西側内縁の K11-10 に位置する。

検出状況 遺構精査中に検出した。立石は上端 36 × 26cm、深さ 19cm の楕円形のピットに、直立の状態で設置されていた。

覆土 覆土は暗褐色土である。

(6) 石列 3136A (図版 71, 写真 387)

位置 集落跡西側内縁の J11・12 に位置する。

検出状況 扁平でやや細長い人頭大以上の礫が、長辺を北に向けて並なり、逆「く」の字を描くように検出された。長辺は 5.6m、短辺は 3.5m で、石材は安山岩を中心とする。

その他 広場と住居跡などの遺構密集地の境界付近で検出された。この内側では遺構が極端に少なくなる。

(7) 捨て場 A (図版 72, 写真 387・388)

位置 集落跡西端の H～L2・3 に位置する。

規模 南北 49m、東西 8m

層序 基本層序 II a 層の下位から II b 層にかけて、縄文中期前葉の土器およびそれに伴う石器が大量に出土した。II b 層と III 層の間には、流路の覆土が堆積しており、その厚さは多いところで約 50cm を計る。砂や小礫を多く含み、多量の炭化物も検出された。遺物は覆土上部の 1～10 層より集中して出土した。

出土遺物 土器 (593, 594, 596～724, 726～878, 1172, 1401, 1505)、土製品 (1509, 1510, 1539～1554, 1605, 1606, 1625～1640, 1715)、石器 (石錐 7, 石斧 10, 石匙 2, 両面加工石器 14, 三脚石器 39, 板状石器 62, 打製石斧 118, 磨製石斧 9, 球形器 19, 磨石 83, 砥石 14, 石皿 10, 両極石器 15, 不定形石器 524, 台石 2, 石核 36)

時期 中期前葉

その他 91 年度の包含層発掘中に、現在の用水路に沿うようにして遺物の集中区が見つかり、92 年度もその続ぎが検出された。遺物は段丘崖の近くでは出土量が少なく、現在の用水路周辺（環状集落帯）で多く出土しており、この遺物は環状集落帯から廃棄されたものと考えられる。遺物を取り上げた後、遺構精査を行ったところ、複数の流路跡・遺構の落ち込み・礫の集中箇所を検出し、また底面からは大粒の炭化物の集中箇所を検出した。これらについては、「水場遺構」的な性格が考えられるが、それを積極的に示すような遺構や遺物は発見されなかった。また覆土については、捨て場の性格を明らかにするために、化学的な分析を行った。その結果、L2-21 区では水域が存在したことを示唆する所見が得られた。

(8) ピットおよび性格不明の落ち込み

ピットは柱穴を除いて 2,180 基あまりが検出され、その分布は住居跡の集中域と一致している。ピットおよび性格不明の落ち込みで、出土遺物が実測図・拓本に掲載されたものは観察表としてまとめ、遺構全体図に番号を付した。

B 遺 物

(1) 土 器

集落跡1からは、绳文時代中期の土器が大量に出土している。これらの土器は、中期前・中葉のものがほとんどである。しかし、前回の調査（新潟県教育委員会1990b）とは少し様相が異なり、前葉が中心で北陸系の土器が目立っている。なお、土器観察表で時期の欄が空白となっているものは、中期前・中葉に属するがその詳細が不明のものである。

a. 造構出土の土器

住居跡（SI・SB）10は、蓮華文が描かれているが、その描出手法は、三角形陰刻手法によるものではない。18は、溝巻文が描かれているが、その手法は、隆起線などではなく沈線である。29は、沈線および隆起線で直線や弧線が描かれ、弧線の中心付近には、ヘラ状工具で爪形様の刻目文が施されている。38は、中心部に円形刺突の施された瘤状の突起が添付されている。39は、4単位の波状口縁をもち、口縁部上半には半隆起線がめぐり、その直下の口縁部下半には、櫛長の蓮華文が施されている。頸部には爪形が施された半隆起線がめぐり、そこから縄文地上の胴部へ継ぎの半隆起線が垂下する。中期前葉③の典型的な資料である。40・41は、文様が半隆起線で描かれ、器面をかなりの密度で埋めている。越後系土器の文様が半隆起線から隆起線へと変化することを示す好資料である。49は、かなり大型の台付土器の脚部で太い隆帯が1条めぐるほかは無文である。

54は、口縁部に2単位の角状の突起が付き、口縁部は、横位有節沈線が密に施され、胴部は縄文である。今までの越後系にはほとんどみられない文様パターンである。なお、底部は上げ底気味となる。60、63は、半隆起線で描いた文様の空白部分に格子目文や横位細沈線文を充填するもので、中期前葉③の典型的な資料である。65の爪形文は施文間隔や爪形自体も粗い、一応北陸系に含めておいたが、他の北陸系のものとは雰囲気が少し異なる土器である。72は、口縁端部に2対4単位の突起をもち、口縁部に横円気味の隆帯区画があり、その内部は沈線や有節沈線で施文され、一部には爪形様の刺突も認められる。胴上部には4条の沈線がめぐり、その直下から太く、先端が溝巻文を描く隆帯が斜行垂下し、隆帯間の空白部分には沈線や有節沈線で波状文などが施文されている。有節沈線は、おもに隆帯にそって施されている。越後系の土器とは器形・文様・胎土・色調などにおいて異なっている。

108は、顔面を連想させるような把手である。115は、口縁部に隆起線で工字文状の文様が描かれている。130は、胴部に継ぎの結び目縄文が施文されている。131は、口縁部下半に指頭圧痕の施された隆帯がめぐり、そこから隆帯が垂下する。それ以外の空白部分は半隆起線でみたされており、口縁部には横位の半隆起線がめぐっている。137の口縁部には2対4個の補修孔が穿たれている。139は、口縁部に隆帯や隆起線で溝巻文、陰刻状の沈線で玉抱き三叉文が描かれ、頸部には1条の隆帯がめぐっている。胴部は、縄文地上に2本1組の隆起線で文様が描かれている。143は、口縁部に隆帯で連弧文が描かれ、それに沿うような形で撲糸側面圧痕が押圧されている。胴部上半には隆帯や半隆起線で菱形文や溝巻文が施文され、やはりそれらに沿うような形で撲糸側面圧痕が押圧されている。胴部は、縄文地上に隆起線で同心円状の溝巻文が描かれ、そこから3条の半隆起線が横位方向にのびている。

150～154は、口縁端部に突起状の把手をもつ大型の深鉢で、口縁部は太い隆帯や半隆起線で文様が描かれ、空白部分は細沈線でみたされている。胴部はかすかな縄文地上に2本1組の沈線が無作為に施されてい

る。155は、不明瞭な縄文地上に半隆起線でほとんど密に文様が描かれている。越後系土器の初現的な資料である。168は、地文が縄文ではなく撲糸である点を除けば、東北系2類土器と同じである。169は、口縁が無文帯となり、その直下の縄文地上には隆帯と沈線で文様が描かれている。隆帯の一部は劍先状を呈し、その直下は橋状把手となる。178は、隆帯と半隆起線で文様が描かれ、文様間に空白部が目立っている。191は、北陸系深鉢1a類に類似するが、口縁部下半に継位の半隆起線が施される点が異なる。197は、口縁に綫長の突起が2個付され、その間には継位の刺目状沈線が施されている。胎土中に雲母を多く含んでいる。200は、口縁部に有筋沈線が施され、それ以下の無文地上には横位沈線と弧状沈線で文様が描かれている。214は、口縁部文様は越後系深鉢1b類に類似するが、胴部文様は北陸系深鉢4c類である。215は、口縁部に継位の細沈線が施されるが、頸部は無文帯となる。口縁端部には透かし彫りの突起が付され、そこから胴上部へと橋状把手がのびる。胴上部と中央部には数条の半隆起線がめぐり、その中には爪形が施されているものもある。胴部には地文として継位羽状縄文が施文されている。233は、横位の帯状撲糸文が施文されている。249は、製作時点に形が歪んだものをそのまま焼成し、実際、煮炊きに使用している。439は、輪積み痕がことさらに強調されている土器である。このような類例は、本県では三島郡千石原遺跡（中村ほか1973）でみられる。

土坑（SK） 252は、頸部に1条の隆帯と2条の隆起線がめぐり、隆起線の中の1条には円形状の刺突が施されている。253は、隆帯を添付した後に地文の縄文を施文しており、口縁端部の突起内面には渦巻状の隆帯がみられる。254は、地文の縄文は綫方向の施文である。259は、阿玉台Ia式土器（塚本1988・1990）で、胎土中に雲母を多く含み、外面の色調が黒味を帯びた美しい褐色である。口縁端部の突起の内外に隆帯や渦巻文が描かれ、内面は玉抱き三叉文となっている。263は、無文地に隆帯のみで文様が描かれている。胴最上部には横円区画が付され、胴上部と下部の境界付近には1条の隆帯がめぐり、その間は4単位に区画され、その内部には「の」の字状など他の土器にはみられないような文様が2単位づつ施文されている。270は、口縁部に1条ずつの有筋沈線と指頭圧痕隆帯がめぐる。頸部以下は地文として縄文が施文され、頸部には2条の有筋沈線がめぐり、胴部上半は横割付の文様が、下半は縦割付の文様がそれぞれ沈線で描かれている。271は、東北系深鉢1aないしは1bに類似するが、地文に縄文をもたない点および口縁の横円区画内に点列状の刺突文が施文されている点が異なる。274は、非常に軽い土器である。286は、火焔型土器の鶴冠状把手を想起させる透かし彫りの「S」字状把手をもつ土器である。290は、胴上部の一部分に赤彩がされている。

308は、口縁に1条ずつの有筋沈線と隆帯がめぐり、口縁部には隆帯で横「S」字状と交互刺突文が施文され、そこから縄文地上の胴部へ隆帯が垂下する。口縁部の空白部分には継位の細い有筋沈線が密に施されている。317は、口縁部は無文地で内側に瘤状の突起を有する。口縁部の直下には爪形文が施文された半隆起線がめぐり、また無文帯となる。無文帯下には2条の半隆起線がめぐり、その間には三角形陰刻が交互に施されている。330は、口縁が肥厚し、そこから口縁部へと幅広の隆帯が「し」の字状にのびる。肥厚した口縁および幅広の隆帯上には細沈線による刻目が施され、口縁部外には赤彩の痕跡がみられる。胎土も緻密で他の土器と比較しても異質な感じを強く受ける土器である。331は、台付の鉢形土器になる可能性もある。337は、完形品で、越後系でこのようなタイプの土器は初めてである。341は、口縁と頸部に円形状刺突が加えられた隆帯が1条ずつめぐり、その間の口縁部の無文地上には沈線で直線文や弧線文が描かれている。胴部上半も無文地上に口縁部と同じような文様が描かれている。胴部下半は縄文が施文されている。

370は、口縁に爪形の施された半隆起線が2条めぐり、以下は縄文が施文されている。377は、口縁部に

蓮華文が施文され、頸部には4条の半隆起線がめぐり、胴部は半隆起線で文様が描かれ、その空白部分は縦沈線でみたされている。382は、北陸系の浅鉢とは異なり、盤状の底部をもつものである。402は、口縁は縦文帯となり、その直下には2条の半隆起線がめぐる。口縁部下半は無文帯となり、頸部には2条1組と3条1組の半隆起線がめぐり、その間に撫糸文地上に半隆起線で山形文が描かれ、半隆起線で縁どりされた右下がりの突起が3単位、等間隔に添付されている。胴部全面には木目状撫糸文が施文されている。木目状撫糸文は北陸地方の該期の土器にもみられるが、この土器は、器形、文様から東北地方の円筒上層式土器の影響を受けたものと考えたい。

406は、口縁から胴部へと垂下するクランク状の隆帯で縱方向に2単位に分割され、それらの面には撫糸文地上に沈線で文様が描かれている。他に類例をみないタイプである。427は、口縁部は無文地で、隆帯や爪形が施された半隆起線で三角形状や連弧状に区画され、その区画内は沈線などで文様が描かれている。頸部には爪形が施された隆帯と半隆起線がめぐり、そこから胴部の縦文地上に3本1組1対の沈線が垂下する。436は、口縁端部に「S」字状の把手をもち、そこから口縁部へと「Y」字状の橋状把手がのびる。口縁部は隆帯で横円状に区画され、区画内には点列状の刺突が上下に施されている。胴部は全面に縦文が施文されている。443は、深沢（高橋1989）的な土器である。444は、口縁に撫糸の側面圧痕が押圧され、それ以下は撫糸文が施文されている。

ピット（P）490は、波状口縁で、広い意味では越後系深鉢1b類に含まれるが、口縁部に蓮華文的な文様がみられる。511は、4単位の波状口縁をもち、口縁にそって波状隆帯がめぐる。胴部は口縁から垂下する波状隆帯によって3単位に区画され、その区画内の縦文地上には1条の縦位の沈線が施文されている。512は、口縁に円形刺突の施された隆帯がめぐり、それ以下は結び目縦文が施文されている。513・514は、口縁部上半が無文帯となり、下半には蓮華文がみられる。頸部には爪形が施された1条の半隆起線がめぐり、胴部は半隆起線で縦区画され、その内部は綾状や横位の細沈線でみたされている。523は、大波状口縁の土器で、半隆起線間に爪形の刻目が施され、地文に縦文をもっている。525は、口縁部が3条の縦位の半隆起線で6単位に区画され、その内部は2条の横位半隆起線でみたされている。頸部には点列状の刻目文と3条の半隆起線がめぐり、そこから縦文地上の胴部へと半隆起線が垂下し、胴部を縦区画している。526は、頸部までの文様は北陸系深鉢1b類と同じであるが、胴部文様は、縦文を地文にもたないという点をのぞけば525と同じである。

その他 542は、波頂部に隆帯の円文をもち、そこから隆帯が口縁部下半へと垂下する。口縁にそっては交互刺突の施された半隆起線がみられる。口縁部下半には縦位を基本とした半隆起線が施されており、その空白部分は縦沈線で埋められている。胴部には縦文が施文されている。551は、北陸系深鉢2b類に類似し、縦文地上に口縁部上半に2条、頸部に3条の背竹管による沈線がめぐっている。胴部は全面に縦文が施文されている。555は、黒色土からの出土であるが、その出土状況からして埋甕の可能性が大きい。561は、器高が低く、浅鉢というよりも皿状を呈する。585の文様の空白部分には横位の縦沈線が施されている。

捨て場A 592は、隆帯文間の空白部分に細沈線を充填している。594は、口縁端部に1条の有節沈線をもち、口縁部は無文地上に沈線で横位文様が、胴部は縦文地上に沈線で縦位文様がそれぞれ描かれている。なお、口縁は、ゆるやかな波状となる可能性がある。

608は、基本的な文様構成は中部高地系深鉢隆帯系列2a類に類似するが、区画内が単なる沈線ではなく有節沈線である。611は、頸部に4単位の瘤状突起がつき、底部に木葉痕がみられる。615は、口縁に蓮華文がめぐり、その直下は半隆起線である。618は、口縁部に2列の点列刺突がめぐっている。622は、隆帯

と半隆起線で文様が描かれ、その空白部を縦位の細沈線や波状沈線で埋めている。634は、4単位の小突起をもち、口縁部には細い半隆起線と同一工具による爪形様の刺突が施されている。小突起直下には細半隆起線で逆「U」字状の文様が描かれ、それ以下の胴部全面には縄文が施されている。なお、器内面の一部に条痕状の整形痕がみられる。637~640は、同一個体である。643は、隆帯と半隆起線で文様が描かれ、その空白部に撫糸を縦および横回転することによって格子目文風の文様を描いている。660は、中部高地系深鉢鉢1a類に類似するが、口縁部直下が無文帯となっている。676の蓮華文は、三角形陰刻手法によるものである。679は、口縁が無文で胴部全面に縄文が施されている。681は、口縁部が無文帯となり、そこに3条の撫糸面圧痕が押圧されている。東北地方の円筒上層式土器の系統を引く可能性もある。692は、一見すると木目状撫糸文のようであるが、詳細に観察しても撫糸は認められない。695は、半隆起線で文様が描かれ、口縁部に斜格子目文が施されている。696は、口縁部下半に2条1組の縦位半隆起線が施されている以外は、北陸系深鉢1a類と同じである。

704は、全面に縄文が施されているが、結び目縄文がみられる。719は、口縁に眼鏡状の文様がめぐり、その直下には細沈線で斜格子目状の文様が施されている。724は「X」字状の横状把手をもった土器である。726は、口縁部下半に蓮華文風の文様が施され、胴部には結び目縄文がみられる。727は、口縁部文様は東北系深鉢1b類と同じであるが、胴部は縄文のみが施されている。734は、722と同一個体の可能性が高い。735は、口縁部に爪形状の点列文が2条めぐり、それ以下は間隔のある撫糸文が施されている。740は、隆帯部分を除いた口縁部全体に、細沈線で斜格子目文が描かれている。766は、口縁に縄文帯がめぐり、その直下の口縁部下半に縦位沈線がほぼ等間隔に施されている。頭部には2条の波状沈線がめぐり、胴部には全面に縄文が施されている。769は、口縁部に点列の刺突文が2条、頭部には交互刺突が施された隆帯、胴部には2条の波状沈線と縦位の細沈線がみられる。771は、撫糸文地上に隆起線で文様が描かれているが、器形も特異で他に類例をみない土器である。上下も定かではない。776は、北陸系深鉢1a類に類似するが、口縁部下半に縦位の半隆起線が施されている点が異なる。781は、小形の土器であるが、ミニチュア土器的な越後系土器は珍しい。796の内外面には煮炊きの炭化物とは異なる物質が付着している。799は、口縁に隆帯で区画を施し、その空白部分に細沈線を稜形状に充填するなどしている。頭部には3条の半隆起線がめぐり、その下位の胴上部には2条の波状沈線と3条の半隆起線および刻目が施され、半隆起線上には小突起が添付されている。

800は、東北系深鉢5b類に類似するが波頂部から胴部へと波状気味の隆帯が垂下する。812は、747と同一個体である。828は、口縁に1条、口縁部上半と下半の境界に1条の隆起線がめぐり、その間に斜位の細沈線でみたされている。口縁部下半は無文帯で、頭部には1条の隆起線がめぐる。胴部は無文地上に隆帯と隆起線で、三角形状に区切られ、刻目で縁どられている。829は、文様は北陸系であるが、胎土、色調は北陸系というよりもむしろ中部高地系である。830は、四角形の大波状口縁の波頂部に、眼鏡状の文様が隆帯で表現されている。834は、器形・文様・内面の整形から有孔鈎付土器の可能性がうかがわれる。835は、中部高地系深鉢2a類に類似するが、区画内が単なる沈線ではなく有筋沈線が施されている。856は、文様構成は北陸系深鉢1a類に類似するが、口縁部下半は縄文帯ではなく、縄文地上に2本1組の縦位半隆起線が施されている。

b. 遺物包含層出土の土器

888の縄文は、条の間隔が広く、一見すると格条体圧痕のように見える。902は、口縁部に5条の半隆起

線がめぐり、うち3条には爪形が加えられている。胴部は4単位に区割りされ、上端は無文帯となるが、それ以下は半隆起線で文様が描かれ、文様の空白部分は格子目状の沈線が施されている。904は、特異な形をしており、器種は深鉢と考えられるが、器形は不明である。胴部からは角状の突起もしくは把手がのびている。文様は頭部は無文帯となり、胴部上端に隆帯が通り、その直下に逆位の蓮華文が施されている。それ以下の胴部文様は半隆起線で直線文や満巻文が描かれ、文様の空白部分には格子目状沈線が施されている。914の口縁文様帯は、隆帯で何単位かに区分され、鎖状隆帯で上半と下半に分けられる。上半は無文地上に沈線で連弧状の文様が連続して施文されているが、下半は繩文帯となっている。頭部には数条の沈線がめぐっている。929は、器形と文様で北陸系と判断したが、縄文の施文や胎土の雰囲気は東北的である。944は、頭部と胴部の境界にやや幅広の隆帯が1条めぐるほかは、無文地上に沈線で文様が描かれている。947は、半隆起線の直下に蓮華文が施され、その下位に撚糸側面圧痕が施されている。ひとつの土器に北陸的な要素と東北的な要素が併存する例である。

952は、浅い沈線文が施文されており、器壁が薄く焼成も良好である。集落跡1出土の他の土器にも類例がなく、異質な土器である。縄文時代早期後半の沈線文系土器の可能性も考えられる。955は、越後系深鉢Ib類に類似するが、地文に縄文が施文されている。961は、口縁に爪形が施された1条の半隆起線または爪形が施された2条の半隆起線と1条の隆帯がめぐり、4単位の突起部分からは爪形が施された2条の半隆起線と1条の隆帯が縄文地上の胴部上半まで垂下する。973は、口縁に2条の半隆起線がめぐり、胴部は波頂部より垂下する爪形が施された隆帯で区分される。それぞれに区分された部分の文様は、半隆起線を中心にして縦位主体に構成され、文様の空白部分は細沈線を施すか、無文帯の縁にそって刻目を加えるかしている。977は、口縁は無文帯と3条の横位半隆起線からなり、その直下は縄文地上に2条1組の縦位半隆起線がほぼ等間隔に施文されている。胴部には1条の隆帯がめぐり、そこから胴部へと1条の隆帯が垂下して胴部文様を3単位に区分している。それぞれの単位文様には隆帯と沈線からなる満巻文と懸垂文が施文され、それ以外の縄文地上には沈線で縦区画を基本とした文様が描かれている。995は、口縁に1条ずつの隆帯と半隆起線がめぐり、口縁部は無文地上に沈線と半隆起線で弧線状の文様が描かれている。口縁部文様帯と胴部文様帯は1条ずつの半隆起線と押圧が加えられた隆帯で区分され、胴部は口縁部と同様の施文具で満巻文や弧線文などが施文されている。997は、口縁には横位の撚糸文が、それ以下には縦位の木目状撚糸文がそれぞれ施文されている。

1018は、「X」字状の橋状把手をもち、文様の縁にそって刻目状の細沈線が密に施されている。1033は、口縁に軌輪的な文様がみられ、その直下に半隆起線がめぐり、半隆起線以下には縄文が施文されている。1053は、口縁部に半隆起線と爪形が加えられた半隆起線が交互にめぐり、胴部には口縁部から2本1組の半隆起線がほぼ等間隔に垂下し、その空白部分には縦位の細沈線が施されている。1069は、口縁端部には階層状の小突起を連想させるような連続する小刻みな波状小突起をもち、口縁部には3条の隆起線がめぐる。胴部には沈線がみられる。1074は、沈線で満巻文などが描かれ、文様の空白部分は斜格子目状の沈線が充填されている。1089は、口縁部が欠失しているため口縁部文様は不明であるが、胴部文様帯は上部と下部に2分される。上部は上位から2/3余りのところまでを占め、おもに隆帯および半隆起線で文様が描かれており、隆帯上に爪形、文様空白部分などの縁どりには刺突状の刻目が施されている。下部は、上部から垂下する隆帯を軸に沈線を中心に文様が描かれている。1093は、口縁部内面に押し引きで文様を描くことを特徴とする浅鉢で、この時期において関東地方や中部高地を中心に一般的にみられる。

1100は、口縁部に2条の隆帯がめぐり、それらの隆帯上には1列の刻目状刺突と2列の点列状刺突が施さ

れている。口縁部直下からは4条あるいは3条1組の半隆起線が垂下し、空白部分には斜格子目状の沈線が施されている。1114は、台付土器の脚で無文であるが、丁寧に磨かれている。1115は、縄文が施文された隆帯で文様が描かれている。このような土器は、本集落跡では類例がないところから異系統の土器ではないかと考えられる。なお、このような施文技法は東北地方の円筒上層式にみられる。1127は、口縁部が欠失しており胴部のみである。無文地上に半隆起線で満巻文や垂下する直線文が描かれている。1128は、口縁部に蓮華文を簡略化したと考えられる縱位刻目状沈線と点列状の刺突がめぐり、その直下の頸部にも6条の半隆起線と1条の点列状の刺突がめぐる。胴部上半は無文帯と4条の横位半隆起線のくり返しとなり、無文帯と半隆起線帯の境界には点列状の刺突が施されている。1135の内面は全面にスス?が付着しており、一部では黒光りしていることから、焼成時に付着したものではなく塗布されたものでないかとも考えられる。1145は、口縁部上半に2条の沈線がめぐり、下半は蓮華文状の文様が施文されている。頸部には途中から連弧状となる1条の押圧隆帯と3条の沈線がめぐり、縄文地上の胴部には3本1組の沈線で満巻文などが描かれている。1161は、口縁部に交互刺突の施された鋸齒の隆帯が1条めぐり、以下は縄文が施文されている。1199は、東北系深鉢1~3類に類似するような胴部文様をもつが、施文技法は沈線ではなく、半截竹管を用いた半隆起線である。また、細い縄文を地文にもつことも特徴的である。

1206は、深鉢もしくは鉢形を呈すると考えられるもので、半隆起線で満巻文などが描かれ、部分的に刻目状点列文が縱位あるいは横位に施文されている。1214は、口縁部上半に3条の半隆起線と1条の爪形文がめぐり下半は無文地上に縱位の細沈線が密に施されている。頸部には4条の半隆起線と2条の爪形がめぐり、そこから撚糸文が施文されている胴部へと縱位の半隆起線が垂下する。1218は、東北系浅鉢としては一般的な器形ではなく、胎土中に白っぽい大粒の砂粒やビカビカ光る砂粒を含んでいる。1225は、縄文地上に有節沈線で文様を描いている。中部高地系か東北系かで迷うところであるが縄文地上に満巻文を描いていた点などから東北系とした。なお、1225~1227は、一括出土している。1228は、口縁部が無文帯となり、頸部には半隆起線と爪形文が交互にめぐり、そこから縄文地上の胴部へと半隆起線が垂下する。1234は、口縁部に2条の沈線と交互刺突がめぐり、胴部は細沈線で粗い斜格子目状文が描かれている。1236は、口縁部上半は有節沈線、下半は縄文地上に半隆起線でそれぞれ文様が描かれている。1239の外面上にはタール状の付着物が認められる。1244は、口縁部に有節沈線が密に施文され、それ以下の口縁部には横位の隆起線などが施されている。1248は、口縁部に鋸齒状の小突起をもち、撚糸文地上に沈線や隆帯で文様が描かれている。なお、一部に縫合条体とおぼしき縄文が認められる。

1263・1264は、頸部に2条の半隆起線と1条の隆帯がめぐり、その直下に当たる頸部と胴部の境目には、点列状の刻目が施されている。胴部には隆帯と半隆起線で逆「U」字状の文様が描かれ、文様空白部分の一部には太目の横位沈線が密に施されている。1267は、口縁部上半に斜格子目状の沈線が施文され、下半には2条の半隆起線と2条の爪型文が交互にめぐっている。口縁部上半から斜行する隆帯上にも斜格子目文が施されている。1272は、口縁から胴部上半にかけては無文、胴部下半には縄文が施文されている。口縁部には「ノ」の字状突起が付され、突起直下の胴部上半には沈線で文様が描かれており、口縁部と胴部の境界線にも1条の沈線がめぐっている。1274~1277は、一括して出土している。1279は、口縁が無文帯で、直下の縄文地上には2条の撚糸側面圧痕が施されている。胴部上半には、縄文地上に2条の半隆起線と1条の爪形が加えられた隆起線からなる半隆起帯が2組、間に縄文帯をはさんでめぐっている。1286は、口縁部上半は無文帯、下半には無文地上に6条の沈線がめぐる。胴部上半には縄文が地文として施文されており、3条1組の沈線が垂下する。

1306, 1307, 1310, 1311は、一括して出土している。1309は、波頂部の縄文地上に半隆起線で三角形状の区画を対面するように描き、その内に縦位細沈線を充填している。頭部には爪形が加えられた半隆起線がめぐり、胴部には縄文が施文されている。関東・中部高地で五領ヶ台直後型式とされている土器の範疇に含まれるものと考えられる。1312は、口縁端部から口縁部上半にかけて「S」字状の突起がつけられる。口縁部上半は、交互に押圧された隆帯と直線状の隆帯で横位に区画され、区画内の無文地上には縦位の撫糸側面圧痕が施されている。口縁部下半には、縄文地上に背竹管状沈線で弧線文が描かれている。頭部と胴部の境界には1条の隆帯がめぐり、そこから下位へと直線状の隆帯および波状隆帯が縄文地上を垂下し、沈線も隆帯に沿うような形で弧線文などを描きながら垂下する。1319は、口縁部は隆帯で梢円形に区画され、区画内には2条の横位沈線が施され、上位の沈線には刺突が加えられている。頭部には1条の波状隆帯がめぐり、胴部には縄文が施文されている。1321は、底径に比べて器高が高いスリムな土器であるが、このような類例は群馬県房谷戸遺跡（山口ほか1989）に認められる。1322は、内面の器面整形痕が比較的よく残っている。口縁端部から下位へ約10cmは横方向のナデ、それ以下は縱方向のナデである。1325～1329は、一括出土している。また、1331～1333も一括して出土している。1349は、口縁端部に横長の双瘤状の突起がつく以外は、縄文が施文されている。

1358は、口縁端部から口縁にかけて横「S」字状の突起がつけられ、口縁は肥厚して無文帯となるが、それ以下の口縁部は全面に縄文が施文されている。1375～1377は、214と同一個体である。1394は、口縁端部と口縁に小突起をもち、口縁には隆帯と刻目が加えられた隆帯が1条ずつめぐり、隆帯間に有節沈線が施されている。口縁直下と頭部には3条1組の隆起線と2条の隆起線、1条の隆帯がめぐり、その間の縄文が施文されている口縁部は、数条の隆起線や隆帯で三角形状に区分されている。なお、口縁部上半に補修孔が1対穿たれている。なお、1394と1395は、一括して出土している。1399は、口縁部は4条1組半隆起線などで方形状に区画され、区画内には2列の点列刻目が施されている。

1402は、全面に縄文が施文されており、口縁部下半には2条の半隆起線と1条の爪形がめぐっている。突起部分からやや左へずれた箇所には、縦長の瘤状の小突起が付けられている。1410は、口縁に交互刺突がめぐり、以下の口縁部は無文地上に沈線で文様が描かれている。器壁が薄く、ほかの土器とは毛色が異なる土器である。1418～1422は、同一個体である。口縁部は、集合沈線的に縦位の半隆起線を密に施している。頭部は縄文帶で、胴部には縄文地上に2本1組の隆帯や半隆起線で斜行するワラビ手状の渦巻文などが描かれている。1423～1427は、一括して出土している。1431～1436も一括して出土している。1444は、口縁に3条の隆起線がめぐり、それ以下の口縁部は刺落が目立ち詳細は不明であるが、縄文地上に半隆起線で曲線的な文様が描かれている。1448は、台付深鉢である。口縁部が欠失しているが頭部には2条の隆起線がめぐり、胴部には帯状の撫糸文が横方向に施文されている。外面は2次焼成を受けているが、内面にニカワ状の付着物があることから漆などを入れた容器として再利用された可能性も考えられる。1449は、口縁部から頭部にかけては全面に縄文が施文され、胴部上半には5条の隆起線と3条の爪形がめぐっている。胴部下半は、半隆起線で文様が描かれている。

1467は、口縁に三角形陰刻手法の蓮華文と軌軸文が施文され、その直下に2条の半隆起線がめぐっている。口縁部下半は無文帯となり、頭部にも2条の半隆起線がめぐっている。1504は、變形を呈する。口縁には2列の円形刺突列が施され、肩部には2条の沈線がめぐり、その間にも2列の円形刺突列がみられる。肩部より下位においても2条の沈線と2列の円形刺突列で文様が描かれている。中期前、中葉に比定されない土器である。1505は、早期の押型文土器と考えられる。円形の刺突が2列施してあり、その直下に梢円文ら

しい押型文が施されている。器壁は薄く、焼成も良好である。

(2) 土 製 品

a. 土 偶 (1506~1517, 4193~4195)

「らしきもの」を含めて15点の出土が確認されている。出土地点別では、土坑からが3点、ピットからが2点、捨て場からが3点、遺物包含層からが7点を数える。部位は、腕部が2点、脚部が5点、胴部8点であるが、顔面部分は出土していない。胴部は1507、1513、1516のように板状を呈するものが目立ち、1509や1510のように下半部も板状または棒状に表現するものもみられる。脚部は、1508や1515のように立体的で立像土偶の脚を想起させる。文様は、沈線で描かれているものが多く、刺突はほとんどが腰部付近に施されている。時期は、伴出または同一グリッドから出土した土器から、1506は中期前葉②、1507は中期中葉③、1509は中期中葉①、1514は中期前葉③、1515は中期前葉②、1516は中期中葉①、4193は中期中葉①市に比定される可能性がある。

b. 三角形土板 (1518~1524)

17点の出土が確認されている。1518を除けば、いずれもグリッドからの出土である。1523は完形であるが、それ以外はすべて欠損している。大きさは大、小があり、断面形も1520以外は表面が膨らみ、裏面が内彎する。1520は、表面は膨らむが、裏面はかすかに内彎する程度である。文様は円形刺突が目立つが、沈線や爪形状刺突もみられる。時期は伴出土器がいまひとつはっきりしないことから中期前・中葉としておきたい。1518は三角形の両側辺が内彎気味になるものと予想されることから、中期前葉もしくはそれに近い時期ではないかと考えられる。

c. 板状土製品 (1525~1700)

196点の出土が確認されており、いずれも土器片を再利用したものである。平面形により、三角形板状土製品 (1525~1602)、四角形板状土製品 (1603~1610, 1650, 1652, 1657, 1658, 1670, 1672, 1686)、円板状土製品 (1611~1649, 1651~1656, 1659~1669, 1671, 1673~1685, 1687~1700) に分類される。それぞれの出土数は、三角形のものが72点、四角形のものが17点、円板状のものが107点であるが、四角形と円板状については1650や1658のように識別しかねるようなものも存在した。時期については、表面に残されている文様から判別が可能なもののうち大半が中期前葉に比定される。また一方、遺構出土のもので遺構によってある程度時期が特定できるものは、約6割が前葉、約4割が中葉であった。なお、三角形板状土製品には1574や1591などように表面が膨らみ、裏面が内彎するものもみられることから、似て非なるもの（金子1983）といわれている三角形土板との関係を再度見直す必要性がうかがわれる。

d. 三角場土製品 (1701)

半分欠損したものが1点出土している。底面の幅約5cm、高さ約4cmと推測され、正面と側面に半隆起線で文様が描かれている。同一グリッドからは中期中葉③の土器 (1444) が出土している。

e. 耳 飾 り (1702~1705)

4点出土しており、鼓形と滑車形が2点づつ出土している。いずれも無文であるが、1703には赤彩の痕跡

が認められる。1702は中期中葉③の住居跡から出土しているが、他はいずれもグリッドからの出土で時期は必ずしも明確とはいがたい。1704が出土したグリッドからは中期前葉②の土器、1705が出土したグリッドからは中期前葉の土器が主に出土している。

f. 性格不明土製品 (1706~1708, 4197, 4198)

性格不明土製品と考えられるものを一括した。1706は、平面形および断面形が方形状を呈し、裏面中央がやや内側する。大きさは、縦5.5cm、横5cm、厚さ2.7cmである。表面には指先を押したと考えられる指頭状のくぼみが2か所、並んで認められる。1707はコロ状を呈し、大きさは長さ3.9cm、幅2.6cm、厚さ2.3cmである。表面は丁寧に磨かれている。1708は欠損しており、1707よりも扁平ではあるが、同じような形状をなすものと考えられる。大きさは、長さ2.3cm(現存)、幅2.5cm、厚さ1.5cmである。1707と同様に表面は丁寧に磨かれている。出土グリッドからは、中期前葉③の土器が主に出土している。4197も扁平で面どりがなされており、長さ・幅とも2.7cm、厚さ1.4cmである。わずかに欠損しているが、ほぼ完形で、焼成も良好である。4198は、基本的には長辺2.7cm、短辺2.2cm、厚さ1.6cmの直方体状を呈する。各面には指頭圧痕が認められ、片方の短辺はつぶれている。

g. ミニチュア土器 (1709~1712)

4点の出土が確認されている。1709, 1710, 1712は、北陸系もしくは越後系の深鉢を忠実に模したもので、それぞれに施文されている文様で所属時期は特定可能である。3点とも器外面上にススや赤変の痕跡が認められることから、何らかのかたちで二次焼成をうけたことは明らかである。1709はともかく、1710と1712は、ミニチュア土器とするよりもむしろ小型深鉢としたほうが適当かもしれない。1711は、坏状をなす鉢形土器で底部が上げ底となる。体部に絲線で渦巻文や曲線文が描かれている。1709, 1710などとは対照的に二次焼成の痕跡はまったく認められない。同一グリッドからは、中期前葉③と中期中葉①の土器が出土している。

h. 人面・獸面装飾付き土器 (108, 1386, 1713~1718)

人面もしくは獸面を模した装飾がつけられた土器を一括した。8点の出土が確認されている。内2点は深鉢の口縁部外面に隆帯や沈線で描かれたものであり、ほかの6点は1386のように、突起として深鉢の口縁端部につけられたもので、いずれも内側を向いている。表情は写実的ではなく、目などがかなりデフォルメされて抽象的な表情になっている。1713と1715は、出土遺構や同一グリッドから出土したほかの土器から中期前葉③に、1386, 1714, 1716~1718は、描かれている文様から中期前葉③~中期中葉①にそれぞれ比定されるものと考えられる。

i. 焼成粘土塊 (1719, 1720, 4199)

何の変哲もない粘土塊を焼成したものが40点ほど出土している。最大のもので4199のように幼児の握り拳くらいあるが、そのほとんどが1720くらいの大きさである。住居跡や土坑といった遺構からの出土が目立つようである。1719は、平たく延ばした粘土板を右手の親指と人差し指で握りつぶしたらしく、表面に縦長で幅広の割れ目がみられる。裏面には、周囲の粘土をつまみ上げたような短い隆起が認められる。焼成粘土塊というよりはむしろ、性格不明土製品とした方が適当なのかもしれない。

(3) 石器

a. はじめに

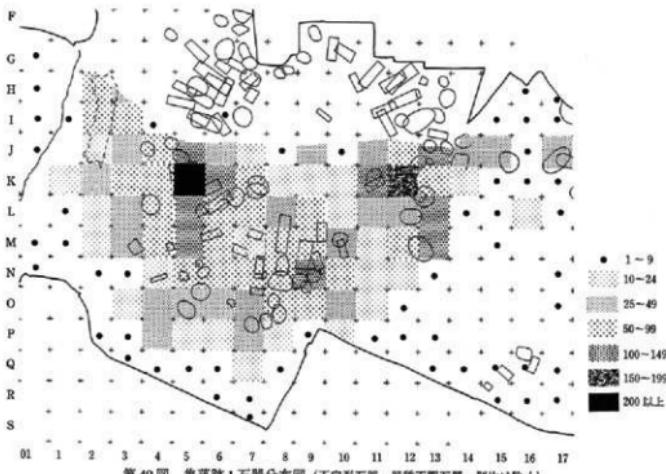
集落跡1は集落1と捨て場Aで構成される。

集落1 前回の調査で検出された環状集落の残り半分(前半分)を中心とする地区で、西側は北東から流下する自然流路上に形成された該期の捨て場Aと接し、東側は北東から南西に走る微高地に形成された中期初頭(集落跡3)と前期(集落跡4)の集落に接する。石器は他の地区に比べ圧倒的に多く、分布状況はほぼ環状に検出された遺構群に概ね重なる。これらの分布は東側に接する集落跡3・4とは明瞭に区別されるが、西側の捨て場Aとは数量的な違いはあるものの連続しており、厳密な区別は困難である。なお、集落跡1は存続時間が長く中期前業から中業までは連続する。

捨て場A 北東から流下する自然流路上に形成され、東側は供給源である集落1に接し、西側は比高3mほどの微高地に形成された中期前業を中心とする集落2と接する。集落跡2の微高地と捨て場Aの自然流路との間に若干の平坦面(捨て場Dを除く)が存在し、遺物も出土するが捨て場Aの範囲は地形上からも自然流路内と限定し作業を進めた。石器の分布状況は集落1と接する東側と西側平坦地(K01, K1)に連続するが、捨て場Aが周辺と比べ際立って多数の石器を出土することはなく、東西方向の厳密な線引きは困難である。

第9表 集落跡1の出土石器

地区	石 類	尖 石 器	石 器	石 器	西 面 加 工 石 器	三 脚 石 器	板 状 石 器	打 制 石 器	磨 製 石 器	擦 石 器	磨 石 器	砥 石 器	石 器	不 定 形 石 器	石 器	台 石 器	石 核	剥 片	石 製 品	合 計	
集落1	38	8	34	8	45	248	412	1322	126	138	1258	144	136	162	3276	4	8	262	19791	4	27424
捨て場A	7		10	2	14	39	62	118	9	19	83	14	10	15	524		2	36	3781		4745
合計	45	8	44	10	59	287	474	1440	135	157	1341	158	146	177	3800	4	10	298	23572	4	32169



第49図 集落跡1石器分布図(不定形石器・器種不明石器・剥片は除く)

b. 集落I出土の石器

① 石 鋸 (図版 172)

分類別出土数と出土分布状況 第50図・第10表参照。総数38点が出土しているが、未成品が5点含まれる。これらは、ほとんどが包含層からの出土 (76.3%) であり、遺構内から出土しているものは9点 (23.7%) にすぎない。分類別ではA1類が最も多く11点 (28.9%) を数え、A2類・A3類がそれぞれ6点 (15.8%) ずつ、A4類1点 (2.6%)、B類3点 (7.9%)、C類2点 (5.3%) が出土している。

集落I 内での出土状況は、環状集落の住居跡の分布に沿って出土が多く、その中でも東と西の住居群付近に比較的集中している。

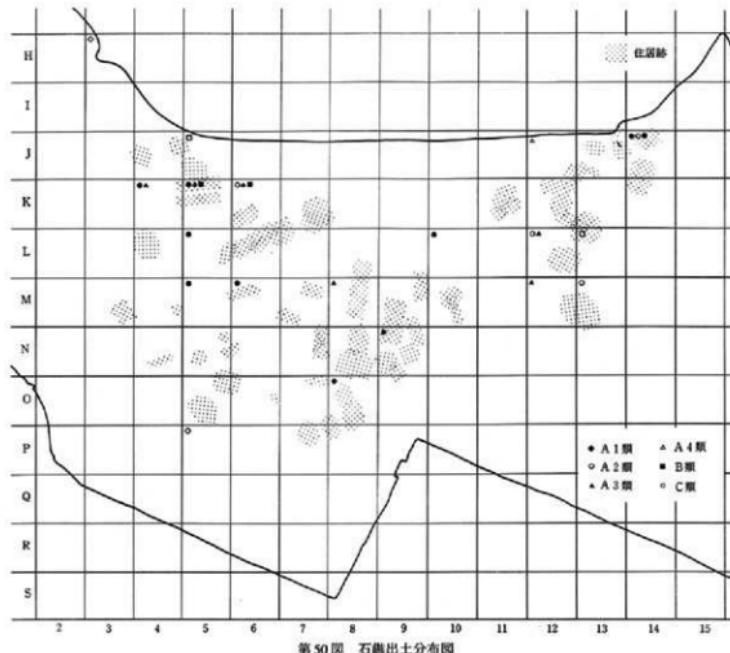
長さと幅 第51図参照。完形品・ほぼ完形品および片側を残すもののうち破損部位が微小で復元可能な

第10表 石鋸分類別出土数

分類	住居跡	ピット	遺構外	合計
A1類	2		9	11
A2類	1		5	6
A3類		3	3	6
A4類			1	1
B類	1		2	3
C類	1		1	2
未成品		5	5	
分類不明		1	3	4
合計	5	4	29	38

第11表 石鋸石材表

石材	鉄石英	頁岩	流紋岩	凝灰岩	黒曜石	メノウ	チャート	黑色板岩	安山岩	合計
A1類	2	1		3	1	2	2			11
A2類	1	1	1	1	1				1	6
A3類	2	2	1				1			6
A4類		1								1
B類			3							3
C類		1		1						2
未成品	1		1		2					4
分類不明	3	1	1							5
合計	9	7	7	5	4	3	2	1	38	



第50図 石鋸出土分布図

もの計18点を対象とする。長さは1.6～4.5cmとややばらつきがあるが、A1類は3cm前後にまとまる傾向が強く、C類は2点のみながらどちらも4.6cmを計る大型のものである。幅は全体的に1.2～1.8cmに収まるものが多い。長さと幅の比率（以下「長幅比」とする）は3:1～3:2の範囲にほとんどのものが収まるが、分類ごとに異なる傾向を示す。A1類は2:1前後、A2類は3:2前後の範囲に収まる。A3類は分布域が広く集中が認められないが、C類は3:1を中心で分布する。

重量 第52図参照。完形品、ほぼ完形品11点を対象とする。A類では1.0～2.0g前後のものが多いが、C類では5.0gを計る。

石材 第11表参照。鉄石英（23.7%）、頁岩（18.4%）、流紋岩（18.4%）、凝灰岩（13.2%）、黒曜石（10.5%）、メノウ（7.9%）、チャート（5.3%）、黒色緻密安山岩（2.6%）が使用されている。

素材 5点が識別できた。縦長削片を素材とするものは4点、横長削片を素材とするもの11点である。分類ごとに偏りは認められない。

遺存状態 破損品24点を対象とする。先端部を欠損するものは9点（37.5%）、脚部を欠損するものは15点（62.5%）であり、脚部を欠損するものの割合が高い。

その他 黒色物質の付着するものが4点認められる。ほとんどが下半部に付着し、矢柄に装着する際の接着剤と考えられるが、1点のみ先端部にわずかに付着しているものがある。また、黒色物質の成分は化学的分析を行っていないため不明である。

② 尖頭器（図版172・173）

8点が出土している。分類別の内訳はA類が5点、B類が2点、未成品1点である。集落跡内の出土分布状況は、資料数が少ないながら分布に偏りが認められ、東と南の住居群からの出土が多い。

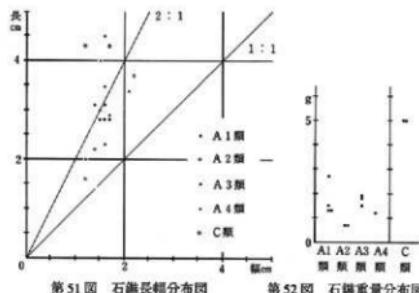
大きさでは、幅はいずれも3cm前後であるが、長さは個体差が大きく7～8cm前後のものと、10cm以上の大型品に大別できる。破損品の1点も残存長は8cmを計り、本来は10cm以上の大型品であったと推定される。

A類は、ほぼ左右対称形で、二次加工の部位は片面だけのもの（1759, 1760）と両面に施されるもの（1756～1758）があり、また素材の深部まで二次加工が及ぶ丁寧なもの（1756, 1758, 1760）と周縁部に粗雑な加工を施すのみのもの（1757, 1759）があり、特に1759は自然面を広く残している。

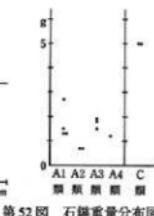
B類は逆刺しをもつものであるが、1762は片面のみに逆刺しが作られ、1761は両側につけられる。どちらも縦長削片を素材とし、全周を交互削離により仕上げられている。

③ 石錐（図版173）

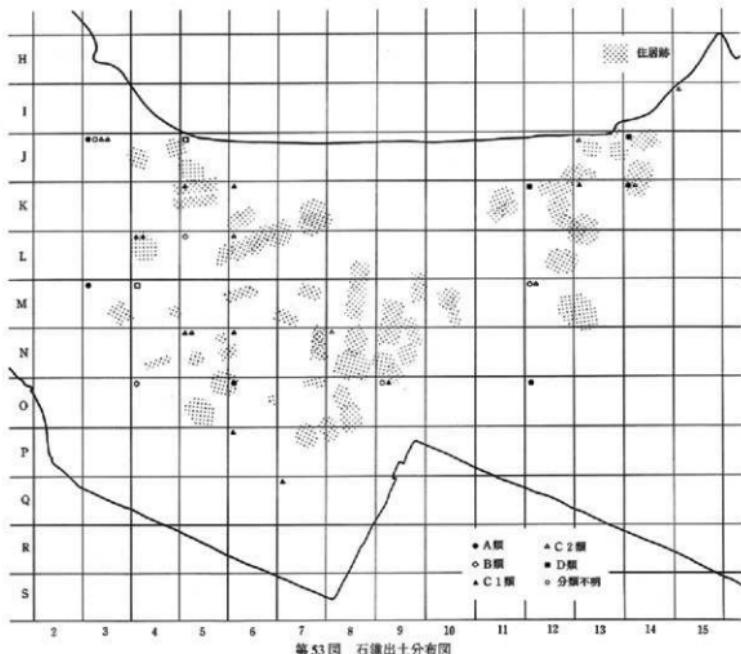
分類別出土数と出土状況 第53図・第12表参照。総数34点が出土している。前回の調査と比べて石器全体の中での比率は低くなっているが、不定形石器D類と分類したものの中に石錐とすべきものを含めてし



第51図 石錐長幅分布図



第52図 石錐重量分布図



第53図 石器出土分布図

また可能性がある。ほとんどが包含層からの出土（91.2%）であり、遺構内出土は3点（8.8%）である。分類別では、前回の調査と同様にC1類（29.4%）・C2類（32.3%）が多い。集落1内での出土分布状況は、環状集落の住居跡付近からの出土が多いが、特に集中せずに散発的に出土する傾向を示す。

長さと幅 第54図参照。完形品38点を対象とした。長さは3.0~6.0cm、幅は1.0~5.5cmのものが多い。長幅比は1:1~3:1にはばく取まる。分類ごとに特に偏りは認められないが、分類基準を反映してC1類はC2類と比較して縦長となる傾向をもち、D類はこれよりさらに長くなり3:2~3:1の比率をもつ。

重さ 第55図参照。完形品31点を対象とした。資料数が少ないが、1g強のものから70g弱のものまで幅広く存在する。分類別の傾向はよく読みとれないが、全体的な傾向として、2~3gと7~8gに分布のピークが認められ、25g以上の重い製品は少ない。

石材 第13表参照。石材の種類は少なく、著しい選択性が認められる。鉄石英・頁岩の両石材で全体の79.4%を占める。その他に流紋岩・凝灰岩・メノウが使用されているが、ごくわずかである。

素材 A類はすべて縦長削片を使用している。B・C・D類は分類基準どおりの素材を使用する。石錐全体では縦長削片を素材とするものが19点（55.9%）と多く、横長削片を素材とするものは35.3%を占める。

第12表 石錐出土数

出土位置 分類	住居跡	ピット	遺構外	合計
A類			4	4
B類			5	5
C1類			10	10
C2類	1	1	9	11
D類			2	2
分類不明		1	1	2
合計	1	2	31	34

遺存状態 総数34点のうち、完形品が31点、錐部の欠損するものが1点、遺存状態の不明のものが2点である。遺存状況の良好なものが大部分を占める。

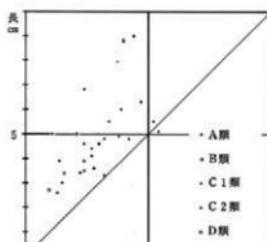
錐部断面形 第14表参照。錐部先端より5mm前後の位置で断面の形状を観察した。全体の90%が三角形状を呈する。また3点が四角形状で、その他の形状のものはほとんどない。分類ごとに特徴は認められない。

使用痕 30点のうち24点(70.6%)に使用痕が観察された。先端と両側縁が磨耗するもの1点、先端の磨耗するもの23点で、極端に磨耗するものは認められない。分類別ではつまみ部のはっきり

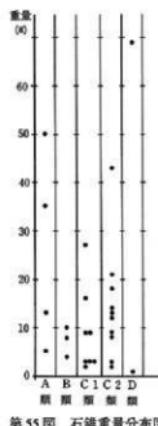
りしたA類の4点中3点に使用痕が観察され、C2類でも54.5%と使用痕の認められる率が高い。またD類は2点と資料数が少ないので両者ともに磨耗痕が認められる。

第13表 石鋸石材表

石材 分類	鉄石英	頁岩	メノウ	流紋岩	凝灰岩	合計
A類	4					4
B類	3	1			1	5
C1類	5	1	2	1	1	10
C2類	2	7		1	1	11
D類	1	1				2
分類不明	1	1				2
合計	16	11	2	2	3	34



第54図 石鋸長幅分布図



第55図 石鋸重量分布図

第14表 石鋸錐部断面形表

錐部 分類	三角形	四角形	台形	菱形	不明	合計
A類	3	1				4
B類	3	1				5
C1類	10					10
C2類	9	1	1			11
D類	2					2
分類不明	1				1	2
合計	28	3	1	1	1	34

④ 石匙 (図版173-174)

総数7点が出土している。完形品は6点で、いずれも縦型石匙であるが、細身のものと(1778, 1779, 1782)やや幅広のもの(1780, 1781, 1783)が認められる。また、先端部の形状も1779, 1780, 1783は尖るが1778, 1781, 1782は丸みを帯びる。破損品の1784も遺存する部分から推定すると縦型石匙になると思われる。

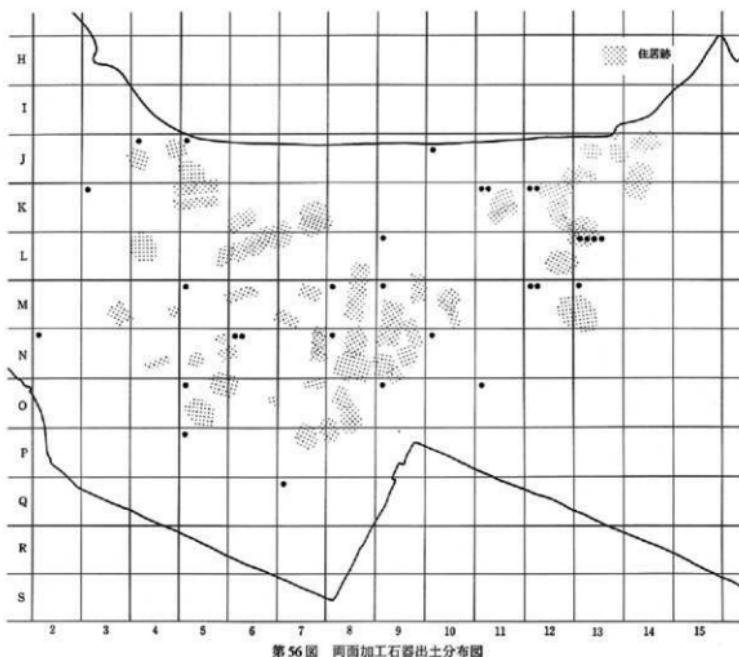
二次加工は、1780がほぼ全面に施され、刃部も交互削離により作出される丁寧なものであるが、その他は周縁部に片側からの加工が施される程度である。

石材は、鉄石英・頁岩・黒曜石・流紋岩・砂岩が用いられ、硬質な石材が多い。

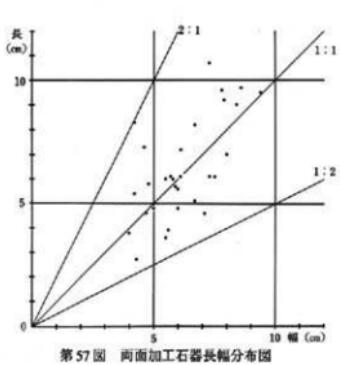
使用痕は、1779の裏面の一部に微細な剥離、1783に磨耗痕・光沢痕が認められる。

⑤ 両面加工石器 (図版174-175)

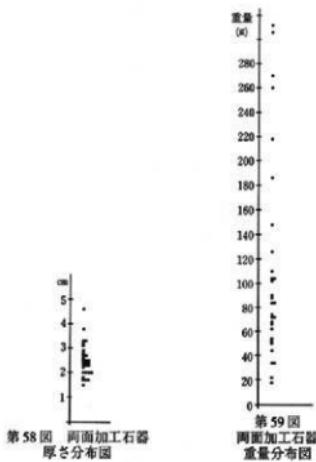
出土分布状況 第56図参照。総数45点が出土している。遺構内からは4点の出土をみるが、住居跡から出土したものはない。集落内での出土状況は、環状集落中央部からの出土がわずかにみられるが、主に住居跡の分布に沿って出土している。その中でも特に東側の住居群に集中する傾向がある。



第56図 両面加工石器出土分布図



第57図 両面加工石器長幅分布図



第58図 両面加工石器
厚さ分布図

第59図 両面加工石器
重量分布図

長さと幅 第57図参照。長さ幅ともに4~10cmの範囲に分布する。円形・橢円形の平面形態を基本とするものが多いことから、長幅比は、1:1を中心にして3:2~2:3の範囲に含まれるもののがほとんどである。

厚さと重さ 第58・59図参照。重さは20~320gに分布し、その範囲は広いが、その中でも40~110gのものが比較的多い。厚さは、2~3cmに集中する。

石材 第15表参照。頁岩(26.7%)・鉄石英(20.0%)・流紋岩(11.1%)など緻密な石材が比較的多く用いられている。

素材 素材の深部に及ぶ二次加工により素材の識別は困難で、識別可能なものは11点(30%)だけである。剥片素材のものは9点で、そのうち縦長剥片を素材とするもの6点、横長剥片を素材とするもの3点である。また扁平錐を素材とするものが2点存在する。また、器面のいずれかに自然面を残すものは27点(60.0%)存在し、前報告の分析結果とはほぼ一致する。

その他 折断状の痕跡を残すものが12点(26.7%)認められる。また製作以前に使用されたものか転用後に使用されたものであるのか不明であるが、正面のほぼ中央に敲打痕を残すものが1点存在する(1789)。

第15表 両面加工石器石材表

石材	頁岩	黑色頁岩	鉄石英	流紋岩	カルン フェルス	凝灰岩	黒色麻痺 安山岩	安山岩	砂岩	粘板岩	花崗岩	合計
出土数	12	2	9	5	4	4	3	1	3	1	1	45

⑥ 三脚石器(図版175~178)

分類別出土数と出土分布状況 第60図・第16表参照。

総数248点が出土している。遺構内からは44点(17.7%)で、このうち住居跡から出土しているものは15点があり、特にSB3158Aの柱穴となるP1799Aから4点がまとまって出土しているが、詳細な記録に乏しい。遺構外から出土しているものが204点(82.3%)と大半を占める。

分類別では前回の報告と同様にA2類が最も多く、47.2%と全体の半数近くを占めている。

集落1内の出土分布状況は、環状集落の住居跡の分布とはほぼ一致し、大きく3つの集中区にまとまる。環状集落の東側ではJ~M4~6に集中し、南側ではJ~M12~13に、西側ではL~O7~9が集中域である。分類別では、B類が南側と西側の集中域から出土が多い傾向がある。

長さと幅 第61図参照。完形品・ほぼ完形品235点を対象とし、長辺を幅として計測した。三脚石器全体としては、長さが4~8cm、幅5~10cmの範囲のものが大半である。分類別ではA1類は長さ5~7cm・幅6~9cmの小型のものと、長さ8~9cm・幅10~12cmの中型、そして長さ13cm以上・幅15cm以上の大型のものが認められるが、小型のものの割合が高い。A2類では、長さ3~7cm・幅4~9cmに比較的まとまる。A1類と比較するとやや小型のものが多く、大型品は認められない。B類は長さ4~8cm・幅5~10cmのもの

第17表 三脚石器自然面集計表

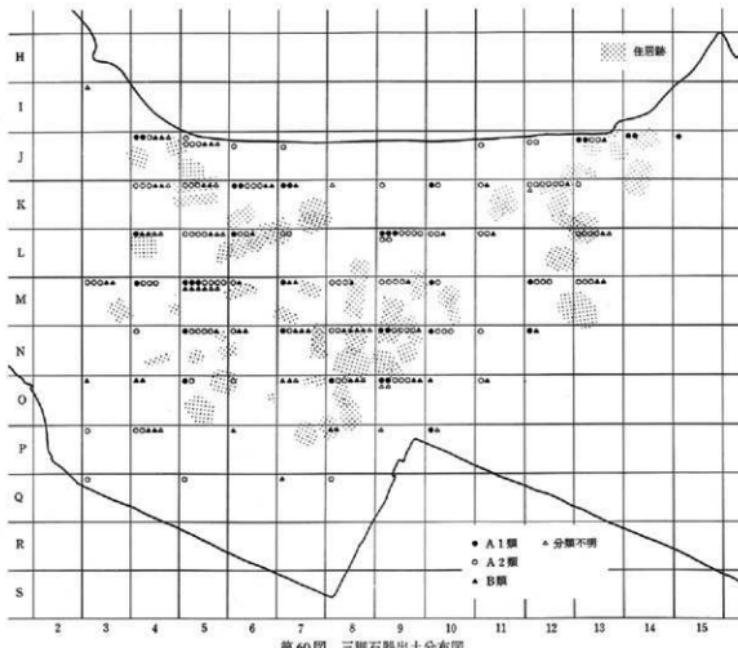
自然面	有			無	不明	合計
	正面	正裏面	側面			
A1類	31	1		3	2	37
A2類	105	1		6	5	117
B類	58		1	4	7	70
分類不明	21			2	1	24
合計	215	2	1	15	15	248

第16表 三脚石器分類別出土数

出土面 分類	住居跡	プラスコ 状土坑	土 坑	ピット	遺構外	合計
A1類	3		1	4	29	37
A2類	8	5	7	7	90	117
B類			1	6	63	70
分類不明		1	1		22	24
合計	11	6	10	17	204	248

第18表 三脚石器遺存状態表

遺存 分類	完形	一部欠	二脚欠	三脚欠	破 片	合計
A1類	32	5				37
A2類	86	28	3			117
B類	59	10	1			70
分類不明	13	2	3	1	5	24
合計	190	45	7	1	5	248



第60図 三脚石器出土分布図

第19表 三脚石器石材表

石材 分類	粘板岩	結晶片岩	硬砂岩	紗 岩	ホルン フェルス	頁 岩	黒色頁岩	凝灰岩	安山岩	黒色凝灰 安山岩	流紋岩	礁 岩	不 明	合計
A1類	4	10	2	1	9	3	2	3	1	1			1	37
A2類	54	25	14	8	9	3	1	1			1			117
B類	34	13	5	6	6	3	2					1		70
分類不明	12	7	1		2	1		1						24
合 計	104	55	22	15	26	10	5	5	2	1	1	1	1	248

ものが多くある。長幅比は分類ごとに偏りはありません見られず、2:3を中心で分布する。

厚さ 第63図参照。比較的集中が認められる。A1類は1.5~3.5cm、A2・B類は0.8~2.2cmに分布するものが多い。分類基準を反映して、A1類は厚手となる。

重さ 第62図参照。全体的に分布域は広い。A1類は40~140g、A2類は10~130g、B類は20~80gのものが多い。A1類には250g以上の重量をもつものもあり、最大は970gと最も分布域が広くなっている。

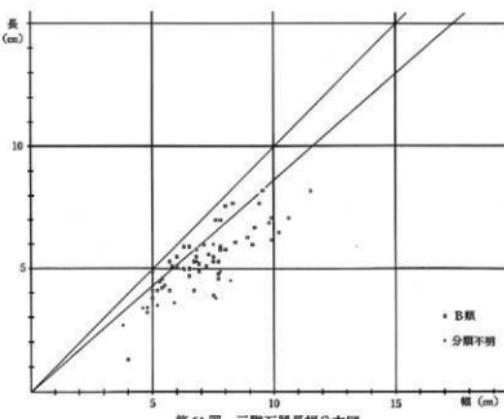
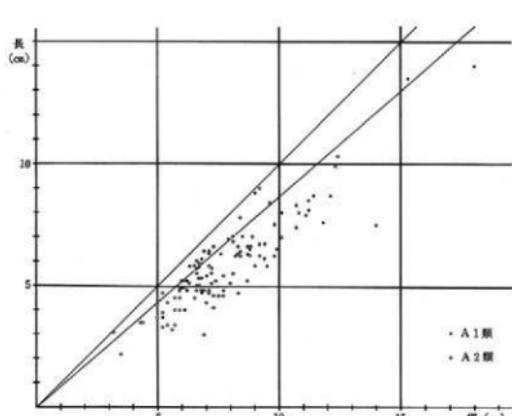
石材 第19表参照。粘板岩(41.9%)・結晶片岩(22.2%)・ホルンフェルス(10.5%)・硬砂岩(8.9%)が多く使われている。A2・B類とともに石材選択はこれと同様の傾向だが、A1類は粘板岩の比率が前二者の石材と比較して10.8%と極端に低く、かわってホルンフェルス・頁岩の割合がやや高くなっている。

素材 2点が刷毛面を素材とする他は削片素材である。しかし、主要削面がおむね筋理に沿った削離であることや、著しい風化・二次加工等により長削片であるのか横長削片であるのか大部分が不明である。また、全体の87.9%に自然面が除去されずに残されている。その部位はほとんどのものが正面であるが、

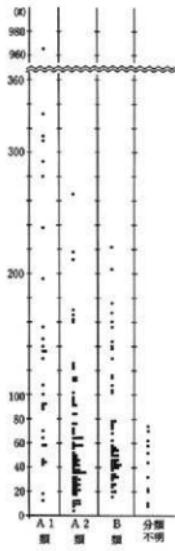
側面にあるものも1点、扁平標素のものは、正・裏面に認められる（第17表参照）。

遺存状態 第18表参照。観察表には脚部の欠損状態を記入した。破損品は58点（23.4%）存在し、いずれも脚部が欠損している。分類ごとの破損品の割合は、A1類が13.5%、A2類が26.5%、B類が15.7%であり、A2類の破損品の割合が高く、1/4強が破損していることになる。これは、A1・B類と約2倍強の比率である。

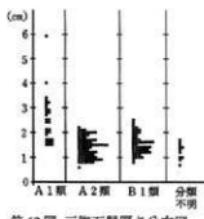
使用痕 119点に使用痕と思われる磨耗痕あるいはつぶれが認められる。使用痕は、側面・裏面によく認められ、裏面では磨耗痕だけが認められる。正面や脚端部に認められるものは各1点ずつである。



第61図 三脚石器長幅分布図



第62図 三脚石器重量分布図



第63図 三脚石器厚さ分布図

⑦ 板状石器 (図版178~180)

分類別出土数と出土分布状況 第64図・第20表

参照。総数412点が出土している。このうち遺構内からは57点(13.8%)で、住居跡からの出土が多く25点を数える。分類別ではB類が最も多く188点(45.6%)、A類が123点(29.6%)を数え、A・B類合わせて75.2%と大部分を占める。

集落内の出土分布状況は環状集落の住居跡の分布に沿って出土する傾向が強い。また、C類の大部分は7ラインよりも西側で出土しているのが特徴的である。

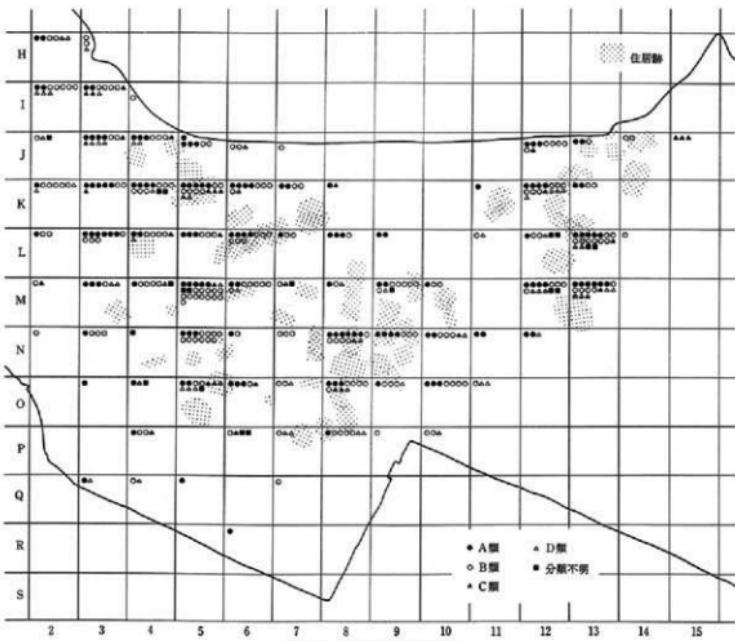
長さと幅 第65図参照。完形・ほぼ完形品371点を対象とし、長辺を幅として計測している。分類に関わりなく長さ2~8cm、幅3~7cmに大部分が収まるが、A類だけは他の分類と異なり、長さ6cm以上の大形品は極端に少なくなる。長幅比はA・B・D類が1:1~1:2であるが、C類は1:1~2:3に分布し幅が狭くなる傾向にあり、円形を指向している。

厚さ 第66図参照。分類ごとに差異は認められない。全体的に0.5~1.2cmにほぼすべてが収まるが、その中で計測値が特に集中するのは、0.8~1.2cmである。

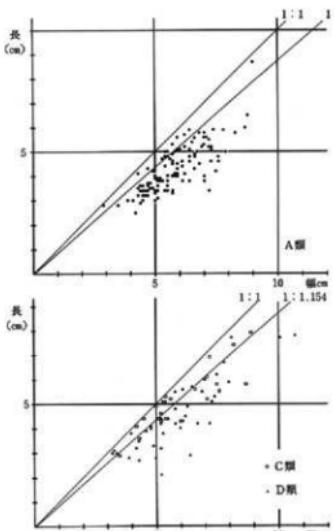
重さ 第67図参照。分類による傾向にあまり差異は認められない。全体的に10g~40gに大部分が分布す

第20表 板状石器分類別出土数

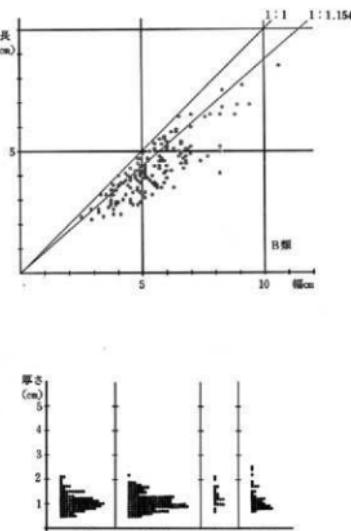
分類	出土量						合計
	住居跡	フラスコ状土坑	土 坑	ピット	立 石	遺構外	
A類	2	4	5	4		108	123
B類	16	3	3	8		158	188
C類		1	1	1	1	22	26
D類	6	1				50	57
分類不明	1					17	18
合計	25	9	9	13	1	355	412



第64図 板状石器出土分布図



第65図 板状石器長幅分布図



第66図 板状石器厚さ分布図

第21表 板状石器石材表

石材分類	粘板岩	結晶片岩	砂岩	硬砂岩	カルンフェリス	凝灰岩	頁岩	安山岩	流紋岩	チャート	花崗岩	輝緑岩	不明	合計
A類	68	21	10	11	6	4	1	1					1	123
B類	91	43	19	17	6	4	3	2	1	1	1			188
C類	7	7	4	1	2			2				1	2	26
D類	20	11	8	3	4	5	2	3					1	57
分類不明	7	2	2		2	3	2							18
合計	193	84	43	32	20	16	10	6	1	1	1	1	4	412

る。長さ・幅の大きさを反映して、B・C・D類は60g以上のものもやや多い。

石材 第21表参照。粘板岩(46.8%)・結晶片岩(20.4%)・砂岩(10.4%)・硬砂岩(7.8%)がよく用いられ、板状に剥離する石材が多い。C類で結晶片岩の割合が他の分類よりもやや多いほかは、分類ごとに偏りは特に認められない。

素材 6点が扁平礫素材、25点が素材不明である他はすべて平板状の剥片を素材とするが、器面のいずれかに自然面を多く残すものが340点(82.5%)認められる。自然面のある部位は正面だけのものが306点と最も多い(第22表参照)。

遺存状態 第23表参照。観察表の項目にはA・B類・分類不明が、脚部の欠損状態、C・D類は残存部の割合を記入した。前回の報告とは大きく異なり、完形品・ほぼ完形品が90.0%を占め、破損品の割合が著しく低い。これは、破損についての認識が前回報告と本報告書では異なるためと思われる。本報告書では他の部位と比べて破損面が明らかに色調を異なるものを破損として取り扱い、同一色調のものは素材状況を示すと解しこれらの急角度剥離は破損とはしなかった。破損部位はA・B類は一脚のみ破損するものだけであり、二脚以上破損するものはない。C・D類においても破損品は1/2以上遺存しており、破損品といえども

第22表 板状石器自然面集計表

自然面	有					無	不明	合計
	正	正・側	正・裏	正・側・裏	側・縁			
A類	107	1		1	1	9	4	123
B類	138	7			7	20	16	188
C類	16	1	1		2	3	2	26
D類	35	1	2	2	4	6	7	57
分類不明	10	2			1	4	1	18
合計	306	12	3	3	15	1	42	412

第23表 板状石器遺存状態表

遺存 分類	完形	有						合計
		一脚欠	二脚欠	2/3脚	1/2脚	破片		
A類	119	4						123
B類	174	14						188
C類	24			1	1			26
D類	53	2		1	1			57
分類不明	1	4	2	1	2	8	18	
合計	371	24	2	3	4	8	412	

残存率は高い。

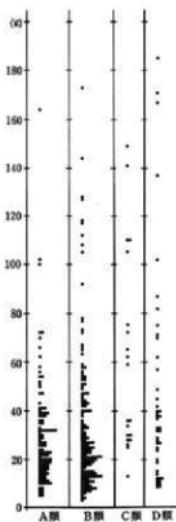
使用痕 262点 (63.6%) に磨耗痕・つぶれ、あるいは線条痕が認められた。磨耗痕は、155点で観察され、側縁や裏面に認められる。つぶれはすべて側縁に認められ119点に観察された。これらのうち磨耗とつぶれが両方とも観察されるものも15点を数える。また線条痕は2点で認められるにすぎないが、いずれも裏面に認められる。また、石器正面の一部を除くほぼ全面を研磨したものが1点出土しており、注目される (1839)。

⑧ 打製石斧 (図版180~187)

分類別出土数と出土分布状況 第68図・第24表参照。総数1,322点が出土しているが、未成品と思われるものが1点含まれる。これらのうち遺構内からは145点 (11.0%) 出土しており、その内訳は住居跡52点、フラスコ状土坑23点、土坑21点、ピット49点である。大半の遺構で1点ないし2点が出土している程度であるが、その中でSB130Aが6点、SI618Aの柱穴である

P293Aが7点、SB1299Aが7点、SK1838Aが6点、SK1973Aが5点となる程度まとめて出土しているものもあり注目されるが、詳細な出土状況の記録に乏しい。分類別ではB3類412点 (31.2%)、A3類159点 (12.0%) の出土が多い。

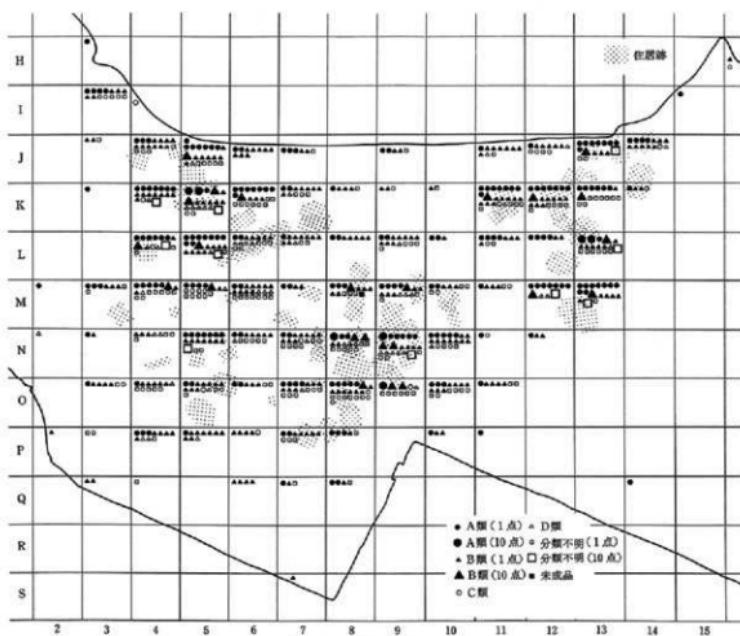
集落跡1内の出土状況は、全体的には環状集落の住居の分布とはほぼ一致しており、遺構外出土として取り上げたものの中の340点も住居跡内にかかる地点からの出土である。分類別ではA・B類には特に偏りが認められないが、C類は7ラインから西側に、D類は9ラインから西側に分



第67図 板状石器重量分布

第24表 打製石斧分類別出土数

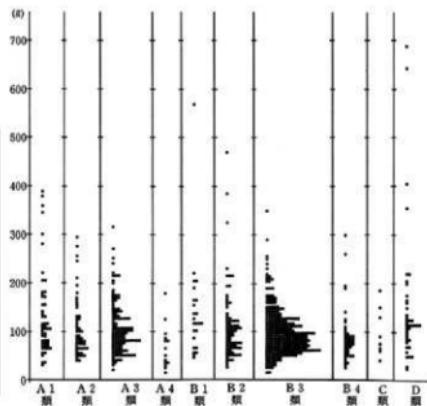
分類	出土位置					合計
	住居跡	フラスコ 状土坑	土 坑	ピット	遺構外	
A1類	2	1		4	65	72
A2類	3			3	58	64
A3類	12	4	3	8	132	159
A4類	1				16	17
B1類	1	1		1	26	29
B2類	4	1	2	5	96	108
B3類	16	6	5	15	370	412
B4類	3		1		63	67
C類				1	9	10
D類	2	2	1	1	58	64
未成品	8	8	9	11	283	319
分類不明	8				1	1
合計	52	23	21	49	1177	1322



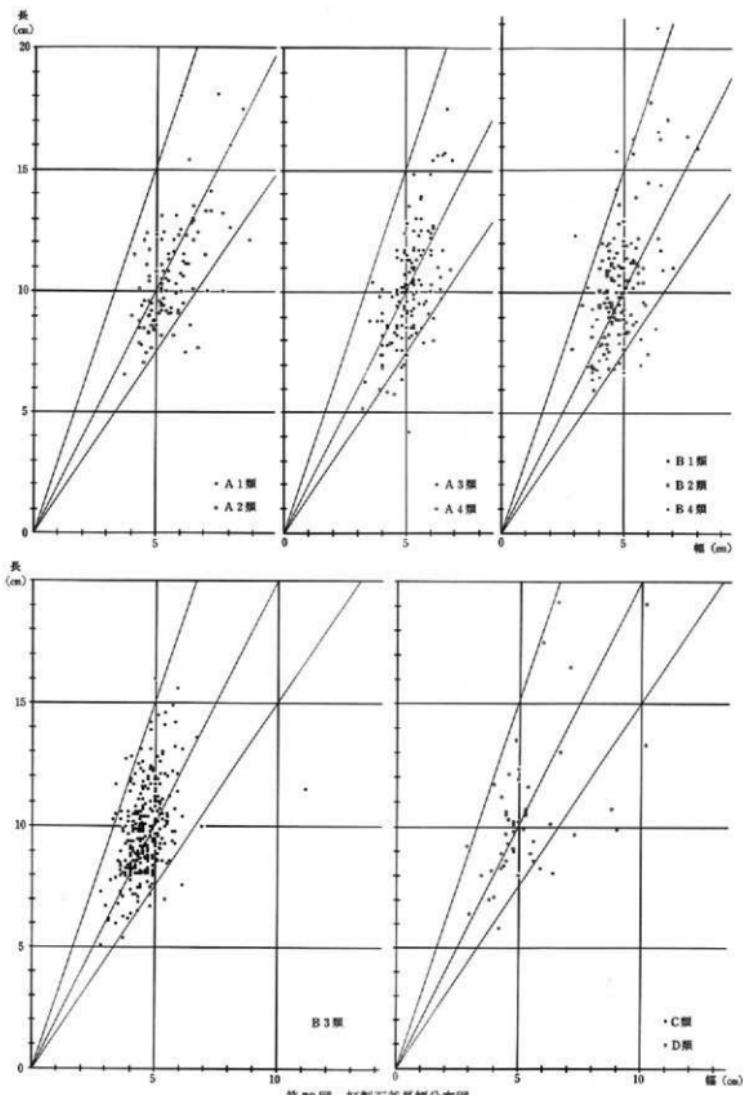
第68図 打製石斧出土分布図

第25表 打製石斧素材表

分類	材料				合計
	縦長削片	横長削片	扁平薄片	不明削片	
A1類	3	25		26	54
A2類	5	30		22	57
A3類	4	75		55	134
A4類		8		8	16
B1類	5	8		12	25
B2類	8	35		46	89
B3類	20	134		165	322
B4類	2	15		36	53
C類	4	1		4	9
D類				42	42
完成品				1	1
合計	51	331	42	378	802



第69図 打製石斧重量分布図



第70図 打製石斧長幅分布図

布している。

長さと幅 第70図参照。完形品・ほぼ完形品802点を対象とする。分類に関わり無く長さ8~13cm、幅4~6cmに分布するものが多いが、長さ16cm以上、幅6cm以上の大型品も一定量存在する。長幅比は全体で3:1~3:2を中心に分布するが、分類によってはこの範囲内で偏るものがある。A2・A4類は2:1~3:2に分布し全体の中では幅広い側にあり、C類は3:1~2:1とより綫長になる傾向が強い。D類は2:1よりも幅広いものが多い傾向がある。

重量 第69図参照。50~180gに収まるものが多い。分類別の傾向は顕著ではないが、300gを超える重量品はA1類・B1類・B2類・D類に認められる。D類は礫素材であるためか、特に600gを超える重いものが認められる。

石材 第26表参照。結晶片岩が368点(27.8%)、粘板岩が331点(25.1%)とよく使用されるほか、硬砂岩(15.6%)、ホルンフェルス(14.0%)などが使用されている。

素材 第25表参照。完形品・ほぼ完形品802点を対象とする。分類基準どおりA~C類は剥片を素材とし、D類は扁平盤を素材とする。剥片を素材とするもののうち331点(41.1%)は横長剥片を使用し、綫長剥片を素材とするものは6.4%にすぎない。不明としたものは、剥片を素材としながら綫長剥片か横長剥片か判断できないものである。これには深部まで及ぶ二次加工や風化によるものや、あるいは粘板岩や結晶片岩など節理面で板状に剥離する石材を主要な石材としていることによる。また、剥片素材であってもいずれかの部位に自然面を残すものが645点(80.4%)と認められる。そのほとんどが正面だけに自然面を残すものである(第27表参照)。

遺存状態 第30表参照。破損品520点を対象とする。破損部位は刃部側で破損したもの(CC)がやや多く176点(33.8%)を数える。ほぼ中央部で破損したものの(BB)が164点(31.5%)、基部側で破損したものの(AA)が107点(20.4%)でこれに続く。刃部から基部へ綫方向に破損したものは少ない。

遺存部分では基部側を残すものが287点、刃部側を残すものは177点と前者のほうが多い。しかし、破損部位が基部側にある107点のうち66点が刃部が遺存し、基部の遺存するものの方が多い。これは、遺存部分の大きい方が再利用のため回収されるためか、あるいは集落内における使用による等の可能性を考えられる。

刃部平面形・断面形 第28・29表参照。完形品・ほぼ完形品801点を対象とする。平面形は前回の報告にしたがって、円刃・直刃・扁刃に分けた。C類のほとんどが直刃である他は円刃のものが多く64.9%を占

第26表 打製石斧石材表

石材 分類	結晶片岩	粘板岩	硬砂岩	砂 岩	ホルン フェルス	頁 岩	黒色頁岩	安山岩	黑色巖質 安山岩類	凝灰岩	礫 岩	流紋岩	その他	合 計
A1類	18	20	15	5	9	2	1				2			72
A2類	12	19	11	8	11	2						1		64
A3類	47	33	27	19	15	5	2	4	1	3	1	1	1	159
A4類	4	5	2	1	2	2				1				17
B1類	6	5	2	4	5	4		1					2	29
B2類	27	29	17	11	16	2		1		2	2	1		108
B3類	116	106	63	37	61	9	5	7	1	3	2	1	1	412
B4類	27	19	4	12	3	1	1							67
C類	2	1	1			3		3						10
D類	10	20	5	7	11	1		5					5	64
未成品	1													1
分類不明	98	74	59	16	52	7	2	5	1	2	1	2	11	319
合 計	368	331	206	120	185	38	11	26	3	11	7	5	11	1322

3 集落跡の調査

第27表 打製石斧自然面集計表

残存部分 分類	正面・正面と周縁部						周縁部のみ						正面・正面と周縁部						不 明	合 計		
	正 面 の 基 礎 部 み	正 面 ・ 片 刃 部 無 縫	正 面 ・ 基 礎 部 ・ 片 刃 部 無 縫	正 面 ・ 刀 部 ・ 片 刃 部 無 縫	基 礎 部 の み	刀 部 の み	基 礎 部 ・ 刀 部 無 縫	片 刃 部 の み	基 礎 部 ・ 刀 部 無 縫	刀 部 ・ 片 刃 部 無 縫	周 縁 部 の み	正 面 裏 面 ・ 基 礎 部 無 縫	正 面 裏 面 ・ 片 刃 部 無 縫	は ば 全 面								
A1類	40	2	1			2				1						7	1	54				
A2類	45	1	1			2		2								5	1	57				
			47					4														
A3類	88	1	1	1		5		3	1	1						21	12	134				
A4類	10					1										2	3	16				
B1類	17							1								5	2	25				
B2類	65	5	2			6	1									6	4	89				
B3類	209	9	3	8	1	1	1	12		5						40	33	322				
B4類	34	1	1	3			1									7	6	53				
C類	6							1								2		9				
D類	1	1									13	5	7	6	9			42				
合計	515	19	7	14	2	1	1	29	1	1	11	0	2	1	13	5	7	6	9	95	62	801
	569							45								40						

第28表 打製石斧刃部平面形表 第29表 打製石斧刃部断面形表

刃部 分類	刃部平面形				刃部断面形				遺存部分 ・折れ方	個数	小計	遺存部分 ・折れ方	個数	小計	合計			
	円刃	直刃	扁刃	不明	合計	方頭 分類	両刃	片刃	不明	合計								
A1類	41	6	7		54	A1類	42	12		54	A1	25	A	A1'	22	A'	A'A'	
A2類	38	12	7		57	A2類	42	15		57	A2	14	41	A2'	32	66	107	
A3類	90	29	14	1	134	A3類	109	25		134	A3	2		A3'	12			
A4類	11	3	2		16	A4類	11	5		16	B1類	48	B	B1'	31	B'	BB'	
B1類	17	6	2		25	B1類	21	4		25	B2類	39	94	B2'	20	70	164	
B2類	50	23	16		89	B2類	75	14		89	B3類	7		B3'	9			
B3類	207	49	65	1	322	B3類	255	63	4	322	C1類	48	C	C1'	15	C'	CC'	
B4類	41	6	6		53	B4類	41	12		53	C2類	56	147	C2'	11	29	176	
C類	1	7	1		9	C類	9			9	C3類	43		C3'	3			
D類	24	6	11	1	42	D類	31	10	1	42	D	5		D'	12			
合計	520	147	131	3	801	合計	627	169	5	801	E	56						

第30表 打製石斧遺存部分と破損の仕方

遺存部分 ・折れ方	個数	小計	合計	AA'
A1'	22			
A2'	32	66	66	107
A3'	12			
B1'	31	B'		
B2'	20	70	70	BB'
B3'	9			164
C1'	15			
C2'	11	29	29	CC'
C3'	3			176
D'	12			

める。断面形は片刃・両刃に分けた。C類は分類基準どおりすべて片刃であるが、その他は両刃のものの比率が高く、A類で78.2%、B類で80.2%、D類で73.8%を占める。

使用痕 完成品の完形品・ほぼ完形品801点を対象とする。201点(25.9%)に使用痕が認められる。これらのすべてに磨耗痕が認められ、またその中の22点には擦痕も観察される。使用痕の認められる部位は、圧倒的に刃部が多い。また、基部付近に磨耗痕や擦痕が認められるものが7点あり、装着痕として注目される。

つぶし 完形品・ほぼ完形品801点を対象とする。側縁の後線がつぶされているつぶしが、143点(17.9%)に認められる。両側縁に施されるもの(63点)と片側縁のみに施されるもの(80点)とがあるが、片側縁に施されるものがやや多い。分類別にみるとA・B類では約20%につぶしが観察されるが、C・D類では11%程度にしか認められない。

⑨ 磨製石斧 (図版 187~189)

分類別出土数と出土分布状況 第71図・第31表参照。総数126点が出土している。遺構から出土しているものは23点(18.3%)で、このうち住居跡からは11点が出土している。特にSI1847Aからは3点がまとまって出土しているが、詳細な出土状況の記録に欠ける。分類別の出土数は、A類が56点(44.1%)で最も多い。分類不明のはほとんどが欠損しているため全体の長さがわからず細分できなかったが、A類の欠損品である。

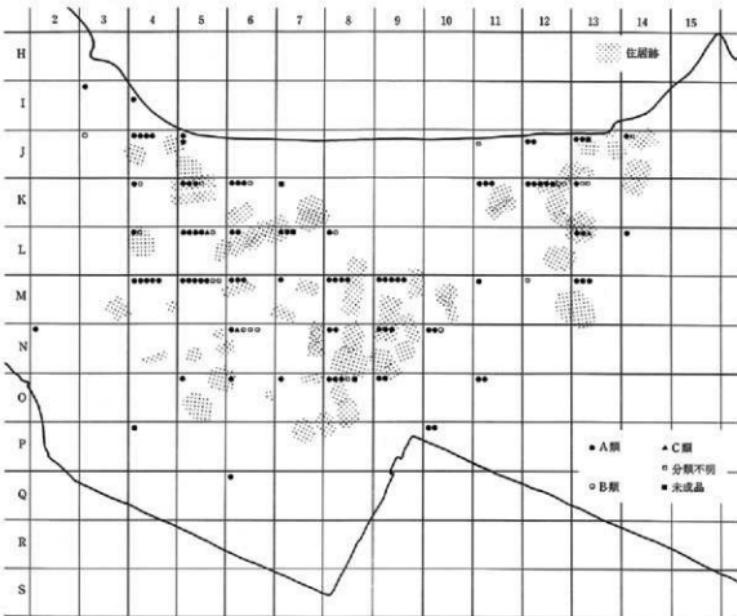
集落1内の出土分布状況は、住居跡の分布に沿った地点からの出土が多い。

長さと幅・重さ 第72・73図参照。完形品・ほぼ完形品25点を対象とするが、B・C類には完形品が出士せず、A類だけが分析の対象となる。A類は法量が細分基準となるので、長さ・幅はそれを反映する。長幅比は特に偏りは認められないが、3:1から3:2に大部分が分布する。重量は長さ・幅をそのまま反映している。

石材 第32表参照。蛇紋岩の使用割合が高く、65点(51.6%)と半数以上を占める。その他には安山岩・硬砂岩など多種類の石材が使用されているが、それぞれの数は少ない。また、石材によって出土分布に偏りが認められる。蛇紋岩・安山岩・凝灰岩は集落1のはば全城から出土があるが、閃緑岩製のものは環状集落東の住居群からのみ出土する。また、硬砂岩・砂岩・

第31表 磨製石斧分類別出土数

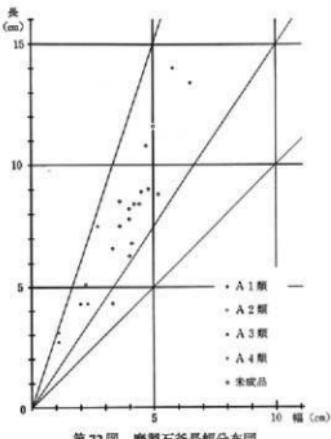
分類	住居跡	プラスコ 状土塊	土 坑	ピット	遺構外	合計
A1類	1			2	26	29
A2類	2	1	1	1	17	22
A3類	1				2	3
A4類					2	2
B類	1				2	3
C類					3	3
分類不明	5		2	5	48	60
未成品	1				3	4
合 計	11	1	3	8	103	126



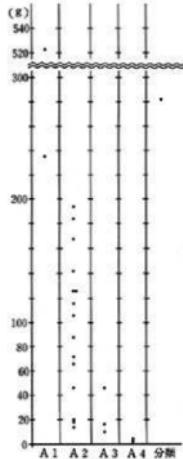
第71図 磨製石斧出土分布図

第32表 磨製石斧石材表

石材分類	蛇紋岩	安山岩	ホルンフェルス	輝緑岩	硬砂岩	砂岩	凝灰岩	閃緑岩	粘板岩	緑色凝灰岩	流紋岩	不明	合計
A1類	10	5		5	5	1	1	1				1	29
A2類	17					3				1	1		22
A3類	2								1				3
A4類	1	1											2
B類	3												3
C類	1	1			1								3
分類不明	29	7		2	4		7	5	1	1		3	59
未成品	2	1	1						1				5
合計	65	15	1	7	10	4	8	6	3	2	1	4	126



第72図 磨製石斧長幅分布図



第73図 磨製石斧重量分布図

輝緑岩製のものは環状集落南と西の住居群からのみ出土している。

遺存状態 第33表参照。破損品101点を対象とする。破損部位は基部側(AA)が8点、ほぼ中央で破損するもの(BB)30点、刃部側で破損するもの(CC)が32点であり、刃部に近いほうで破損しているものの数が多い。遺存部分では、基部側が遺存するもの(A・B・C・D)が44点、刃部側が遺存するもの(A'・B'・C'・D')が28点で、基部側の遺存が多い。特に刃部側で破損しているものにこの傾向が強い。また、中央部のみが遺存するもの(E)は8点、細片16点である。

刃部平面形・断面形 刃部の遺存するものすべてを対象とし、平面形で49点、断面形で55点が判別可能である。平面形は円刃が多く75.6%を占め、直刃・扁刃はわずかである。断面形では両刃が94.5%と圧倒的に多い。

使用痕 総数126のうち29点に使用痕が認められる。刃部に磨耗痕のあるものは16点認められる。基部

第33表 磨製石斧遺存状態表

遺存部分・折れ方	個数	小計	合計
A1	3	A	AA
A2	2	5	
A3			
B1	6	B	BB
B2	5	13	
B3	2		
C1	3	C	CC
C2	7	24	
C3	14		
D	2		
E	8		
B'	11	B'	
B''	3	17	
B'''	3		
C'	4	C'	
C''	1	6	
C'''	1		
D'	2		

あるいは側面に敲打痕のあるものは10点あり、装着痕として注目される。また、2045のように正面あるいは裏面に敲打痕のあるものも3点認められ、装着痕であるのか他器種に転用されているのかは不明である。

その他 2052のように欠損後、未完成のものもあるが、残存部を敲打・剥離・研磨により再利用されるいるものがある。刃部を再生するもの5点で、基部を再生するもの6点である。また、破損後再生しているもののうち石材別では蛇紋岩が半数近くを占めているが、磨製石斧全体の石材の割合を考えると、特に蛇紋岩の再生率が高いわけではない。

⑩ 砺器類 (図版 189~192)

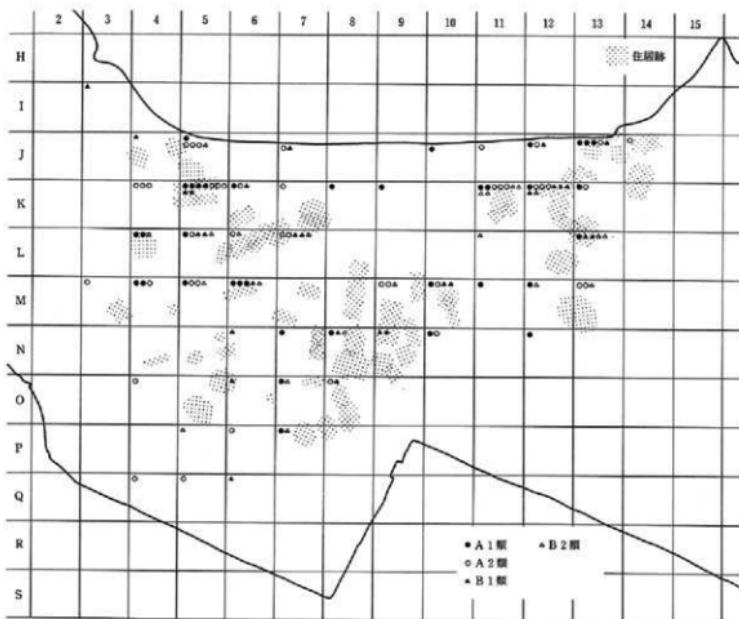
分類別出土数と出土分布状況 第74図・第34表参照。总数138点が出土している。遺構内からは32点(23.2%)の出土があるが、一遺構からまとまって出土しているものはない。分類別では、A2類46点(33.3%)、A1類40点(30.0%)とA類の出土が多い。また、刃部の断面形では、片刃の1類と両刃の2類とはほぼ同数の出土がみられる。集落内の出土分布状況は、ほ

ば住居跡の分布と一致するが、その中でも東と西の住居群からの出土が多く南の住居群からの出土が比較的少ない。

長さ・幅・重さ 長さ5~15cm、幅5~18cmに分布するものが多い。分類ごとに固有の傾向は特

第34表 砺器類分類別出土数

遺構内 分類	住居跡	プラスコ 状土坑	土 坑	ピット	遺構外	合 計
A1類	5	1	1	5	28	40
A2類	1	2		5	38	46
B1類	2	2	2	1	22	29
B2類	1	1	3		18	23
合 計	9	6	6	11	106	138



第74図 砺器類出土分布図

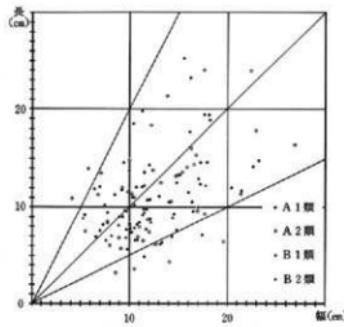
に見出せないが、A類にはB類と比較して長さ・幅ともに15cm以上を計る大型品の出現率が高い。長幅比は2:1~1:2に收まるものが大部分であるが、分類ごとに特に偏りは認められない（第75図参照）。

重さはA1類が400~800g、A2類が100~400g、B類が200~600gの範囲のものが多いが、個体差が大きく分布範囲は広い。またB類よりもA類のほうが礫を素材とする大型品が多いことから、A類のほうが重量分布も幅広い（第76図参照）。

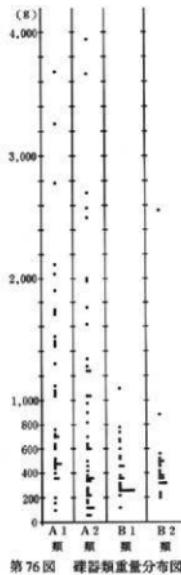
石材 第35表参照。多種類の石材が用いられているが、安山岩の割合が71.7%と集中する。その他の石材は、使用されても数点と安山岩の比率には及ばない。

素材 分類基準とお

り、A類は礫素材、B類は剥片素材である。剥片素材のものに関しては風化や二次加工のため縦長剥片であるのか横長剥片であるのかは不明であるものがほとんどである。また、剥片素材のものはすべてが一面に自然面を残している。



第75図 碓器類長幅分布図



第76図 碓器類重量分布図

第35表 碓器類石材表

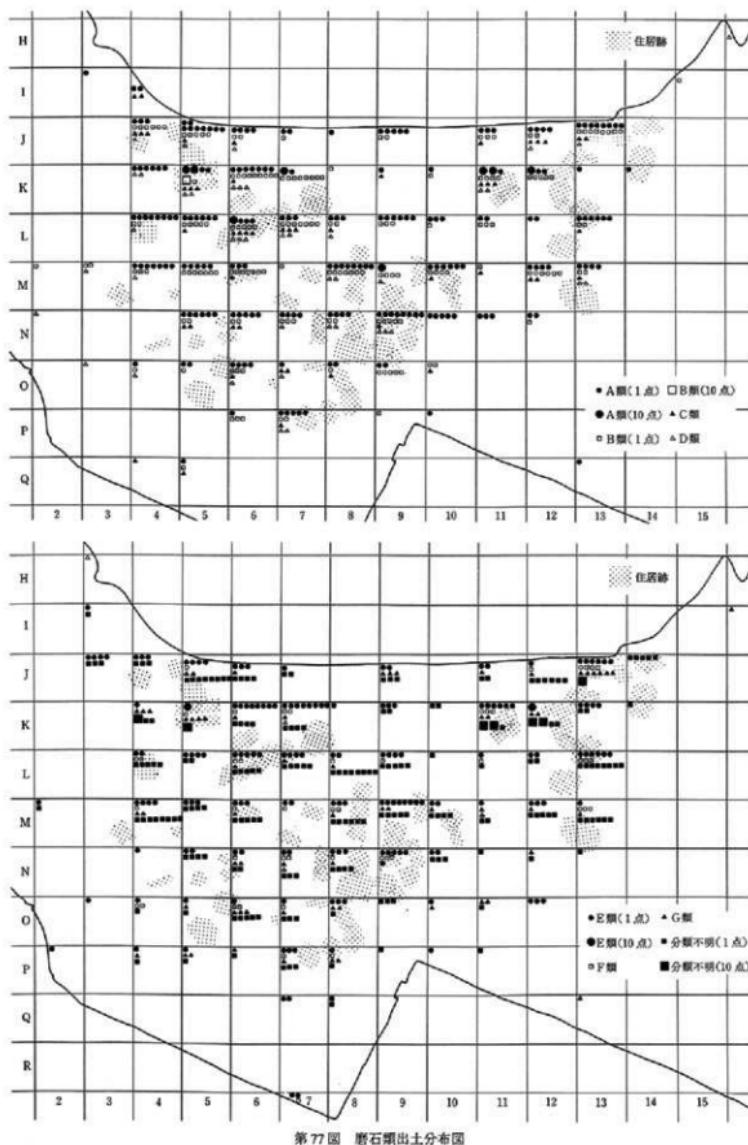
石材 分類	安山岩	ホルンフェルス	粘板岩	結晶片岩	頁岩	流紋岩	凝灰岩	硬砂岩	砂岩	その他	合計
A1類	35	1	1			1				2	40
A2類	35	1	2	3	1		2		1	1	46
B1類	19	2	2	1				2	1	2	29
B2類	10	5	1	1	4	2				0	23
合計	99	9	6	5	5	3	2	2	2	5	138

① 磨石類（図版192~194）

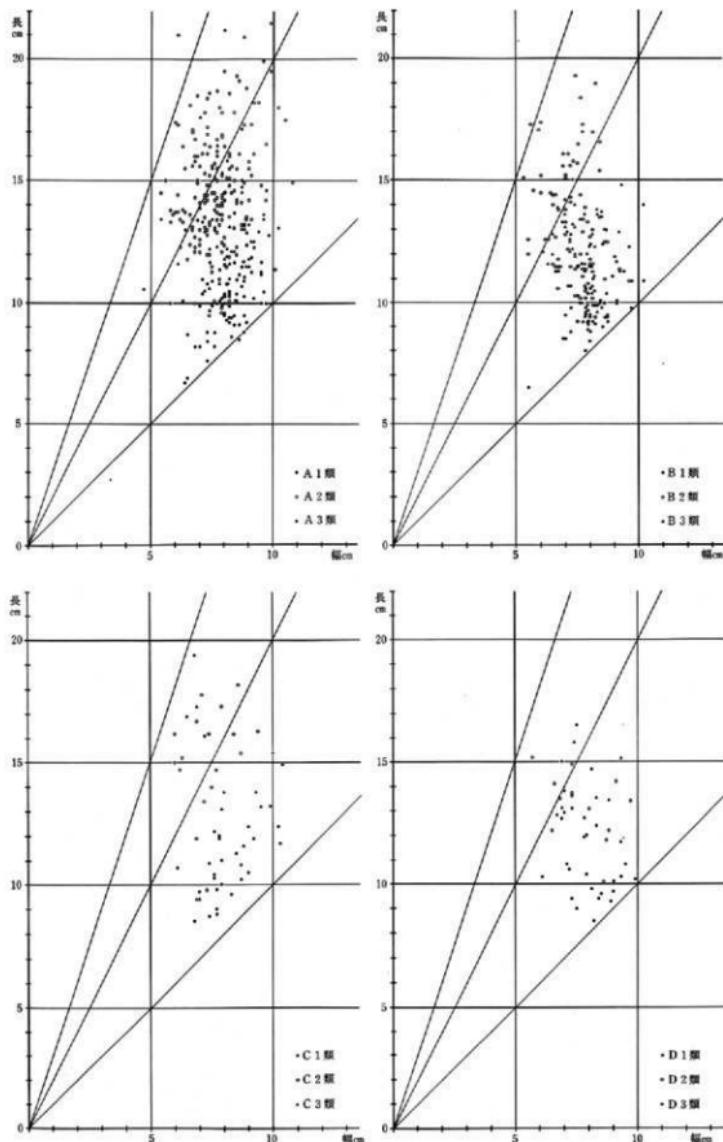
分類別出土数と出土分布状況 第77図、第36表参照。総数1,258点が出土している。遺構内からは263点（20.9%）が出土しており、住居跡89点、フ拉斯コ状土坑53点、土坑45点、ピット78点の出土を数える。他の器種に比べ比較的の遺構内出土の比率が高く、特にSB130A（6点）・SB1262A（9点）・SB1299A（7点）・SK445A（5点）・SK2619A（5点）・SK2628A（7点）等はまとまって出

第36表 磨石類分類別出土数

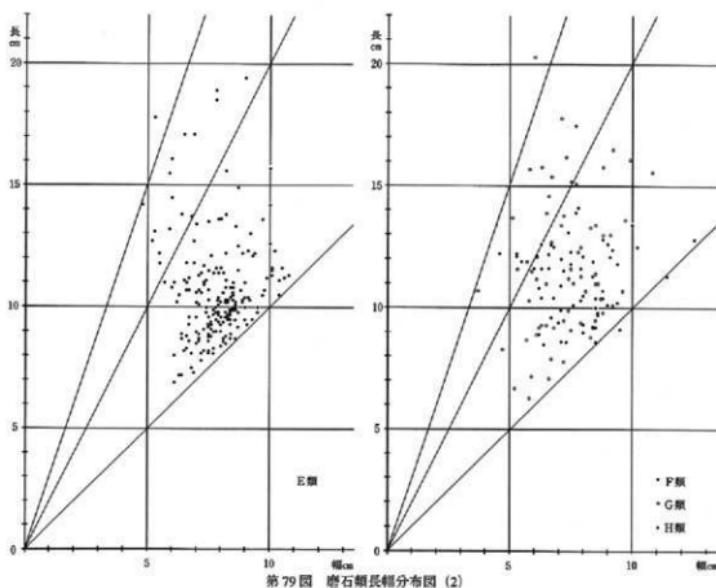
出土位置 分類	住居跡	フ拉斯コ 状土坑	土坑	ピット	遺構外	合計
A類	30	18	9	24	234	315
B類	16	8	4	16	154	198
C類	3	2	5	1	46	57
D類	2	1	5	3	42	53
E類	12	10	7	10	172	211
F類	3	1	3	3	52	62
G類	3	2		3	66	74
H類	1			1	2	4
分類不明	19	11	12	17	225	284
合計	89	53	45	78	963	1258



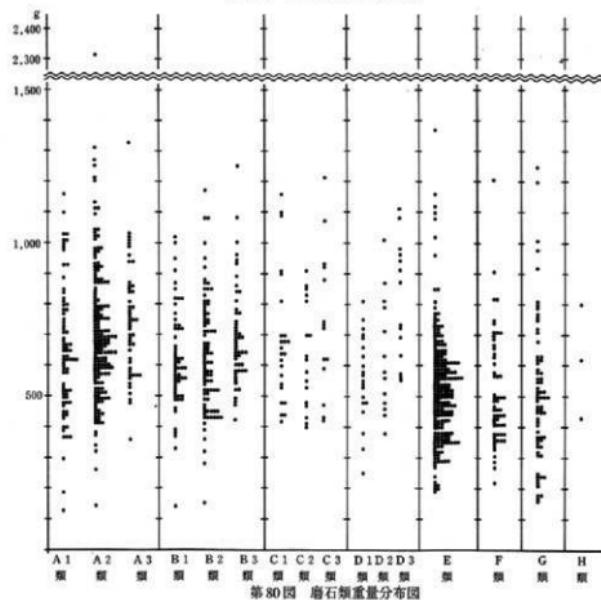
3 集落跡1の調査



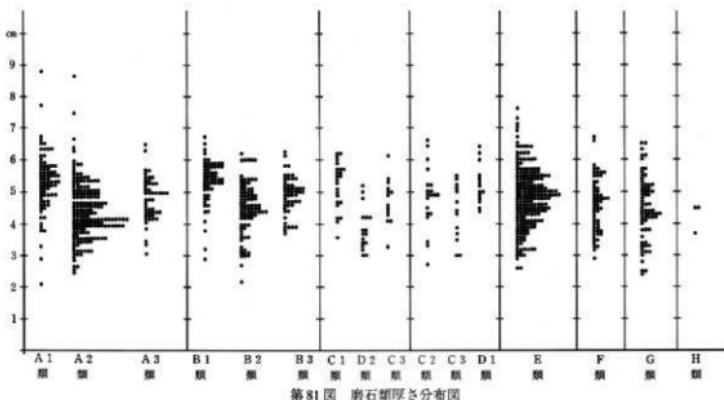
第78図 磨石類長幅分布図(1)



第79図 磨石類長幅分布図(2)



第80図 磨石類重量分布図



第81図 磨石類厚さ分布図

土しているが、詳細な出土状況の記録に乏しい。分類別では、A類(315点・25.0%)・E類(211点・16.8%)・B類(198点・15.7%)の割合が高い。集落1内の出土分布状況は、住居跡の分布に沿った地点からの出土が多いが、分類別の分布状況に差異は特に認められない。

長さと幅 第78・79図参照。完形品・ほぼ完形品948点を対象とする。磨石類全体では長さ8~17cm、幅6~8cm、長幅比3:1~1:1のものが大部分を占めるが、分類ごとに長さ・長幅比に若干差異が認められる。A・B・C・G類は長さ10~17cm、長幅比3:1~1:1が多いが、E・F類は長さ8~13cm、長幅比2:1~1:1と若干短めになる。特にE類は長幅比が12:1に集中し、円形の指向が強い。D類は前二者の中間的な様相を示す。長さは9~15cmのものが多く、長幅比は3:1~1:1に分布するが、その中でも2:1~1:1のものが多い。

また、磨痕のあるA・B・C・D類では、その位置によって大きさに若干差異が認められることが前回報告で指摘されているが、今回も同様の傾向が認められる。例えばA類では、正裏面に磨痕のあるA1類は長さ8~10cm、長幅比15:1~1:1に分布するが、側縁に磨痕のあるA3類は長さ13~17cm、長幅比3:1~3:2に分布し前者よりも大型で細長いものが使用される。磨痕が、正裏面と側縁にあるA2類は、長さ10~14cm、長幅比2:1~1:1に分布し、両者の中間的な形態を示す。同様なことが、B・C・D類にも認められ、使用法によって素材の選択があると言えるが、使用痕の組み合わせが増えるほど差は小さくなり、特にD類ではその他の分類よりも顕著ではない。

厚さ 第81図参照。分類にかかわりなく3~6cmに大部分が分布するが、前回報告と同様に磨痕の認められるA~D類については、磨痕のある位置によって、若干の偏りがある。たとえばA類では、A1類は4.5~7.0cm、A2類は3~6cmと前者よりも薄いものになる。A3類は4~6.8cmに大部分が分布し、両者の中间的な厚さをもっている。B類では、B1類は4.5~6.5cm、B2類は3~6cm、B3類は4~6cmに分布しA類と同様の傾向が認められる。C・D類についても資料数が少ないのだが、A・B類と同様の傾向が認められる。

重量 第80図参照。分布域は広い。使用痕が一種類だけ認められるA・B・G類を比較するとA類は400~1,000gに分布するものが多く、E類では300~800gに分布するものが多くA類よりも軽くなる傾向がある。G類では200~800gに分布するものが多く、E類とほぼ同様であるが軽いほうに分布域が広がっている。磨

第37表 磨石類石材表

石材分類	安山岩	花崗岩	凝灰岩	流紋岩	閃綠岩	砂岩	輝綠岩	緑晶片岩	緑色 凝灰岩	ホルン フェルス	輝岩	不明	合計
A類	216	27	20	15	9	10	7	2				9	315
B類	116	29	12	18	5	7	2	1				8	198
C類	30	6	6	7	3	2	1	1				1	57
D類	19	4	5	11	6	3	2					2	53
E類	138	20	16	11	7	4	6	1				8	211
F類	24	6	11	10	1	1	4	1				4	62
G類	26	5	16	14	2	1	2	3	1			4	74
且類	2	1					1					22	26
分類不明	96	33	44	41	13	16	13	4			1	1	262
合計	667	131	131	127	46	44	36	13	1	1	1	58	1258

痕のものが一番重く、凹痕がこれにつづき、敲打痕のものは凹痕のものと同じかや軽いということになる。磨痕とその他の組み合わせるB・C・D類はA類よりも軽いものが多くなる。また、磨痕の位置別にみると、長さ・幅を反映して正面に磨痕のあるものが、側面に磨痕があるものよりも軽い。

石材 第37表参照。安山岩の使用される割合が53.0%と圧倒的に多い。その他の石材では花崗岩・凝灰岩(10.4%)・流紋岩(10.1%)が比較的多く用いられている。しかし分類別にみると様相が若干異なる。安山岩の割合が高いものはA類(68.6%)・B類(58.6%)・E類(65.4%)であるが、D・F・G類では安山岩が石材の中で最も使用率が高いことに変わりはないものの、A・B・E類ほどではなく、かわって凝灰岩・流紋岩の比率が増している。前回の報告と同様に磨痕・凹痕の認められるものは安山岩の比率が高く、敲打痕の認められるものは安山岩の比率がやや少なくなると言える。

その他 被熱の認められるものが54点、ススの付着するものが25点存在し、その中で被熱とスス付着両方が認められるものが6点存在する。また、タール状のものが付着するものも7点ある。

⑫ 砥石(図版194・195)

出土数と出土分布状況 第82図・第38表参照。総数144点が出土している。遺構内からは50点(34.7%)出土し、遺構の種類は住居跡と土坑からの出土が多いが、特殊な出土状況のものはない。集落1内の出土分布状況は、他器種同様住居跡の分布に沿った地点での出土が多い。

長さと幅・重量 第83~85図参照。完形品・ほぼ完形品87点を対象とする。長さ12cm以下、幅9cm以下の小型のものと長さ15cm以上、幅12cm以上の大型品に大別できる。大型品の中には長さ30cmを超えるものもあり、分布域は広い。重量は小型品は500g以下であるが、大型品は1,000g以上を計り、3,300gを中心分布する。

第38表 砥石分類別出土数

使用面	住居跡	土坑	プラスコ 状土坑	ピット	遺構外	合計
磨面	14	7	2	6	44	73
磨面+溝	7	3	4	3	39	56
溝	1	1	1	1	11	15
合計	22	11	7	10	94	144

第39表 砥石石材表

石材	花崗岩	安山岩	砂岩	凝灰岩	閃綠岩	緑色 凝灰岩	粘板岩	真岩	合計
磨面	63	6		1		1		1	72
磨面+溝	54	1				1		1	57
溝	9	3	3						15
合計	126	10	3	1	1	1	1	1	144

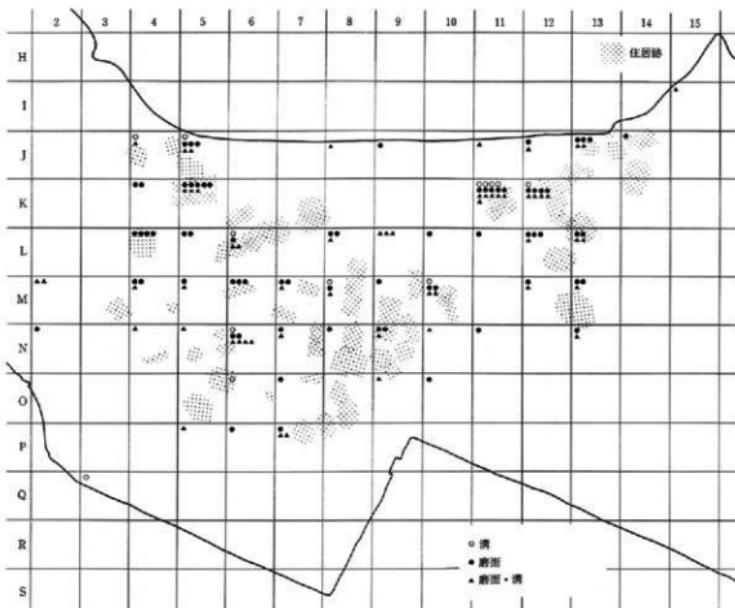
第40表 砥石遺存状態表

遺存 使用面	完形	ほぼ完形	2/3以上	1/2以下	破片	合計
磨面	31	16	6	14	5	72
磨面+溝	18	15	13	5	6	57
溝	4	3	2	5	1	15
合計	53	34	21	24	12	144

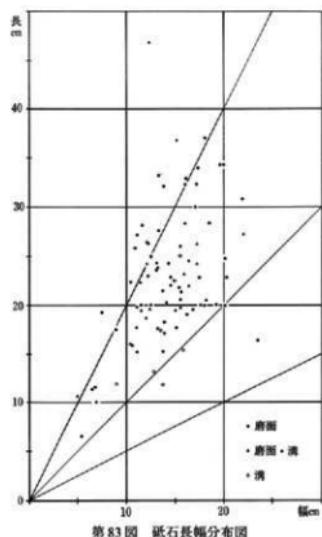
第41表 砥石使用面数

面数 使用面	1面	2面	3面	4面	5面	合計
磨面	52	13	5	1	1	72
磨面+溝	25	17	11	3	1	57
溝	8	7				15
合計	85	37	16	4	2	144

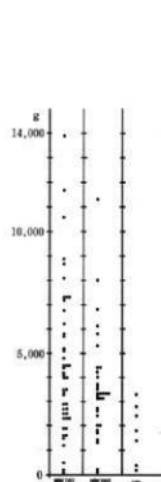
3 集落跡1の調査



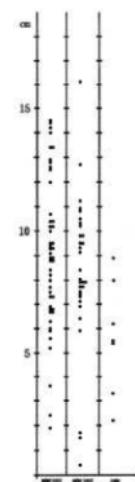
第82図 砥石出土分布図



第83図 砥石長幅分布図



第84図 砥石重量分布図



第85図 砥石厚さ分布図

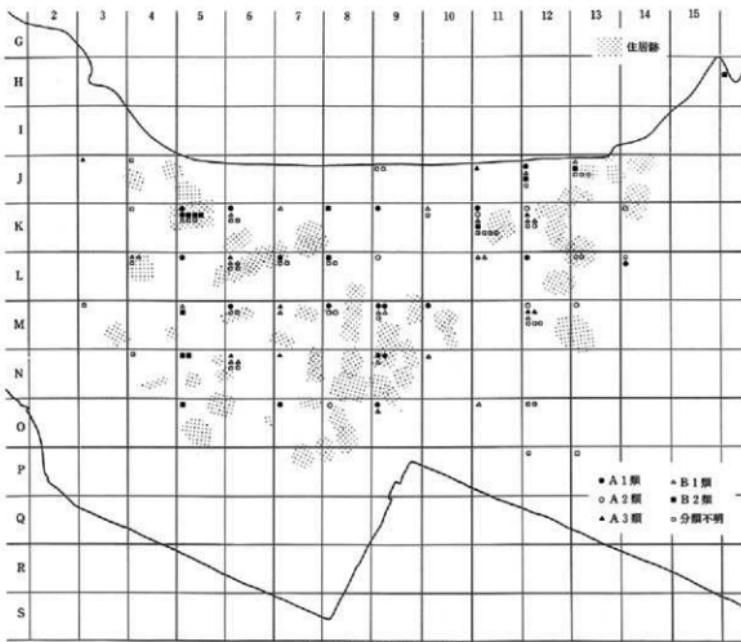
石材 第39表参照。選択性が強く、126点(87.5%)に花崗岩が使用されている。次いで安山岩(10点・6.8%)が多い。

遺存状態 第40表参照。総数144点中、57点が破損品である。この中で、遺存率2/3以上のものは21点(36.8%)、1/2以下の破片は36点(63.2%)であり、遺存率が低いものが多い。これは、主体となる石材が花崗岩で、風化によってかなりもろくなっているためと思われる。

⑩石皿(図版196~199)

分類別出土数と出土分布状況 第86図・第42表参照。総数136点が出土しているが、未完成品が19点含まれる。これらの中で遺構内からは43点(31.6%)が出土している。ほとんどが単独で出土しており、特殊な出土状況のものは認められなかった。分類別の出土数は、A類(45点・33.1%)とB類(43点・31.6%)はほぼ同数があるが、なかでもB1類(29点)とA1類(25点)の出土が多い。集落1内の出土分布状況は、他の器種と同様、住居跡の分布とほぼ一致した地点からの出土が多く、環状の分布状況を呈する。また、分類ごとに出土分布状況の偏りは認められない。

長さと幅 第87図参照。完成品のうちの完形品・ほぼ完形品37点を対象とする。A類は長さ22~43cm、幅17~31cmに分布するが、なかでも長さ30cm以上、幅24cm以上のものの割合が高い。B類は長さ18~40cm、幅12~24cmに分布するが、長さ30cm以下のものが大部分である。两者とも分布域がかなり広いが、



第86図 石皿出土分布図

3 集落跡1の調査

第42表 石皿分類別出土数

石皿 分類	住居跡	土 坑	フランク 状土壤	ピット		遺構外	合 計
				1	3		
A1類	2	1		1	3	18	25
A2類				2		9	11
A3類	1	1				7	9
B1類	2	3	2	3	19	29	
B2類	1	2		3	8	15	
分類不明	5	5	2	4	32	47	
合 計	11	12	7	13	95	136	

第44表 石皿造存状態表

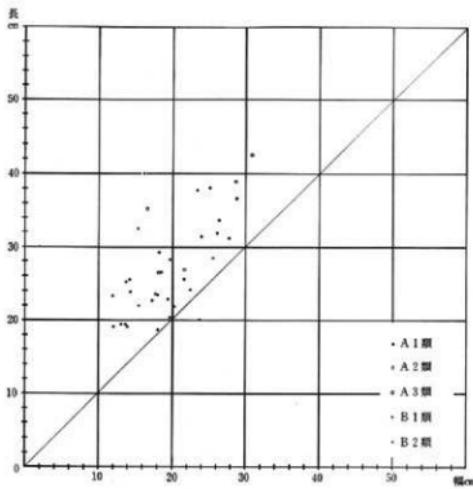
造存 分類	完形	ほぼ完形	2/3以上	1/2程度	1/3以下	合 計	
						1	2
A1類	7	2	4	5	7	25	
A2類		1	1	3	6	11	
A3類	3	1	4		1	9	
B1類	10	5	9	3	2	29	
B2類	2	6	5		1	14	
分類不明	7	9	1	2	29	45	
合 計	29	24	24	13	46	136	

第43表 石皿石材表

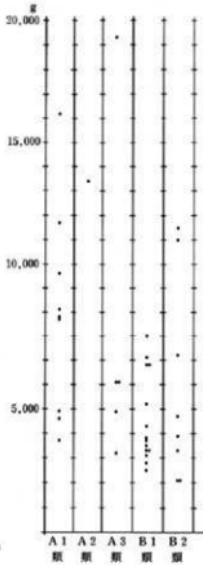
石材 分類	安山岩	花崗岩	砂 岩	緑色凝灰岩	合 計	
					1	2
A1類	25					25
A2類	10				1	11
A3類	7		2			9
B1類	3	24	2			29
B2類	1	13				14
分類不明	37	11				48
合 計	83	50	2	1	136	

第45表 石皿使用面数

使用面 分類	1面	2面	3面	合 計	
				1	2
A1類	24	1		25	
A2類	11			11	
A3類	8			8	
B1類	16	12	1	29	
B2類	8	6		14	
分類不明	29	1		30	
合 計	96	20	1	117	



第87図 石皿長幅分布図



第88図 石皿重量分布図

B類よりもA類のほうが大きいものが多い傾向にある。長幅比は分類に関係なく、2:1~1:1に取まるもの多い。

重量 第88図参照。A類では3,000~22,000gに分布域があるが特定域に集中は認められない。B類では2,000~13,000gに分布するが、なかでも2,000~8,000gに分布するものが多い。全体的傾向として、長さ・幅を反映して、A類のほうがB類よりも重い。

石材 第43表参照。安山岩(61.0%)・花崗岩(36.7%)を使用する割合が高く、両者で全石皿の97.8%を占

める。しかしながら、分類別ではA類では安山岩が93.3%と使用率が高いが、B類では花崗岩が86%と多く、A・B類における石材選択に違いが認められる。B類の石材選択は砥石のそれに近い。

遺存状態 第44表参照。完成品117点のうち完形品・ほぼ完形品は37点(31.6%)で、破損品は80点(68.4%)と完形品の割合が著しく低い。分類別ではA類の完形品・ほぼ完形品の割合は31.1%と低いが、B類では53.6%と完形品の割合が高くなっている。

破損品の遺存率 をみると72.9%が1/2以下の破片であり、1/3以下の細片だけでも56.2%を占め、他器種と比較しても遺存率は極めて低い。

使用面 第45表参照。完成品117点のうち片面だけを使用するものが96点(82.1%)であるが、両面を使用するものも少なくない。A類ではわずか1点(2160)だけであるが、B類では18点存在し、両面を使用するものの割合はB類のほうが高い。また、3面を使用するものも認められ、正裏面は石皿として使用されているが、側面は砥石として利用されている。

その他 被熱したもののが25点認められる。完形品・ほぼ完形品では9点、破損品に14点で破損品に被熱したものが多い。

側縁を敲打や剥離によって整形するものが33点(2151~2154, 2168, 2177)認められるほか、彫刻の施されたものが8点認められる(2150, 2155, 2170~2174)。彫刻には円弧を描くものが多く、弧を単独で描くもの(2150, 2173)、連続した弧を描くもの(2155, 2172)、円と弧が組み合わされるもの(2170, 2172)、円のみを描くもの(2174)等がある。また、円が描かれるものは円が浮き上がるよう陽刻的に彫刻される。

④ 両極石器(図版180)

分類別出土数と出土分布状況 第91図・第46表参照。総数162点が出土している。遺構内からの出土は21点(13.0%)があるが、特殊な出土状況は認められない。分類別の出土状況は、2極1対のものが143点(88.3%)と圧倒的に多く、4極2対のものは16点(9.9%)に過ぎない。集落1内の出土分布状況は他の器種と同様に住居跡の分布する地点からの出土が多い。特に東と西の住居群から集中的に出土している。また、4極2対のものは西の住居群からの出土が多い。

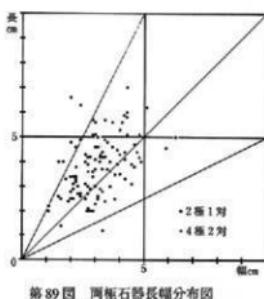
長さと幅 第89図参照。長さ2~6cm、幅2~5cmに大部分が分布する。ただし、4極2対のものは幅3cm以上のやや横幅の広いものが多い。長幅比は2極1対は3:1~2:3の範囲に収まり、4極2対は3:2~2:3に分布する。

第46表 両極石器分類別出土数

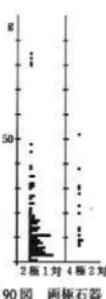
分類	住居跡	土坑	フクスコ	ピット	遺構外	合計
2極1対	8	1	3	6	125	143
4極2対	1	1	1		16	19
合計	9	2	4	6	141	162

第47表 両極石器石材表

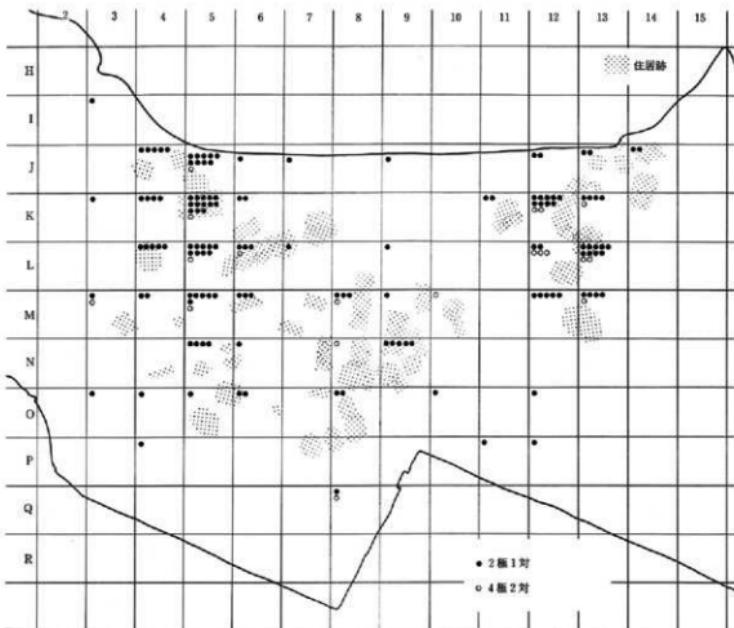
石材	鉄	貝	黒	美	メ	粘	波	黒	ホル	その	合
分類	石	石	色	灰	ノ	板	波	色	シ	の	計
2極1対	51	31	1	22	12	7	7	3	2	7	143
4極2対	11	4	1		3						19
合計	62	35	1	23	12	10	7	3	2	7	162



第89図 両極石器長幅分布図



第90図 両極石器重量分布図



第91図 両極石器出土分布図

重さ 第90図参照。2枚1対は3~40gに分布するものが多いが、80~83gにまで分布域は広がる。4枚2対は50g以下の軽量なものが多いが、分布に特に集中は見られない。

石材 第47表参照。硬質な石材が用いられている。鉄石英62点(38.2%)、頁岩35点(21.6%)、凝灰岩23点(16.0%)、メノウ12点(7.4%)と多く用いられ、以上の石材で全体の81.5%を占める。

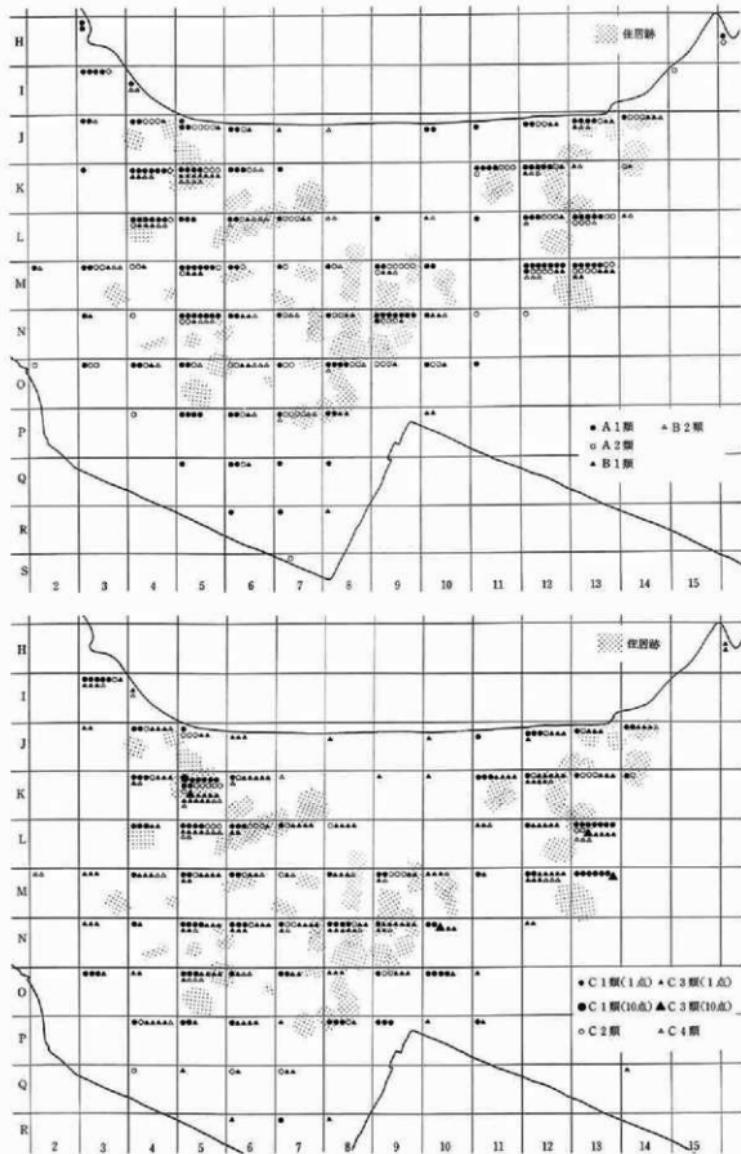
素材 5点が扁平螺貝を素材とするかほんどのものは不明である。また、自然面の有無を観察すると有が70点、無が91点である。

その他 1906のように側縁に二次加工のあるものが4点認められる。

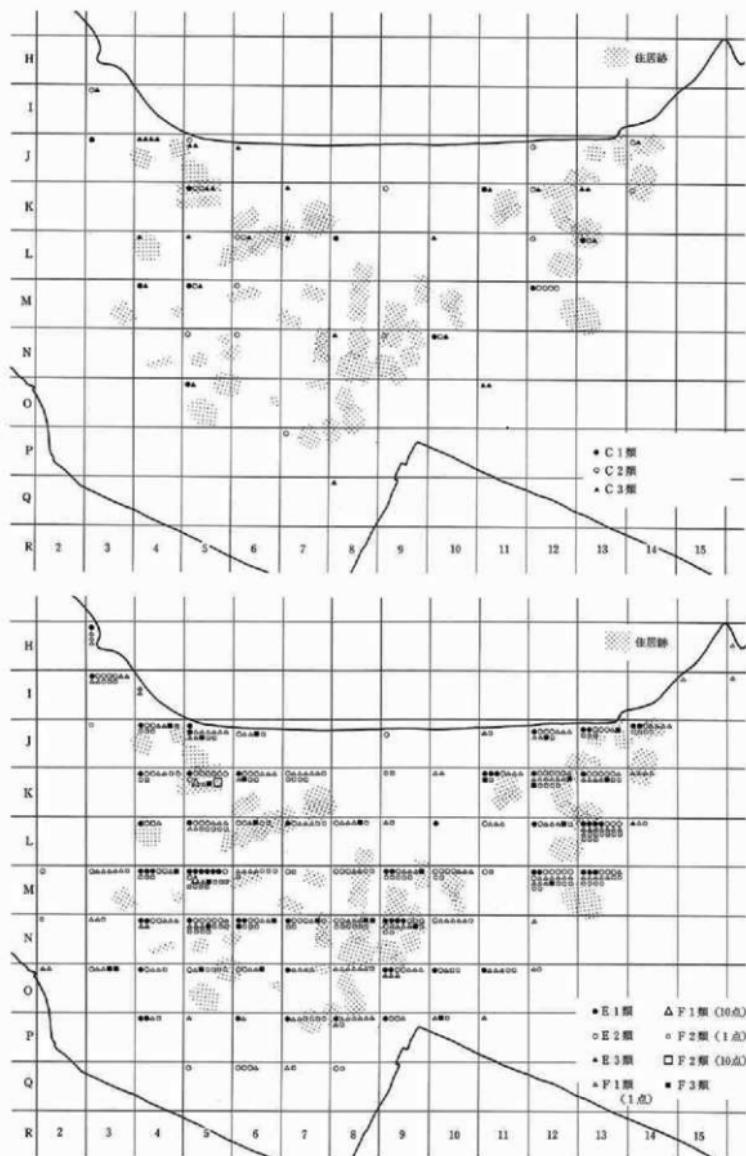
⑯ 不定期石器(図版200~203)

分類別出土数と出土分布状況 第92~94図、第48表参照。総数3,278点が出土している。これらのうち、造構内から出土するものは439点(13.4%)で、その中でも住居跡とピット出土がそれぞれ175点、132点と多く認められる。個々の造構での出土状況の詳細は不明であるが、住居跡やフラスコ状土坑に比較的集中して出土しているものが多く、住居跡では、SB130A(21点)、SB1262A(10点)、SB1299A(15点)、SB3153A(11点)、SI40B(12点)、SI349A(21点)に特に多くが出土している。フラスコ状土坑では、SK1558A(7点)、SK1925A(7点)、SK1946A(6点)に出土数が多い。これらとは反対にピット出土のものは個別にみれば多くが単独あるいは2点程度の出土があるに過ぎない。

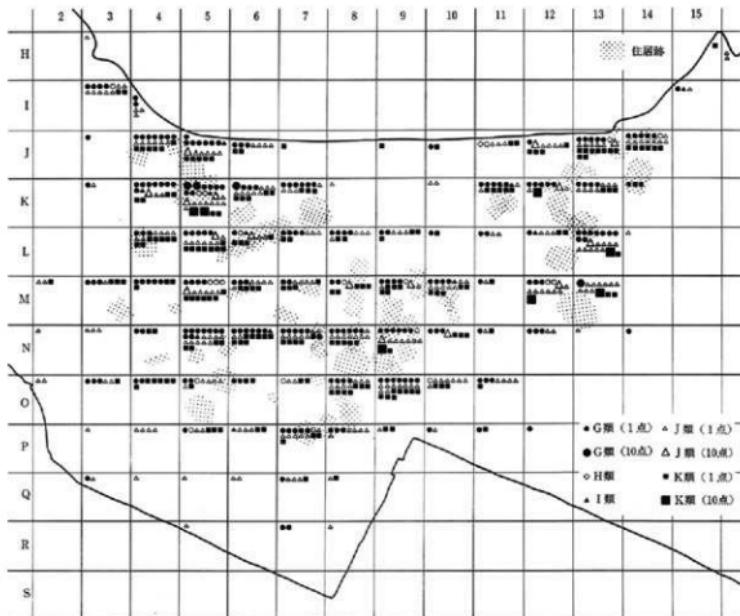
3 集落跡1の調査



第92図 不定形石器出土分布図(1)



第93図 不定形石器出土分布図(2)



第94図 不定形石器出土分布図(3)

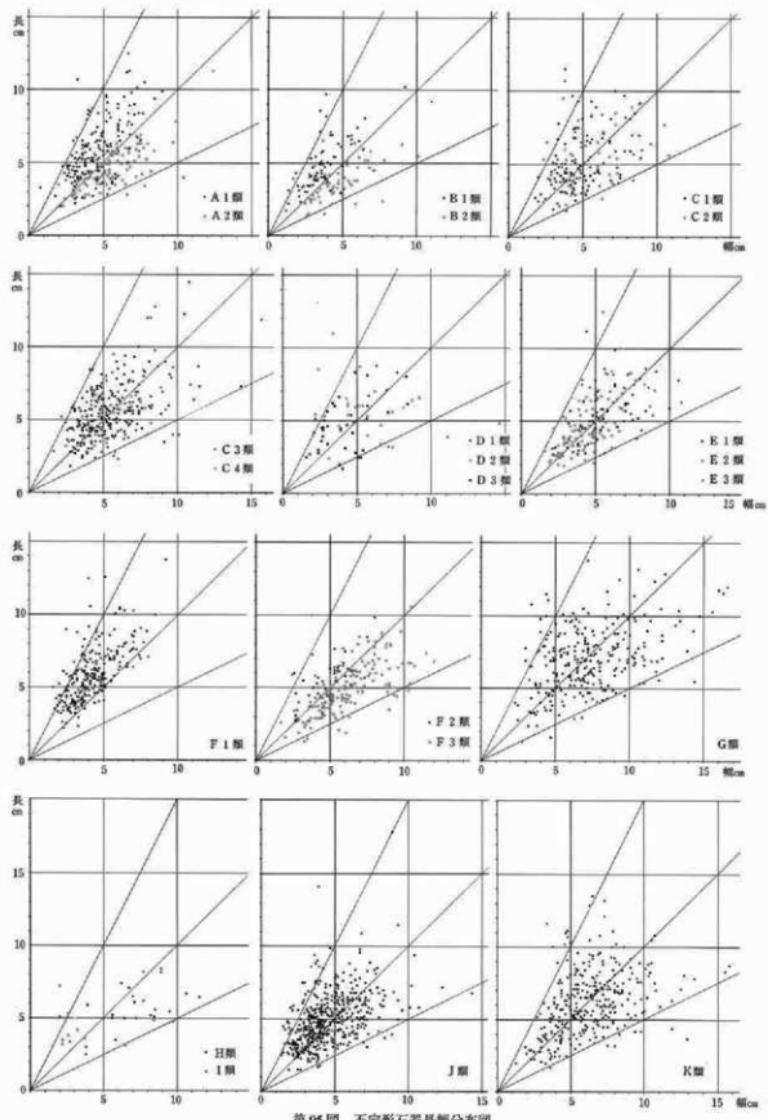
軽量のものが多い。また、200gを超えるものが多いのは、C・G・K類である。

石材 第49表参照。全点を対象とする。全体的には頁岩(37.8%)・鉄石英(25.5%)の割合が他の石材と比べて圧倒的に多い。分類別の傾向はそれほど顕著ではないが、ホルンフェルス・黒色緻密安山岩はG・K類に、安山岩はG類によく使用され、他の分類での使用は少ない。

素材 第50表参照。ほとんどが剥片素材である。その中でも縦長剥片を素材とするものが多いが、横長剥片を素材とするものも少なくない。素材不明としたものは剥片を素材とするが、折断状の痕跡あるいは二次加工などにより、縦長か横長か判断できないものである。また、扁平隕を素材とするものは13点が認められ、C・K類(各4点)が多い。両極端な形の剥片を素材とするものも7点と少ないながら認められる。

剥片の形状 1,899点で形状を識別できた。正面が剥離面で構成されるC型が圧倒的に多く、1,004点(52.9%)を数える。正面がすべて自然面で構成されるA型は138点(7.3%)と全体からみるとごくわずかでしかないが、C3類(21点)・G類(29点)・K類(17点)に比較的まとまって認められる。打面の様子は、すべてが自然面である1型が最も多く認められ798点(42.0%)を数えるが、打面が2面以上の剥離面で構成される3型は347点と少ない。正面構成と打面の様子を組み合わせた形状の分類ではC1型(439点)・C2型(333点)・B2型(303点)が多い。

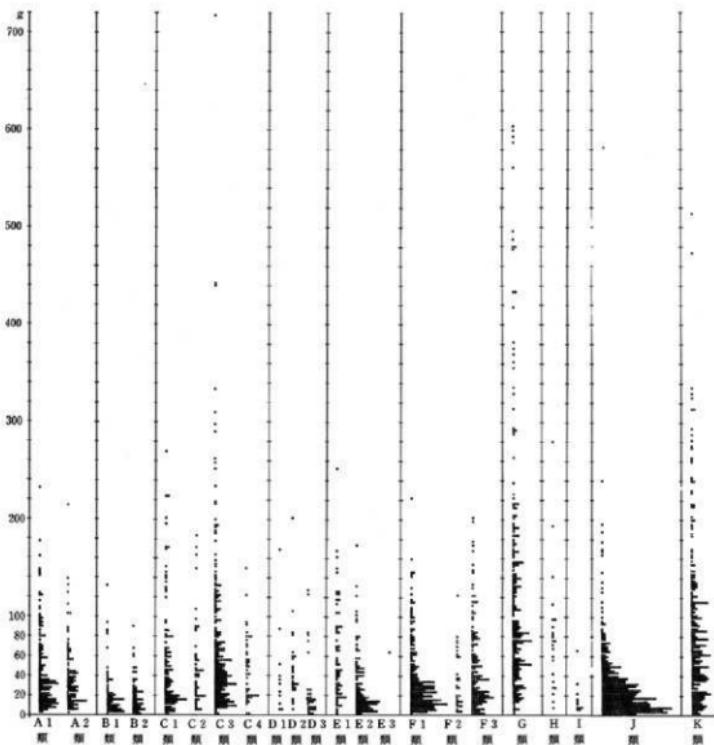
打面の大きさ 計測可能なものは1,803点である。これらのうち打面の大きさが最大幅の1/2よりも大きいものが最も多く1,164点で、打面幅と最大幅がほぼ等しいものも111点認められる。各分類ともに同様の傾向をもち、分類ごとの特徴はそれほど顕著ではない。



第95図 不定期石器長幅分布図

第50表 不定形石器素材統計表

分類	出土数	種類	縫合の有無	縫合の形狀												打面の大きさ				主張剖面と打面との角度(度)				断面形状の実際				
				A型			B型			C型			分割			最大面積(平方ミリ)		計面積		不規則		90°		180°		180°		
				縫合	縫合	縫合	縫合	縫合	縫合	縫合	縫合	縫合	縫合	縫合	縫合	縫合	縫合	縫合	縫合	縫合	縫合	縫合	縫合	縫合	縫合			
A1類	159	126	不規則	33	43	3	2	8	12	8	15	13	9	35	2	35	29	39	40	21	7	2	35	54	40	93	63	3
A2類	105	1	61	17	1	1	3	12	2	12	17	4	19	1	24	23	22	34	12	5	1	18	37	32	1			
B1類	70	53	20	20	7	1	4	13	9	13	14	3	26	18	14	24	11	5	1	20	36	25						
B2類	61	2	39	83	6	1	2	6	5	13	11	12	66	5	32	21	69	28	15	2	1	81	69	35	3			
C1類	127	26	15	1	27			2	6	11	3	4	21	1	21	6	10	11	4	1	23	29	20					
C2類	49	14	8	4	153	13	6	2	12	16	15	31	15	15	134	11	79	30	139	37	34	4	2	162	176	81	2	
C3類	269	57	45	44	14	10	20	3	4	4	2	9	3	19	1	13	11	19	18	9	2	2	13	25	19			
C4類	44	12	2	8	17			1	1	1	1	7	4	1	7	5	1	6	1	6	11	1						
D1類	26	5	4	16	33	12	5	7	6	3	1	4	2	4	2	6	2	18	4	3	1	18	19	7				
D2類	70	16	10	44	2			7	6	3	9	3	8	32	2	24	10	34	14	15	1	1	40	39	27	4		
E1類	123	33	29	1	60	1	7	10	14	20	22	5	44	4	42	29	48	41	21	9	2	49	75	45	3			
E2類	1																						1					
E3類	244	182	62	2	3	2	15	38	30	45	42	28	49	10	111	71	52	105	56	16	6	61	108	136				
F1類	32	24	1	7	1	3	6	2	8	4	4	4	3	16	7	6	14	10	8	13	18	1						
F2類	173	7	109	1	56	3	33	15	8	33	21	16	44	10	65	47	51	81	28	20	4	40	84	86	3			
G類	278	63	84	2	128	24	1	4	40	22	18	31	8	11	119	12	90	41	135	71	44	7	5	151	143	119		
H類	23	1	18	4	10	1	1	2	2					7	1	3	4	15	4	2	17	10	11	2				
I類	11	7	2	2	1			1	1	1	2	4	1	5	2	3	4	3	2	2	6	5						
J類	458	191	112	155	3	1	37	61	34	91	75	35	121	16	203	115	124	160	116	27	18	137	209	246	3			
K類	310	57	67	4	182	14	2	1	27	24	14	32	11	17	166	11	69	47	183	71	43	10	2	184	194	165	11	
分類不明	696	87	110	3	3	405	21	1	4	32	34	23	42	39	24	388	9	114	76	409	82	71	21	6	428	390	195	23
合計	3276	982	731	7	13	1543	104	16	255	303	199	439	333	232	1377	111	1053	639	1473	564	154	54	1549	1633	1337	76		



第96図 不定期石器重量分布図

転位度 1,727点で観察が可能である。打面転位の行われていない0°が最も多く954点を数えるが、90°転位のものも564点と比較的多く認められる。90°と180°の転位が行われたものは54点で少ない。

折断 1,863点に折断状の痕跡が認められるが、素材の整形・二次加工・使用時の破損あるいは破棄後の事故のいずれによるものであるかは判断できなかった。

㊯ 石 錐 (図版192)

3点の出土を見るだけである。集落1内では、前回の報告と合わせても5点の出土があるにすぎず、組成上の構成率は極めて低い。

すべてが橢円形の錐の両端を打ち欠いてつくられた錐石錐である。

㊯ 台 石 (図版199)

总数8点を数える。集落1内の出土分布状況は、住居跡の分布範囲に沿って散発的に出土しているが、南

の住居跡からの出土は見られない。

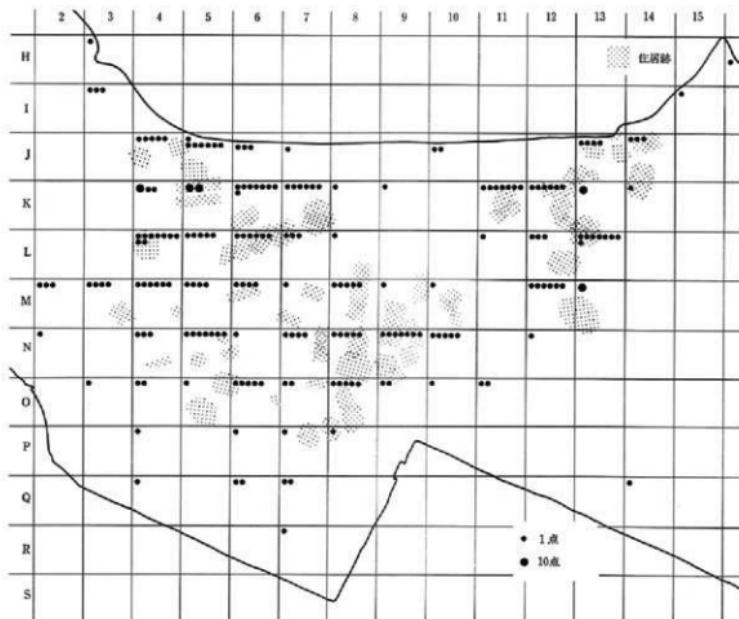
大きさでは、長さ20cm前後、幅10~15cmの楕円形のものが多い。重量は個体差が大きく1.330~5.660gに範囲が広がる。石材は安山岩(5点・62.5%)が最も用いられる。使用面はほとんどのものが片面のみを使用しているが、2186のように両面を使用するものも2点存在する。

⑩ 石核(図版203~205)

分類別出土数と出土分布状況 第97図・第51表参照。総数262点が出土する。遺構内からは35点、遺構外からは227点の出土である。遺構内出土の中では住居跡からの出土が多く17点を数える。土坑・ピット出土はそれぞれ8点ずつの出土があるが、フラスコ状土坑からの出土は少なく2点を数えるだけである。また、一遺構からまとまって出土している例はない。

調整段階の調整方法は、調整段階にある調整石核43点の中では調整Bの石核が42点と大部分を占める。剥離作業段階にある石核202点の中でも調整Bの石核を経て剥離作業段階に入ったものが最も多く、166点である。剥離作業の不明のものの中の11点も調整Bを経ているので全体の83.6%が調整Bが施されていることになる。これとは反対に調整Cを経た石核は1点が認められるだけで、最も少ない。再調整の行われた石核は剥離作業段階に入ったものの中に認められ、31点を数えるが、再調整Bが大部分を占める。

剥離作業では、剥離作業1が102点(50.5%)と半数以上を数え、調整段階でいずれの調整が施されたにか



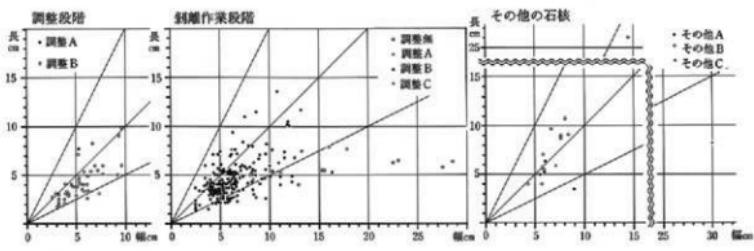
第97図 石核出土分布図

第51表 石核分類別出土数

調整・再調整段階		剥離作業段階											
出土位置 分類	住居跡	プラスコ 状土坑	土 坑	ピット	遺構外	合計	出土位置 分類	住居跡	プラスコ 状土坑	土 坑	ピット	遺構外	合計
調A	1			2	2	38	42	作1	1			11	12
調B			2	2	38	42	作3				1	1	
合 計	1	0	2	2	38	43	作6				1	1	
							再b 作5				1	1	
							調A 作1					2	2
							調A 作3					1	1
							調A 作3+4					1	1
							調A 作3+5					1	1
							調A 再b 作1	1				1	
							調B 作1	5	1	3	2	57	68
							調B 作2	1		1	1	8	11
							調B 作2+6					1	1
							調B 作3	1				15	17
							調B 作3+5					3	3
							調B 作4					9	9
							調B 作4+5					2	2
							調B 作5	1				18	19
							調B 作6	1				7	8
							調B 再a 作1					3	3
							調B 再a 作3					1	1
							調B 再b 作1					13	16
							調B 再b 作3					1	1
							調B 再b 作5					4	4
							調B 再b 作5+6					1	1
							調B 再b 作6					2	2
							調B 不明					11	11
							調C 再b 作6					1	1
							不 明					3	3
							合 計	13	2	5	4	178	202

第52表 石核石材表

石 材	鉄	頁	凝	流	安	メ	黒色 鐵 青 安 山 岩	ホ ル ン フ エ ル ス	黒 色 質 岩	緑 色 質 岩	結 晶 片 岩	砂 岩	石 子 ヤ ト 英	継 砂 岩	合 計
出土数	115	66	17	15	12	12	6	5	3	3	2	2	1	1	262



第94図 石核長幅分布図

かわらず最も多い。剥離作業3・5も比較的多く、それぞれ23点(11.3%)、24点(11.9%)である。これら以外の剥離作業はほとんど例がない。

集落1内の出土分布状況は、住居跡の分布にほぼ一致し、住居跡の密度の高いところで出土が多い。住居

の分布しないところでは出土は少ない。

石材 第52表参照。鉄石英(115点・43.9%)・頁岩(66点・25.2%)が圧倒的に多い。これ以外で比較的多い石材としては、凝灰岩(17点)・流紋岩(15点)・安山岩(12点)・メノウ(9点)等がある。その他にも多種類の石材が石核として用いられているが、これらの数は少ない。分類別にみると荒削りの行われない調整無の石核のはほとんどが安山岩が使用されていることが目立つ程度である。

大きさ 第98図参照。調整石核では長さ・幅ともに3~10cmを計る。小型の調整石核ははじめから小型の剥片をとることが意識されていたものと思われる。またこの調整石核の大きさは、剥片石器の中で最も出土数の多い不定形石器の多くがもつ法量に一致し、他の石核に使用するにも十分な大きさである。剥離作業段階の石核では長さ1~14cm、幅2~29cmにすべて収まる。長さ・幅が1~2cm程度が石核として利用される最低限の大きさとみることができる。また、幅が15cmをこえる大型の石核は打面調整の行われていないものがほとんどで、剥離作業もあり進んでいないものである。その他の石核では長さ4~11cm、幅4~9cmのものがほとんどであるが、長さあるいは幅が25cmをこえるものも2点存在する。

その他 2263はP1385Aから出土しているが、同ピット内から出土する8点の剥片と接合する。頁岩の角砾を原石とし、上面に大ぶりな剥離を数回施している。ここを打面として数回の剥離によって側面の形状を整えるとともに、剥片剥離作業を行っているが、左側面および底面に広く自然面が残されたままである。剥片剥離作業は、まず正面で行われ、この段階で得られた剥片はイ・ウ・エ・キであり、その他に持ち出されているものもある。この後、同一打面のまま右側面に作業面を移し数回剥離作業が行われ、オ・カが剥離される。そして、打面を右側面に移し同じ作業面から1回の剥離が行われ、クの剥片を得ている。ここで一旦、最初と同一の打面と作業面でケの剥片を剥離した後、正面に打面を転位し右側縁を作業面として最低2回の剥片剥離作業を行っているが、この段階での剥片は全て持ち去られており出土していない。

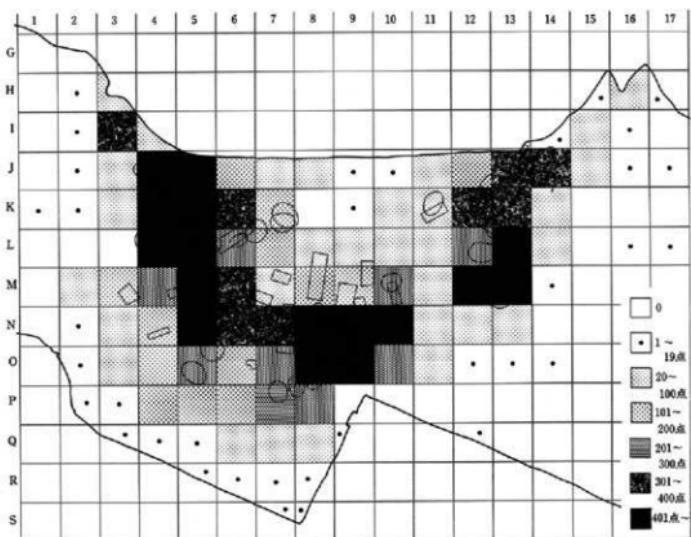
⑩ 剥片類

分類別出土数と出土分布状況 第99図参照。総数25,273点が出土する。以下の分析は、時間的制約等のため遺構や簡便塙等などの擾乱から出土する5,482点を除く遺構外出土剥片19,791点を対象とするが、全体的な傾向はある程度反映しているものと思われる。環状集落内の出土分布状況は石器種類・石核同様に住居跡の分布に沿っての出土が集中的である。このような出土状況は住居付近で剥離作業が行われ、不要な剥片が住居周辺に残されたままにされた、あるいは集落廃絶後に住居跡付近で剥離作業が行われ、住居跡に廃棄された、あるいは他器種の不要品とともに環状集落に持ち込まれ廃棄された等の状況を想定させるが、詳細な出土分布が不明であることや制片同士のもしくは石核や剥片石器との接合に十分に時間を費やすことができなかっただため憶測の域を出ない。

剥片の正面の様子による分類別の出土数は、全体的にはB型が多く5,019点(25.4%)を数え、C型(3,772点・19.0%)がこれに続く。しかし石材によって傾向が若干異なる。安山岩・砂岩・硬砂岩はB型が多く、頁岩・黒色頁岩・鉄石英・流紋岩・凝灰岩ではC型が多い。A型の多いものは粘板岩・結晶片岩である。

第53表 剥片類石片表

石材	安 山 岩	黒 色 板 岩	頁 岩	黑 色 頁 岩	鉄 石 英	凝 灰 岩	粘 板 岩	砂 岩	ホ ル ン フ エ ル ス	流 紋 岩	結 晶 片 岩	硬 砂 岩	メ ノ ウ	輝 石 岩	チ ヤ リ ト	綠 色 葉 岩	石 英 岩	輝 石 岩	花 崗 岩	ひ ん 岩	そ の 他	合 計
出土数	9421	258	2341	52	2000	1823	852	743	711	402	366	190	172	97	54	41	36	32	24	8	148	19791



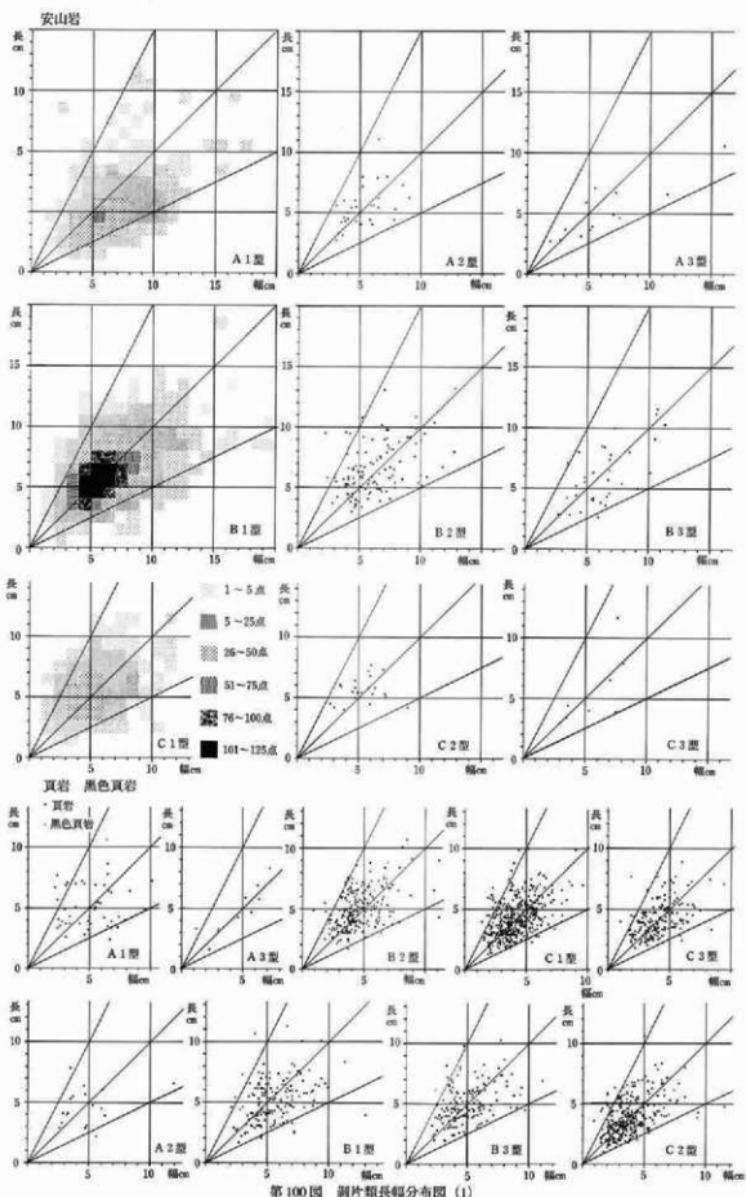
第99図 剥片類出土分布図

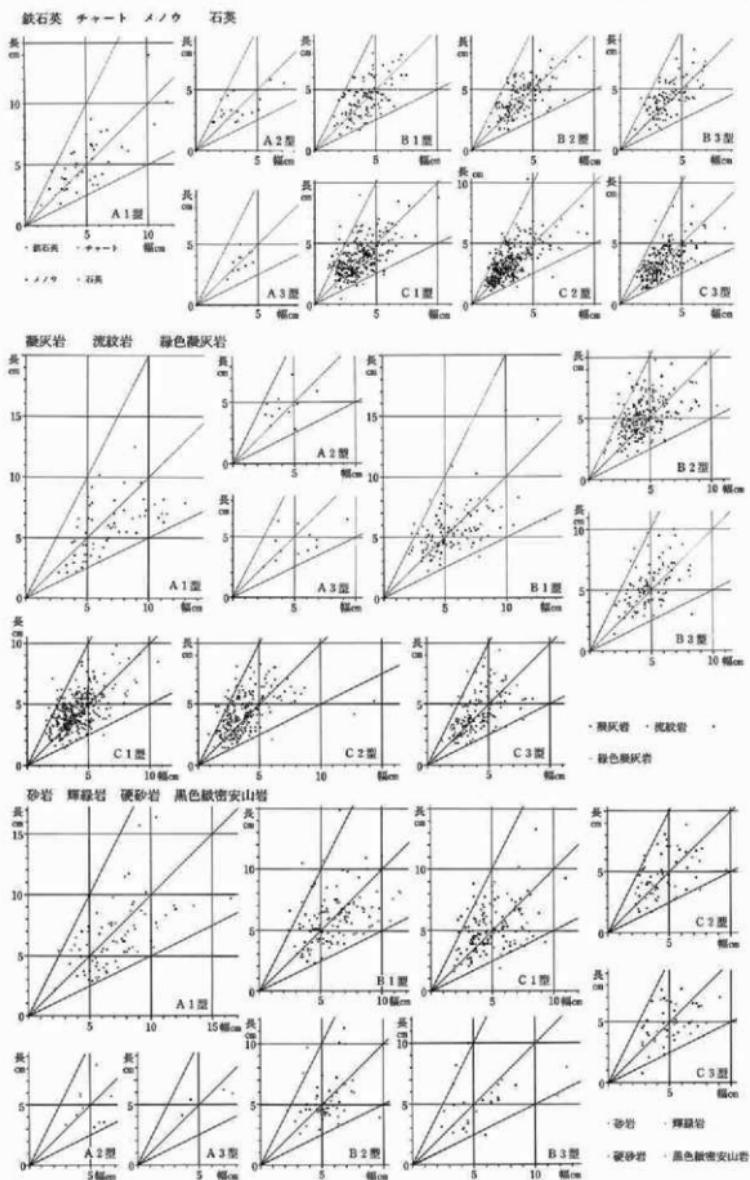
打面の様子から見た場合、1型が最も多く 7,429 点 (37.5%) である。これはほぼすべての石材で同様であり、打面調整の行われずに剥離された剥片の数が多い。なお分類不明としたものは風化が著しいものや、打面の欠損などにより判断できないものである。

石材 第53表参照。安山岩の出土数が圧倒的に多く 9,421 点 (47.6%) と半数近くを占めている。しかし、剥片石器の中では安山岩は主体的でない。これは前回の報告にもあるとおり、安山岩は風化が著しく石器として認定されなかったものも存在している可能性があるためである。また、安山岩の多用されている石皿などの整形時に剥離されたものであるかもしれない。その他の石材では、頁岩 (2,341 点)、鉄石英 (2,000 点)、凝灰岩 (1,822 点)、粘板岩 (852 点)、ホルンフェルス (711 点) 等の出土が多い。これらは剥片石器の主要な石材となっているものである。

大きさ 第100~102図参照。前回報告とは計測方法が異なり、打面を上として計測した。主要な石材についてのみ長幅分布図を作成したが、その他の石材は出土数が少ないので割愛した。全体的には長さと幅が 2~8cm に分布するものが多い。大型のものは 1型、その中でも A1型に多く認められる。石材別では安山岩に 10cm を超える大型の剥片が多く認められる。また、縦長剥片は、頁岩・鉄石英・流紋岩・凝灰岩・黒色緻密安山岩に多く、横長剥片の割合が高いのは安山岩・粘板岩・ホルンフェルス・結晶片岩・砂岩・硬砂岩等であるが、著しく比率が高いわけではない。

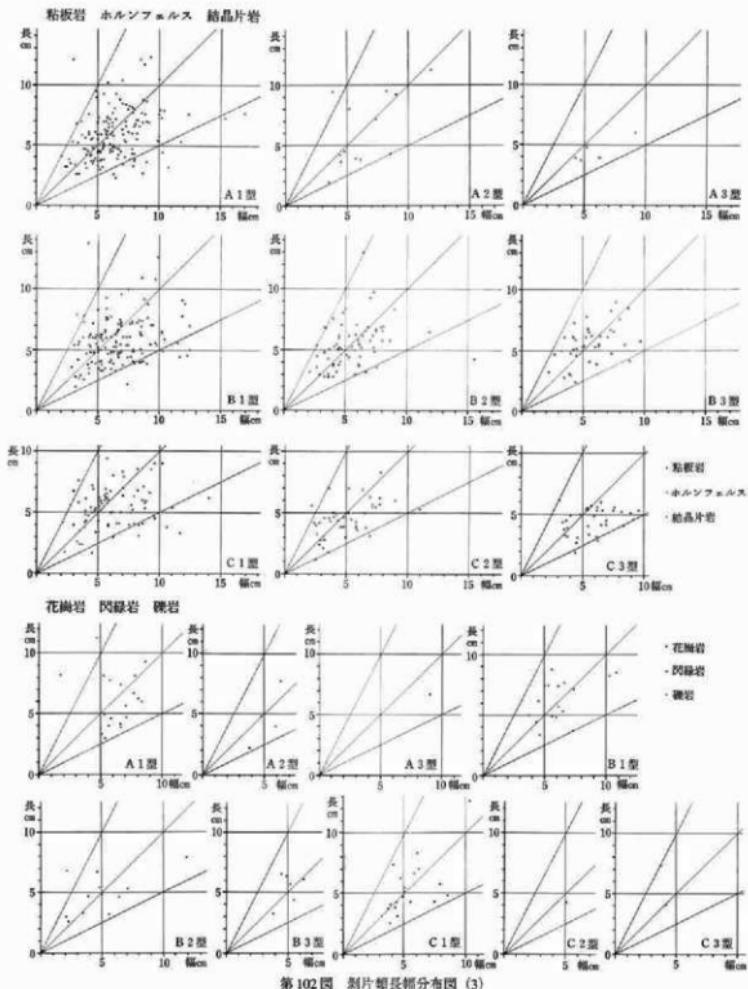
打面の大きさ 第54・55表参照。10,177 点で観測できた。打面の大きさが最大幅の 1/2 よりも大きいものが、7,507 点認められ計測可能なものの中では 73.8% を占める。この中には、打面の大きさと最大幅のほぼ等しいものが 660 点含まれる。頁岩で打面の大きさが最大幅の 1/2 未満のものがやや多くなるほかは、石材による違いは顕著ではない。





第101図 剥片類長幅分布図(2)

3 集落跡1の調査



第102図 剥片類長幅分布図 (3)

第54表 剥片類石材別観察集計表(1)

全体

型	出土数	打面の大きさ				転位率					折断
		最大幅 ≈最大幅 ≥1/2	最大幅 ≥1/2	最大幅 ≤1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	不明	
A1型	1467	29	694	154	590						489
A2型	111	8	70	32	1						30
A3型	58	3	43	11	1						13
B1型	3726	150	2454	765	357	2769	592	70	22	273	1024
B2型	829	22	430	365	12	521	204	42	9	53	210
B3型	464	29	308	121	6	276	141	22	6	19	96
C1型	2236	264	1489	389	94	1161	596	93	57	329	842
C2型	910	32	469	392	17	474	262	67	32	75	343
C3型	626	60	422	134	10	296	213	49	20	48	190
分類不明	9364	63	468	291	8542	1255	389	94	25	7601	2929
合計	19791	660	6847	2654	9630	6752	2397	437	171	8398	6166

安山岩

型	出土数	打面の大きさ				転位率					折断
		最大幅 ≈最大幅 ≥1/2	最大幅 ≥1/2	最大幅 ≤1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	不明	
A1型	992	26	595	121	249						382
A2型	30	4	23	3							10
A3型	13	1	11	1							3
B1型	3016	136	2107	560	213	2371	395	29	6	215	867
B2型	116	7	76	33		83	21	2		10	22
B3型	35	3	25	5	2	25	6		1	3	8
C1型	970	137	679	96	58	551	172	25	9	213	387
C2型	22	2	14	6		11	4	3		4	8
C3型	8	2	6			5	3				
分類不明	4219	45	358	196	3620	631	79	10	1	3948	1103
合計	9421	363	3895	1021	4142	3677	680	69	17	4393	2790

頁岩・黒色頁岩

型	出土数	打面の大きさ				転位率					折断
		最大幅 ≈最大幅 ≥1/2	最大幅 ≥1/2	最大幅 ≤1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	不明	
A1型	54	2	8	7	37						15
A2型	18	1	8	9							4
A3型	10	1	8	1							2
B1型	165	4	73	64	24	85	57	10	6	7	34
B2型	233	8	117	107	1	154	53	14	4	8	61
B3型	158	12	98	46	2	85	60	7	3	3	32
C1型	397	37	247	106	7	191	150	19	16	21	132
C2型	283	9	147	125	2	150	77	25	10	21	100
C3型	184	17	123	43	1	85	67	17	8	7	56
分類不明	891	5	28	16	842	124	86	17	9	655	450
合計	2393	96	857	524	916	874	550	109	56	722	886

鉄石英・メノウ・チャート・石英

型	出土数	打面の大きさ				転位率					折断
		最大幅 ≈最大幅 ≥1/2	最大幅 ≥1/2	最大幅 ≤1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	不明	
A1型	43		9	3	31						16
A2型	20		13	7							5
A3型	11		8	3							3
B1型	106	1	63	34	8	60	21	4	2	9	32
B2型	134	2	53	76	3	69	43	8	2	12	45
B3型	95	3	68	24		56	30	3	1	5	22
C1型	250	20	161	63	6	132	71	11	7	29	104
C2型	260	6	125	127	2	128	78	15	11	28	101
C3型	200	20	130	49	1	97	62	15	7	17	66
分類不明	1143	1	9	21	1112	134	72	798	7	885	420
合計	2262	53	639	407	1163	676	377	854	37	985	814

3 集落跡1の調査

第55表 剥片類石材別観察集計表(2)

凝灰岩・流紋岩

型	出土数	打面の大きさ				転位度					折断
		最大幅 ≈最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	不明		
A1型	65	11	1	53							19
A2型	14	2	8	3	1						5
A3型	12		7	4	1						3
B1型	117	2	62	33	20	64	31	9	3	10	28
B2型	203	2	104	92	5	132	49	8	1	13	51
B3型	99	5	64	28	2	62	26	4	1	4	19
C1型	305	28	203	61	13	148	99	17	10	31	131
C2型	222	10	116	85	11	125	62	16	5	14	94
C3型	142	16	98	23	5	69	49	8	4	12	46
分類不明	1046	4	40	38	964	157	72	23	6	787	415
合計	2225	69	713	368	1075	757	390	85	30	871	811

粘板岩・ホルンフェルス・結晶片岩

型	出土数	打面の大きさ				転位度					折断
		最大幅 ≈最大幅 >1/2	最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	不明	
A1型	192		36	12	144						28
A2型	13	1	7	5							4
A3型	6		5	1							2
B1型	160	3	68	29	60	90	37	11	4	18	33
B2型	69	2	40	27		35	20	8	1	5	15
B3型	40	5	25	10		22	12	4		2	5
C1型	129	21	78	27	3	56	41	14	4	14	36
C2型	46	1	29	16		25	15	2	3	1	13
C3型	37	1	26	8	2	17	12	2	1	5	2
分類不明	1257	4	11	17	1225	92	40	14	2	1110	261
合計	1949	38	326	152	1434	337	177	55	15	1155	399

砂岩・硬砂岩

型	出土数	打面の大きさ				転位度					折断
		最大幅 ≈最大幅 >1/2	最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	不明	
A1型	84		27	7	50						21
A2型	11		8	3							1
A3型	1		1								
B1型	103	4	50	29	20	64	24	2	1	12	19
B2型	43		27	15	1	31	8	2	1	1	6
B3型	20	1	16	3		15	1	2		2	4
C1型	87	12	60	13	2	44	24	4	4	11	16
C2型	32	1	15	15	1	15	10	2	1	4	8
C3型	27	2	20	5		13	7	4		3	10
分類不明	525	1	8	6	510	66	13	8		438	143
合計	933	21	232	96	584	248	87	24	7	471	228

黒色緻密安山岩

型	出土数	打面の大きさ				転位度					折断
		最大幅 ≈最大幅 >1/2	最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	不明	
A1型	2				2						
A2型	9										
A3型	2		1	1							
B1型	17		8	6	3	7	7	3			3
B2型	10		3	5	2	5	3			2	5
B3型	7		7			4	1	2			3
C1型	58	6	33	14	5	24	26	2	2	4	22
C2型	29		15	13	1	12	10	4	1	2	14
C3型	21	1	14	5	1	10	7	2		2	9
分類不明	112	1	2	1	108	21	23	2		65	2
合計	258	8	83	45	122	83	77	15	3	75	58

転位痕 第54・55表参照。11,393点で観察可能であった。全体的には 0° のものが6,752点(59.3%)を数え半数以上を占め、逆に 180° と $90^\circ+180^\circ$ のものはそれぞれ0.4%、0.2%と非常に少ないが、石材によって傾向が異なる。安山岩では82.8%と大部分が 0° であり、打面転位の行われているものは少ない。砂岩・硬砂岩においても安山岩ほど集中的ではないが 0° の割合が他と比べて高い。鉄石英は 180° 転位のものが最も多く半数近くを占める。その他の主要な石材では 0° が最も多いことには変わりがないが 90° 転位も30%以上を占め一定量が存在する。

折断 第54・55表参照。折断状の急角度の剥離面を有するものが6,166点に認められた。十分な観察が行えたわけではないため、石器製作の過程で行われた意図的なものであるのか、事故によるものであるのかまでは判断できなかった。

◎ 石製品 (図版205)

块状耳飾り(2265)と有孔磨製石斧?(2264)が各1点出土している。前者は滑石製の欠損品で、切り込み部上方には正裏両方向から穿孔されている。断面形は厚い方形を呈し、重さ2.6g、外径は約3.5cmに復元できる。L5-20から出土している。後者は重さ59gの完形品で上方にある穴は正裏両方から穿孔され、穴の外縁には円形と考えられる沈刻の一部が見られることから穿孔作業には竹管状工具が部分的に加わったことを物語るものである。横断面は扁平な方形で上端には自然面を残し、下端は研磨により刃を漸いている。石器表面には擦痕が顕著に残る。石材は凝灰岩でM7-19のSK601から出土している。

◎ 藍翠原石 (図版463)

J5-13とL9-13のP1701Aから各1点が出土している。前者の法量は長さ4.3cm、幅5.2cm、厚さ3.4cm、重さ110.4g。後者は長さ4.8cm、幅3.5cm、厚さ2.2cm、重さ40.5gを計り、両者とも角擲で部分的に大まかな剥離が加えられている。

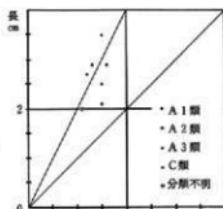
c. 捨て場 A 出土の石器

① 石 砕 (図版206)

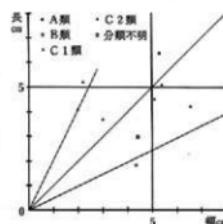
7点出土している。完形品・ほぼ完形品は3点で、破損品はいずれも片脚を欠損している。大きさでは、長さ2~3.5cm、幅1.1~1.5cmのものが多い。資料数が少ないので分類別の傾向は見出せないが、C類が小型であるほかは、集落1の傾向に反しない。石材では黒曜石・頁岩・流紋岩・黑色緻密安山岩等が用いられている(第103図参照)。

② 石 锥 (図版206)

10点が出土している。このうち完形品・ほぼ完形品は7点である。分類別ではC1類の出土が多く(5点・50.0%)、D類の出土は認められない。大きさ・重さは集落1とほぼ同様である。石材は流紋岩・鉄石英・頁岩がよく使用される。使用痕は2点に認められ、どちらにも(2275)先端に磨耗痕が観察される(第104図参照)。



第103図 石礫長幅分布図



第104図 石錐長幅分布図

③ 石 魚 (図版 206)

2点が出土している。どちらも凝灰岩製の環型石匙であるが、2278は先端が尖り、2279は先端が直線的で打面をそのまま残す。二次加工は2278は比較的に丁寧につまみ部と刃部が作り出されるが、2279は粗製品で、えぐりの部分を作り出しているだけで刃部は未加工であるが、使用痕と思われる微細な剥離が認められる。

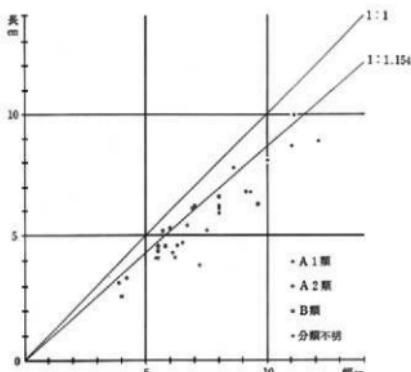
④ 両面加工石器 (図版 206)

14点が出土している。形態は円形・指円形を基本とし、長さ・幅ともに4~7cmのものが多いが、絶対量が少ないためか集落1のような大型のものは無い。石材は鉄石英(5点・35.7%)、頁岩(3点・24.4%)、硬砂岩・黒色緻密安山岩(各2点・14.3%)等が使用されている。

⑤ 三脚石器 (図版 206・207)

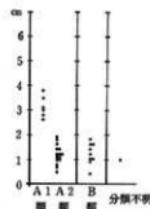
総数39点が出土している。分類別では、A2類の出土が多く、21点(53.8%)を数える。A1・B類はそれぞれ6点(15.4%)・10点(25.6%)を数え、これらの割合は集落1とほぼ同じである。大きさでは、A1類が他の分類よりも一回り大きく、すべてが長さ7cm以上、幅8cm以上を計る。A2・B類は長さ4~7cm、幅4~10cmにはほとんどが収まるが、長さ3~4cm、幅5cm前後の小型品もある程度認められる。厚さは分類基準を反映し、A1類が他の分類よりも厚手で2.5cm~4cmに分布し、A2・B類は1.5~2.0cmに大部分が分布する(第105・106図参照)。

石材の選択は集落1とほぼ同様である。粘板岩が最も使用され、19点(48.7%)を数える。次が結晶片岩・硬砂岩で各6点(15.4%)を数える。ただし集落1と同様にA1類には粘板岩は主体的ではない(第56表参照)。



第105図 三脚石器長幅分布図

第56表 三脚石器分類別出土数・石材表



第106図 三脚石器厚さ分布図

第57表 三脚石器遺存状態表

石材	出土数	粘板岩	結晶片岩	硬砂岩	凝灰岩	安山岩	頁岩	砂岩	黒色頁岩
A1類	6	1	2	1	1				1
A2類	21	12	4	3	1				1
B類	10	6		1			1	2	
分類不明	2	1	1						
合計	39	19	6	6	2	1	1	3	1

遺存 分類	完形	一脚欠	二脚欠	合計
A1類	6			6
A2類	15	5	1	21
B類	9	1		10
分類不明	1	1		2
合計	31	7	1	39

素材は全て剥片素材であるが、38点(97.4%)の器面に自然面が除去されずに残されている。その部位はほとんどが正面のみであるが、1点だけ正面と側面に認められる。

破損品は8点が存在し、A2類に破損品の割合が高いが、他の分類にはほとんど認められない(第57表参照)。また、使用痕は23点に認められる。使用痕の種類ではつぶれが多く、認められる部位は側縁がほとんどである。

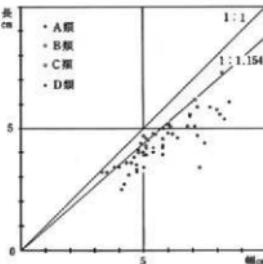
⑥ 板状石器(図版207)

总数62点が出土している。分類別ではA・B類が大半を占め、それぞれ23点(38.3%)・24点(38.7%)を数える(第58表参照)。大きさは、長さ2~6cm、幅3~8cm、長幅比1:1~2:3に大部分が分布し(第107図参照)、重量は10~40gのものが多いが、B・C・D類には50g以上のものも割合多く認められる。石材は粘板岩(45.0%)・結晶片岩(20.0%)・砂岩(11.7%)・硬砂岩(10.0%)の使用割合が高い(第59表参照)。

すべてが平板状の剥片を素材とするが、器面に自然面を残すものが52点(86.7%)存在し、その部位は正面が多い。使用痕は完形品・ほぼ完形品58点のうち44点(75.9%)に認められる。三脚石器同様、側面につぶれのあるものが多い。

第58表 板状石器分類別出土数・石材表

石材分類	出土数	結晶片岩	硬砂岩	砂岩	粘板岩	流紋岩	その他
A類	23	5	3	2	10	2	1
B類	24	4	2	5	8	2	3
C類	3		1		2		
D類	11	3			8		
分類不明	1	1					
合計	62	13	6	7	28	4	4



第107図 板状石器長幅分布図

第59表 板状石器遺存状態表

遺存分類	完形	一脚欠	二脚欠	合計
A類	22	1		23
B類	23		1	24
C類	3			3
D類	11			11
合計	59	1	1	61

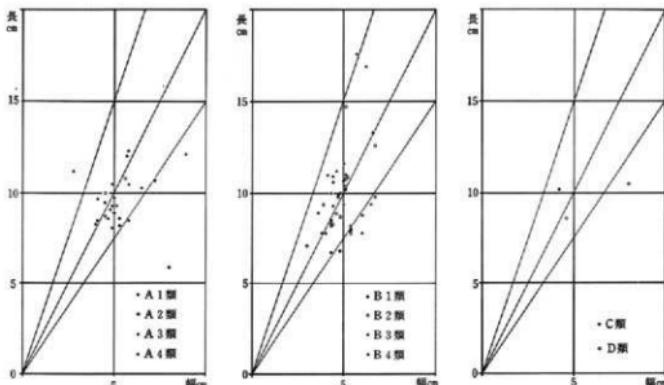
⑦ 打製石斧(図版208・209)

118点出土している。分類別ではB3類(29点・24.6%)・A3類(16点・13.6%)の出土が多い(第60表参照)。大きさは、長さ8~12cm、幅4~6cmのものが多く、長幅比3:1~3:2に大部分が収まる(第108図参照)。また、重量は50~150gに分布が多い。

石材は、結晶片岩(23.7%)・ホルンフェルス(23.7%)・粘板岩(17.8%)・砂岩(14.4%)・硬砂岩(8.5%)が多い。

第60表 打製石斧分類別出土数・石材表

石材分類	出土数	ホルンフェルス	安山岩	凝灰岩	結晶片岩	硬砂岩	黑色頁岩	砂岩	粘板岩	頁岩	結晶片岩	雑岩
A1類	7									5	1	
A2類	4	1				2					1	
A3類	16	7			3	1			2	3		
A4類	2	1								1		
B1類	4	1				1				2		
B2類	13	3	1		1	1			1	2	3	1
B3類	29	6		1	9	2	1		5	5		
B4類	6				1	1			1	1	1	
C類	2	1						1				
D類	4	1				1			1			1
分類不明	31	7				10	4	1	5	4		
合計	118	28	1	1	28	10	3	17	21	6	1	2



第108図 打製石斧長幅分布図

く使用される（第60表参照）。素材は完形品・ほぼ完形品69点のうち、D類が扁平礫を素材とするほかはすべて剥片素材である。縱長剥片であるか横長剥片であるか判断できないものが33点あるが、判断できるものでは横長剥片26点、縱長剥片9点と横長剥片が多い。また、完形品の中で器面に自然面を残すものが60点（87.0%）認められ、その部位は正面がほとんどである。

破損品は49点存在する。破損部位は基部（AA）が18点とやや多いが、中央部（BB）・刃部（CC）と大きな差はない。残存部位を見ても基部側の残存するものと刃部側の残存するものとでは量的には大きな違いは認められないが、基部側の残存するものは刃部の破損したものが多く、刃部側が残存するものは刃部の破損したものは少ないという傾向がある（第61表参照）。

使用痕は25点に認められる。その中の24点は刃部に磨耗が認められ、刃部に光沢痕のあるものが1点ある。また、つぶしは12点に施されている。多くは側縁につぶしがなされるが、2332は側縁だけでなく頭部にもつぶしが加えられる。

⑧ 磨製石斧

図化はしていないが、9点の出土を見る。全て破損品であるが、残存部分の形状からほとんどがA類の破損品と考えられる。刃部側の残存しているものが多く5点を数える。石材は蛇紋岩が多く、4点を数え、凝灰岩・砂岩が各2点ずつ、閃緑岩が1点である。

⑨ 磨器類（図版209・210）

19点出土しているが、A1類は少なく、1点が認められるだけである。大きさは、長さ6~12cm、幅7~13cm、重量200~400gのものが多い。長幅比は2:1~1:2に分布する。石材は安山岩が主体で、15点（78.9%）と集中する。

第61表 打製石斧遺存部分と破損の仕方

遺存部分 割れ方	個数	小計	遺存部分 割れ方	個数	小計	合計				
			A1	A2	B1	B2	C1	C2	C3	E
A'A'	2	A	6	6	7	5	11	16	16	320
A'B'	5		5	11	7	4	11	16	16	
B'B'	2	B	5	11	4	1	2	2	2	
B'C'	3		5	10	1	1	2	2	2	
C'C'	4	C	1	2	1	1	2	2	2	
C'D'	5		10	12	1	1	2	2	2	
C'E'	1				1	1	2	2	2	
E'E'	3								3	

破損品・破片数520点

⑩ 磨石類 (図版210・211)

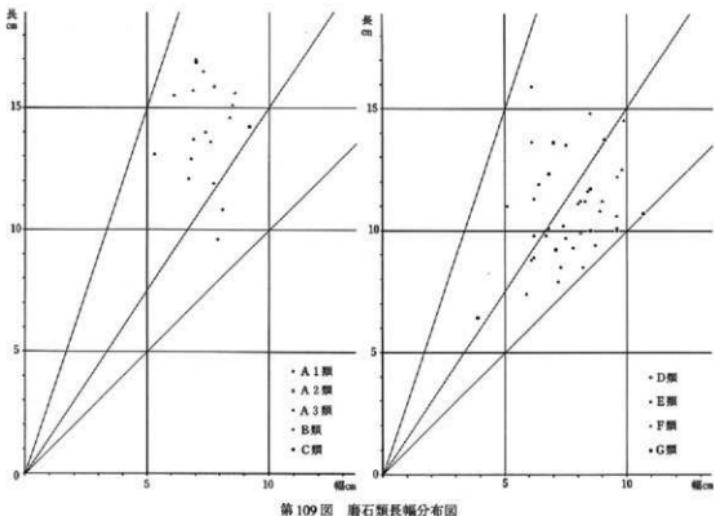
総数83点が出土している。分類別ではE類(32.5%)、A類(19.3%)の出土が多い。

大きさは長さ7~16cm、幅5~10cm、長幅比3:1~1:1に分布するものが多いが、比較的資料数の多いE類では長幅比が3:2~1:1と円形よりまとまる。またA類では集落1同様、磨痕が側面にあるA2類のほうが正面にあるA1類よりも細長く、厚みのない形態を呈する傾向がある(第62表・第109図参照)。

石材は安山岩の割合が49.4%と圧倒的に多い。他の石材では、花崗岩(15.7%)・凝灰岩(13.3%)などが比較的多く使用されている。ススの付着するもの、被熱するものはそれぞれ5点ずつ認められる。

第62表 磨石類分類別出土数

分類	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類	分類不明	合計
出土数	16	1	2	3	27	6	8	20	83



第109図 磨石類長幅分布図

⑪ 砥石 (図版211)

総数14点が出土している。完形品・ほぼ完形品は7点である。大型品と小型品が認められる。小型品は長さ11~15cm、幅6~8cmに分布し、大型品は長さ19cm以上、幅11cm以上を計り、長さ35cm以上となるものも2点存在する。石材は花崗岩(50.0%)・安山岩(42.9%)の比率が高い。

⑫ 石皿 (図版211)

総数10点が出土している。分類別ではA3類(4点)とB1類(3点)の出土が多い。完形品・ほぼ完形品が7点、破損品が3点であるが、ほぼ完形品とした2368は數片に破損したものが接合したものである。ただし、底部中央に接合するものはなかったが、過度の使用によって底が抜けたものではない。石材は安山岩が多く7点を数える。側面を整形するものが4点認められ、これには敲打によるもの(1点)と剥離によるもの(3点・2368, 2371)とがある。また、被熱の痕跡のあるものは3点認められる。

3 集落跡1の調査

⑬ 両極石器 (図版 207・208)

総数15点出土している。このうち両極削離痕が2極1対のものは12点、4極2対のものは3点である。大きさは、長さ2~5cm、幅1~4cmが多く、長幅比は2:1~2:3に大部分が取まる。石材は鉄石英(6点)・頁岩(4点)など硬質な石材が用いられている。

⑭ 不定形石器 (図版 212~214)

総数524点が出土している。分類別の出土数は、J類(107点・20.4%)・G類(49点・9.4%)が比較的多いが、H類・I類はあまり出土していない(第63表参照)。大きさは、分類不明を除く全点についてみると全体的には、長さと幅が2~10cmのものがほとんどである。分類別ではA・B・C・D類には3cm以下の小型品が認められない。10cmをこえる大型の部類に入るものはG・J・K類に比較的多く認められる。長幅比は大部分が2:1~1:2に分布している。細分類によっては縦長あるいは横長のどちらかに集中するものがあるが、素材の形状が細分類基準に含まれているためである(第110図参照)。

重量は全体的には20~100gを計るもののが大部分であるが、D類・I類は50g以下の軽量品がほとんどである。C3・E2・F3・G・K類には量的には少ないながら150g以上の重量品が認められる。

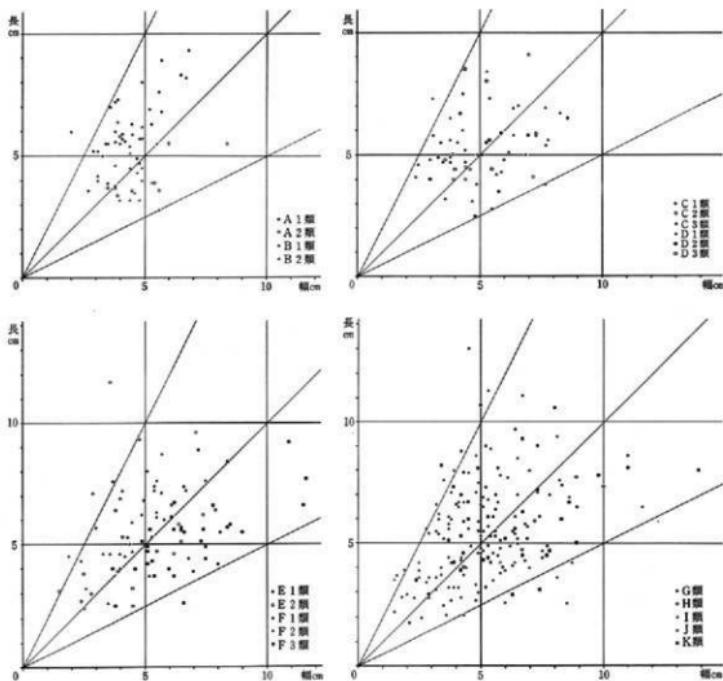
石材は頁岩(34.4%)・鉄石英(28.1%)の割合が多く、集落1出土のものとはほぼ同様の傾向である。その他にも他種類の石材が少量ずつ用いられている。頁岩・鉄石英以外の石材の数が少ないので、分類別の傾向ははっきりしない(第63表参照)。素材についての傾向は、集落1出土の不定形石器とほぼ同様である。縦長削片を素材とするものが多く、剥片の形状はC1・C2型が多い。打面の大きさは最大幅の1/2よりも大きいものが主体的である。転位痕は集落1とはやや異なり、90°転位のものが最も多いが、0°も一定量を占めている。折断の痕跡は301点で観察された(第64表参照)。

第63表 不定形石器分類別出土数・石材表

分類	岩	頁	鉄	流	ホ	巖	緑	安	黒	縦	沙	メ	粘	結	チ	縦	黒	不	出
	岩	岩	石	岩	ル	岩	色	安	色	砂	沙	ノ	板	晶	ケ	一	曜	石	土
A1類	6	13	4		1	1			1		1	1							28
A2類	2	3	1	1															7
B1類	4	6	2													1			13
B2類	6	4							1		1								12
C1類	9	2			2							1							14
C2類	3	1	1		1												1	7	
C3類	10	5	6		1				2							1			25
D1類					1														1
D2類	4	2	1	1				1											9
D3類	2	2	1		1														6
E1類	1	2	1	2	1			1		1									9
E2類	5	8	3	1					1							1			19
F1類	8	6	3	1	3												1		22
F2類	5	3	1																9
F3類	15	5	3	2	2			2	3										32
G類	12	7	5	3	6	1	3	5	2	1	1		2				1		49
H類	1				1				1	1						1			5
I類	1	3																	4
J類	47	31	9	3	6	1		2	3	1	1		1		2				107
K類	6	11	1	5		1	2	1	2	3			1		1				34
分類不明	33	33	12	8	6		4	1	4		2	6	2		1				112
合計	180	147	54	29	30	4	9	15	18	8	7	6	6	1	6	1	3	524	

第64表 不定形石器基材標印表

分類	出土数	縦長 横長 斜片	素材の種類			剥片の形状			打面の大きさ			主要な断面と打面との位置関係			折断状況の実態						
			A型			B型			C型			>大面 <大面			前側						
			1型	2型	3型	1型	2型	3型	1型	2型	3型	不明	0°	90°	180°	90° ^a	無	有	不明		
A1類	28	25	1	2	1	6	3	4	5	2	7	1	12	8	7	8	12	1	7	14	
A2類	7	3	4			1	2			2		2	3	2	3	1	1	2	4	3	
B1類	13	11	2			1			4	4	2	1	9	1	2	3	5	1	2	4	
B2類	12	6	6			3			3	2	1	3	1	6	3	2	8	3	1	3	
C1類	14	5	2	7		1			5	1	2	5		6	3	5	2	6	6	11	
C2類	7	2	1	4		1	1		1	1	3		4		3	1	3		3	5	
C3類	25	8	6	11	1	1	2	1	5	1	2	12	3	6	3	13	5	9	11	14	
D1類	1	1											1			1		1		1	
D2類	9	1	2	6		1	1	1				3		5	1	3		6	1	2	8
D3類	6	3	1	2		1			2	1		2		2	2	1	3	1	1	3	
E1類	9	2	7	1	1				1	6		3	6		4			5	6	2	
E2類	19	4	2	13	1	4			1	2		11	1	2	3	13	5	1	1	7	13
F1類	22	17	5	1		3	5	3	5	2		3	1	14	4	3	9	10	1	2	9
F2類	9	5	1	3	1		1		2	5		1	4	3	1	4	2	1	2	3	
F3類	32	19	13	1		5	2	1	8	4	2	9	2	13	7	10	12	8	4	5	
G類	49	15	13	21	3	1	8	7	4	7	4		15	1	21	5	22	15	12	5	1
H類	5	4	1	1			1	2				1	1	2	2	1	2	1	1	2	
I類	4	3	1						1	2	1	1	2	1	1	1	2	1	1	2	
J類	107	42	28	37	1		9	12	12	23	19	13	18	8	43	34	22	37	12	3	18
K類	34	5	8	21	2		2	2	2	3	1	24	4	2	28	6	10	1	1	16	
分類不明	112	10	16	86	4	2	1	7	4	4	12	4	4	70	3	24	10	75	16	30	5
合計	504	158	114	252	13	6	4	46	47	32	89	57	33	197	25	183	94	222	137	170	36



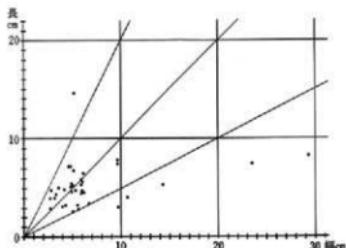
第110図 不定期石器長幅分布図

◎台石(図版212)

2点出土している。两者ともに破損品である。図示した2372は安山岩製、他方は凝灰岩製である。

◎石核(図版214)

总数38点が出土している。すべてが剥片剥離作業段階に入っているもので、調整・再調整段階にある調整石核は出土していない。これらの石核のうち、調整段階で調整Bを経ているものが大部分で27点である。調整の行われない石核は2点が認められ、いずれも安山岩製である。調整Aおよび調整Cの施されたものは出土していない。再調整の行われている石核は1点が認められ、再調整bが施される。剥片剥離作業は作業1が10点で最も多く、他の作業の行われているものは少ないが、不明であるものも14点と少なからず存在する。その他の石核では、その他



第111図 石核長幅分布図

第65表 石核分類別出土数・石材表

石材 分類	出土数	頁岩	鉄石英	流紋岩	凝灰岩	安山岩	黒色板岩 安山岩	メノウ	石英	粘板岩
調整無作業1	2					2				
調整B作業1	6	1	3	1				1		
調整B作業3	2		1	1						
調整3作業4	2		1	1						
調整3作業5	1		1							
調整B作業6	1		1							
調整B再調整B作業1	1				1					
調整B再調整・作業不明	12	6	1		1			2	2	
調整無作業1	2					2				
不明	2		1							1
その他の石核A	3		1				1		1	
その他の石核B	3	1	2							
その他の石核C	1					1				
合計	38	8	12	3	2	5	1	3	3	1

の石核 A・B が3点ずつ、その他の石核 C が1点である(第65表参照)。

石材は、鉄石英・頁岩が多く、それぞれ12点・8点を数える。両石材で全体の大部分を占め、その他の石材の種類は多いが、それぞれの出土数は少ない。大きさは長さ2~8cm、幅2~7cmのものが大部分であり、環状集落内の出土石核よりも一回り小さい。10cmを超える大型の石核も認められるが、これらはその他の石核 A であるか、安山岩製の調整無の石核である(第111図参照)。

⑦ 刃片類

総数3,781点の出土がある。石材は刃片石器では主体的でない安山岩が40.7%を占め最も出土数が多い。刃片石器で主体となる石材である頁岩・鉄石英・凝灰岩・ホルンフェルス・粘板岩も比較的の出土は多い(第66表参照)。これら以外にも多種類の石材が出土しているが、全体に占める割合は非常に低い。そのため第112~114図および第67・68表は主要な石材についてのみ作成した。

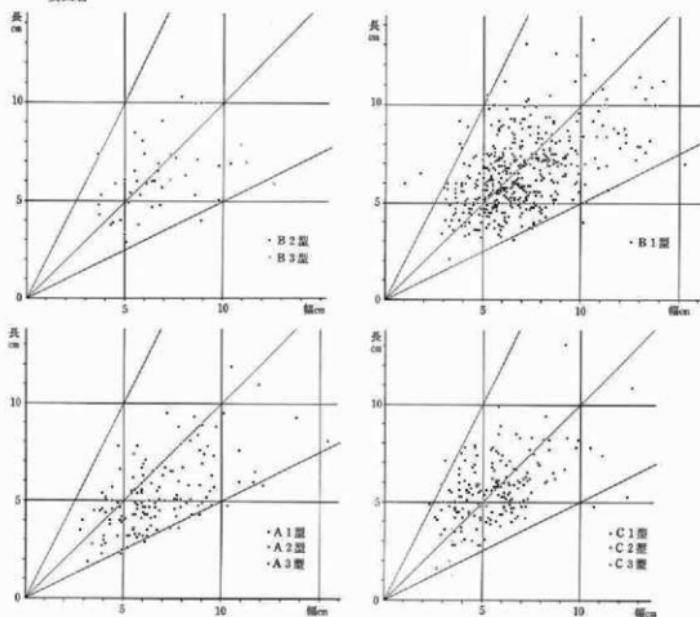
背面の様子をみると、安山岩ではB型が大半を占め、打製石斧・三脚石器・板状石器等に多く使用される砂岩・硬砂岩・粘板岩・ホルンフェルス・結晶片岩ではB・C型が多くA型が少ない。頁岩・鉄石英・凝灰岩・流紋岩ではC型が多く認められる。また、打面の様子は、安山岩・砂岩・硬砂岩・粘板岩・ホルンフェルス・結晶片岩では自然面打面となる1型が圧倒的に多くなっているが、その他の石材では1・2・3型がほぼ同じくらい認められるか3型がやや少なくなる。

大きさは安山岩が他の石材よりやや大きく、長さあるいは幅が3~10cmを計るものが多い。その他の石材では2~8cmのものが多い。大まかな傾向としては、A型が最も大きくなり、C型は小型である。また、1型が大きく3型は小さくなる(第112~114図参照)。打面の大きさは、2,090点で観察できた。全体的には打面の大きさと最大幅のほぼ等しいものが124点(5.9%)、最大幅の1/2よりも大きいもの1,401点(67.0%)、最大幅の1/2より小さいもの565点(27.0%)である。この比率にやや前後はあるものの、いずれの石材においてもほぼ同様の傾向をもっている。

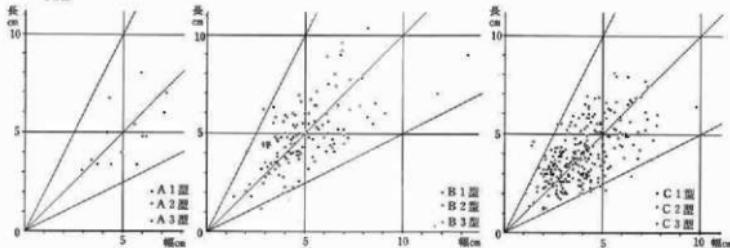
第66表 刃片類石材表

石材 分類	安 山 岩	黒色板岩 安山岩	頁 岩	黑 色 頁 岩	鐵 石 英	凝 灰 岩	ホ ル ン フェ ル ス	砂 岩	硬 砂 岩	粘 板 岩	流 紋 岩	結 晶 片 岩	メ ノ ウ	裸 岩	チ ヤ ト	石 英	輝 碧 岩	そ の 他
出土数	1539	44	628	57	459	249	180	172	39	145	84	69	35	28	20	8	5	18

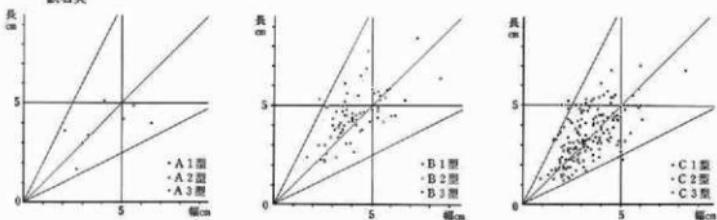
安山岩



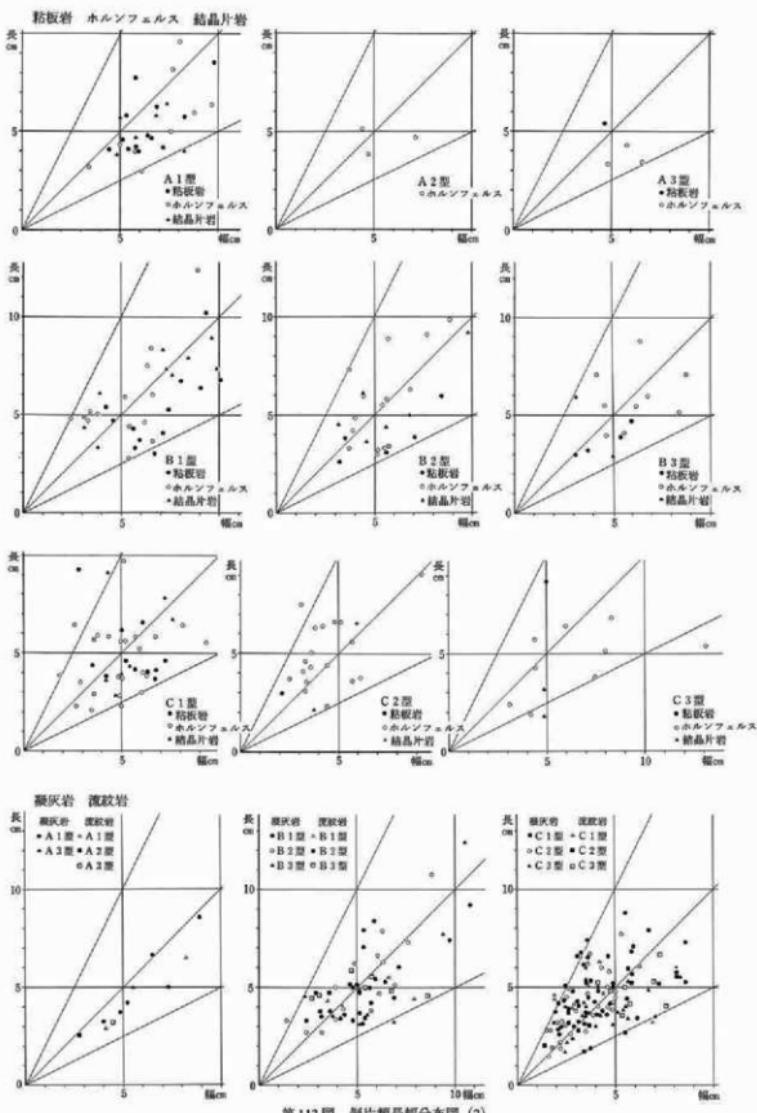
頁岩



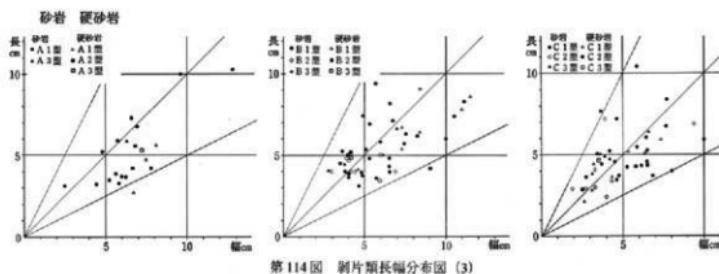
鉄石英



第112図 刺片類長幅分布図(1)



第113図 剥片類長幅分布図(2)



第67表 剥片類石材別観察集計表(1)

全体

型	出土数	打面の大きさ			転位度					折断	
		最大幅 ≈最大幅 >1/2	最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°		
A1型	198	7	138	51	2					47	
A2型	18	1	13	4							
A3型	18	1	12	5						2	
B1型	624	28	441	150	5	456	145	12	3	8	91
B2型	181	5	97	78	1	117	53	7	3	1	7
B3型	116	9	79	28		77	29	8	1	1	1
C1型	453	45	321	82	5	316	107	19	5	6	60
C2型	277	15	151	110	1	184	71	14	7	1	33
C3型	198	12	142	44		126	53	17	2		8
分類不明	1668	1	7	23	1667	20	8	2	1	1667	545
合計	3781	124	1401	575	1681	1296	466	79	22	1684	794

安山岩

型	出土数	打面の大きさ			転位度					折断	
		最大幅 ≈最大幅 >1/2	最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°		
A1型	134	7	102	24	1					40	
A2型	5		4	1							
A3型	1		1								
B1型	460	24	342	91	3	258	95	5	2	74	
B2型	39	1	23	15		25	11	2	1	3	
B3型	7	2	3	2		5	1			1	
C1型	152	17	119	16		116	30	5	1	24	
C2型	21	4	15	2		15	6			1	
C3型	2		2			2					
分類不明	718	1	4	4	709	8	1		709	142	
合計	1539	56	615	155	713	429	144	12	2	712	284

頁岩

型	出土数	打面の大きさ			転位度					折断	
		最大幅 ≈最大幅 >1/2	最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°		
A1型	5	4	1							1	
A2型	5		2	3							
A3型	4		2	2							
B1型	40	1	22	17		22	16	2		3	
B2型	53	1	30	22		34	16	2	1	1	
B3型	36	3	24	9		21	11	3	1		
C1型	96	6	67	23		63	27	4	2	13	
C2型	95	3	49	43		60	28	4	3	12	
C3型	74	5	52	17		51	18	4	1	3	
分類不明	220		6	214		5	2			213	113
合計	628	19	252	143	214	256	118	19	8	213	146

第68表 剥片類石材別観察集計表(2)

鉄石类

型	出土数	打面の大きさ				転位痕					折断
		▲最大幅 最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	不明		
A1型	2		2								
A2型	1		1								
A3型	5	1	2	2							
B1型	20		11	9	15	4		1		1	
B2型	20		8	12	13	7				1	
B3型	29		19	10	21	6	2			1	
C1型	60	7	40	12	1	51	6	2		1	6
C2型	62	3	33	26		45	11	4	2		5
C3型	49	3	35	11		30	15	4			
分類不明	211		1	4	206	3	2			206	103
合計	459		14	152	86	207	178	51	12	3	207
											117

凝灰岩・流紋岩

型	出土数	打面の大きさ				転位痕					折断
		▲最大幅 最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	不明		
A1型	8		4	4							
A2型	1		1								
A3型	2		1	1							
B1型	23		16	6	1	14	4	2	1	2	4
B2型	20	1	8	11		12	7	1			
B3型	15		11	4		13	2				
C1型	49	4	29	15	1	30	15	2	1	1	4
C2型	43	3	22	17	1	27	13	2		1	7
C3型	32	1	24	7		19	9	4			3
分類不明	140		1	1	138		1	1		138	57
合計	333		9	117	66	141	115	51	12	2	142
											75

粘板岩・ホルンフェルス・結晶片岩

型	出土数	打面の大きさ				転位痕					折断
		▲最大幅 最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	不明		
A1型	28		18	10							3
A2型	3		3								
A3型	4		4								1
B1型	34	2	19	12	1	19	11	1	1	2	5
B2型	26	1	16	8	1	15	7	2	1	1	2
B3型	15	2	12	1		9	5	1			
C1型	43	3	32	7	1	23	13	4		2	7
C2型	21		15	6		13	6	22			2
C3型	13	1	10	2		8	3				1
分類不明	208			2	206	1				207	62
合計	365		9	129	48	309	88	45	30	2	212
											63

砂岩・硬砂岩

型	出土数	打面の大きさ				転位痕					折断
		▲最大幅 最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	不明		
A1型	18		5	12	1						2
A2型	1		1								
A3型	2		2								1
B1型	31	1	19	11		19	9	2		1	3
B2型	9	1	3	5		8	1				
B3型	6		6			2	2	2			
C1型	26	4	16	5	1	14	9	1	1	1	4
C2型	11	1	4	6		8	3				2
C3型	8		5	3		5	2	1			1
分類不明	90		1	4	94	2	1	1	1	94	35
合計	211		7	62	46	96	58	27	7	2	96
											48

転位痕の観察できたものは1,863点である。裏面と正面の剥離方向が0°のものが69.6%と大半を占める。90°のものも25.0%と比較的多く認められる。180°や90°+180°は非常に少ない。ほぼすべての石材で同様の傾向が認められるが、粘板岩・ホルンフェルス・結晶片岩だけは0°の割合が低くなり、かわって180°転位が18.2%と一定量を占める。また、折断状の痕跡は794点で観察された(第67・68表参照)。

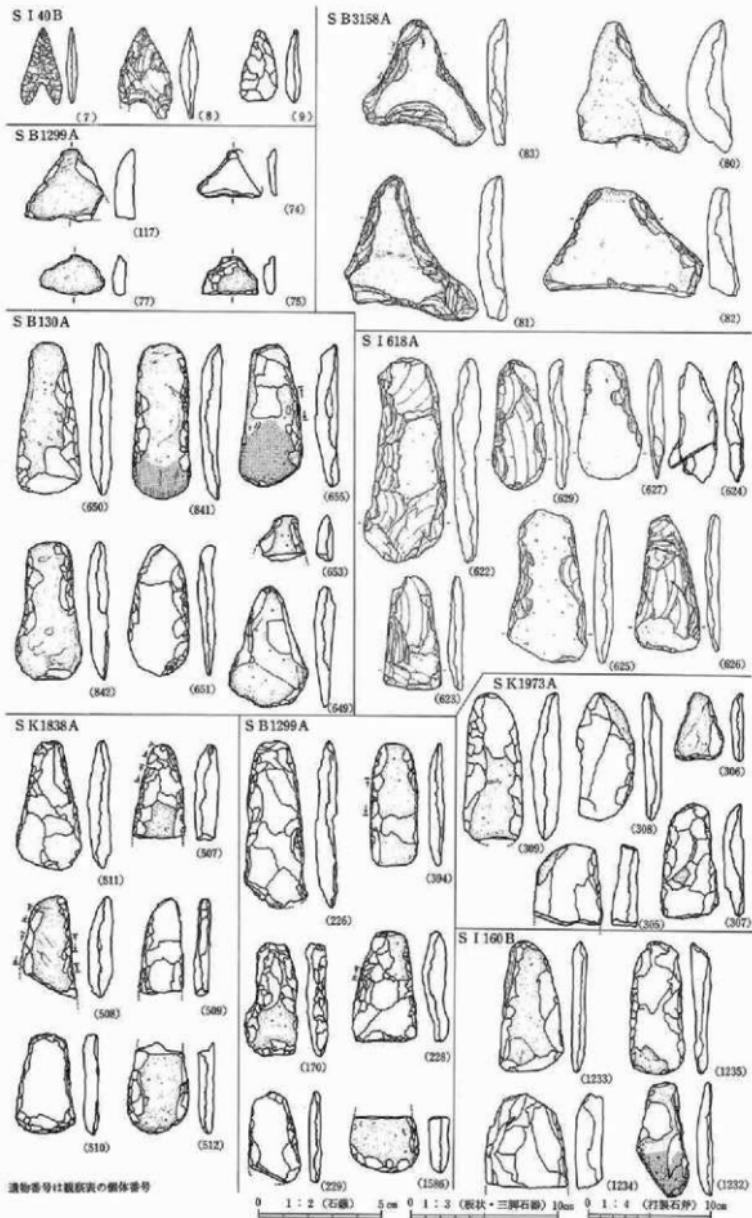
(4) 造構内出土石器および一括性の高い石器

a. 造構内出土石器(第115~119図)

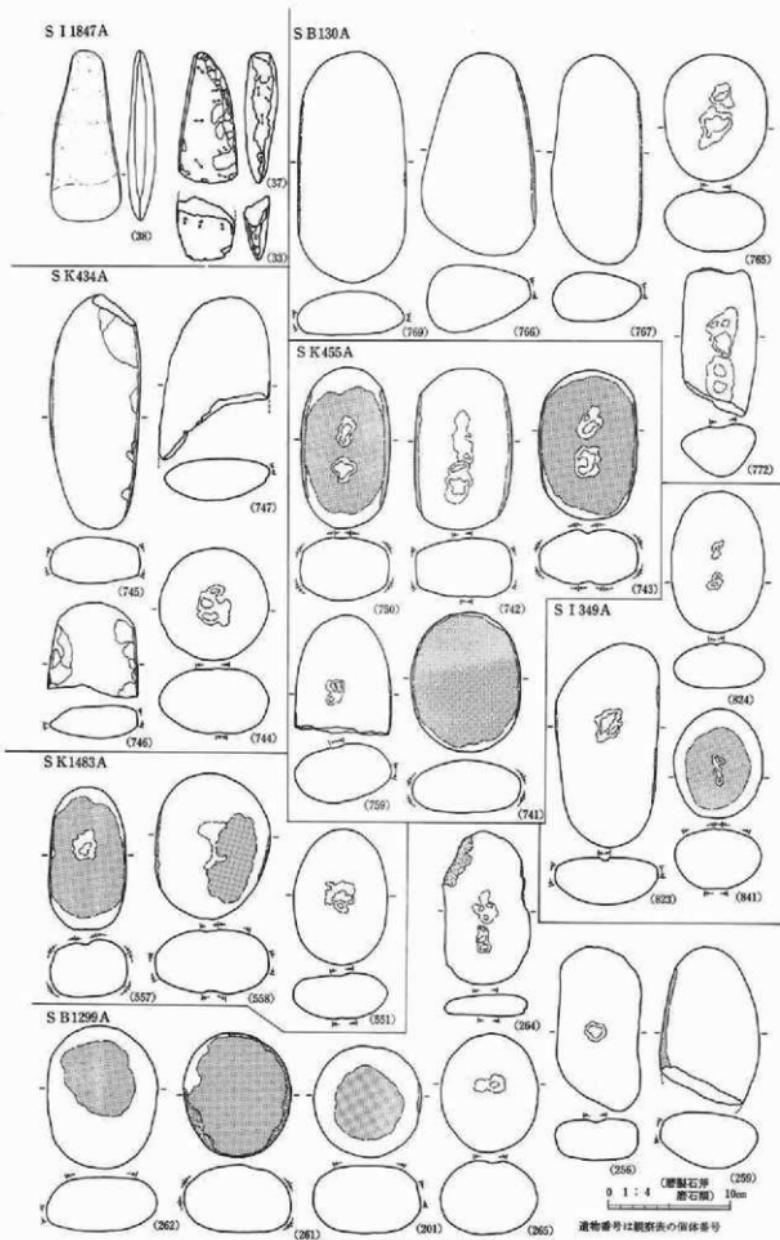
ここでは造構内から出土した石器の内、特に同一器種が多数出土したもの、または、その出土状況から一括性が高いと考えられる石器に関し、その資料を提示したい。なお、SI160Bは集落跡2の造構であるが、ここで説明する。

資料の中には、検出時に細かく出土状況を観察していない場合や、整理段階で抽出したものも多く含まれるため、参考資料程度で細かな分析等は行えなかった。資料中、住居跡(SI・SB)で取り上げたものは床直上ないしそれに近い状態で取り上げたもので、土坑またはピットに関しては覆土全体からの出土が大多数であることを前もって述べておく。

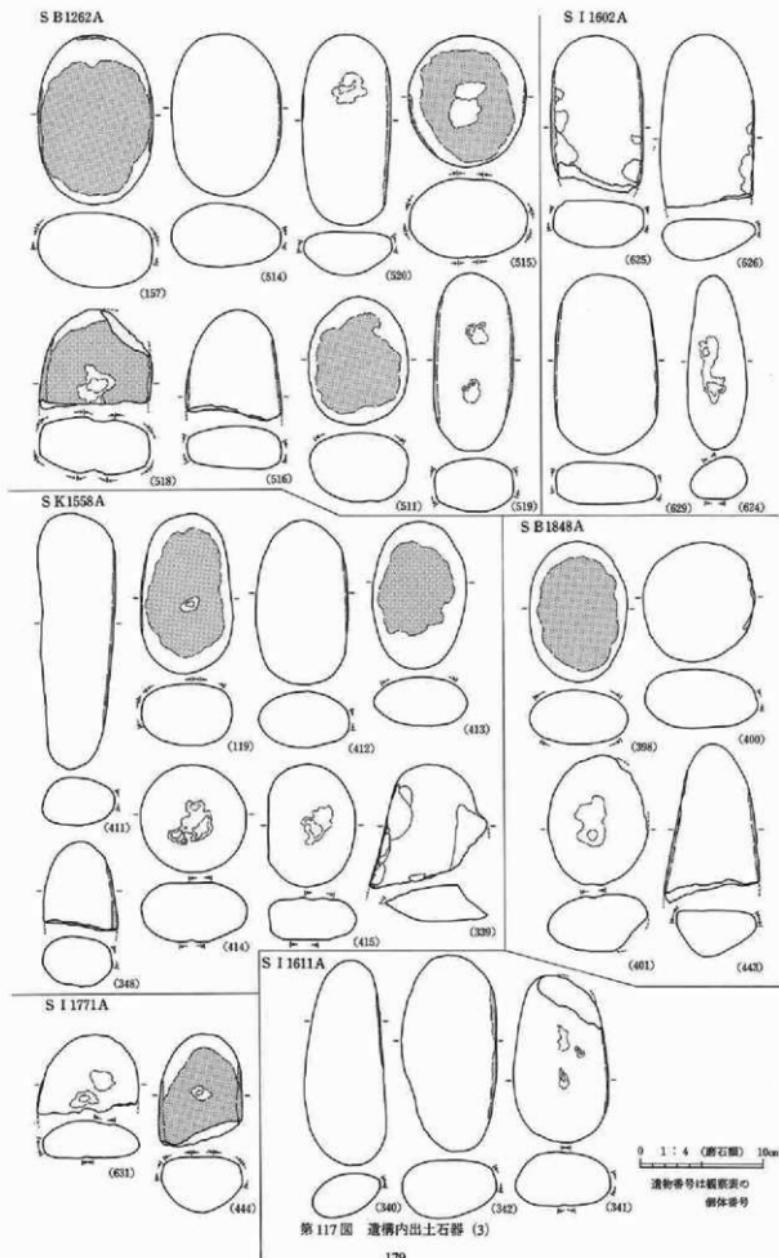
石器の出土した造構は、全体で608基存在する。地区別では遺物・造構の量に比例して集落1が大半を占める。石器組成のセットとして考えられるものは無いが、器種別の造構内での偏りでは、打製石斧が住居(SI40B, SB130A, SI618A, SI1893A, SI160B)にまとまって出土する例が多く、磨石類が土坑でも特にプラスコ状(SK434A, 455A, 1483A, 1558A, 1973A, 2538A, 2628A)の土坑から多数出土する傾向がある。これらの内で特徴的な出土状況を示すものはSI618AのP293Aの打製石斧のみである。主柱穴にならない壁際のピット(P293A)の北東壁に立てかけたように出土したもので、7点中5点は間隔無く重なっているため、紐または袋等で固定された可能性が高い。前回の調査でも16号住居跡の壁際床面付近から5本重なって出土した。これらは比較的大型の完形品で側縁につぶし加工は見られるものの肉眼で観察される刃部への磨耗(使用痕)は見られず、未使用品と考えられる。今回の資料も遺存状態の良い6点でみると刃部の破損は見られず、磨耗痕も無いことから未使用品と考えられよう。このような出土状況が意味するものは、住居廃絶時に置き忘れた石器製品のストックまたは住居廃絶時の祭祀行為の表れ等が考えられるが、詳細は不明である。

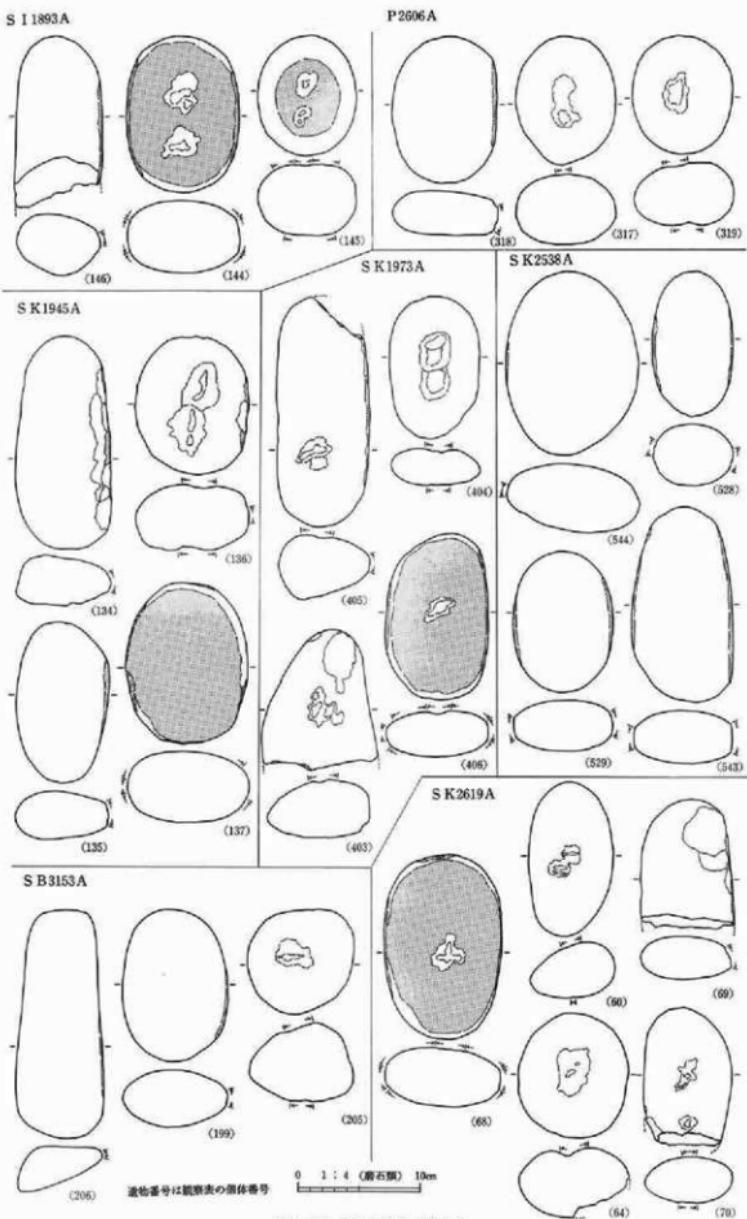


第115図 遺構内出土石器(1)

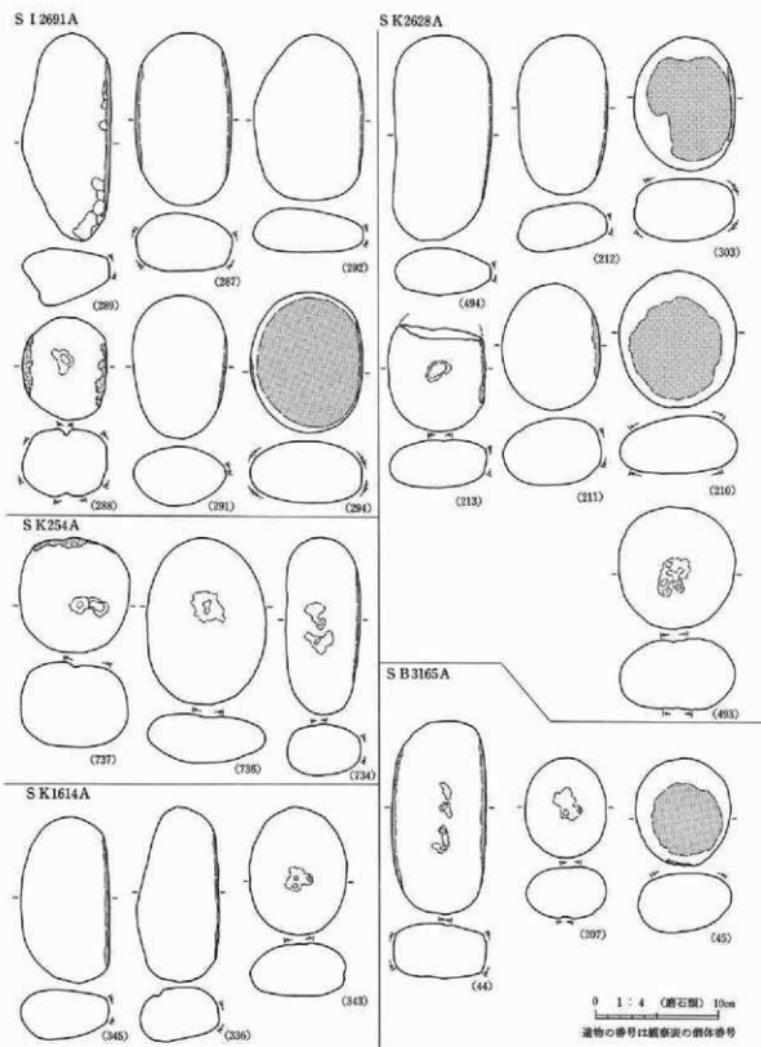


第116図 造構内出土石器 (2)





第118図 造構内出土石器 (4)



第119図 遺構内出土石器 (5)

4 集落跡2の調査

A 遺構

(1) 住居跡

掘り方の認められる堅穴住居跡が1軒検出された。台地上の集落には、多数のピット群を中心とした遺構集中区が検出されており、住居跡の可能性も考えられるが、炉跡と考えられる焼土および柱穴となりうる良好なピットの配列やプランの検出には至らなかった。また、検出された住居跡は、これらのピット群から外れた集落の北側に位置し、出土遺物からも、遺構集中区のものとは時期が異なる。

SI160B (図版216, 写真472)

位 置 集落跡北側のG01に位置する。

平面形 楕円形である。

規 模 長軸7.4m、短軸6.1mである。

壁 壁高36cmを計るが、立ち上がりは比較的緩やかである。北東側では、テラスが設けられている。

柱 穴 10本。主柱穴はP476B～P480B、P483Bで、掘り方のやや内寄りに炉を開むように椭円形に巡る。炉の周辺の柱の間隔は0.8～1.9m、深度は19～40cmで安定している。

炉 地床炉。95×78cmの不定形プランで、地山に浅い掘り方が認められる。覆土は炭化物を多く含んでいるが、焼土はほとんどみられない。

床 地山には平坦な掘り方が認められるが、堅い明確な床は確認されなかった。

覆 土 覆土は黒褐色土主体で全体に炭化物を含み、下部へ向かう程地山の割合は多くなる。整部付近では堆積が複雑になるが、基本的には覆土1～3の3層に大別できる。

出土遺物 土器(2428～2432)、石器(打製石斧5、磨石類1、石皿1、両極石器1、不定形石器4)

時 期 中期中葉③

その他の 調査時にII層中でその存在がある程度確認できた。テラスが設けられ、主柱穴でないP481B、P502Bなどが所在する北東側が入口ではないかと考えられる。

(2) 土坑

フラスコ状土坑4基、フラスコ状以外の土坑10基の計14基が検出された。その中で、形状・覆土・出土遺物などから、明らかに縄文時代の土坑と認定したフラスコ状土坑、フラスコ状以外の土坑それぞれ4基を観察表に記載した。それ以外のものについては、全体圖にその完掘状況を示したのみである。それらの主な分布はピットが集中する集落跡中央付近の台地縁辺部に位置するが、特にフラスコ状土坑は、I03のピット群をめぐるように狭い範囲で検出された。土層堆積は、自然堆積、人為堆積の2つに大別され、自然堆積と考えられるものが1基、その他は人為堆積と考えられ、うちフラスコ状土坑はすべて人為堆積と考えられる。フラスコ状土坑は底部径によりI・II類に、フラスコ状以外の土坑は平面形から円形に分類されたが、特に規模の大きなものはみられなかった。

(3) ピットおよび性格不明の落ち込み

ピットは、住居跡の柱穴を除いて 263 基検出された。その中で、観察表に記載したものは、遺物の出土した 21 基である。ピットは主に集落跡中央付近の台地縁辺部に集中しており、その分布状況からも、住居跡存在の可能性がうかがえる。性格不明の落ち込みは、遺物が出土したもののみを SX として、観察表に記載した。

(4) 集石

集石 428B (図版 217, 写真 474・475)

位置 集落跡中央よりやや西寄りの J03-10 に位置する。

検出状況 II 層下部より検出された。礫は径約 1m のほぼ円形の範囲に広がり、地山にはやや南寄りに上端 80 × 57cm、下端 70 × 44cm、深度 13cm の落ち込みが認められるが、本来の検出面が II 層包含層中であるため、規模はさらに拡大すると考えられる。

覆土 磨の表面が風化、赤変しており、また覆土中には多量の炭化物を含んでいることから、被熱した可能性が高い。

その他 時期を示すような遺物は出土していないが、検出層位などから縄文時代の集石と考えられる。

(5) 一括土器

一括土器は、3か所で検出された。そのうち 254B、429B が遺構の集中する台地の上に位置するのに対し、555B は捨て場 D と同じ段丘崖下に位置し、唯一地山に掘り方をもつ。

一括土器 254B (写真 475)

位置 集落跡西端の J06-17 に位置する。

検出状況 85 × 62cm のまとまった範囲で土器が散布しているのが II 層中より検出された。

出土遺物 土器 (2684~2688)

時期 前期前半 I

一括土器 429B (写真 475)

位置 集落跡中央よりやや西寄りの J03-5 に位置する。

検出状況 70 × 80cm のまとまった範囲で土器が散布しているのが II 層中より検出された。

出土遺物 土器 (2470~2472)、石器 (磨石類 1)

時期 中期前葉①

一括土器 555B

位置 集落跡南側の崖下、捨て場 D より南側の N03-6, N02-10 に位置する。

検出状況 上端 68 × 34cm、下端 59 × 16cm、深度 11cm の溝状の掘り方の中から土器が一括出土した。

覆土は暗褐色で締まりはやや弱く、プラン内にはピット状の落ち込みをもつ。

出土遺物 土器 (2473)

時期 中期前葉①

(6) 捨て場

捨て場は2か所（捨て場B・D）が検出された。両者とも遺構が集中する台地の縁辺から落ち込む崖下に形成されている。この2か所の捨て場からは、中期前業を主体に前期前半の遺物が出土したが、捨て場Dに限り早期末のものが若干出土した。両者の捨て場における時期差はみられず、各時期の遺物が分布的に偏ることもなかった。

捨て場B（図版218、写真475）

位置 集落跡北西側斜面のG04, H05・04, I06・05に位置する。

規模 南北10m、東西23mにわたって遺物が発見されていた。

層序 基本層序のⅡ層に比定される沢の斜面堆積土から、中期前業の遺物を中心に前期のものも若干出土した。植林のための整地により削られている箇所もあるが、Ⅱ層からの斜面堆積は最深120cmを計る。ただし、花粉・珪藻分析の結果、この地点の堆積土は地表からの崩落等によって形成されたもので流路的性格ではなく、本来の流路はさらに下方に存在したと考えられる。遺物集中区域は概ね2か所に大別できる。H05付近の遺物はⅡ層以下の堆積土から出土し、ほぼ地山の傾斜に沿って分布する。一方、H04-6付近の遺物はⅡ層中のみより出土しており、前者のものより規模が小さい。

出土遺物 土器(2474~2569, 2689)、土製品(2769~2776, 2781, 2782)、石器(石斧5, 石匙3, 板状石器10, 打製石斧28, 磁器類10, 磨石類89, 砥石5, 石皿4, 不定形石器126, 合石1, 石核10)

時期 中期前業①~③、前期前半Ⅰ、前期末

その他 この捨て場は沢の東斜面に形成されたものである。捨て場内における2つの遺物集中区域は、出土層位がやや異なるが土器による時期差は認められず、捨て場の時期的な変遷はなかったと考えられる。

捨て場D（図版219、写真476）

位置 集落跡南側の崖下 M03・02, N04~02に位置する。

規模 南北10m、東西20mにわたって遺物が破棄されていた。

層序 遺物が出土した層は、基本層序のⅡ層に比定される斜面堆積土で、最深110cmを計り、南東に向かって緩やかに終結する。

出土遺物 土器(2570~2610, 2690~2727)、土製品(2766, 2777, 2778, 2783~2785)、石器(両面加工石器2, 板状石器1, 打製石斧4, 磁器類3, 磨石類27, 砥石1, 石皿2, 両極石器3, 不定形石器44, 石鍬2, 石核2)

時期 中期前業①~③、前期前半Ⅰ、前期末、早期末

その他 集落跡南側の段丘崖から下位の段丘面の一部に位置するが、遺物の分布域は比較的なだらかで、特筆すべき落ち込みは認められない。

B 遺 物

(1) 土 器

集落跡2からは、集落跡1と同様に縄文時代中期前葉を中心として中期中葉までの土器が相当量出土している。これらは、主に土器捨て場BおよびDから出土しており、遺構や遺物包含層からの出土はそれほど多くなかった。このほか、前期前半の土器も捨て場Dを中心に一定量出土している。なお、土器觀察表で時期の欄が不明となっているものは、中期前・中葉に属するがその詳細が不明のものである。

a. 中期前葉の土器

遺構出土の土器 2437は、2単位の台形状の突起をもち、向かって左側には4単位1組の鋸歯状の小突起がみられる。2442は、ところどころに3点の刺突が加えられた4条1組の隆起線が、等間隔に縄文地面上の脇部を垂下している。2460は、口縁端部に刺目が施された横長の小突起をもち、縄文地文の口縁部に3条の波状沈線文がめぐっている。脇部は、全面に縄文が施文されている。2473は、口縁は無文帯で1条の半隆起線がめぐっている。口縁部下半には半隆起線で集合沈線的な文様が描かれ、脇部には1条の半隆起線がめぐっている。脇部は縄文地上に半隆起線が垂下し、器面をほぼ埋めている。2474は、脇部と脇部の境界に横長の瘤状突起が添付されている。このような瘤状の突起は、集落跡2出土の土器群の特徴のひとつとなっている。2482は、2561と同一個体の可能性が高い。2497は、平面形が長円形をなし、正面形が舟形を呈するといった特異な器形を呈する。口縁部には3条の半隆起線がめぐり、脇部は縦位の半隆起線で4単位に区画され、区画内は縦位の半隆起線で埋められている。底部には木葉痕の痕跡が認められる。2526は、口縁部に3条の半隆起線がめぐり、脇部は無文地に縦位の半隆起線が密に垂下している。2531は、盤状の底部をもつことから、古いタイプの浅鉢と考えられる。2533、2534は、ヘラ状工具を用いた細長い刺突を密に施している。2537は、沈線で文様を描き、沈線中に細い刺突を加えている。2544は、口縁部が直立して底部が丸底ではないかと考えられる皿状の浅鉢である。文様は半隆起線、爪形、隆帶で描かれ、北陸系浅鉢1類に類似する。2560は口縁部上半に蓮華文が施文されている以外は、文様は北陸系深鉢4c類に類似する。2578は、口縁の内面に沈線で渦巻文などが描かれている。沈線は単なる沈線で有筋沈線ではないが、一部沈線のわきに刺目が施されている。2596は、北陸系深鉢1d類に類似するが口縁部下半に無文帯をもっている。

遺物包含層出土の土器 2613は、三角形陰刻手法の蓮華文が施文されている。2617は、口縁に集合沈線的な縦位半隆起線が施されている。2630は、五領ヶ台II式の範疇に含まれると考えられる土器で、口縁部は無文帯、脇部に5~7条の沈線がめぐり瘤状の小突起が付く、脇部は縄文地上に沈線が垂下する。2648は、脇部に斜格子目状の沈線が施されている。2669は、口縁と口縁部下半の二か所に三角形陰刻文が施されている。2677・2678は、2617と類似し、口縁に縦位半隆起線が施されている。

b. 前期前半の土器

2469は、施文されている縄文が中期的でないこと、胎土中に纖維らしきものが混入していること、脇部の状況から底部が丸底気味になることなどから、前期前半の土器と考えられる。2687は、器壁が厚めの土器で、縄文の痕跡がかすかに確認される。2695、2696は脇壁がかなり厚い土器である。2707は、口縁端部に突起をもっている。2709は、口縁端部に突起をもつ波状口縁の土器で、口縁部には無文地上に2条の沈線と爪形が施され、脇部には幅狭等間隔横帯区画の羽状縄文が施文されている。2713は、器壁の厚さという点

では、2695, 2696に類似する。2717は、無文地上に沈線で弧線状の文様を描いている。2727は、沈線で弧線状の文様や爪形が施文されており、2717に類似する。同一個体の可能性もある。

c. その他の時期の土器

2726は、内外面に条痕が施されていることから、早期末に比定されるであろう。2735は、器面に密に横位沈線が施されている。器壁薄く焼成も良好である。早期後半の沈線文系土器に含まれるものであろう。2749は、縄文地文に細かい刻目が施された浮線で文様が描かれているもので、胎土に纖維を含んでいないことから、関東地方の諸磧式に比定される土器であろう。2750は、半隆起線や三角形彫刻文で文様が構成されていることから、本県の鍋屋町遺跡から出土している土器あるいは北陸地方の福浦上層式に類似する。2752は、東北地方の大木9式に比定されると考えられる。口縁部は隆帶で格円状に区画され、区画内には円形刺突が点列状に施されている。胎土は緻密で焼成も堅密である。2753は、底部に箒の圧痕がみられる。2754は、沈線で文様が描かれ、沈線の集合部分に瘤状の突起が添付されている。いわゆる沖ノ原式(江坂・渡辺1977)の範疇に含まれる土器であろう。2755は、口縁が無文帯となっている。2758も口縁は無文帯である。2760~2763は、縄文地文の口縁部に隆帶で渦巻文や方形状区画が描かれ、そこから縄文地文の胴部へと隆帶がところどころに渦巻文をつくりながら垂下する。

(2) 土 製 品

a. 土 偶 (2766, 4195, 4196)

「らしきもの」を含めて3点の出土が確認されている。2766は膨らんだ下腹部と横に張り出した臀部をもち、背竹管を用いた沈線で文様が描かれている。ヘソは豆粒大の粘土塊の添付によって表現されており、出ペソ状をなしている。施文技法から中期前葉③に比定されるのではないかと考えている。4196は右肩ではないかと考えられるものであるが、遺存状態が悪いため詳細は不明である。

b. 板状土製品 (2767~2786)

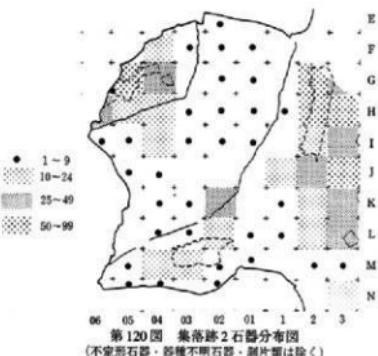
20点の板状土製品が確認されており、すべてが土器片を再利用したものである。内訳は、三角形板状土製品が14点、四角形板状土製品が1点、円板状土製品が5点である。その多くは捨て場より出土している。

集落跡2では、SI160Bをのぞくと中期中葉の遺物はほとんど出土していないことから、これら の板状土製品の大半は中期前葉に含まれるものと考えられる。

(3) 石 器

a. はじめに

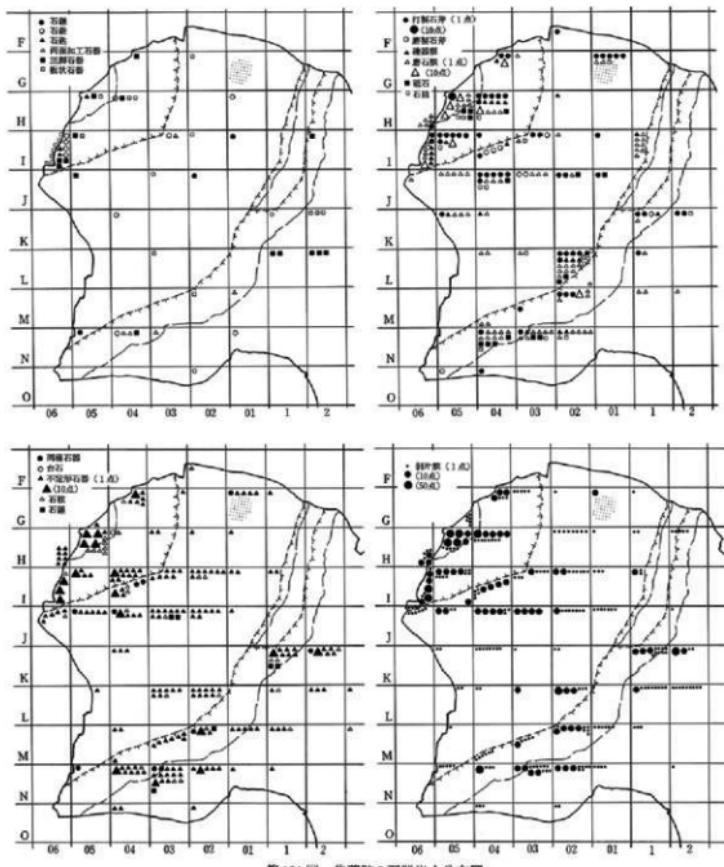
集落跡2は集落2と捨て場B・Dで構成される。集落2 捨て場Aよりも西側を集落跡2とした。ここでは、出土土器の状況から集落跡2の捨て場と考えられる捨て場Bおよび捨て場Dを一括して記述の対象とする。石器器種の総数は705



第69表 集落跡2の出土石器

地区	石 錐 頭 器 錐	石 路 路	石 器 加工	三 脚 石 鉢	板 状 石 斧	打 製 石 器	磨 製 石 斧	磨 器 類	石 灰 灰	石 灰 灰	石 灰 灰	不 規 則 石 器	石 錐 錐	石 核 核	剥 片 片	石 製 品	合 計			
集落2	3	5		3	8	9	34	8	55	11	11	8	171	4	18	624	1	982		
捨て場B		5	3		7	10	28		10	89	5	4	129		1	10	587		888	
捨て場D				2		1	4		3	27	1	2	3	46	2	2	117		210	
合計	3	10	3	5	15	20	66	8	22	171	17	17	11	346	6	1	30	1328	1	2080

点、剥片類1328点であり、集落跡2内の分布状況はG01の住居跡周辺、I06～02・J06～02の遺構集中区、K1・2、L02、捨て場BおよびDに集中する。ただしL02の出土石器は開墾塹として後世に投棄されたものがほとんどであり本来の位置を留めているものではないが、隣接するL03～04に遺構が集中しその南側に捨



第121図 集落跡2石器出土分布図

て場Dが位置することから考えて、本来はL02ではなくL03~04に位置していたものと思われる。また、K1・2の集中区は集落2の位置する平坦面よりも一段低い面にあり、むしろ集落1もしくは捨て場Aに含まれる可能性が高いが、当初からの地区区分に従い一応集落2に含め、ここで取り扱うことにする。

捨て場B 東側に位置する集落2が形成した土器捨て場で、遺物は集落2の台地上および捨て場Bの崖下で明瞭に区別される。捨て場遺物集中域内の崖傾斜地に散布する遺物も捨て場Bとして取り扱った。

捨て場D 北側の集落2が形成した土器捨て場で、範囲外、特に捨て場西隣で、連続する遺物分布を見るが、一応、図中範囲内出土のものに限った。それ以外のものは、台地上の集落2からの流れ込みと考え、捨て場のような積極的行為とは区別した。

b. 石 錐 (図版238)

3点出土しているが、そのうち1点が未成品である。全て遺構外の出土で、集落の立地する台地上から散発的に出土している。大きさは、完成品の2点をみると、長さ2.4cm前後で、幅は1点がわずかに脚部を欠損するが、復元すると両者とも1.5cm程度である。石材は黒曜石・メノウ・凝灰岩など堅致な石材が用いらされている。

c. 石 錐 (図版238・244)

総数10点が出土している。すべて遺構外の出土である。分類別ではA類・C2類が各3点、C1類2点、B類1点である。集落2内の出土分布状況は、特に捨て場Bからの出土が集中し、5点を数える。また、集落の立地する台地上ではA類が多く、捨て場BからはC類の出土を多くみる。石材は鉄石英を用いるのがほとんどで、8点を数える。

大きさは、長さ3~8cm、幅2~7cmに分布し、長幅比は3:1~1:1にすべて収まる。重さは5~30gが多いが、50g以上を計るものも認められる。資料数が少ないためか、分類ごとの傾向は見出せない。

錐部の断面形を観察すると、三角形状のものが6点、四角形状のものが2点である。錐部の先端に使用痕が認められるものは4点あり、すべてが磨耗痕である。

d. 石 匙 (図版244)

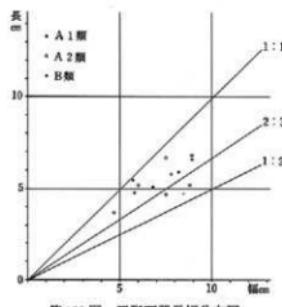
3点出土するが、いずれも捨て場Bからの出土である。すべて縁形石匙であるが、先端部の形状はそれぞれ異なる。2893は丸みを帯び、2894は尖り、2895は直線的である。つまみ部を除いて、二次加工は表面のほぼ全周に施されるが、2895は先端部が未加工で自然面を残している。石材は、凝灰岩・緑色凝灰岩が使用されている。

e. 両面加工石器 (図版238・249)

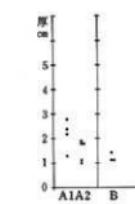
総数5点出土しているが、集落内からの出土は1点だけで、他は崖下の捨て場Dとした範囲およびその周辺からの出土である。大きさは長さ・幅とともに5cm前後のものが多く、円形・楕円形の形態を基本とするが、2793は長幅比1:2の長方形状を呈し、また2967は先端が徐々にすぼまる尖頭状の形態をとっている。石材はホルンフェルス・黒色緻密安山岩・鉄石英・頁岩が使用されている。

f. 三脚石器 (図版238・244)

総数15点が出土している。集落2からの出土は1点のみで、捨て場DとK1・2からの出土が大半である。分類別ではA1類が5点、A2類が6点、B類が4点とほぼ同数である。また、石材は粘版岩(6点・40%)、頁岩(3点)、ホルンフェルス・結晶片岩(各2点)等が使用されるが、主体となる粘版岩はA1類には使用されていない。



第122図 三脚石器長幅分布図



第123図 三脚石器厚さ分布図

破損品は3点認められ、いずれも一脚を欠損するものである。以下は完形品・ほぼ完形品12点を対象とする。大きさは、長さ3~7cm、幅5~9cmに分布し、集落跡1のようにA1類に特に大型のものは認められない。長幅比は1:1~1:2に全てが収まる。厚さはA1類が2~3cm、ほかは1~2cmに分布するものが多く、分類基準通りA1類が厚手である(第122・123図参照)。

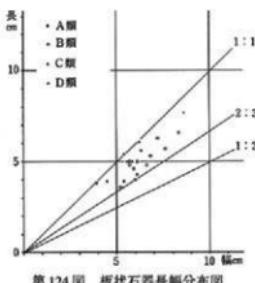
使用痕としては、側縁につぶれや磨耗が認められるものが6点存在する(2794, 2796, 2899, 2900)。

g. 板状石器 (図版238・244・249)

総数20点出土している。全て完形品・ほぼ完形品である。集落内および捨て場Dでは散発的な出土をみるだけであるが、K1・2および捨て場Bでは比較的集中しており、特に捨て場Bの出土数が多い。分類別ではB類の出土が多く12点を数える。C類・D類はそれぞれ4点、A類は1点の出土である。

大きさは、全体的に3~6cm、幅4~8cmに比較的集中し、長幅比1:1~2:3に全て収まる。厚さは、0.8~15cm特に集中は見られない(第124図参照)。

石材は結晶片岩・粘版岩を使用するものが多く、それぞれ8点(40%)、7点(35%)を数える。素材はほとんどが平板状の剥片を用いるが、2969は両極打法によるものである。また、礫素材のものも1点認められる。



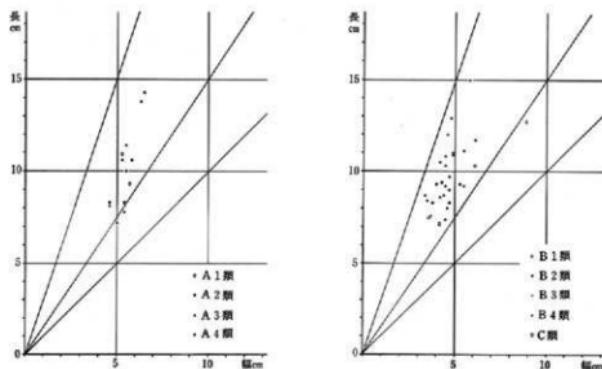
第124図 板状石器長幅分布図

h. 打製石斧 (図版238・239・245・249)

総数66点出土している。分類別ではB3類が18点(27.3%)と最も多く、集落跡2内の出土分布状況は、遺構の分布と重なる。特にSI160Bから5点がまとめて出土するが、詳細な状況は不明である(第70表参照)。

完形・ほぼ完形品は44点を数え、破損品では刃部側あるいは中央部で破損したものがやや多く7点ずつ、基部側で破損するものは5点である。残存部位では、破損部位に間らず基部の遺存するものがほとんどである。

大きさは、長さ7~12cm、幅3~6cmを計るものが多い。長幅比は分類に関らず3:1~3:2に分布するが、



第125図 打製石斧長幅分布図

A類は特に2:1付近～3:2付近に收まり、B

類は3:1～2:1にはいるものが多く認められる。重量は40～140gのものが大部分である（第125図参照）。

石材は結晶片岩（16点）、粘板岩（14点）、ホルンフェルス・砂岩（各10点）を使用するものが多い（第71表参照）。

刃部の形態は、平面形が円刃のものが最も多く32点、扁刃7

点、直刃4点であ

る。断面形は両刃が26点、片刃が17点である。

使用痕は14点に認められ、ほとんどが刃部の磨耗痕である。またB1類に含めたが、2909

第70表 打製石斧分類別出土数

分類別	住居跡	土坑	ピット	遺構外	捨て場B	捨て場D	合計
A1類				2	3		5
A2類	1			1	4		6
A3類	1	1		2			4
A4類				1			1
B1類				1	2		3
B2類			2	3	1		6
B3類	1			10	6	1	18
B4類				3	3		6
C類						2	2
D類				1	1		2
分類不明	2			2	8	1	13
合計	5	1	2	26	26	4	66

第71表 打製石斧石材表

石材 分類	結晶片岩	粘板岩	ホルン フェルス	砂岩	硬砂岩	頁岩	安山岩	黒色凝灰岩	安山岩	塵岩	合計
A1類	1		1	1		2					5
A2類	1	1	2	1		1					6
A3類	1			1		1					4
A4類					1						1
B1類	1	1								1	3
B2類	2	2	1	1							6
B3類	7	3	4	1	1	1			1		18
B4類	2	2		2							6
C類					1	1					2
D類	1		1								2
分類不明	2	3		3	3	2					13
合計	16	14	10	10	5	8	1	1	1		66

は分銅形の形態をもった製品である。中央部のくびれはそれ程強くない。

i. 磨製石斧（図版239）

総数8点が出土しているが、全て遺構外の出土である。集落跡2内では特にI06～02、J06～02の遺構集中区に出土が多い。完形・ほぼ完形品は3点認められ、いずれもA2類であるが、破損品の5点もほとんどがA類の破損品である。石材は蛇紋岩が多い。

j. 砥器類 (図版 239・240・245・246・249)

総数 22点が出土している。集落の立地する台地上では石器集中区すべてから出土が見られるが、すべて遺構外出土である。また、捨て場Bからは 16点、捨て場Dから 3点の出土が認められる。分類別の出土数は、A1類4点、A2類6点、B2類5点である。砾素材のものと剥片素材のものとは出土数に大きな違いはない。大きさは長さ 6~14cm、幅 6~17cm を計るが、長さ 10cm 以上のものは A1類に多く認められる。長幅比は 1:1~1:2 に大部分が分布するが、A1類には 2:1~1:1 の縦長のものが多い。

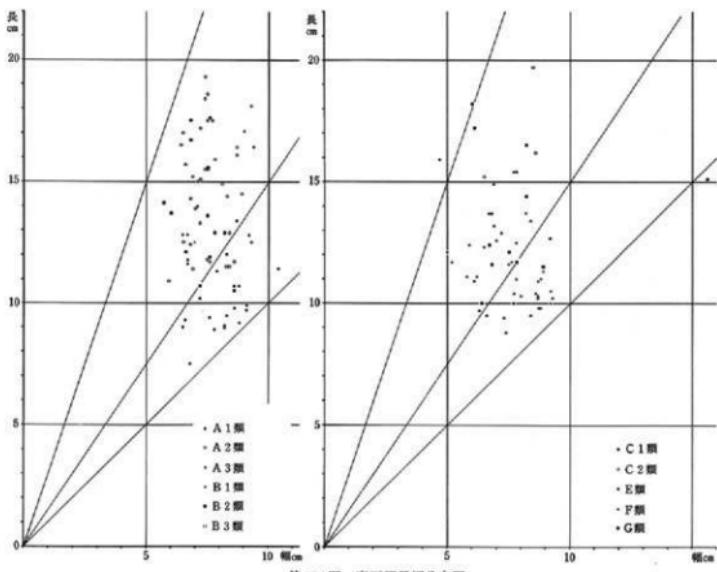
石材は安山岩が 31.8% と最も使用率が高いが、集落跡 1 ほどには選択性は強くない。安山岩の他には、凝灰岩 (18.1%)・砂岩 (13.6%)・粘板岩 (13.6%) 等が使用されている。

k. 磨石類 (図版 240・246・249・250)

171点が出土している。分類別では、A類 (50点・29.2%)・E類 (35点・20.5%)・B類 (25点・14.6%) が多い。集落跡 2 内の出土状況は、I06~02・J06~02 の遺構集中区、捨て場 B および D に比較的集中するが、G01 の SI160B 周辺と K1・2 には出土が少ない (第 127 図参照)。

大きさは、長さ 9~18cm、幅 6~10cm、厚さ 3~6cm、重量 300~600g の範囲に大部分がある。長幅比は集落 1 とほぼ同様であるが、E類において 2:1~1:1 を計り、円形指向がそれほど強くない点で異なる。また、磨痕の認められるものは集落 1 と同様にその部位によって形態があり、磨痕が正面にあるものは側面にあるものと比較して長さが短く厚みのある素材を選択する傾向が強い (第 126・127 図参照)。

石材は安山岩に集中し、101点 (59.1%) を数える。その他には凝灰岩 (18点・10.5%)・花崗岩 (13点・7.6%)・

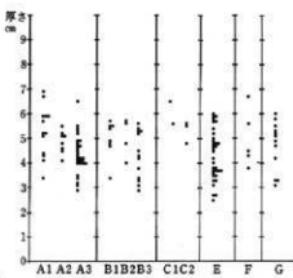


第 126 図 磨石類長幅分布図

第72表 磨石類分類別出土数

分類	住居跡	ピット	遺構外	捨て場B	捨て場D	合計
A類		16	28	6	50	
B類	1	4	16	4	25	
C類		3	1	1	5	
D類			1		1	
E類	1	1	13	7	35	
F類		1	3	1	5	
G類		5	3	5	13	
分類不明		10	24	3	37	
合計	1	2	52	27	171	

砂岩 (12点・7.0%) が比較的多く使用されている (第73表参照)。



第127図 磨石類厚さ分布図

l. 砥 石 (図版240・241・246・250)

総数16点の出土をみると、遺構内から出土しているものは、P418Bの1点だけである。集落跡2内の出土分布状況は集落2からの出土は少なく、周辺の崖下からの出土が比較的多い。

完形・ほぼ完形品は12点で

ある。大きさは、長さ15cm前後、幅5~10cm程度のものと長さ20cm以上の大型ものとが認められる。それを反映して重量も500~1,000g前後のものと、2,000g以上の重量品とに分かれる。石材は花崗岩が圧倒的に多く12点 (75.0%) を数える。

m. 石 盤 (図版241・246)

総数17点が出土している。集落跡内では特にまとまりではなく散発的な出土状況である。遺構内の出土は2点で、SI160B・SK161Bからそれぞれ1点ずつが認められる。分類別の出土数はA1類2点、A2類2点、A3類3点、B1類3点、B2類2点である。石材は安山岩が14点 (82.4%) と最も多い。花崗岩は2点と少ないが、いずれもB2類に使用されている。

n. 両極石器 (図版238・249)

総数10点が出土しているがすべて2極1対のものである。遺構内からはSI160Bから1点が出土しているだけである。集落跡2内では散発的な出土状況を示す。

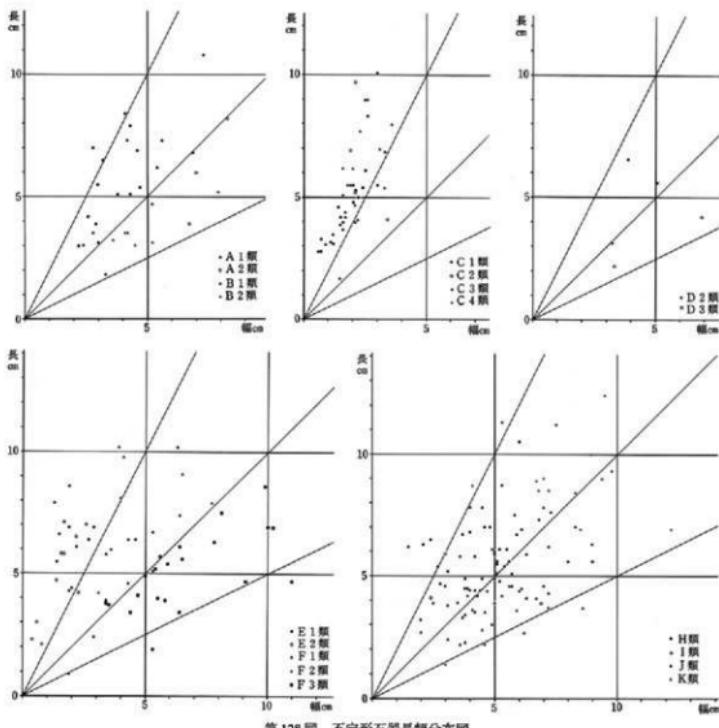
大きさは長さ4~6cm、幅2~4cm前後のものが多く、長幅比は2:1~1:1を示すものが多いが、横長の形態をもつものも存在する。重量は10~50gのものが多い。石材は頁岩 (5点)・メノウ (2点)・鉄石英 (2点)等が使用されている。

o. 不定形石器 (図版241~243・247・250)

総数346点である。集落2からは171点の出土があり、その中で遺構出土のものは、住居跡ではSI160Bの4点、土坑4点、ピット8点である。また、捨て場Bからは129点、捨て場Dからは46点の出土がある。分

類別の出土数は、A1類16点 (2849~2852, 2941, 2942)、A2類3点、B1類6点 (2865)、C1類12点 (2857, 2944)、C2類4点 (2945)、C3類28点 (2856, 2858, 2859, 2861, 2946, 2948)、C4類1点 (2860)、D2類3点 (2947)、D3類2点、E1類10点 (2862, 2949, 2950)、E2類11点 (2863, 2865)、F1類16点 (2866, 2867)、F2類6点 (2864)、F3類21点 (2871)、G類33点 (2868, 2870, 2952~2954)、H類2点 (2869)、I類3点 (2955)、J類73点 (2872~2876, 2956, 2957)、K類24点 (2877, 2879, 2959, 2960)、分類不明66点 (2878, 2880~2883, 2951, 2958, 2961) である (第75表参照)。

大きさは、分類基準により小型となるものがあるが、長さ2~10cm、幅2~10cmを計るもののが大部分である。長幅比は2:1~1:2にほとんどが収まるが、C類は2:1~1:1に分布し横長となるものが認められない。また、E類は長幅比が3:1よりも縱長となるものが多い。石材は頁岩 (117点)・鉄石英 (100点)の両者で全体の68.7%を占める。その他の比較的多く使用されている石材としては、凝灰岩 (28点)・流紋岩 (26点)・黒色細密安山岩 (26点)等がある (第128図・第76表参照)。



第128図 不定形石器長幅分布図

第74表 不定期石器基材概算表

分類	出土数	基材の種類	剥片の形状						打削の大きさ						主要剥離面と打面との方位				折断状の要因						
			幅長 斜片	幅長 斜片	幅長 斜片	A型 1型	A型 2型	A型 3型	B型 1型	B型 2型	B型 3型	C型 1型	C型 2型	C型 3型	分類 1番大面	分類 2番大面	分類 不明	削面 0°	削面 90°	削面 180°	削面 不可	有	無	不明	
A1類	16	12	4						3	4	3	2	4	1	9	2	4	5	7		1	3	8	8	
A2類	3	2	1				1		1	1				3			2	1			1	1	2		
B1類	6	3	3				1	1	1	2	1	1	2	2	1	2	2			1	1	2	4		
B2類	6	5	1				1	1	1	2	1	1	2	2	1	2	2			2	3	3			
C1類	12	2	8				1	1	1	1	1	1	7	2	3	7	4	1		7	10	2			
C2類	4	1	3						1		1	2		2		2		2		2	3	1			
C3類	28	3	23				1	2	1	2	4	2	16	1	7	4	16	5	6	1	2	14	20	8	
D2類	3	1	2				1		1			1	1		1	1	2	1			1	2	1		
D3類	2		1	1								1	1		1						2	2			
E1類	10	4	2	4				2		1	3		2	2	2	6	2	2	5	3		1	1	6	
E2類	11	3	5				1		1	1	3		5	1	2	2	6	4			1	5	9	2	
F1類	16	10	6					4	1	3	2	1	5		8	3	5	9	7			12	4		
F2類	6	5	1						1		1	3		1		5		1	3	2		1	3	2	
F3類	21	12	9					1	4	2	5	2	4	3	1	8	9	3	9	3	2	3	4	8	
G類	33	6	9	18	2			5	2	5	2	3	1	13	11	7	15	11	10	2	3	7	19	14	
H類	2		2	1								1			1		2			2		2			
I類	3	2	1										1		2		1	2			1	2			
J類	73	24	17	32	1			1	5	7	5	10	15	10	19	5	31	17	20	23	29	10	1	10	
K類	24	8	6	10	1			3	1	5	1	1	12		4	7	13	11	5	1	7	17	7		
分類不明	66	7	9	50	1	1		3	3	1	6	8	3	40	2	11	13	40	10	12	7	3	34	47	
合計	345	91	73	181	5	1	2	26	27	27	43	47	31	136	14	115	74	142	106	95	23	17	102	188	144

第75表 不定形石器分類別出土数

分類	出土位置	住居跡	土坑	ビット	遺構	捨て場	合計	
A1類				9	5	2	16	
A2類				2		1	3	
B1類				3	3	6		
B2類				2	3	1	6	
C1類				6	6		12	
C2類				2	1	1	4	
C3類				14	10	4	28	
C4類				1		1		
D2類					1	2	3	
D3類				1	1	2		
E1類	1			1	3	3	2	10
E2類				1	1	4	3	2
F1類					8	7	1	16
F2類					2	4	6	
F3類				1	11	7	2	21
G類	1	1			16	13	2	33
H類					2		2	
I類					3	3		
J類	1	2			36	26	8	73
K類				1	8	14	1	24
分類不明	2	1			27	23	13	66
合計	4	2	2	8	155	120	46	346

第76表 不定形石器石材表

分類	石材	頁岩	鉄石	流紋岩	ホルンブリルス	凝灰岩	緑色凝灰岩	安山岩	黒色板岩	粘板岩	砂岩	砂岩	メノウ	結晶片岩	チャート	不明	合計	
A1類	6	4	3												2		1	16
A2類		2	1															3
B1類	3	3																6
B2類	1	4													1			6
C1類	3	6				2								1				12
C2類	2	2																4
C3類	11	7	4	2	2								1	1				28
C4類		1																1
D2類	2	1																3
D3類	1					1												2
E1類	4	2			1								1	1			1	10
E2類	1	8											1			1		11
F1類	2	6			3							4	1					16
F2類	1	1			1						2			1				6
F3類	10	5		1	1	1					2	1						21
G類	11	1	3	3	4			1	4	4	4	1				1	33	
H類		1		1														2
I類	1			2														3
J類	27	28	3	2	4	1			4			4						73
K類	9	4	3	2	3				2		1							24
分類不明	22	15	8	4	4				5	2	1	2	1		2	66		
合計	117	100	26	15	28	2	1	1	26	11	4	9	1	1	5	346		

p. 石錘 (図版240・249)

6点が出土しているが、遺構内出土は無い。すべてが完形品であり、ほとんどは砾を素材とする砾石錘であるが、1点だけは剥片を素材とするもので、正面は撃打部を除いて全面が自然面である。

大きさは長さ6~14cm、幅6~13cmの範囲にあり、長幅比はほとんどのものが3:2~1:1とやや縦長のものとなる。重量は分布域が広く、70g程度のものから800g強のものまであるが、420g以下のものが比較的多い。石材は安山岩・花崗岩・粘板岩・流紋岩が使用されている。

q. 台石 (図版247)

捨て場Bから1点出土しているだけである。残存率約1/2の破損品であるが梢円形の砾を素材とすると思われる。表面に敲打による凹みを多数残している。安山岩製。

r. 石核 (図版243・248)

总数30点である。集落2からは8点の出土がある。これらのうち遺構出土のものは、P184B・P496Bからそれぞれ1点ずつの計2点である。また、捨て場Bから10点、捨て場Dから2点の出土がある。

全点ともに剥片剥離作業段階の石核である。調整についてみると調整Bを経たものが大部分を占め、21点を数える。調整が施されずに剥片剥離作業にはいる石核は3点であり、そのうちの2点が安山岩である。調整Cを経た石核は1点が認められる。再調整は6点に認められ、すべてが調整Bを経た後、再調整bが施される。剥片剥離作業は、作業1によって行われるもののが12点と他の作業よりも圧倒的に多い。また、その他の石核では、その他の石核Bが認められるだけである(第77表参照)。

4 集落跡2の調査

第77表 石模分類別出土数・石材表

石材 分類	出土数	鉄石英	頁岩	流紋岩	安山岩	凝灰岩	黒色練密 安山岩	粘板岩	メノウ
調整B作業1	5	3		1		1			
調整B作業2	3	1		2					
調整B作業5	1	1							
調整B作業6	1		1						
調整B+調整B作業1	5	1	3	1					
調整B+調整B作業4	1			1					
調整B作業不明	5	4	1						
調整C作業不明	1					1			
調整無作業1	2				2				
調整無作業5	1							1	
その他B	2	1						1	
不明	3		2			1			
合計	30	11	8	4	2	2	1	1	1

s. 剥片類

総数1328点が出土する。このうち捨て場B出土が587点、捨て場D出土が117点である。集落2内の出土分布状況は、他の石器と同様であり、遺構の集中する区域およびK1・2に多く出土する傾向が強い。石材は多種類が認められるが、安山岩(32.2%)・頁岩(20.5%)・鉄石英(15.5%)・凝灰岩(7.2%)等の出土が多い(第80表参照)。長幅分布図および観察表は主要な石材についてのみ作成した。

分類別の出土数では、背面の様子からみると安山岩はB型が圧倒的に多くなっているが、他の石材ではC型が多くを占める。打面の様子からみると、安山岩ではほとんどすべてが1型で、粘板岩・ホルンフェルスにおいても1型が卓越する。その他の石材では2型の割合が高いが、1・3型も一定量が存在する。

大きさは、ほとんどの石材で長さ・幅が2~8cmを計るものが多いが、安山岩はやや大型となり3~10cm

第78表 剥片類石材別観察集計表(1)

全作 型	出土数	打面の大きさ			転位痕					折断
		△最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	最小幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	
						0°	90°	180°	90°+180°	
A1型	78	1	50	12	15					22
A2型	15	9	6							2
A3型	12	11	1							6
B1型	179	5	128	35	8	89	80	7	3	34
B2型	85	2	49	33	1	36	42	4	3	14
B3型	47	4	29	14		23	21	2	1	9
C1型	139	17	87	32	3	60	55	10	11	3
C2型	105	4	53	48		49	41	3	8	1
C3型	86	4	62	19	1	39	36	6	4	1
分類不明	582	14	7	561	25	10	3		544	292
合計	1328	37	492	210	589	321	285	35	30	549
										454

安山岩

型	出土数	打面の大きさ			転位痕					折断
		△最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	最小幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	
						0°	90°	180°	90°+180°	
A1型	52	1	41	6	4					13
A2型	1		1							
A3型	4		4							3
B1型	137	5	106	22	4	74	60	2	1	26
B2型	20	1	15	3	1	7	12	1		2
B3型	2		2			2				
C1型	25	6	12	7		17	5	2	1	3
C2型	5	2	2	1		1	3		1	
C3型	1			1			1			
分類不明	180		8	3	169	12	2	1		165
合計	427	15	191	43	178	113	83	6	3	165
										101

第79表 制片類石材別観察集計表(2)

頁岩

型	出土数	打面の大きさ			転位痕					折断
		最大幅 ≈最大幅 >1/2	最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	
A1型	7		2	2	3					2
A2型	7		3	4						2
A3型	2		1	1						2
B1型	16		7	7	2	4	8	2	2	2
B2型	32		15	17		15	15	2		7
B3型	16	3	7	6		9	5	2		2
C1型	37	4	22	10	1	16	16	3		2
C2型	34	2	15	17		18	13	2		10
C3型	27	3	20	4		11	14	1	1	5
分類不明	94		3	1	90	5	2	1		86
合計	272	12	95	69	95	78	73	13	3	89
										104

鉄石英

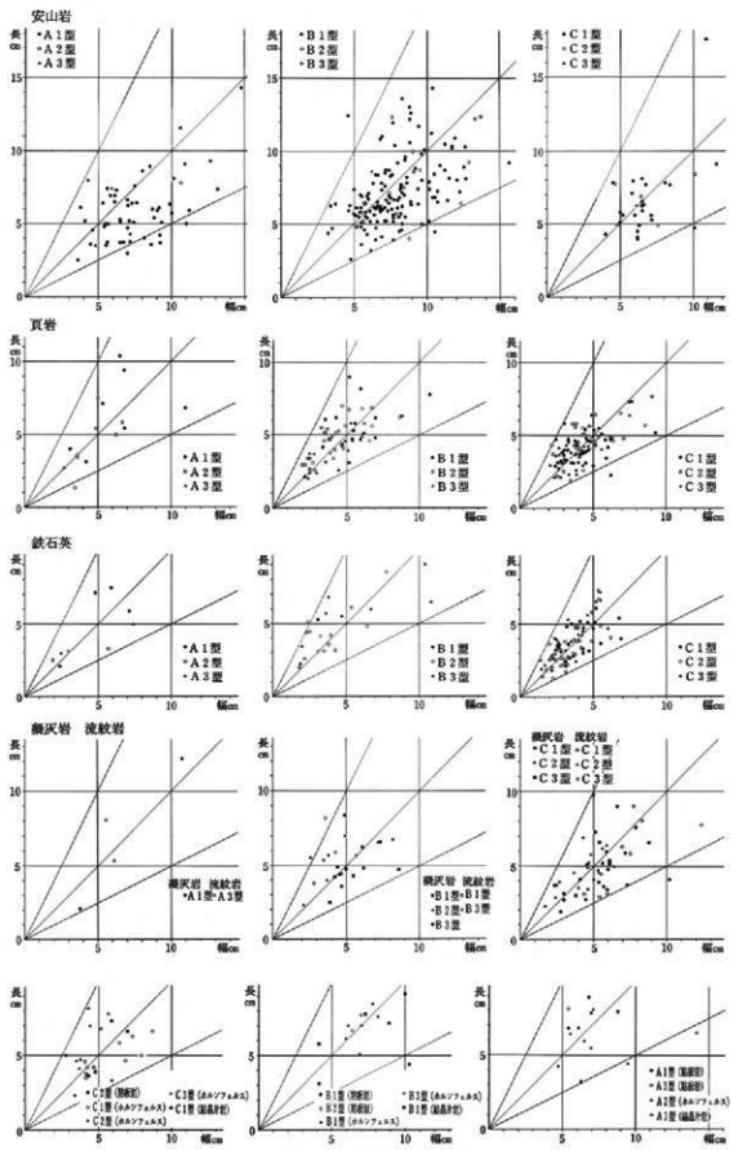
型	出土数	打面の大きさ			転位痕					折断
		最大幅 ≈最大幅 >1/2	最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	
A1型	4		2	1	1					
A2型	3		2	1						
A3型	2		2							
B1型	1		1		1					
B2型	14	1	6	7		6	6	2		2
B3型	8		6	2		2	5		1	2
C1型	15	1	11	3		5	7	1	2	3
C2型	39		21	18		21	13	2	3	9
C3型	30		19	10	1	16	8	3	2	1
分類不明	90		1	1	88	2	1			87
合計	206	2	71		90	53	40	8	8	88
										82

凝灰岩・流紋岩

型	出土数	打面の大きさ			転位痕					折断
		最大幅 ≈最大幅 >1/2	最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	
A1型	1		1							
A2型	0									
A3型	2		2							1
B1型	4		1	3		3	1			1
B2型	8		5	3		4	3			1
B3型	13		9	4		7	6		1	4
C1型	20	4	10	6		7	8			5
C2型	15		7	8		3	6	1	3	7
C3型	16	1	12	3		6	7	2	4	4
分類不明	61		1		60	4	3	2	1	54
合計	140	5	48	27	60	34	34	5	9	55
										66

熱板岩・ホルンフェルス

型	出土数	打面の大きさ			転位痕					折断
		最大幅 ≈最大幅 >1/2	最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	
A1型	8		2	1	5					4
A2型			2							
A3型	1									
B1型	10		5	3	2	3	5	2		3
B2型	1		1			1				
B3型	3	1	1	1			3			1
C1型	13		7	5	1	4	6	2	1	3
C2型	7		5	2		4	3			1
C3型	4		3	1		1	3			
分類不明	79		1		78	1				78
合計	125	1	28	13	86	14	20	4	1	78
										12



第129図 剥片類長幅分布図

第80表 剥片類石材表

石 材 地 区	安 山 岩	黒色 鐵 青 色 頁 岩	黒 色 頁 岩	鐵 石 英 岩	凝 灰 岩	ホ ル ン ジ エ ル ス	流 紋 岩	砂 岩	硬 板 岩	粘 板 岩	結 晶 片	メ ノ ウ	チ ヤ ト	石 英 岩	綠 色 鐵 青 色 頁 岩	綠 色 鐵 青 色 頁 岩	泥 岩	ひ ん 岩	礫 岩	不 明
集落跡2	210	14	127	7	92	29	29	29	15	5	18	20	8	5			1			14
捨て場B	202	10	121	15	94	54	22	8	16	9	11	11	4	3	1	1	1			3
捨て場D	15	2	24	3	20	13	7	8	8	6	4	2	3						1	1
合計	427	26	272	25	206	96	58	45	39	14	35	14	11	1	1	1	1	1	18	

を計るものが多く、特に安山岩B1型には大型のものが比較的集中する（第129図参照）。

打面の大きさは684点で観察可能であった。石材にかかわらず最大幅の1/2よりも大きいものが多く66.8%を占める。また、頁岩・鉄石英においては打面の大きさが最大幅の1/2未満のものも比較的多く認められるが、これらはその他の石材では少ない。

転位痕は638点で観察できた。0°(62.5%)、90°(29.2%)で大部分を占め、これ以外の転位痕が観察されたものは非常に少ない。折断状の痕跡は466点(31.6%)で認められた（第78・79表参照）。

t. 石 製 品 (図版243)

L03のP462Bの覆土から蛇紋岩製の有孔磨製石斧が1点出土している。重さはわずか1.7gの小型完形品で、上方の穴は正裏両方から穿孔される。横断面はおおむね扁平な六角形を呈し、下端の刃は鋭利である。石器の表面には擦痕が部分的に残るもの、良く研磨され全体に光沢がある。

5 集落跡3の調査

A 遺構

(1) 住居跡

炉跡のみが確認されたものも含め、7軒が検出された。柱穴の配列により、長径が6~10mの円形ないし椭円形プランの竪穴住居跡が主体と考えられるが、掘り方や床面等の明確なプランをもつ住居跡は皆無で、柱穴の配列も不規則なものが多い。炉は地床炉であるが遺存状態は悪い。

SI3173 A (図版252, 写真499)

位置 集落跡南側のK17・18, L18に位置する。

平面形 柱穴の配置により、椭円形ないし倒卵形と推定される。

規模 柱穴間距離長軸 (P2045A~P2189A) 7.5m、短軸 (P2193A~P2217A) 5.9m である。

柱穴 12本。規模は上端径が30~70cm、深度が22~51cmと安定しない。北西側では柱間が狭くなり、近接しているものもある。南東側では柱間が極端に開くが、その間からは柱穴となりうる遺構は検出されなかった。

出土遺物 土器(2996, 2997)、石器(不定形石器2)

時期 中期初頭③

その他 炉跡も検出されず、柱穴間も一定しないことから住居跡とするには問題がある。しかし、プラン内に存在する楓倒木(SX2090A)に、炉は破壊されている可能性があり、周囲に他の遺構は少なくひとまとまりである可能性が高いことから、整理中に住居跡と認定した。

SI2088 A (図版252, 写真501)

位置 集落跡東側のJ18, K18に位置する。

平面形 東側の搅乱が著しく、プラン全体の検出は不可能であったが、円形ないし椭円形と推定される。

規模 残存する壁の形状からは推定不可能である。

壁 西側3.9mにわたって弧状に検出された。地山に約7cmの掘り方が認められ、深度は浅いが立ち上がりは良好である。

柱穴 狹い範囲で不規則に位置する6基のピットが検出された。規模は上端径が29~63cmで安定せず、深度も19~30cmと全体的にやや浅い。東側のプランに関わる柱穴は検出できなかった。

覆土 覆土は暗褐色土單層で締まりは強く、下部は地山粒が多量に入る。土器、石器が出土した。

出土遺物 土器出土、石器(櫛器類1)

時期 中期初頭

その他 整理中に残存する壁を積極的にとらえて住居跡と認定した。

SI3171 A (図版253, 写真499)

位置 集落跡西側のJ15・16, K15・16に位置する。

平面形	柱穴の配置により梢円形と推定される。
規模	柱穴間距離長軸 (P2035A～P2118A) 6.5m であるが、短軸は不明である。
柱穴	12本で不規則に位置する。西側は搅乱によって破壊されており、検出不可能であった。規模は上端径が38～76cm、柱間も配列が不規則で一定しないが、外側のものには2本組みでは等間隔にめぐるものもある (P2028A・P2118A, P2022A・P2132A, P2026A・P2023A)。
炉	地床炉が中央よりもやや北寄りに検出された。約60×48cmの不定形プランだが、搅乱によりかなり破壊されていて、ブロック状の焼土が散乱している。Ⅲ層上面が被熱の影響で赤変していることから、火床はここにあったと考えられる。
床	残存する炉の焼土面が地山上面よりも5～7cm上にあり、本来の床面もⅡ層包含層中にあったと推定される。
出土遺物	土器 (2990～2994)、石器 (不定形石器1)
時期	中期初頭
その他	整理中に認定した住居跡である。

SI2007 A (図版254, 写真500)

位置	集落跡の中央部にあり、SI3174Aと重複している。J17, K17に位置する。
平面形	残存する壁の形状と柱穴の配置により長梢円形ないし長方形と推定される。
規模	長軸 (北壁～P2232A) 10.0m、柱穴間距離短軸 (P2160A～P2020A) 5.5m である。
壁	長軸の北端4mにわたって検出された。壁高6～8cmを計る。
柱穴	19本で梢円形に並ぶ。規模は上端径が32～67cm、深度が24～48cm、柱間は0.55～2.9mで一定しない。
床	残存する壁付近には、床面の一部と思われる平坦な面がみられるが、大部分は検出できなかった。
覆土	覆土は暗褐色土單層で締まりが強い。地山粒を全体に少量含むが、炭化物は認められない。
出土遺物	土器 (2999～3001)、土製品 (3237)
時期	中期初頭(③)
その他	整理中に認定した住居跡であり、SI3174Aとの新旧関係は不明である。

SI3174 A (図版255, 写真500)

位置	集落跡中央のSI2007Aと重複している。J17・18に位置する。
平面形	柱穴の配置により、長梢円形ないし長方形と推定される。
規模	柱穴間距離長軸 (P2167A～P2170A) 6.45m、短軸 (P2097A～P2093A) 2.65m である。
柱穴	16本で炉の周囲を梢円形に並ぶが、部分的に2本組みを含み (P2009A・P2165A, P2008A・P2167A, P2171A・P2175A)、深度は19～45cm、柱間は0.9～2.2mと一定しない。重複しているSI2007Aの柱穴よりも深度がやや浅い。
炉	地床炉で、地山に62×34cmの掘り方が認められるが、北西側をピット状の掘り込み (2層) に切られている。覆土は暗褐色土で炭化物を多量に含む。火床と考えられる焼土は掘り方の底面に35×25cm、厚さ1～2cmの不定形プランで認められ (1層)、その直下の地山は被熱により固く締まっている。

出土遺物 土器(2998)、石器(不定形石器1)

時期 中期初頭③

その他 整理中に認定した住居跡である。

SI3172 A (図版256、写真501)

位置 集落跡北側のH17, II17・18に位置する。

平面形 柱穴の配置により、楕円形と推定されるが、北東部分は調査区外におよぶ。

規模 柱穴間距離長軸(P2103A～P2255A) 8.6m であるが、短軸は5.0mと推定される。

柱穴 6本で楕円形にはば等間隔で並び、規模は上端径が30～65cmとややばらつくが、深度がほぼ30cm以上を計り安定している。調査区外にあと2～3本は存在すると推定される。

炉 地床炉が南側に偏って検出された。焼土2079Aは、南端のP2104A付近に位置する。地山に皿状の掘り方が認められ、火床と考えられるまとまった焼土が、44×36cm、厚さ4cm程度の規模で検出された。その下には被熱の影響でわずかに赤変した暗褐色土が入る。焼土2075A～2078Aは、中央よりやや南寄りに115×100cmの範囲でブロック状に散在する。地山に掘り方は認められず、規模や形状からも炉跡としてのまとまりに欠けるが、焼土ブロックの下の覆土を共有し、狭い範囲に集中していることから、本来まとまった単一の炉が擾乱などにより破壊された可能性がある。

出土遺物 土器(2995)

時期 中期初頭③

その他 整理中に認定した住居跡である。

住居跡2031A (焼土) (図版257、写真502)

位置 J15-22に位置する。

炉 地床炉でJ15-22に検出された。周辺のほとんどは後世の耕作により破壊されているが、原形を復元すれば径約55cmの円形もしくは楕円形と推定される。

床 J15-17に60×38cmの規模で床面と思われる堅く平らな面のごく一部が検出された(図版9)が、プランを確認するのは不可能であった。

その他 耕作による擾乱のため住居プランや柱穴が不明で、炉と床面がわずかに残存するのみである。

(2) 土坑

15基検出された。フラスコ状の土坑は検出されなかった。比較的住居跡に近在している。規模は径1m以上のものが多いが、深度は12～28cmと比較的浅い。これらの土坑は平面形から円形・楕円形に分類され、前者のものが6基、後者のものが9基を数える。土層堆積は自然堆積と考えられるものが4基、人為堆積と考えられるものが9基である。

(3) ピットおよび性格不明の落ち込み

ピットは柱穴を除いて16基が検出された。集落の範囲が時期の異なる集落跡4と重複しているため、柱穴以外は、出土土器の時期および集落跡3の分布状況から、集落3と判断されるもののみを観察表に記載し

た。風倒木等自然の落ち込みや性格不明の落ち込みも中期初頭の土器の出土したものとし、観察表に記載した。

(4) 捨て場

集落3の捨て場は東側の段丘崖より検出された。また、同捨て場の下層に存在する自然流路跡からは集落4の捨て場も検出された。

捨て場 C 上層 (図版 259, 写真 505)

位置 集落跡東端の M20, N20, O~S19・20 に位置する。

規模 南北 70m、東西最大 14.5m の遺物集中区域を検出したが、南側は調査区外に続くと思われる。

層序 集落の東側段丘崖下の流路跡に形成された捨て場であり、遺物出土層位は基本層序の II 層と自然流路の堆積土 1~4 層である。集落跡3のものとされる中期初頭の遺物は、このうち II a、II b 層と自然流路 1 層からなる斜面堆積土から出土した。最深 1m を計る。断面の状況から中期の遺物は河川堆積後の緩斜面に廃棄されたものと考えられ、これらの遺物は西側斜面から東側の平坦地 (A 地区) に向かって広範囲に分布している。

出土遺物 土器 (3044~3134, 3137~3185, 3189~3192)、土製品 (3238~3244)、石器 (石錐 6, 石匙 1, 両面加工石器 5, 三脚石器 4, 板状石器 2, 打製石斧 13, 磨器類 7, 研磨石類 24, 砕石 2, 石皿 4, 両板石器 6, 不定形石器 126, 石錐 4, 台石 1, 石核 5)

時期 中期初頭①~③

その他 捶て場を境に集落側が台地状に高くなっていることから、この捨て場が集落跡の東限であったと考えられる。

B 遺 物

(1) 土 器

集落跡3からは、縄文時代中期初頭の土器が出土している。特に、捨て場 C の II b 層を中心にまとめて出土しており、質・量の両面で本県における縄文時代中期初頭の基準資料となり得るものである。出土土器は、本県では剣野 E 式土器 (金子 1967)、巻町豊原遺跡の土器 (小野・前山ほか 1988) など、北陸地方では新保式土器と時期をほぼ同じくするが、魚沼という地域性が関東・中部高地系の土器が一定量を占めている。なかでも、五領ヶ台 Ia 式・Ib 式 (今村 1985) と考えられる土器が出土していることや、傾向として東関東的または東北地方南半的な土器? が目立つことは興味深いことである。なお、土器観察表で時期の欄が不明となっているものは、中期初頭に属するがその詳細が不明のものである。

a. 遺構出土の土器

3001 は、器壁が厚い土器である。巻町豊原遺跡 (前掲 1988) で類似資料が出土しており、五領ヶ台 Ib 式に比定されている。3003 は、無文土器であるが、磨きが丁寧で底部には縄の圧痕が認められる。3006 は、3 単位の波状口縁をもつ小型の土器である。口縁には 1 条の半隆起線がめぐり、波頂部直下に縦長の隆起が添付

され、その間は2条の撚糸側面圧痕で結ばれている。胴部は無文であるが、よく磨かれている。3020は、口縁に刻目状の圧痕がめぐり、その直下には1条の半隆起線が施されている。胴部下半は無文帯となる。3028は、中部高地色の強い土器で、最近「松原土器」と呼ばれている土器の新段階（三上・上田1996）に当たるのではないかと考えられる。3038は、撚糸を口縁部では横方向、それ以下では縱方向に施している。

3047、3048は、3001と同様に器壁が厚く、底部には網代圧痕が認められる。3051の胴部の縄文は、結び目縄文である。3052は、縄文地上に3本1組の半隆起線で方形に区画し、区画内に三角形陰刻を施している。なお、区画内の下半分には、縄文施文後に撚糸文が施文されている。3060は、典型的な五領ヶ台Ib式（前掲1985）と考えられる。文様は、シャープな沈線で玉抱き三叉文や三角形陰刻文を描き、文様間の空白部分は細縄文で埋められている。3084は、3028と同タイプと考えられる土器である。3088は、口縁部上半を幅広の隆帯で区画し、区画内は3~4条の横位半隆起線で埋められている。隆帯および口縁には格条体圧痕が施されている。口縁部下半は無文帯となる。3091は、口縁が無文帯で直下に2条の半隆起線がめぐり、以下に縄文が施文されている。3093は、縄文地上に半隆起線で連続する弧線文が描かれ、弧線区画内は横位半隆起線でみたされている。3097は、土器師や須恵器の椀のように高台をもち、無文ではあるが外面は丁寧に磨かれている。3105は、東関東の五領ヶ台Ib式に類似するものと考えられる。3106は、縦位の沈線直下に2条の半隆起線がめぐり、次に斜位の沈線が施されるなど、沈線と半隆起線で文様が描かれている。3108・3109は、口縁に爪形が施されている。3110は、口縁端部に刻目が施され、2条の半隆起線と1条の隆帯がめぐり、2条の半隆起線の間に2列の点列状刺突が施されている。3119は、縄文地上に半隆起線や隆帯および沈線で文様が描かれており、それらの一部には爪形が施されている。3123は、半隆起線で縄文地上に渦巻文を描き、その直下に2条の半隆起線をめぐらしている。口縁部下半は無文帯である。なお、器壁は厚い。3132は、無文の浅鉢であるが、外面に条痕状の器面整形痕がみられる。3138、3139は、頭部に2条の半隆起線がめぐり、その直下の縄文地上の胴部には、半隆起線で鋸歯状文が施文されている。3142は、口縁に格条体圧痕、口縁部上半には半隆起線で山形文が施文されている。3147は、口縁は縄文帯となり縦位の細沈線が施され、その直下に半隆起線がめぐり、以下は無文帯となる。3161は、全面に細かい縄文が施文され、口縁が隆帯状に肥厚し、その直下には1条の半隆起線がめぐっている。口縁部上半と下半の境目にも2条の半隆起線がめぐり、口縁直下の半隆起線とは「ノ」の字状の半隆起線で結ばれる。頭部には1ないしは2条の半隆起線がめぐっている。3167は、関東・中部高地というよりもむしろ東北色の強い土器と考えられる。3175は、頭部に4条の沈線がめぐるほかは、胴部および口縁部下半とも全面に撚糸文が施文されている。3183は、五領ヶ台Ia式ではないかと考えられる。五領ヶ台Ia式は、本県ではその出土がほとんど知られていない。

b. 遺物包含層出土の土器

3204は、口縁の一部に2条の半隆起線がみられ、口縁端部から口縁部にかけて縦長の突起が添付されている。なお、突起の頭部は円形にくほんでいる。3229は、細くて長い沈線が密に施されており、内面の整形も他の土器と比較してあまり丁寧でないことなどから、中期初頭ではなく前期後半の諸磯c式土器の範疇に含まれる可能性がある。3236は、内面の整形などから壺形土器の肩部付近ではないかと考えられる。沈線で文様が描かれており、後期あるいは晩期に比定されるものであろうか。

(2) 土製品

a. 板状土製品 (3237~3245, 4200)

三角形板状土製品2点(3244, 4200)、円板状土製品8点(3237~3243, 3245)の計10点の出土が確認されている。すべてが土器片の再利用であり、そのほとんどが捨て場Cより出土している。板状土製品そのものには時期を明らかにするような文様の施文はみられないが、出土地区から中期初頭に比定されるものと考えられる。

(3) 石 器

a. はじめに

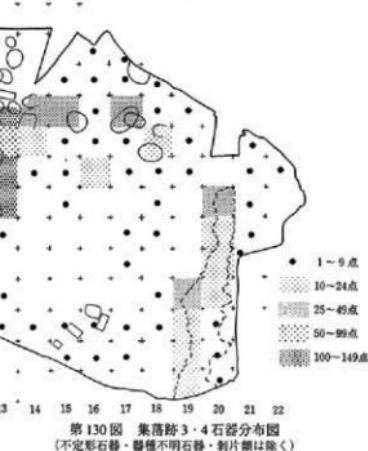
集落跡3は集落3と捨て場C上層で構成される。

集落3 北東から南西に走る微高地に存在し、調査範囲の微高地北側に分布する。時期は縄文時代中期初頭を中心とする。集落4との区別は、遺物分布および微地形上からも困難であるが、該期の土器および遺構の集中出土範囲で線引きした。

また、東側は該期の捨て場Cが形成された崖下を境とする。なお、集落は遺物、遺構または微地形の連続性から、未調査部分の北側に若干範囲が拡大されるものと思われる。

捨て場C 集落3・4の東側に存在する南北に走る崖線および崖下を範囲とする。上層、下

層に2分され、上層が集落3の捨て場である。遺物も東側に大きく流れ、A地区との区別は不明瞭となる。また、遺物の分布は南側の調査範囲外に伸びる。



第130図 集落跡3・4石器分布図
(不定形石器・器種不明石器・削片類は除く)

第81表 集落跡3の出土石器

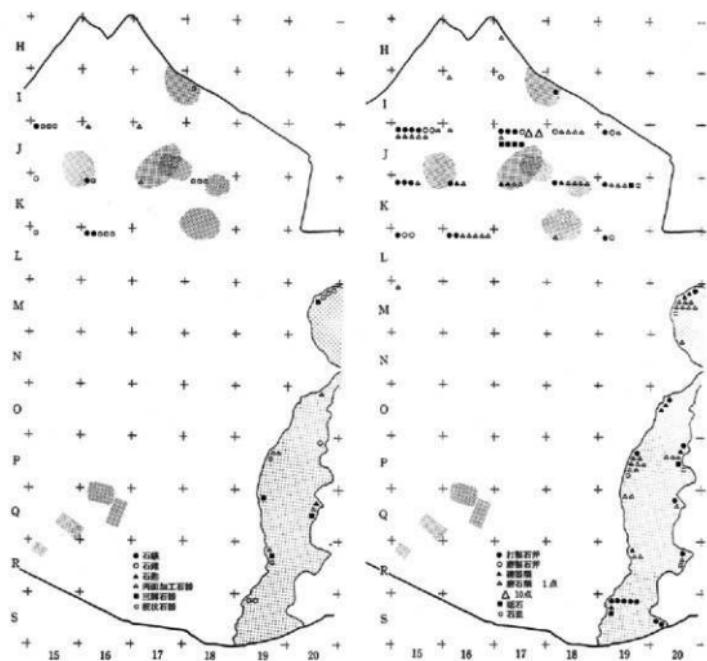
石器 地 区	石 器	石 尖 頭 器	石 鋸	石 刃 加 工	石 脚 部 加 工	三 脚 石 器	板 状 石 器	打 削 石 器	磨 削 石 器	磨 石 器	石 墨	石 灰	不 定 形 石 器	石 錐	石 台	石 核	石 削 片	石 製 品	合 計	
集落3	4		1		3		12	19	9	5	53	5	1	10	230		11	976	1339	
捨て場C上層				6	1	5	4	2	13		7	24	2	4	6	126	4	1	5	498
合計	4		7	1	8	4	14	32	9	12	77	7	5	16	356	4	1	16	1474	

b. 石 錐 (図版270)

総数4点が出土しているが、未成品が1点含まれる。いずれも遺構外出土であるが集落3からの出土であり、捨て場C上層からの出土は認められない。完成品では完形品は1点、脚部の欠損するもの1点(3247)、遺存状態の不明のものが1点(3246)を数える。全体の形状の確認できるものは全て凹基無茎錐である。石材は、メノウ・黒曜石・鉄石英が使用されている。

c. 石 锥 (図版270・296)

総数7点が出土している。全点を図化した。集落3からは1点の出土を見るだけであるが、他はすべて捨



第131図 集落跡3石器出土分布図(1)
(捨て場以外のスクリーントーンは集落跡3・4の遺構)

て場C上層から出土している。分類別ではA類2点(3799, 3802)、B類1点(3800)、C1類1点(3248)、C2類2点(3801, 3804)、分類不明1点(3803)である。分類不明のものは、上下両端が尖頭状に作出され、両端ともに錐として使用されたと思われるものである。石材は5点が鉄石英を使用し、その他は頁岩・黒色緻密安山岩が用いられている。

d. 石匙 (図版296)

捨て場C上層から1点が出土するに過ぎない。3805は縱形石匙であり、えぐり部は浅く作られ、先端部は打面をそのまま残す。刃部は一個縁に両面からのやや大振りな加工によって作出される。黒色緻密安山岩製である。

e. 両面加工石器 (図版270-296)

总数8点が出土している。集落3には3点が認められ、いずれも遺構外出土ではあるが住居の周辺から出土する。また捨て場C上層には5点が認められる。長さ・幅とともに5~10cm程度を計る円形・楕円形の形態を呈するものが多く、また3808のように折断状の痕跡が認められるものが6点ある。石材は黒色緻密安山岩・結晶片岩・頁岩・黒色頁岩・ホルンフェルス・凝灰岩が使用されている。

f. 三脚石器 (図版 296)

捨て場 C 上層から 4 点が出土しているに過ぎず、集落 3 からは出土が認められない。分類別では A1 類 2 点、B 類 1 点、不整形なものが 1 点であるが、A1・B 類の 3 点はすべて一脚を欠損する破損品で完形品は認められなかった。使用痕が観察されるものは 2 点で、側縁につぶれが認められる。石材は粘板岩・ホルンフェルス・安山岩が使用される。

g. 板状石器 (図版 270・296)

総数 14 点が出土している。このうち 14 点が集落 3 からの出土である。すべてが遺構外出土ではあるが住居跡の周辺に分布が多く認められる。また、捨て場 C 上層からは 2 点の出土がある。分類別の出土数は円形・梢円形を呈する C 類が圧倒的に多く 8 点を数え、挿入三角形・三角形を呈する A 類・B 類はそれぞれ 1 点・3 点であり、不整形な D 類は 1 点である。なお、捨て場 C 上層から出土しているものはすべてが C 類である。

大きさは、長さ 4~8cm、幅 5~10cm のものが多く、長幅比 1:1~2:3 に大部分が収まる。長さ 5cm 以下、幅 6cm 以下の小型品は C 類に多く認められる。

使用痕の観察されるものは 4 点存在し、そのうちの 3 点は側縁に磨耗が認められ、1 点は側縁につぶれが認められる。石材は粘板岩・結晶片岩を使用するものが多く、それぞれ 4 点、3 点を数える。

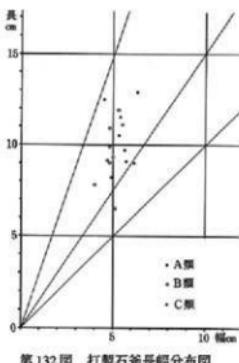
h. 打製石斧 (図版 270・271)

総数 32 点が出土し、14 点が捨て場 C 上層からの出土である。また、集落 3 からは 18 点が出土しているが、すべて遺構外出土である。分類別では B3 類が多く 10 点を数える。A2・A3・B4 類はそれぞれ 3 点ずつ、A1・A4・D 類は 1 点ずつの出土を見る。

完形品・ほぼ完形品は、17 点が認められる。大きさは、長さ 8~12cm、幅 4~6cm に分布し、分類にかかわりなくこの範囲に大部分が収まる。長幅比は 3:1~3:2 を計るもののがほとんどである (第 132 図参照)。刃部の平面形は円刃が多く 13 点、直刃・扁刃はそれぞれ 2 点ずつで、断面形は両刃が 13 点、片刃 3 点、不明 1 点である。使用痕の観察されるものは 4 点で、すべて刃部に磨耗痕の観察されるものである。石材は粘板岩 (10 点)・結晶片岩 (8 点) が多く使用され、その他にホルンフェルス、硬砂岩 (各 4 点)、安山岩 (3 点)、黒色緻密安山岩・砂岩 (各 1 点) が用いられている。

i. 磨製石斧 (図版 271)

総数 9 点が出土している。すべてが住居の周辺部から出土し、捨て場 C 上層からの出土はなかった。また、これらのうち全体がほぼ分かるものは 1 点 (3268) だけで、他のものは破損品である。破損品の中では、基部側の残存しているものが多く、その中でも刃部側で破損しているものが多い。石材は蛇紋岩が 4 点と最も多く認められ、その他に硬砂岩・砂岩・流紋岩・凝灰岩がそれぞれ 1 点ずつ使用されている。



第 132 図 打製石斧長幅分布図

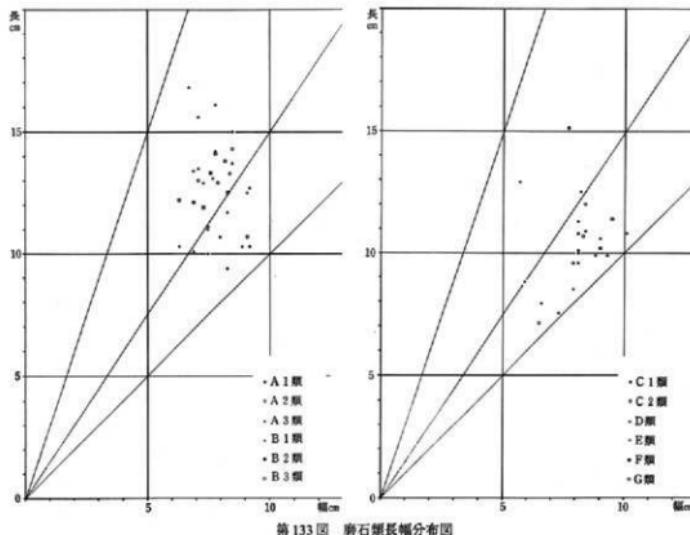
j. 磁器類 (図版 271・296・297)

総数12点出土しているが、捨て場C上層から出土している7点が含まれる。分類別ではA1類4点、A2類4点、B1類3点、B2類1点であり、礫を素材とするものの割合が高い。大きさでは長さ6~14cm、幅5~20cmに分布するが、長さ9cm以下、幅14cm以下の小型のものはB類に多い。長幅比は分類にかかわりなく2:1~1:2に分布するものが大部分である。重量は200~400gの軽量のものと700g以上を計るものがあるが、重いものは長さ・幅を反映してA類にしか認められない。石材は安山岩の割合が41.7%と高い。その他には多種類の石材が用いられてはいるが、それらの数は少ない。

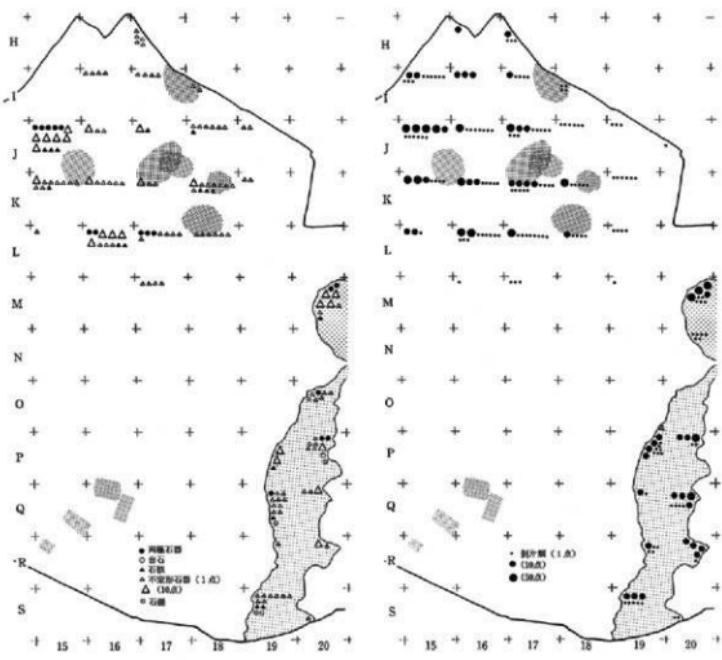
k. 磨石類 (図版 271・298)

総数77点出土している。集落3からは53点の出土が認められ、このうち土坑内から1点、ピットから4点が出土しているが、特にP2100Aに3点がまとまっている。また、捨て場C上層からは24点の出土がある。分類別ではA類23点、B類11点、C類4点、D類1点、E類13点、F類2点、G類3点、分類不明20点である。分類不明のものはすべて破損品である。

大きさは全体では長さ8~16cm、幅6~10cmを計るもののが大部分であるが、長さ14cm以上のものはA類、なかでも側縁に磨痕をもつものに多く認められ、その反対にA類には長さ10cm以下の小型のものはほとんど認められない(第133図参照)。また、被熱の認められるものか7点、ススの付着するもの2点、タール状のものが付着するもの1点が認められる。



第133図 磨石長幅分布図



第134図 集落跡3石器出土分布図(2)

l. 砥 石 (図版 271・272・298・299)

7点出土している。遺構内から出土するものは2点あり、SK2230AとP2100Aからそれぞれ1点ずつの出土がある。捨て場C上層からは2点の出土がある。使用面の種類を見ると磨面だけのものが3点、磨面と溝を有するものが4点であり、使用面の数は2面のものが4点、1面のみを使用するものが3点である。石材は花崗岩が6点と集中し、他の1点は凝灰岩を使用している。また、使用面にススの付着するものが1点存在する(3283)。

m. 石 盤 (図版 299)

5点出土している。SK2230Aからの1点を除く他はすべて捨て場C上層からの出土である。分類別ではA1類が1点、B1類が2点で、未完成と思われるものが2点認められる。石材はすべてが安山岩製である。3857は被熱が認められ、使用面にはタール状のものが付着している。

n. 両極石器 (図版 270・296)

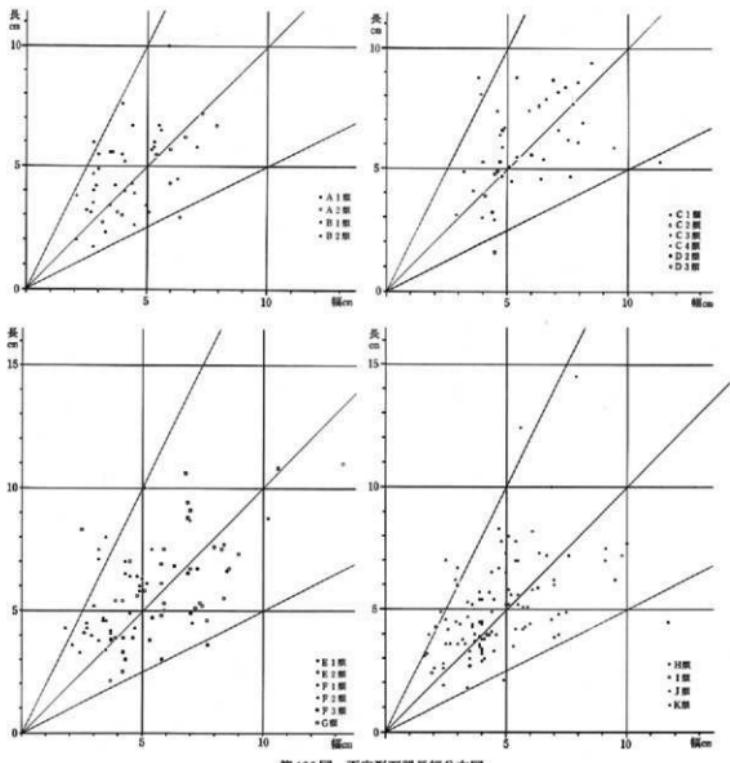
16点出土している。集落3から出土するものは10点で、捨て場C上層からは6点が出土している。両極剥離痕は2極1対のものが大部分で4極2対のものは1点が認められるに過ぎない。大きさは長さ・幅とも

に1.5~4.0cmを計るもののが大部分で、長幅比は2:1~1:2に分布する。重量は1.0~10.0gのものがほとんどである。石材は、鉄石英6点、頁岩4点、メノウ3点、流紋岩2点、ホルンフェルス1点である。

o. 不定形石器 (図版272・299・300)

総数356点である。集落の立地する平坦面からの出土は230点であり、15点が遺構出土である。これらのうちで、住居跡出土は4点、土坑出土は8点で、特にSK2049Aに5点がまとまる。また、ピット出土は3点である。遺構外出土のものも住居のあるH15~18、L15~18に集中して出土している。捨て場C上層からは126点の出土がある。分類別では、J類(19.4%)・C類(14.0%)・F類(12.4%)が多く出土しているが、I類・H類・D類・E類は非常に少ない(第82表参照)。

大きさは長さ2~10cm、幅2~10cmに分布するものが多い。K類には長さ12cmを超える大型品が認められる(第135図参照)。石材は頁岩(133点)・鉄石英(114点)の両者で全体の69.4%を占める。その他の石材では、黒色緻密安山岩(26点)・流紋岩(19点)・凝灰岩(17点)等があり、緻密な石材が多く選択されている(第83表参照)。



第135図 不定期石器長幅分布図

第 82 表 不定形石器分類別出土数

分類	出土位置	住居跡	土坑	ビット	遺物	捨て場	合計		
								路	跡
A1類				10	6	16			
A2類				7	4	7			
B1類				5	1	5			
B2類				9	3	9			
C1類				10	3	10			
C2類				4	4				
C3類				19	11	19			
C4類				2	1	2			
D2類				3	2	3			
D3類				3	2	3			
E1類				2	2				
E2類		I	1	3	4	5			
F1類				20	6	20			
F2類				3	1	3			
F3類		I	1	6	7	7			
G類		I	1	16	9	18			
H類				1	5	1			
I類		I	1	2	3	3			
J類		I	1	30	37	32			
K類		2	1	15	5	18			
分類不明		4		49	12	53			
合計		4	8	3	219	122	356		

第 83 表 不定形石器石材表

分類	石材	頁	鉄	流	ホンブエルズ	凝灰岩	緑色凝灰岩	安山岩	無縫隙安山岩	砂岩	粘板岩	メノウ	結晶片岩	チャート	不明	合計	
A1類	9	7															16
A2類	4	5				1			1								11
B1類	2	4															6
B2類	1	9	1			1											12
C1類	5	3	1	2	1			1									13
C2類	1	2							1								4
C3類	12	10			1	1			4		1	1					30
C4類	1	2															3
D2類	3	1	1														5
D3類	2	2											1				5
E1類	1	1															2
E2類	3	3							1	1	1						9
F1類	10	6	5	1	1			1				1					26
F2類	2	2															4
F3類	7	4	1		1				1								14
G類	5	1	3	3	4	1	2	5		1				1			27
H類	3			1						1	1						6
I類	1	3			1												1
J類	32	27	2			2		2			1	3					69
K類	6	5	1	3	3			2	1			1	1				23
分類不明	23	17	4	2	3				10		3	2	1				65
合計	133	114	19	15	17	3	4	26	3	7	4	9	1	1	2		356

素材は、縦長剝片であるものが 128 点で卓越するが、横長剝片も 77 点と少なからず存在する。また、素材となる剝片の形状は、まず背面の様子では C 型が 149 点で最も多いが、背面がすべて自然面となる A 型は 21 点と少ない。打面の様子をみると 1 型 83 点、2 型 96 点、3 型 71 点を数え、2 型がやや多いもののいずれかに集中する様子はない。打面の大きさは、最大幅の 1/2 もり大きいものが 147 点と多いが、1/2 もり小さいものも一定量存在する。主要剝離面と打面との転位角は 0° (124 点)、90° (73 点) とて大半を占めるが、それ以外は極めて少ない。また、折断状の痕跡が認められるものは、186 点である (第 84 表参照)。

p. 石 錘 (図版 297)

捨て場 C 上層から 4 点出土している。いずれも砾石錘であり、石材は安山岩が 2 点、閃綠岩・砂岩が各 1 点使用されている。

q. 台 石 (図版 299)

捨て場 C 上層から 1 点の出土がある (3860)。安山岩製で使用面に広く敲打痕が認められる。

r. 石 桁 (図版 272・300)

总数 16 点が出土している。集落の乗る平坦面からは 11 点の出土があり、このうち遺構出土は P2196A からの 1 点のみである。遺構外出土のものは住居の周辺からの出土が多い。また、捨て場 C 上層からは 5 点の出土がある。

第34表 不定期石器系材料目録

分類	出土数	素地の種類	剥片の毛状						打面の大きさ						主要剥離面と打面との傾斜度				折断状の概要		
			A型 1面 2面	B型 1面 2面	C型 1面 2面	不分類	不明	扁平層	分類	不明	~最大幅 約大輪 0.7	~最大幅 0.7 0.5/2	直済	0°	90°	160° 180°	無	有 無 不明			
A1類	16	15	1	1	1	1	1	1	2	6	8	2	6	5	6	2	3	6	10		
A2類	11	6	5																		
B1類	6	5	1						4	1	1	3	1	4	3	3	7	1	3	5	6
B2類	12	5	7						1	1	1	2	2	1	3	6	2	5	3	1	3
C1類	13	5	2	6					2	2	1	2	3	2	5	3	3	5	1	1	6
C2類	4	2	2						1		1	1	1			3	1	2	1	1	1
C3類	30	3	7	20	1	1			3	1	2	3	5	2	12	2	8	8	12	1	3
C4類	3	2	1						1		1	1	1			2	1	1	1	1	2
D2類	5	2		3							1	2		2	1	1	1	1	2	4	1
D3類	5	1		4						1	1	1	2		3	2	2	1	1	1	3
E1類	2	1	1								1		1		1		1	1	2	2	2
E2類	9	5	4	1					1	2	2	2		1	1	4	2	2	2	1	4
F1類	26	24	2		1	1			6	1	5	5	4	3	1	12	10	3	12	7	1
F2類	4	2		2					1		1	1		1	2	1	1	1	3		1
F3類	14	10	4						2	5	2	2		3	5	5	4	8	4		1
G類	27	8	9	10	4	1	3	1	5	1	4	7	2	11	4	10	7	5	2	13	14
H類	6	5	1	4	1				1						3	3	1			5	2
I類	6	4		2					1	1	1		3		2	1	3			1	3
J類	69	28	19	22	1				2	7	6	13	15	14	11	3	34	21	11	22	6
K類	23	9	4	1	9	1			1	5	1	1	4	1	9	6	7	10	12	3	1
分類不明	65	13	8	44	2				3	5	7	6	6	36	18	8	39	20	6	4	35
合計	356	128	77	1	150	14	4	3	19	36	25	50	56	43	106	14	133	90	119	124	169

調整石核が1点認められる以外はすべてが剥片剥離作業段階の石核である。石核調整は13点とほとんどが調整Bである。その他では、調整Aの施されるもの1点、石核調整の行われないもの2点である。再調整の施されるものは2点が認められる。いずれも調整Bを経て、再調整bが施される。調整石核を除く15点について、剥片剥離作業をみると、作業1によるものが11点で大部分を占める。その他の剥離作業はほとんど認められない。

大きさは、大部分が長2~7cm、幅3~10cmに分布するが、安山岩製の石核は幅約22cmを計る大型のものである。石材は、剥片石器の中で最もよく用いられている頁岩(7点)・鉄石英(6点)で全体の81.2%を占める。その他の石材は、それぞれ1点ずつの出土であるが、メノウ・安山岩・流紋岩がある。

第85表 剥片類素材観察表(1)

全体

型	出土数	打面の大きさ			転位痕					折断
		%最大幅	最大幅 ≥1/2	最大幅 ≤1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	
A1型	34	1	29	4						9
A2型	12	1	9	2						1
A3型	6	1	5							2
B1型	117	6	84	25	2	67	37	10	2	1
B2型	82	2	46	34		61	18	3		8
B3型	52	3	34	15		36	13	3		2
C1型	125	12	91	22		69	39	13	4	25
C2型	156	7	83	65	1	104	41	7	3	1
C3型	94	4	71	17	2	52	34	6	1	13
分類不明	796	2	5	4	785	10	4	1		781 367
合計	1474	39	457	188	790	399	186	43	10	784 466

安山岩

型	出土数	打面の大きさ			転位痕					折断
		%最大幅	最大幅 ≥1/2	最大幅 ≤1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	
A1型	18		16	2						6
A2型	4		4							
A3型	1		1							
B1型	64	6	51	7		40	23	1		3
B2型	7		7			7				1
B3型	1		1			1				
C1型	13		11	2		7	3	3		3
C2型	4		4			2	2			
C3型										
分類不明	198			1	197		1			19 40
合計	310	6	95	12	197	57	29	4	0	197 53

鉄石英

型	出土数	打面の大きさ			転位痕					折断
		%最大幅	最大幅 ≥1/2	最大幅 ≤1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	
A1型	1		1							
A2型	3		2	1						
A3型	3		3							1
B1型	14		11	3		3	7	4		2
B2型	21		12	9		5	5	1		1
B3型	14		9	5		10	3	1		
C1型	27	5	21	1		17	8	1	1	10
C2型	54	2	24	26		33	18	1	2	12
C3型	40	1	31	8		23	15	1	1	6
分類不明	173	2		2	169	2	2			169 107
合計	350	10	114	57	169	93	58	9	4	160 139

5 集落跡3の調査

第86表 剥片類素材観察表(2)

頁岩

型	出土数	打面の大きさ			転位率					折断
		≈最大幅	最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	
A1型	4		4							2
A2型	3	1	2							
A3型	1		1							1
B1型	13		5	8		10	2	1		
B2型	35	1	17	17		27	8			4
B3型	20	1	11	8		13	6	1		1
C1型	45	4	30	11		26	12	6	1	7
C2型	48	2	27	19		35	11	2		8
C3型	25	1	23		1	12	12	1		3
分類不明	135		1		134	2	1	1		131 89
合計	329		10	121	63	135	52	12	1	131 115

凝灰岩・流紋岩

型	出土数	打面の大きさ			転位率					折断
		≈最大幅	最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	
A1型	1		1							
A2型	1		1							1
A3型										
B1型	9		6	3		5	3	1		2
B2型	9	1	4	4		7	1	1		1
B3型	10	1	8	1		8	1	1		1
C1型	13	2	9	2		4	7	1	1	3
C2型	26	2	16	7	1	18	3	3	1	8
C3型	10	1	7	1	1	6	3			1 2
分類不明	76		1		75	1				75 35
合計	155		7	52	19	77	49	18	7	27 53

粘板岩・ホルンフェルス

型	出土数	打面の大きさ			転位率					折断
		≈最大幅	最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	
A1型	6		5	1						
A2型										
A3型										
B1型	6		5	1		2	1	3		
B2型	3		2	1		2	1			1
B3型	3		2	1		2	1			
C1型	7		6	1		3	3	1		
C2型	7		5	2		5	1	1		
C3型	5		3	2		1	2	2		
分類不明	77			1	76	1				76 28
合計	114		28	10	76	16	9	7		76 29

砂岩

型	出土数	打面の大きさ			転位率					折断
		≈最大幅	最大幅 >1/2	最大幅 <1/2	計測不可	0°	90°	180°	90°+180°	
A1型	2		1	1						
A2型										
A3型	1	1								
B1型	4		2	1	1	2	1	1		1 1
B2型										
B3型	2	1	1			1	1			
C1型	2		2			2				
C2型	5		2	3		4	1			
C3型										
分類不明	16				16					16 6
合計	32	2	8	5	17	9	3	1		17 7

s. 剥片類

总数1,474点が出土している。このうち遺構内出土は42点であり、その内訳は住居跡1点、土坑16点、ピット25点である。特に、SK2049Aに12点が集中する。また、捨て場C上層からは498点の出土が認められる。集落跡3内の出土分布状況は、石器器種同様に遺構の密度の高いI~K15~17に出土が多く認められる。石材は、鉄石英(23.7%)・頁岩(22.3%)・安山岩(21.0%)・凝灰岩(9.3%)等が多いが、その他にも数量的には少いながら多種類の石材が認められる(第87表参照)。このため、長幅分布図および観察表は主要な石材についてのみ作成した。

分類別では、背面の様子は安山岩でB型が最も多いが、その他の石材ではC型が多くなる。いずれの石材においても、A型是非常に少ない。打面の様子をみると安山岩では1型が大部分を占め、粘板岩・ホルンフェルスにおいても1型の割合が高い。その他の石材では2型が最も多くなっているが、1型・3型も一定量を占めている。

大きさは、多くの石材で長さ・幅が2~8cmを計るもののが大部分を占めるが、鉄石英はやや小型で長さ・幅が1~3cmに分布するものが多い。また、安山岩では2~10cmを計るものが多く、他の石材よりもやや大型になる(第136図参照)。

打面の大きさでは、最大幅の1/2よりも大きいものが496点と最も多く、最大幅とほぼ同じ大きさになるものも39点が含まれる。打面の大きさが最大幅の1/2よりも小さいものは全体的に少ないが、鉄石英・頁岩で比較的多く存在する。

転位痕は、0°が最も多く、数量的にはかなり少なくなるが90°がこれに続く。その他の転位痕が認められるものは非常に少ない。また、折断状の痕跡は466点(31.6%)で観察された(第85・86表参照)。

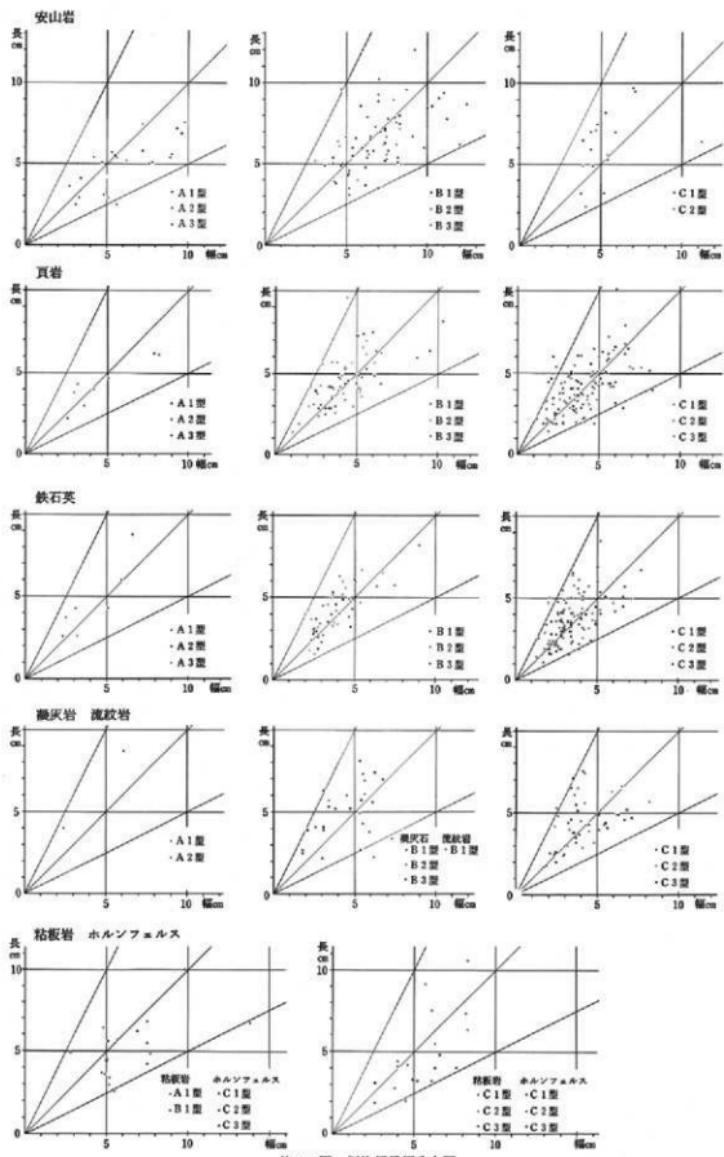
第87表 剥片類石材表

石 材 地 区	安 山 岩	黒 色 鐵 頁 岩	黑 色 頁 岩	鐵 灰 英 岩	凝 灰 岩	小 ル シ ア エ ル ス	流 紋	沙 渺	硬 砂	粘 板	結 晶	メ ノ リ	チ ヤ ト	石 英	輝 綠	ひ ん	輝 岩	そ の 他	
集落3	246	25	236	20	196	88	29	15	18	3	39	16	17	8	4	1	3	5	4
捨て場C上層	64	15	93	8	154	49	15	3	15	5	31	7	11	5	1	1	5	19	
合計	310	40	329	28	350	137	44	18	33	8	70	23	28	13	5	2	3	10	23

t. 石製品(図版300)

鉄石英の異形石器で、頭部を欠いた人形状にも見えるが、二次加工の様子から頭部位置は欠損でなく素材の形状と考えられる。全体のプロポーションまたは3か所の抉り込み状の二次加工の存在から有茎石鏃とは考えられない資料である。重さは3.6g、Q19-21のIIa層から出土している。

5 集落3の調査



第136図 制片類長幅分布図

6 集落跡4の調査

A 遺構

(1) 住居跡

地山に掘り方の認められる竪穴住居跡1軒と、長方形の掘立柱建物跡と考えられる住居跡3軒が集落跡4の南側で検出された。4軒とも10m内に近在するが、1軒のみ(SB351A)長軸の方向の異なるものがある。炉は検出されなかった。

SB368A (図版274, 写真514)

位置 P16, Q16に位置し、SB351Aに隣接する。

平面形 隅丸方形

規模 地山上面でプランが確認された。地山には長軸5.1m、短軸3.6mの掘り方が認められるが、断面の観察により、地山より10~18cm上のⅢ層上面付近まで壁の立ち上がりが認められ、規模は若干拡大すると考えられる。

壁 全周で確認された。壁高はⅢ層上面から22~30cmを計り、立ち上がりは外に大きく聞く。

柱穴 柱穴と考えられるビットが10基不規則に存在する。規模は上端径が比較的安定しているが、深度は8~26cmと全体的に浅く、バラツキがある。

床 地山にはほぼ平坦な掘り方が認められるが、堅い明確な床は確認されなかった。

覆土 覆土は暗褐色土が主体で、下層ほど地山の割合が多くなる。炭化物を全体に少量含む。3層からは土器、掘り方の底部からは磨製石斧が出土した。

出土遺物 土器(3319~3325)、石器(磨製石斧1、磨石類1、石皿1、不定形石器2)

時期 前期前半II

その他 調査時に確認された住居跡である。出土土器の比較から、近在のSBの住居跡よりも若干古いと考えられる。

SB375A (図版274, 写真514)

位置 R15に位置する。

平面形 長方形と推定される。

規模 柱穴間距離長軸(P381A~P378A) 2.55m、短軸(P382A~P378A) 1.9m

柱穴 4本検出された。規模は上端が70cm前後、深度が39~48cmで安定している。覆土は黒褐色土・暗褐色土が主体で、いずれも繊維を含んだ土器が出土しており、炭化物を含むものもある(P378A~P382A)。

出土遺物 土器(3326~3329)、石器(磨石類1、石錘1)

時期 前期前半II

その他 調査時に確認された住居跡で、遺物は柱穴内から出土している。

SB354 A (図版275, 写真515)

位置 Q15・16に位置する。

平面形 長方形と推定される。

規模 柱穴間距離長軸 (P355A～P374A) 5.0m、短軸 (P374A～P390A) 2.7m

柱穴 6本で長軸に3本が相対する配列をとる。柱間・規模上端はほぼ安定しているが、深度は33～81cmとバラツキがある。覆土は暗褐色土が主体で、P374A以外の柱穴からは土器や大小の礫が出土しており、炭化物を含むものもある (P355A・P390A)。

出土遺物 土器 (3330～3335)

時期 前期前半II

その他 調査時に確認された住居跡である。

SB351 A (図版275, 写真515)

位置 Q16に位置し、SI368Aに隣接する。

平面形 長方形と推定される。

規模 柱穴間距離長軸 (P352A～P865A) 5.2m、短軸 (P865A～P351A) 2.5m

柱穴 6本で長軸に3本が相対する配列をとる。規模は上端径が50～80cm、深度が35～59cmと比較的安定している。覆土は暗褐色土が主体で、礫を多く含んでいる。

時期 前期前半II

その他 調査時に確認された住居跡である。他の3軒の住居跡と長軸の方向が異なり、時期の決め手となるような土器も出土しなかったが、SB354Aと形状などで共通性があることから、ほぼ同時期のものと考えられる。

(2) 土坑

北側に10基、南側に5基と偏って検出された。フラスコ状土坑は検出されなかった。出土土器から、Oランイン以北の土坑は以南のものより若干古いと考えられる。これらの土坑は平面形から円形・梢円形に分類され、前者のものが3基、後者のものが12基を数える。土層堆積は、自然堆積と考えられるものが4基、人為堆積と考えられるものが7基である。

(3) ピットおよび性格不明の落ち込み

ピットは出土土器の時期および、集落跡4の分布状況から、集落4と判断されるものののみ6基を観察表に記載した。検出数が少ないため、他の遺構との関連は不明である。性格不明の落ち込みも前期前半の土器が出土したもののみをSXとし、観察表に記載した。

(4) 捨て場

集落跡東側の段丘崖下の自然流路跡から検出された。また、その上層には集落3の捨て場が存在する。

捨て場C下層 (図版259, 写真517～519)

位置 捨て場C上層とほぼ同位置であるが規模は小さい。

規 模 南北 70m、東西最大 13m の遺物集中区域を検出したが、南側は調査区外に統くと思われる。

層 序 集落 3 の捨て場と同じ段丘崖下から検出された。集落跡 4 のものとされる前期の遺物は主に自然流路 2~4 層とⅢ層漸移層から出土した。これらの層位は自然流路の堆積土である。

出土遺物 土器 (3348~3368, 3370~3424, 3428~3658, 3759, 3782)、土製品 (3783)、石器 (石錐 1, 両面加工石器 4, 打製石斧 5, 磨製石斧 3, 磨器類 4, 磨石類 22, 砕石 2, 石皿 4, 両極石器 3, 不定形石器 42, 石錐 11, 石核 6)

時 期 前期前半 I ~ II

(5) 土器集中地点 (写真 519)

位 置 L18・19付近に位置する。

検出状況 南北 10.9m、東西 15.2m にわたって、Ⅱ層中より一括土器 2186A (同一個体)・2187A をはじめとした前期前半 I の遺物が集中して出土した。

出土遺物 土器 (3307~3318, 3667~3747, 3751~3756, 3768~3776)

時 期 前期前半 I

その他 遺物の出土状況や、同時期の土坑が近在することより、住居跡等の何らかの遺構が考えられるが、地山に掘り方などは認められなかった。また遺構がⅡ層中で終結している可能性もあるが、検出には至らなかった。

B 遺 物

(1) 土 器

集落跡 4 からは、捨て場 C の自然流路の堆積土中より縄文時代前期前半の土器が大量に出土した。これらの土器は、時期的には関東地方の関山Ⅱ式と有尾式に並行するものに分される。関山Ⅱ式に並行する土器には、東北色が目立ち、有尾式に並行する土器には関東色が目立つとともに、今回の調査で初めて検出された越後独特の土器群も一定量含まれている。なお、土器観察表で時期の欄が不明となっているものは、前期前半に属するがその詳細が不明なものである。

a. 遺構出土の土器

3300 は、口縁に刻目が 2 列めぐり、以下はループ縄文が施文されている。3301 は、器壁薄く焼成も良好である。3306 は、口縁に 2 列の爪形様の刻目文が施文されている。3323 は、系統は不明としたが、器壁が薄く焼成も良好なことから、越後系の鉢形土器となる可能性もある。

3327~3329 は、同一個体の可能性がある。3331 は、器面の風化が激しく、縄文が施文されていたか否かは不明である。胎土中における繊維の混入は、他の前期前半Ⅱの土器と同じであるが、器壁は他のものよりは薄い。3336 は、口縁部に 4 条の点列状刻目がめぐり、それ以下には縄文が施文されている。3338 は、胎土中繊維は含まれていないようである。仮に含まれていたとしてもごく微量である。このような有尾式土器は、本遺跡では少数である。3340 は、越後系もしくは関東の黒浜式系ではないかと考えている。ただ、越後系とするならば器壁は厚い。

3353 は、口縁に 3 条の点列状刻文がめぐり、その直下に 1 条のコンパス文が施文されている。3355 は、細かい縄文が施文されている。3359 は、口縁に 3 条の点列状刻文がめぐり、それ以下の無文地上には

沈線でコンパス文が2条描かれている。3371は、口縁部付近にやや粗い爪形が2条施され、それ以下は、ループの羽状網文となっている。3373～3375は、同一個体と考えられる。他の土器と比べて器壁が薄く、石英粒なども含まれていない。しかし、繊維の混入は多い。3377は、口縁端部に1条、口縁に3条の刻目様の刺突がめぐり、それ以下の無文地上にも1条の刻目様の刺突がみられる。3384は、7条あまりの点列状刺突が施され、以下は織文が施文されている。内面の整形は丁寧である。相互刺突文土器とも考えられる。3391は、口縁に2列の点列状の刻目が施され、以下には織文が施文されている。3400は、無文地に細い爪形が2条施されている。繊維の混入は識別できない。仮に混入していたとしても微量であろう。東北系でも関東・中部高地系でもない異系統の土器の可能性もある。3410～3414は、同一個体である。3410には数条の刺突列がみられ、3411～3414も内面の器面調整が非常に丁寧で黒味がかっているという点からみて相互刺突文土器の可能性がある。3419は、織文地上に2条のコンパス文がみられる。3420は、最上部に刺突が3列あまり施され、以下は羽状網文となっている。3421は、口縁部に満巻文? や横位直線文、頸部にコンパス文をいずれも半隆起線で無文地上に描いている。胎土中には多量の雲母が混ざるが、繊維の混入はわずかで、色調も赤味がかり焼成は良好である。胎土中に石英、雲母、繊維を含むという点を除けば、文様や色調などにおいて前期前半Iの他の土器とは雰囲気が異なる土器である。3427は、胎土中における繊維の混入は認められない。

3467は、他の土器にはみられない突出気味に張り出す底部をもち、網目状撚糸文が施文されている。なお、この土器は内面の整形が丁寧で焼成も良好である。3472は、4単位の波状口縁をもつ深鉢で、器面全体に多軸絡条体が施文されている。多軸絡条体は、本県では、その類例はほとんど知られていないが、東北地方の円筒下層式土器にその存在が知られている。なお、この土器は器壁薄く、焼成は良好である。3500も器面全体に網目状撚糸文が施文されている。3467や3500のような類例は本県ではほとんど例をみない。類例は、東北地方の大木2式土器においてみることができることから、これらの土器は、大木2式の系統を引くものと考えられる。3501は、口縁に押し引きによる2条の爪形文がめぐり、それ以下の口縁部には、沈線間に、歯齒状工具で点列状の刺突が無文地上に施されている。3504は、無文地上に半隆起線で菱形文が描かれている。3548は、口縁に押し引きによる爪形文が2条めぐり、以下の口縁部には無文地上に半隆起線で菱形文が描かれている。3553は、数条の半隆起線で無文地上に菱形文が描かれ、その内側の空白部分に歯齒状工具で縱位の点列状刺突が3列施されている。3564は、小型土器という面もあるが、器壁薄く器面調整も丁寧で、繊維の混入も関東・中部高地系の土器としては少ない。3574は、上底気味で厚味のある底部である。3585は、口縁波頂部から断面三角形の隆帯が口縁部へと垂下し、その末端に円柱状の突起が付けられている。3621は、3564と同様に小型土器で、つくりが丁寧で焼成も良好である。また、繊維の混入も少ない。3640は、頸部の最下部が無文帶で、点列状の刺突が4条めぐっている。それ以上は、器面の全面にループ織文が施文されている。3645は、3621と同一個体である。

b. 遺物包含層出土の土器

3666は、無文地上にコンパス文が描かれ、それ以下には組紐が施文されている。3669は、他にほとんど類例をみないもので、口縁に2条の半隆起線がめぐり、その直下には歯齒状工具または沈線で2条のコンパス文が描かれている。3696～3702、3706は、3670、3671と同一個体である。3730は、3710と同一個体の可能性が高い。3740は、オコゲが織文の条の部分に付着して拓本が明瞭ではないが、隆起線間の沈線内にヘラ状工具で点列状刺突文を密に施文している。文様効果としては、有尾式土器と同様であるが、施文具が異

なっている。また、胎土も繊維を含まないなど、本遺跡から出土している有尾式土器とは異なる。

3764は、刺突が全面に施されている。器壁が厚く、胎土中に繊維が含まれていないが、胎土の雰囲気は前期前半に類似している。3774は、刺目状の連続刺突で点列状刺突文を描いている。3781は、器壁厚く小穂の混入も多い。しかし、繊維の混入はない。胎土の雰囲気や幅の狭い羽状縞文が施文されていることから、前期前半に含めたい。

(2) 土製品

a. 板状土製品 (3783)

土器片を再利用した円板状土製品が1点、土器捨て場CのO20-14より出土している。「ハ」の字状の爪形が施文され、外面明褐色、内面褐色を呈し、繊維少量と石英を含んでいる。文様や胎土などから前期前半1に比定されるものと考えられる。

(3) 石器 (国版295~300)

a. はじめに

集落跡4は集落4と捨て場C下層で構成される。

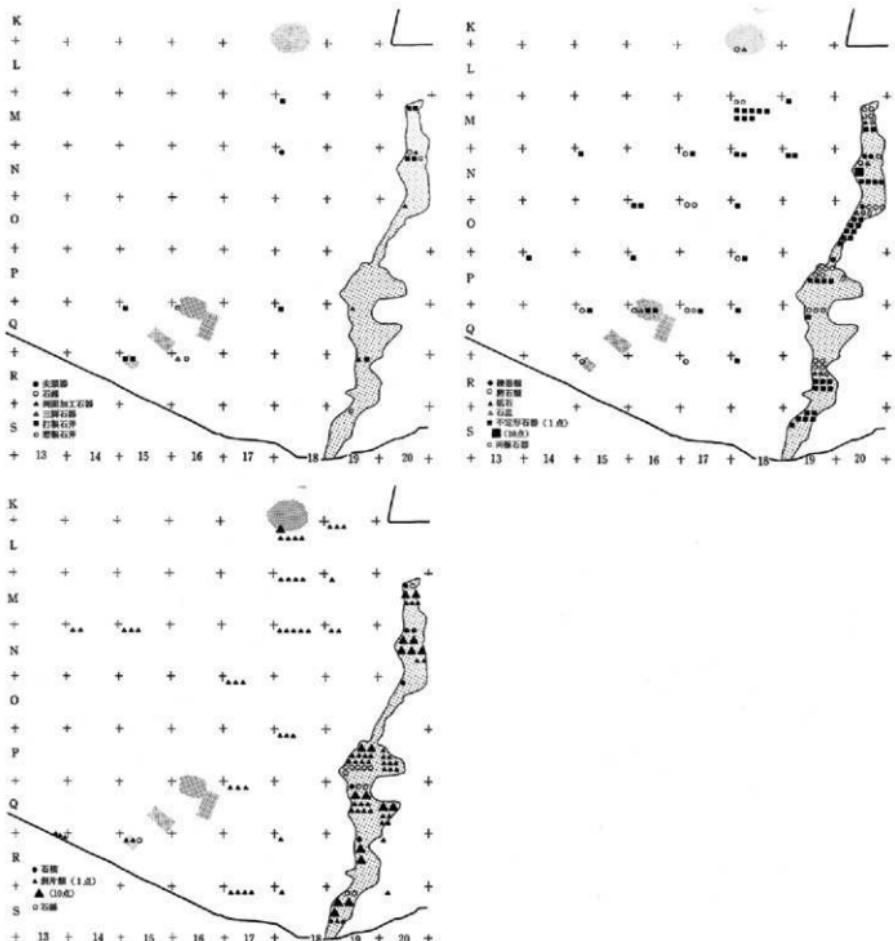
集落4 時期は、縄文時代前期の前業から中業を中心とし、集落3の南側に存在する。範囲の設定は集落3同様、主に該期遺物の出土範囲としたが、若干集落3に相当する遺構、遺物も出土しており、厳密な線引きはできない。また集落は南側に伸びると推定される。

第88表 集落跡4の出土石器

石器 地 区	石 頭 器	石 頭 器	石 頭 器	石 器 加 工	三 脚 石 器	便 利 石 器	打 製 石 斧	磨 製 石 斧	磨 製 器 類	磨 石 類	砥 石	石 皿	青 石 器	不 定 形 石 器	石 錘	合 石	石 核	剥 片 類	石 製 品	合 計
集落4	1				1		5	2	10		2	3	27	1			54		106	
捨て場C下層		1	4				5	3	4	22	2	4	3	42	11	6	218		325	
合 計	1	1	4	1			10	5	4	32	2	6	6	69	12	6	272		431	

捨て場C 集落3・4の東側に存在する南北に走る崖線および崖下を範囲とする捨て場で、上層、下層に2分され、下層が集落4の土器捨て場である。集落4の時期は捨て場として利用した崖下には崖線に沿う産みが存在し、南北に走る自然流路を形成していたため、東側に位置するA地区との区別は明瞭である。

石器総数は、石器種238点、石核5点、剥片類272点である。石器種の内訳は、尖頭器1点、石錐1点、両面加工石器4点、三脚石器1点、打製石斧10点、磨製石斧5点、磨石類34点、砥石2点、石皿6点、両極石器9点、不定形石器153点、石錘12点であり、定形的な器種の出土が極めて少ない。また、他の集落跡と比較して、石錘の出土数が多いことが注目される。集落跡4内の出土分布状況は、捨て場Cの下層に比較的集中的であるが、住居の立地する台地上では散発的である。L18, M18付近でやや集中が認められるが、この地点は集落3との境界にあたり、近辺に集落3の住居跡も存在することから、本来集落3とすべき石器も含めてしまった可能性もある。石材については、打製石斧に粘板岩・結晶片岩が多いが、他の剥片石器では頁岩・鉄石英が多く用いられている。磨製石斧は5点すべてが蛇紋岩を用いている。また、磨石類・石皿・石錘には安山岩が多い。



第137図 集落跡4 石器出土分布図
(捨て場以外のスクリーントーンは集落跡3・4の遺構)

7 A 地区の調査

A 遺 構

(1) 土 坑

縄文の遺構と思われる2基のみを観察表に記載した。平面形から円形・梢円形にそれぞれ分類され、いずれも人為堆積と考えられる。遺物は出土せず、うちSK781Bは集石土坑である。

(2) 集 石

集石 782B (図版301, 写真535)

位 置 A 地区西端に存在する段丘崖中段の南側 Q20-13 に位置する。

検出状況 53×52cmの円形の範囲で II b 層中より検出された。礫は被熱により赤変しているものが多い。

その他 地山に掘り方は認められず、SK781Bと同様の土坑が II b 層中で終結している可能性がある。

(3) 埋設土器

埋設土器 783B (図版301, 写真535)

位 置 A 地区西端に存在する段丘崖中段の南側 O20-12・13 に位置する。

埋設状況 土器は深鉢の頸部から上の部分が倒立位で、同時に 10cm 前後の礫も数点出土した。

埋設遺構 土器は III 層上面に近い II b 層中より出土したが、地山には上端 28×20cm、下端 14×9cm、深度 17cm の規模で掘り方が認められる。

理 土 埋土は暗褐色土であり、この埋設土器の性格を明らかにするために化学的な分析を行ったが、際だった特色は表れなかった。

土 器 3883

時 期 中期初頭①

その他の付近に住居跡等の遺構は検出されず、他の遺構との関連も不明である。

B 遺 物

(1) 土 器

A 地区から出土した縄文土器は、出土量が少なく、小破片が多く、時期などが明確になるものはほとんどなかった。

3883は、口縁端部に1個の突起が付き口縁に三角形陰刻文がめぐっている。それ以下の口縁部は沈線で文様が描かれ、文様の空白部分は短沈線や円形刺突が充填されている。頸部には2条の沈線がめぐり、胴部は口縁部と同様な手法で文様が描かれている。この土器は、五領ケ台 I a式ではないかと考えられているもので、口縁部から胴部上半にかけてほぼまとった形で出土した。このようななかたちで五領ケ台 I a式と考えられる土器が出土した例は、本県では初めてである。3884は、口縁部は無文帯で胴部の最上部と最下部に帯

縄文がめぐっている。帯縄文間の無文地上には、入縄文が描かれている。底部は、無文帯になるものと考えられる。外面の無文帯部分と内面は、丁寧に磨かれている。大洞 BC 式に比定されるものと考えられる。

(2) 石 器 (図版311)

捨て場 C の上層との区別は不明瞭であるが、捨て場 C の東側に広がる小さな南北に伸びる平坦面で、集落 3・4 の立地する微高地から比高 2~3m である。出土石器は他の地区に比べ極めて少なく、散布もまばらなことから、分析は試みず出土石器の一覧を提示するのみにする。

第 89 表 A 地区の出土石器

石器 地区	石 鏃	尖 頭 器	石 錐	石 耙	石 剪刀 型	三 脚 石 器	板 状 石 器	打 製 石 斧	磨 製 石 斧	磨 器	研 磨 石 器	研 磨 石 器	研 磨 石 器	不 規 則 石 器	石 錐	石 台	石 核	剥 片 類	石 製 品	合 計
A 地区		1	1	1			6		1	5				12			1	10	38	

8 E 地区の調査

A 遺構

(1) 住居跡

E③地区の1軒のみである。各地区に集中するピット群から住居跡の存在も考えられるが、検出プランがⅡ層中であった可能性が高く、検出には至らなかった。

SI31C (図版302、写真537)

位置 E③地区の段丘平坦面南端の0J19, 0I19に位置する。

平面形 傾斜地で南半分は検出できなかった。柱穴や炉の配置により、長軸がほぼ南北を向く楕円形と推定される。

規模 柱穴間距離短軸 (P182C~P187C) は3.3mであり、長軸 (P180C~) は炉を中心として推定すると4.5~5.0mである。

柱穴 6本で炉の周り北半分に検出された。P182C・P183Cは2本組である。柱間は1.3~1.8m、規模は上端径が47~70cmでほぼ安定している。深度は12~53cmで南側のものほど浅くなるが、これは地山面の傾斜によるものであり、本来の検出面がⅡ層包含層中であることからも、柱穴の状態は良好であったと考えられる。覆土は暗褐色土が主体で、縮まりは強く、炭化物を極少量含む。

炉 調査区限界付近の0I19-24に位置し、Ⅱ層包含層中より検出された。周りを石で囲い、北側に埋甕炉を配した複式炉で、縫穴形を呈し、長軸方向は住居跡の長軸と一致する。埋甕炉の底部は抜けており、内部には多量の土器片が厚く重き詰められている。これらの土器には赤変やスヌなど被熱の影響がみられる。埋甕炉の周囲には角小砾を配してあるが、南側の石組みでは平らで大きな河原石を立てており、被熱により赤変したり割れているものもある。埋甕炉の下の地山を6~13cm掘込んで構築されており、覆土は暗褐色で縮まりは強く、粘性はやや弱い。

出土遺物 土器(3892~3896)、石器(磨石類1、石核1)

時期 中期末葉

その他 調査時に確認された住居跡であるが、炉自体の検出レベルが130.0m前後でⅡ層包含層中にあるため、本来の床面レベルもその付近にあったと推定される。

(2) 土坑

プラスコ状土坑4基、プラスコ状以外の土坑14基の計18基が検出され、すべて観察表に記載した。

プラスコ状土坑はうちE③地区が3基、E④地区が1基である。いずれも性格不明のピット群が近在しており、検出には至らなかったが住居跡等の遺構があった可能性が高い。これらプラスコ状土坑は底部径によりⅠ・Ⅱ類に分類されるが、E③地区的SK88C、SK188Cについては、土坑の形状が他とは異なる。土層堆積は自然堆積と考えられる。

プラスコ状以外の土坑はE①地区、E②地区がそれぞれ2基、E③地区が10基である。E②地区以外はい

それもピット群などの遺構が集中する位置にある。これらの土坑は平面形から円形・椭円形に分類され、円形のものが9基、椭円形のものが5基を数える。土層堆積は自然堆積と考えられるものが8基、人為堆積と考えられるものが6基である。

(3) ピットおよび性格不明の落ち込み

ピットは95基検出されたが、遺物の出土したものを中心に19基を観察表に記載した。ピットの分布に特徴があり、その検出数にもかかわらず、ほとんどが性格不明で住居跡の検出には至らなかった。また性格不明の落ち込みや木の根跡、風倒木などは30か所あまりが検出されたが、遺物の出土した3基のみを観察表に記載した。

(4) 埋設土器

埋設土器 214C (写真540)

位 置 E③地区西北端の0M15-12に位置する。

埋設状況 深鉢の口縁部の破片が倒立位で出土した。

埋設遺構 掘り方は認められなかった。

土 器 3913

時 期 中期末葉

(5) 一括土器

一括土器 30C (図版304, 写真540)

位 置 E③地区東側の遺構集中分布区域のOK19-12・13に位置する。

検出状況 Ⅲ層上部より深鉢型土器の口縁から脇部にかけての破片が出土し、その下位から71×60cmの範囲で暗褐色の覆土をもつ自然の落ち込みが検出された。

出土遺物 土器 (3911)

時 期 中期末葉

(6) 埋没谷 (図版304, 写真540)

位 置 E③地区の北西部にあたる0M~OK16-17に北東から南西にかけて走る旧谷である。

規 模 上端幅平均7m、下端1m、深度2mを計り、やや緩やかなV字を形成する。

層 序 おむね3層に大別でき、さらに各a、b層に分層した。1、2層はそれぞれ基本層序のI、II層に比定される。特に2層は遺物包含層であり、2a層を中心前に中期の土器が出土した。また3層では早期の土器がまとめて出土した。

出土遺物 土器 (3914~3969)

時 期 早期後半、前期前半II、前期後半、中期初頭、中期前葉、中期末葉?、後期前葉

その他の E③地区では遺物のほとんどが南東部に分布し、また埋没谷内の遺物も中央より南東斜面に偏在するので、これらの遺物は南東部からの流れ込みによるものと推定される。なお、出土土器については、層位ごとの把握が可能であったため、図版において、遺構出土土器と同様に取り扱った。

B 遺 物

(1) 土 器

E地区からは、出土量は少ないながらも縄文時代早期から晩期までの土器が出土している。特に、E③地区からは、中期末葉の土器群がSI31Cを中心に、早期後半の土器群が埋没谷3層を中心に出土した。中でも早期後半の土器群は、無文土器、沈線文系土器からなり、そのほとんどは胎土中に繊維を含まないものである。これらの早期後半の土器は、層位的な把握が可能で、本県においてはまとまった好資料である。E②地区では、少量ではあるが出土している押型文土器と沈線文系土器との関係も注目される。

a. 遺構出土の土器

3885は、細沈線を施した後に瘤状の小突起を添付したもので、関東地方の諸磯c式に比定される。3886は、爪形がランダムに、そして密に施されている。3887は、筒状の胴部をもつ小型の無文土器で底部がやや上げ底気味となる。胴部はほぼ完形で残存し、欠損部分は故意に欠き取られたような形状を呈している。内面には有機物の付着痕が認められることから、漆などを入れた可能性もうかがえる。諸磯式に比定されるのではないかと考えている。3892は、いわゆるバケツ状に聞く深鉢である。口縁は、無文帯で直下に3条の沈線がめぐり、沈線間にはほぼ等間隔・交叉に瘤状の小突起が添付されている。胴部は繩文が施文されており、口縁部から胴部上半へと2条1組で6単位と予想される沈線が垂下する。本県の魚沼地方を中心に分布する沖ノ原式土器（江坂・渡辺1977）である。3893は、口縁部が内彎する深鉢である。口縁は無文帯となり、以下は全面に縦位の櫛齒状の条線が施されている。3894は、3893と同じような器形の深鉢である。口縁は、無文帯で幅広の沈線が1条めぐっている。無文帯の直下には繩文が施され、その繩文地上は幅広の沈線で「U」字状の文様が描かれている。東北地方の大木10式土器に比定されるのではないかと考えられる。3897は、尖底部が乳房状を呈する。器外面は丁寧に磨かれており、胎土も緻密で焼成も良好である。押型文土器の底部ではないかとの指摘もある。3898は、7～8条1組の沈線が斜行し、それ以外の箇所は、口縁端部も含めて4～5個1単位の櫛齒状の刺突が密に施されている。3902は、口縁部に半隆起線で格子目状の文様が描かれていることから格子目文土器（寺崎1991）と呼ばれ、群馬県北部、長野県北部、新潟県上・中越地方を中心に分布する土器である。胎土のきめは細かいがスカスカした感じで、たいへん軽い土器である。この土器は、交点に円形の押圧が加えられており、関東地方の諸磯a式に比定されるものと考えられる。3905は、胴部だけではなく底部にも繩文が施文されている。3909は、無数の横位波状沈線が描かれている。器壁薄く、胎土も緻密で焼成も良好である。3910は、口縁端部に刻目が施され、口縁は無文帯となる。口縁直下には2条の半隆起線がめぐり、以下の口縁部下半は、口縁と同様に無文帯となる。縦長の突起が口縁から口縁部下半にかけ添付され、頭部には半隆起線がめぐっている。3911は、口縁部がやや内彎する深鉢で、口縁は無文帯となるが以下の器面全体には繩文が施文されている。3913は、口縁部がやや内反して胴部が膨らむ深鉢である。口縁部は無文帯で、押圧が加えられた弧線状の隆起文が2単位で口縁部をめぐるよう施文されている。胴部は全面に繩文が施文されている。

3914～3969は、埋没谷からの出土である。3914は、磨かれた無文地上にふたまた状の工具で点列状の刺突が施されている。3930は、口縁は無文帯であるが、それ以下および口縁端部には繩文が施文されている。3933は、関東地方の諸磯bに比定される土器と考えられるが、爪形の間隔が狭いことや器壁が薄く焼成が良

好で堅敏なことを付け加えておきたい。3937は、口縁は無文帯で直下に刻目が加えられた隆起線がみられる。いわゆる沖ノ原式土器（前掲1977）と考えられる。3941、3942等は、埋没谷3層から出土する無文土器で、器面調整が丁寧で良好で堅敏である。3943は、沈線文系土器であるが、口縁内面に横間隔に格条体圧痕がみられる。3945は、口縁部上半に縱長の瘤状突起がつき、それにそって3個の円形刺突がみられる。口縁部下半には貝殻腹縁文が密に施されている。頭部には2条の沈線が認められる。繊維の混入は、はっきりとは確認されなかった。3954は、無文地上に単沈線が施されているが、部分的に細い連続刺突が加えられている。3958は、平行沈線が右下りに斜行し、頭部に横位平行沈線がみられる。3959は、3958と同様に平行沈線が右下がりに斜行している。3965は、口縁端部に刻目が施され、器外面には沈線で斜格子目状の文様が描かれている。3968は、3954と同様に沈線に細い連続刺突を加えている。

b. 遺物包含層出土の土器

3973は、尖底土器の底部付近の破片である。3975～3977は、単沈線で横位平行直線文や区画文を描き、区画内には貝殻腹縁文を密に充填している。焼成良好で堅敏な土器である。3978～3980は、口縁に押し引きによる角押的な文様がみられるが、以下は器面全体に幅狭のループ繩文が施文されている。3986～3990は、横位帶格子目押型文であり、同じクリッドから出土しており、胎土や器面調整が似ていることから、同一個体の可能性もある。3994～3996は、木葉文が施文されているが、口縁部上半に孔の痕跡がみとめられることから、深鉢ではなく孔浅鉢の可能性が考えられる。3998、3999は、口縁部にコンパス文が描かれている。器壁薄く、器面の整形も丁寧で胎土中に繊維が含まれていない。集落跡4で多数出土している越後系の土器である可能性もある。4004～4008は、口縁端部に小突起をもち、隆帯や隆起線で区画文などの文様が描かれている。胴部の文様間の空白部は綾糸状の刻目が充填されている。4011は、晩期後業の浮線文土器である。浮線文土器が魚沼地域で出土するのは珍しい。4014は、底部に近いためか、他の無文土器よりも器壁が厚い。4015は、沈線で幾何学的な文様を描き、その区画内に貝殻腹縁文を充填している。4023は、内面の器面調整が大変丁寧である。4025は、口縁部の沈線区画内に貝殻腹縁文が密に充填され、口縁端部に爪形が施されている。4030は、外面に沈線が施され、内面に格条体圧痕が認められる。4037は、前期前半Iの東北系深鉢2類に類似するが、刺突ではなく爪形を底部に含めた全面に施している。4041は、胴部下半の底部に近い部分の破片であるが、この部分から推定して底部は尖底ないしは丸底と考えられる。4042は、器面全体に刺突が施されている小型の土器である。刺突は、口縁部と胴部下半が櫛歯状工具で、胴部上半は棒状工具によって施されている。4043は、文様および施文技法は4037と同様であることから、同一個体の可能性もある。

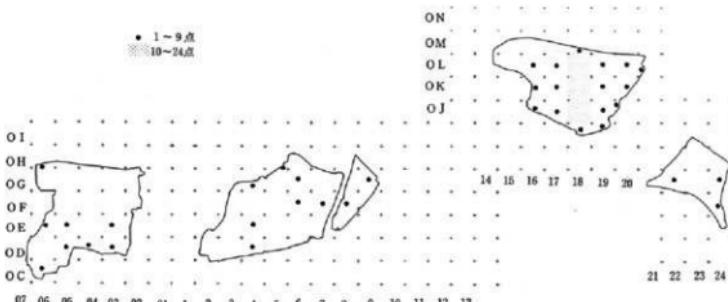
(2) 石 器

a. はじめに

E①地区 D地区と同一の南北に走る台地上に存在する。東と西を沢により区切られる。遺物は散漫で中心となる時期も存在しない。

E②地区 集落2と同一の南北に走る台地の付け根に存在する。調査区は、主に西側の近い範囲で、調査区東側で縄文時代早期の押型文土器が若干集中出土する他は遺物は散漫に少分布し、時期の特定もできなない。

E③地区 調査範囲内で唯一の高等学校面（上の原面）（堀之内町1995）の台地先端部にあたり、南北に走る



第138図 E地区石器分布図
(不定形石器・器種不明石器・削片類は除く)

第90表 E地区的出土石器

石器 地区	石 鐵	尖 頭 器	石 頭	石 頭 底	石 頭 加 工	三 圓 石 器	板 狀 石 器	打 製 石 斧	磨 制 石 斧	磨 制 石 鉤	鐵 石	石 皿	不 定 形 石 器	石 錐	石 台	石 核	削 片 類	石 製 品	合 計	
E①地区								7	2	1	1	1	4	1	2	21			40	
E②地区	1			1	1			2	1	1	1	1	10	2			23		44	
E③地区	4		3	3	4			26	10	8	51	1	3	11	202	3	10	713	2	1054
E④地区								2	1			1		1			4		10	
合 計	5		3	4	6			37	11	10	54	2	6	12	217	6	12	761	2	1148

小さな埋没谷が存在する。埋没谷には、純文時代早期後半の田戸上層式の単純層が存在するが、同層からの出土石器は少ない。その他、E③地区で石製品が2点出土したことを除けば、遺物は少数台地上に散在する。

E④地区 遺物はほとんど出土せず、内容は不明である。

b. 石 錐 (図版312, 313)

5点の出土がある。E③地区出土が4点であるが、未成品が2点含まれる。その他の1点はE②地区出土である。完成品はすべて無茎錐であるが、基部形態はそれぞれである。4080, 4091は基部が凹状をなすが、4080はえぐりが深く、4091はえぐりはわずかである。4092は基部が直線状をなすものである。大きさは、長さ2~2.6cm、幅1.5~1.9cm、厚さ0.4cm、重量0.9~1.0gを計るが、4092はやや大型である。

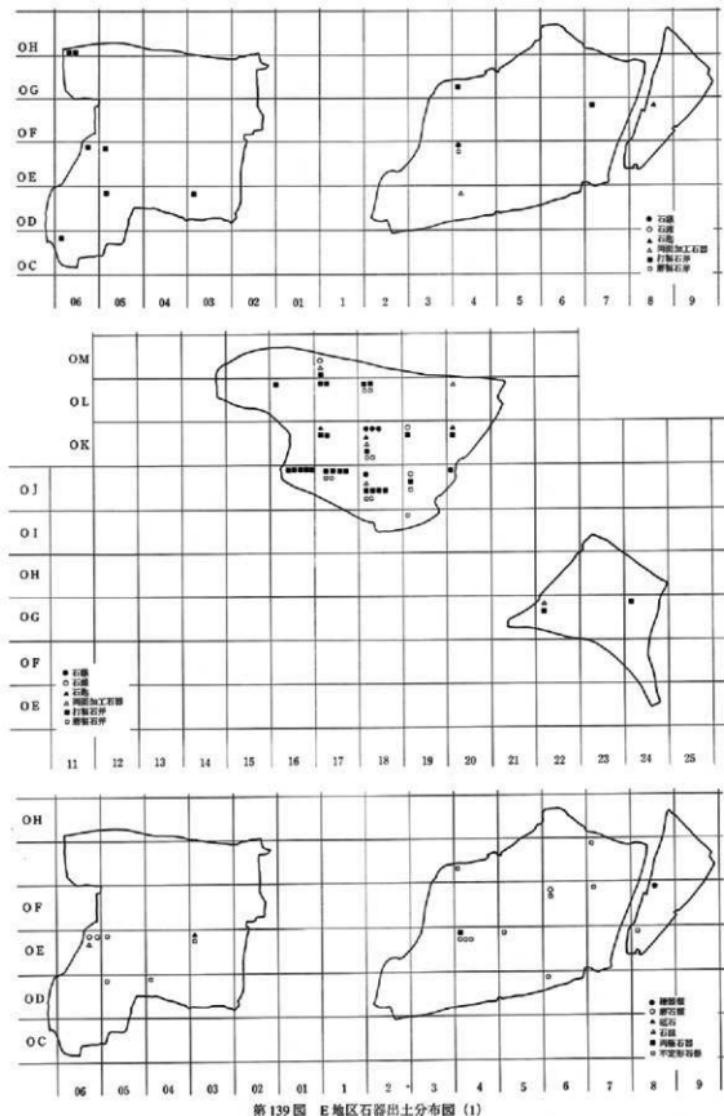
c. 石 錐 (図版313)

E③地区から3点出土しているのみである。図化したものは2点である。4093はC2類のもので片側縁に両面からのかや大振りな削離によって錐部が作出される。4094はA類に分類され、正面のみに加工が施され錐部としている。両者ともに先端部に磨耗痕が認められる。

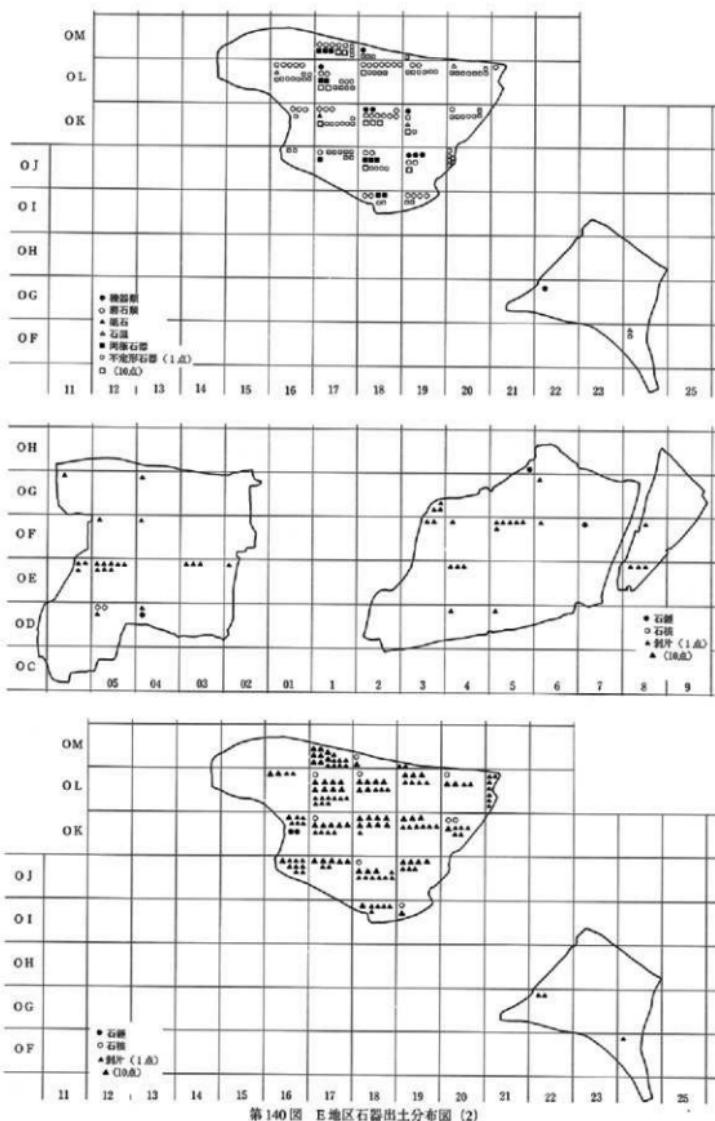
d. 石 鋏 (図版312, 313)

4点の出土がある。E②地区1点、E③地区3点で、すべて完成品である。いずれも縱形石鋏であり、先端は尖る形状のものが多い。4095, 4083には比較的丁寧な二次加工が施されているが、4096, 4097はえぐり部を粗く加工するだけで、刃部は未調整の粗製石鋏である。

8 E 地区の調査



第 139 図 E 地区石器出土分布図 (1)



第140図 E地区石器出土分布図(2)

e. 両面加工石器 (図版 312・313・318)

総数 6 点である。E ②地区 1 点、E ③地区 4 点、E ④地区 1 点が出土している。

f. 打製石斧 (図版 311~314・318)

総数 37 点である。地区別の出土数は、E ①地区 7 点、E ②地区 2 点、E ③地区 26 点、E ④地区 2 点である。E ④地区 SK234C 出土の 1 点を除き、すべて遺構外出土である。分類別では、A1 類 4 点 (4070, 4071)、A2 類 4 点 (4103, 4104)、A3 類 3 点、A4 類 2 点 (4107)、B1 類 2 点 (4108, 4072)、B2 類 3 点 (4084, 4110)、B3 類 7 点 (4073, 4109, 4111, 4183)、C 類 3 点 (4112~4114)、D 類 2 点 (4115) である。使用痕は、刃部に磨耗痕の認められるものが 7 点である。また、片側縁あるいは両側縁につぶしの施されるものが 9 点認められる。石材は粘板岩 (8 点)・砂岩 (7 点)・結晶片岩 (5 点)・ホルンフェルス (5 点) 等が多い。

g. 磨製石斧 (図版 314)

11 点出土している。E ③地区から 10 点が出土している。他の 1 点は E ②地区出土である。大半が定角式磨製石斧 (A 類) であるが、4118, 4120 の 2 点は側面に明瞭な裏面をもたず、断面が偏平状を呈する。また、ほとんどが欠損品であるため、欠失部分が少なく全体の形状をうかがえるものは 3 点 (4117, 4118, 4120) に過ぎない。欠損後、剥離あるいは敲打によって再成の試みられているものが認められる。4116 は刃部に剥離が施され、また 4119 のように基部を再成しようとするものが 3 点ある。石材は蛇紋岩が多く 4 点を数える。そのほかに凝灰岩 (2 点)・輝綠岩 (2 点) 等が用いられている。

h. 磬器類 (図版 312・314)

10 点出土している。E ③地区からの出土が多く 7 点である。E ①地区、E ④地区からもそれぞれ 1 点ずつ出土している。すべてが遺構外出土である。分類別に見ると礫素材の A 類が 6 点で、その中では両刃の A1 類が 4 点、片刃の A2 類が 2 点である。剥片素材の B 類ではすべてが片刃の B2 類である。また、素材の整形時に行われたのかどうかは不明であるが折断面を有するものが 5 点 (4087, 4121, 4122, 4180) 存在し、A 類に多く認められる。石材は 5 点が安山岩を使用し、その他に粘板岩・ホルンフェルス等が使用されている。

i. 磨石類 (図版 311・315)

総数 54 点である。E ③地区から 51 点が出土し、大部分を占める。E ①地区からは 2 点、E ②地区は 1 点と少ない。また、E ③地区 SI31C から 1 点出土している以外はすべてが遺構外出土である。分類別の出土数は A 類 15 点 (4076, 4127~4129, 4131, 4132)、B 類 2 点 (4133)、C 類 7 点 (4130, 4134, 4135)、E 類 12 点 (4075, 4136~4138)、F 類 1 点 (4139)、G 類 6 点 (4140, 4141)、H 類 1 点であり、D 類は出土していない。また、被然しているもの 4 点、タールの付着するものが 1 点認められる。石材は安山岩が最も多く 27 点と半数を占める。凝灰岩・花崗岩・砂岩・流紋岩なども使用されている。

j. 砕 石 (図版 311・315)

E ①地区 P114C、E ③地区的遺構外よりそれぞれ 1 点ずつの出土がある。どちらも礫面は崩面であり、溝の認められるものはない。石材は 4077 が安山岩、4142 が花崗岩である。

k. 石 皿 (図版 311・315)

6点が出土している。E③地区から半数の3点が出土し、E①地区・E②地区・E④地区からそれぞれ1点ずつの出土である。分類別の出土数は、A3類3点、B1類3点であり、A3類で側面に敲打整形が施されるばかりすべて使用面には加工がない。石材は花崗岩1点の他は安山岩である。

l. 両極石器 (図版 313)

总数12点である。すべてが遺構外出土で、E①地区の1点以外はE③地区出土である。全点ともに2極1対の両極削離痕を有し、4極2対ものは認められなかった。石材は頁岩4点、メノウ3点、凝灰岩3点、黒色緻密安山岩1点、鉄石英1点である。

m. 不定形石器 (図版 312・315-317)

总数217点の出土がある。E①地区4点、E②地区10点、E③地区202点、E④地区1点とほとんどがE③地区出土である。E②地区SK20Cから2点の出土があるほかはすべて遺構外出土である。

分類別の出土数は、A1類7点(4145~4148)、A2類4点(4149~4150)、B1類3点(4152, 4153)、B2類3点(4151)、C1類15点(4154, 4155)、C2類1点、C3類15点(4089, 4156, 4157)、C4類4点(4158, 4159)、D2類4点(4160, 4161)、D3類5点(4162)、E1類2点(4090)、E2類9点(4163)、F1類15点、F2類1点、F3類9点、G類35点(4164~4166)、H類2点、I類1点、J類21点、K類19点(4167~4170)である。石材は頁岩が110点と圧倒的に多い。鉄石英28点、黒色緻密安山岩18点、砂岩10点がこれに続く。その他にも流紋岩・緑色凝灰岩・粘板岩などが用いられているがその数は少ない。

n. 石 核 (図版 317)

总数12点が出土している。E①地区2点の他はE③地区出土である。遺構内出土としてはSI31Cに1点が認められる。調整段階にある調整石核は2点があるが、两者とも調整Bが施されている。剥片剥離作業段階の石核は9点が認められ、調整Bを経ているものが最も多く6点、調整Aを経るもの2点、調整の行われず剥離作業に入るものの1点を数える。剥離作業では作業1が5点で最も多い。石材は頁岩4点、凝灰岩3点、安山岩3点、メノウ1点である。

o. 剥片類

总数760点が出土している。地区別の内訳は、E①地区21点、E②地区23点、E③地区713点、E④地区3点であり、大半がE③地区からの出土である。E地区内の出土分布状況は、0E-05および0F-5周辺、E③地区の埋没谷より東側全域に比較的多くが分布している。

分類別の出土数は、A1

第91表 剥片類石材表

地区 \ 石材	頁 岩	黑 色 頁 岩	鐵 石 英	凝 灰 岩	ホ ル ン フ エ ル ス	安 山 岩	黑 色 緻 密 安 山 岩	粘 板 岩	砂 岩	硬 砂 岩	結 晶 片 岩	メ ノ ウ 岩	流 紋 岩	綠 色 凝 灰 岩	チ ヤ ー ト 岩	非 明
E①地区	5	4	1	4	1	1	2			1	1					
E②地区	7	10	1			2		1			1					
E③地区	253	23	124	62	50	42	41	38	43	2	7	2	3	2	1	15
E④地区	1					2										
合計	266	23	138	64	54	45	44	40	44	2	8	4	3	2	1	15

様子では1型が最も多く156点を数えるが、2・3型も一定量が認められる。

石材は多種類が認められるが、頁岩266点(35.0%)、鉄石英138点(18.2%)、凝灰岩64点(8.4%)が比較的多く認められる。他の集落跡で主体となっている安山岩は45点(6.1%)が認められるに過ぎず、様相を異にしている。

大きさは、長さ・幅は1~14cmを計り、平均長4.9cm・平均幅4.7cmである。他の集落同様安山岩はこれよりもやや大きく、平均で長6.4cm・幅6.5cmで、また、鉄石英は平均で長さ3.7cm・幅3.8cmと小型となっている。

p. 石製品（図版317）

OJ18-7のP216Cに接近し块状耳飾(4178)と筒状飾(4177)が出土している。两者とも滑石製である。周辺の包含層からは、田戸上層式土器を中心とする早期後半の遺物が出土しているため、本資料も該期の所産の可能性が高い。块状耳飾は2つに破碎しているもののほぼ完形に復元され、切り込み部上に正裏方向から穿孔される。接合部に見られる穴は接合位置でくい違うことから、資料が破損した後に穿孔された補修孔と考えた。横断面は梢円形を呈し、全体的に良く研磨されているが切り込み部ないし内輪部には擦痕が著しく、仕上げの研磨がいきとどいていない。重量は35.2g。

筒状飾は筒状の上下端から大型の穴が穿孔される。側面の上方には合計5個の穴が外側から内側にかけて穿孔される。側面のほぼ全体は良く研磨されるが上下端面は擦痕が著しい。重量は12.4g。



第141図 石製品出土状況

q. 局部磨製石斧（図版312）

OG6-11で出土した。凝灰岩製で重量269.6gである。刃部が1部欠損するほかは、ほぼ完形で横断面が三角形または台形状の片刃石斧である。器面全体には大小の剥離が施され、その後器面凸部が研磨されるが、特に刃部は丁寧に円刃を作り出している。形態または技術的に他の打製石斧と区別され、縄文時代草創期に出土する丸ノミ形石斧に近似する。